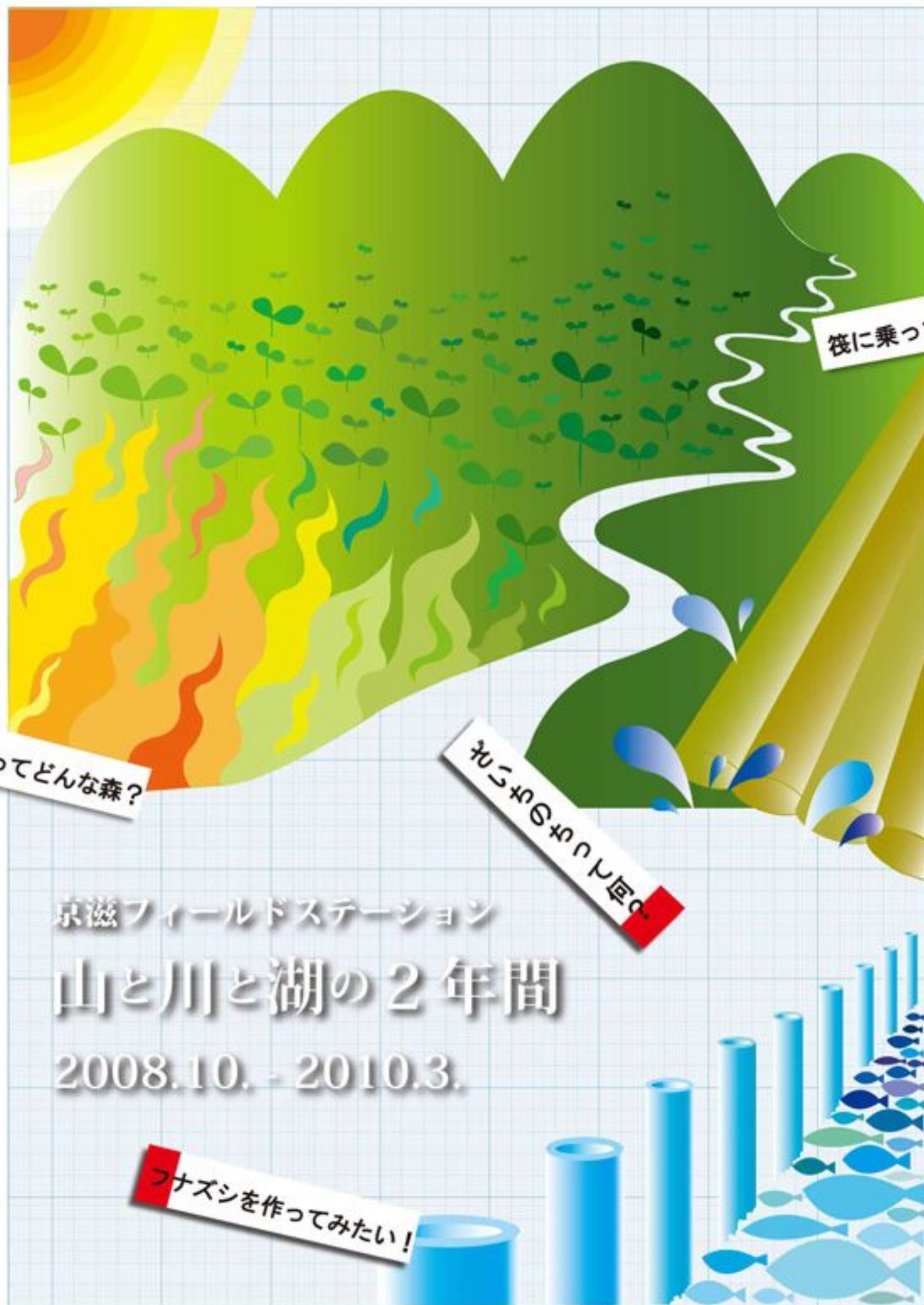


# ざいいちのち

実践型地域研究 中間報告書



筏に乗って京のみやこへ！

「くらしの森」ってどんな森？

「くらしの森」ってどんな森？

京滋フィールドステーション  
山と川と湖の2年間  
2008.10. - 2010.3.

フナズシを作ってみたい！



京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所  
「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

# ざいちのち

実践型地域研究 中間報告書

2010年3月

—在り地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究プロジェクト—

鈴木玲治 編

東南アジア研究所 実践型地域研究推進室

# 生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所 サイト型機動研究 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

代表 水野広祐 (東南アジア研究所)  
ディレクター 清水展 (東南アジア研究所)

## 事務局

事務局長 安藤和雄 (東南アジア研究所)  
コーディネーター 鈴木玲治 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)  
FS 研究員 矢嶋吉司 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)  
藤井美穂 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所・地域研究統合情報センター)

## 守山フィールドステーション

代表 高谷好一 (聖泉大学)  
コーディネーター  
・FS 研究員 嶋田奈穂子 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)  
FS 研究協力者 新道正男 (農業)  
北野長和 (農業)  
戸田直弘 (琵琶湖漁師)  
井上純作 ((株) みらいもりやま 21)  
松永之和 (守山市みらい政策課・守山宿だるまそばの会会長)  
協力機関 守山市

## 朽木フィールドステーション

代表 黒田末寿 (滋賀県立大学人間文化学部)  
コーディネーター  
・FS 研究員 増田和也 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)  
FS 研究員 今北哲也 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所・火野山ひろば)  
FS 研究協力者 野間直彦 (滋賀県立大学環境科学部)  
島上宗子 ((社団) あいあいネット・地域研究統合情報センター・火野山ひろば)  
永井邦太郎 (摺墨山菜生産加工組合・火野山ひろば)  
是永宙 (結いの里・椋川・火野山ひろば)  
中嶋周 (結いの里・椋川)  
宮内亮 (朽木・能家在住)

## 亀岡フィールドステーション

代表 石田紀郎 (京都学園大学バイオ環境学部)  
コーディネーター 大西信弘 (京都学園大学バイオ環境学部)  
FS 研究員 原田早苗 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)  
河原林洋 (生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)  
FS 研究協力者 原田禎夫 (大阪商業大学経済学部)  
高橋藍子 (京都学園大学バイオ環境学部)  
豊田知八 (プロジェクト保津川)

## 巻頭言：地域の人々との協働による実践型地域研究のさらなる充実をめざして

東南アジア研究所所長・研究プロジェクト代表 水野 広祐

東南アジア研究所は、従来、東南アジアを中心とする海外地域を主なフィールドとして地域研究を行ってきました。これまでの海外における研究で練り上げてきました地域研究の方法論と、その過程で蓄積されてきた知見を日本の地域社会に活かそうという目標を立てました。そして、地域の人々とともにある地域研究の理念をかかげ、滋賀サイト型機動研究の一つの柱として生存基盤科学研究ユニットに参加しました。滋賀県立大学、京都学園大学、NPO プロジェクト保津川、NPO 平和環境もやいネット、NPO 市民環境研究所、火野山ひろば、亀岡市、守山市などの諸団体と地元の皆さんと一緒に地域の問題を考え行動する「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」を2008年4月に立ち上げ実施し、4年間のプロジェクト期間のちょうど折り返し点を迎えています。具体的な実践型地域研究の場として滋賀県の朽木、守山、京都府の亀岡にフィールドステーション（FS）を設置し、対象を外から観察するだけではなく、内側から問題を把握し解決する方策を地域の皆さんと実践に参加することで一緒に考えてきました。本報告書で報告されているように、守山 FS では「琵琶湖の漁業と食文化の復興」、朽木 FS では「水と火のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくり」、亀岡 FS では「筏をシンボルとした人・山・川・町（都市）のつながりの再構築」などが主要テーマとなり、FS 担当の研究員を中心に、地元住民・NPO・地方自治体との協働による実践的な研究活動に取り組んでいきました。プロジェクトでは2008年10月以来、毎月ニューズレターを発行し、関係各位にお届けしてきましたが、節目の時を迎えるにあたり、鈴木玲治助教が中心となり、中間報告書をまとめました。関係各位の皆様にはもう一度私たちの活動を振りかえっていただく機会として、また地域研究に興味をいだかれる方々には私たちの実践型地域研究の活動をお伝えする機会にしたいと願っています。

生存基盤科学研究ユニットには、東南アジア研究所の他に、京都大学の4つの研究所（化学研究所・エネルギー理工学研究所・生存圏研究所・防災研究所）が参加し、既成科学の学問的な枠にとらわれない自由な発想に基づく、人類の生存のための科学を築く研究活動を展開しております。生存基盤ユニットへの参加の機会が与えられたことにより、地域研究の新しい展開を試みることができました。また、守山市とは生存基盤科学研究ユニットとしてMOU（学術協定）を結ぶことができ、山田守山市市長ならびに職員の方々には格別のご配慮を賜りました。本プロジェクトが円滑に目的を達成するため、この2年間の地元の皆様、関係団体の皆様、ユニット関係者の皆様のご協力に感謝致しますとともに、後半の2年間の活動にむけて、より一層のご協力とご理解、ご参加を今後ともよろしくお願い申し上げます、巻頭言にかえさせていただきます。

## 目次

巻頭言：地域の人々との協働による実践型地域研究のさらなる充実をめざして 水野広祐	
実践型地域研究に関する覚書 安藤和雄.....	1
<b>■ 守山フィールドステーション</b>	
守山フィールドステーションの活動概要 高谷好一.....	2
漁師のスシ桶に学ぶことー資源としての在来魚の再検討ー 嶋田奈穂子.....	3
在所の方から学ぶ野洲川流域調査 藤井美穂.....	4
<b>■ 朽木フィールドステーション</b>	
朽木フィールドステーションの活動概要 今北哲也.....	5
「くらしの森」を再構築するー火と水のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくりー 黒田末壽・今北哲也・増田和也.....	6
研究活動の背景ー草地に注目してー 今北哲也.....	7
地域と関わっていくということー余呉での取り組みからー 増田和也.....	8
<b>■ 亀岡フィールドステーション</b>	
亀岡フィールドステーションの活動概要 河原林洋.....	9

近世の筏にみる「したたかさ」	
原田早苗.....	10
保津川の筏流しを通しての地域の知恵とそのつながり	
河原林洋.....	11
亀岡の農業と自然	
大西信弘・高橋藍子.....	12
<b>■ 海外での取り組み</b>	
海外関係の活動の経過報告	
矢嶋吉司・安藤和雄.....	13
<b>■ おわりに</b>	
地域の将来像をどう描くのか -2年間の活動を振り返って-	
鈴木玲治.....	14
<b>□ 巻末資料</b>	
1. 実践型地域研究ニューズレター「ざいちのち」 .....	15
2. 京都大学博物館 学術映像博覧会 2009 .....	16

# 実践型地域研究に関する覚書

東南アジア研究所 安藤 和雄

地域研究が学問的な営みであると位置付けされる以上、学問の専門化は目的と方法論の精緻化のためには避けてとおれない発展の道筋です。地域研究をなんでもありの地域研究から、そろそろ、従来の個別学問を基本とする普遍化を重視する地域研究と、普遍化というよりも地域がもっている個性や人々がもっている問題の克服や解決を重視する地域研究とに区分し、目的や方法論を議論していくことをすべき時期にきていると私は考えています。実践型地域研究と名づけたのは、その思いを具体化していきたかったからです。

実践型地域研究を説明するためには、地域に対する研究の二つのかかわり方の姿勢から話を始めることが分かりやすいでしょう。

フィールドワークを用いた地域研究を志している研究者の間では「どこを研究しているのですか」という聞き方よりも「どこに行っていますか」と研究対象の地域を聞かれることが多いです。これを違う表現をするならば前者では「地域を研究する」意識が、後者は「地域で研究する」意識が無意識のうちに表現されていると見ることができます。これを模式化すると図1と図2となります。「地域を研究する」図1では、研究者である「私」はあくまで主体であり、研究の対象である地域の人々や問題（地域が何であるかを含めて）は客体として位置付けられます。したがって、「私」と地域の人々の存在が分離した状況で研究が行われます。研究者である「私」の関心は、多くの場合、問題の具体的な克服にあるというよりは、問題の分析がいかに客観性をもつか、つまり、客観性という観点が重視されて分析が行われます。客観性が重視されるのは、「私」の分析の結果が普遍化されるこ

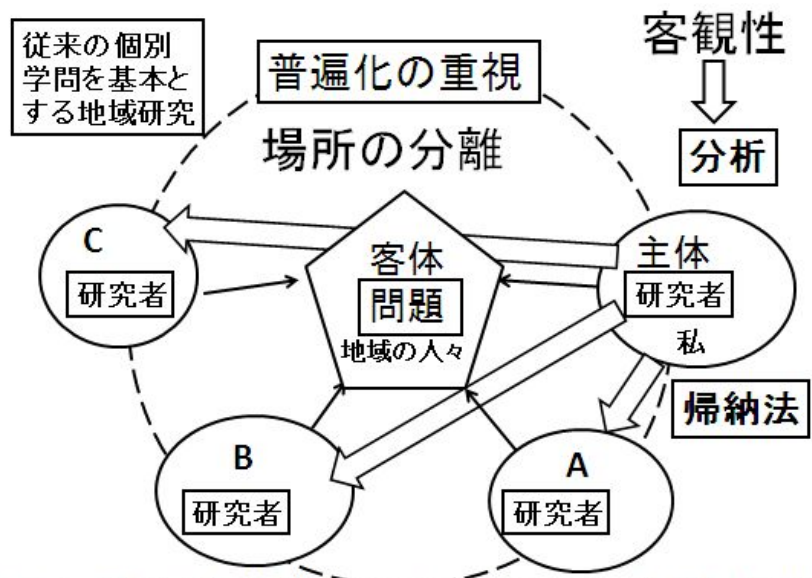


図1 存在の分離 (Ando (2010) を修正引用)

と、すなわち、誤解を恐れずに言えば、他の研究者 A、B、C に理解されることに究極の目的が設定されているからです。特に、普遍化は帰納法の分析によって論理的に推論されるという特徴があります。帰納とは「推理および思考の手続きの一つ。個々の具体的事実から一般的な命題ないし法則を導き出すこと。特殊から普遍を導き出すこと」であると説明され、帰納法は「帰納を用いる科学的研究法。特に因果関係を確定するのに用いる」と説明されています（広辞苑第五版）。つまり科学的方法を意識した地域研究でもあるのです。科学は対象を外から観察することを前提とします。科学的方法にこだわる限り、地域の人々や問題はあくまで客体であり、研究の主体である「私」とは存在が分離した関係になるのです。「問題はあなたの、彼らの問題」であり、「問題は、私の問題」ではあり得ません。したがって、問題の解決や克服を最後までやりきことは研究者である「私」の最終ゴールではないことを意識・無意識のうちに自分に言い聞かせる「科学的正統性」を設定していることに気づかされるのです。「私」にとってもっとも関心があるのは普遍化であり、他の研究者を説得することにあるからです。

ましてや農村開発の問題などに焦点があてられる時には、当該地域の問題を普遍化しやすいのは、他地域との比較による（論理的な比較も含めて）、帰納法の適用です。これで問題の普遍化がされやすくなります。とくに援助事業では、地元の人々のニーズにぴったりと当てはまる事業を計画し、実施することが難しいとよく指摘されてきました。このことは、援助事業計画策定を行う専門家やコンサルタントとよばれる研究者が「地域を研究する」限り、事業内容というペーパーワークが、地域の外の援助をする側の人々を説得するところに重点が移ってしまっているからなのでしょう。問題の解決や克服という地域の人々の問題意識が置き去りにされやすいことが起きていたのではないかと、私には思えるのです。

一方、「地域で研究する」図 2 においては、研究者は、地域という場に、物理的には包含されることとなります。つまりその場に立つ以上、本来は、存在は共有されているわけです。しかし、実際にはそんなに簡単に存在の共有が自覚されるわけではありません。研究者としての「私」が主体であり続ける限り、精神的には「場の分離」という、肉体と精神のねじれ現象が起きます。「フィールドにでかけてきます」と言って元気な顔をしてでかけていった新入生の大学院生が、帰国して「分かりません」といって、げんなりとした表情をしていることをときどき見かけますが、私は、根本的には、この肉体と精神のねじれが起きてしまっているのだと診断しています。大学院生は、研究の現場に立つことによって、主体性を喪失してしまっているのです。自分を見失っているともいえます。ただし、私はこのことをマイナスだとは思っていません。むしろ、大変重要な精神の変化が起きているのだと捉えています。無意識における「私」という主体の否定により、地域の問題、地域の人々が主体として浮かび上がってきているからです。「私」の主体性が、地域の当事者性になりつつあるプロセスなのです。大学院生が研究者である以前に、地域の人々と同一の場所に存在することで、存在の共有を行おうとしている人間の本能がそうさせているの



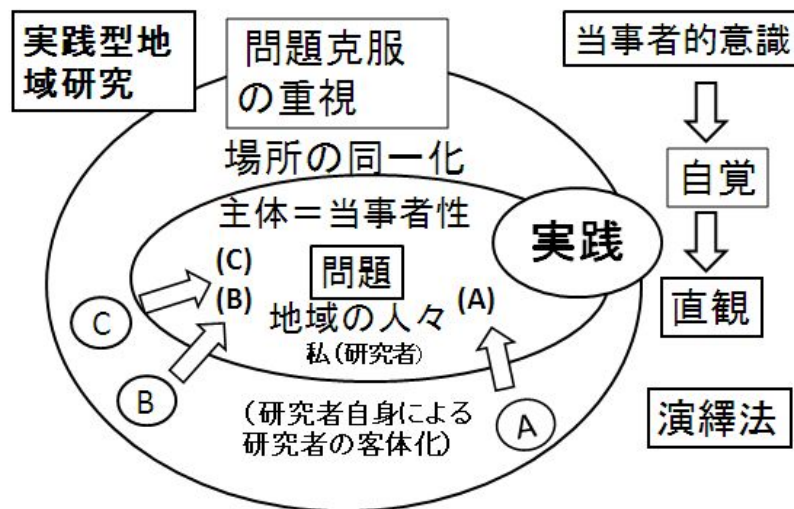


図2 存在の共有 (Ando (2010) を修正引用)

だと理解できるでしょう。言い方を変えるならば、研究者自身による研究者の客体化が行われているのです。自分の主体性の存在を一度疑うことで、真の主体が浮かびあがってくるのです。ここではもはや、「私」の分析の普遍化は主体が行う研究の目的とはなりえません。研究の目的は、地域の人々と存在を共有することで見えてくる当事者が直面している問題の克服であり、解決であるのです。そして、問題の克服や解決が強く意識された時に、帰納法による分析方法では、問題の解決が見えてこないことが分かってくるのです。N = N + 1である帰納法では、問題の本質はなにも変わっていないことに気づかされるのです。N = N<sup>^</sup>となることが必要なのです。そのためには、目的を事象説明の普遍化においている帰納法では、発想のジャンプは残念ながらあまり期待できないことになるのです。当事者あるいは当事者的な意識をもった者がもっている経験に裏打ちされた直観を重視し、N = N<sup>^</sup>であるとイメージすることが必要になります。そのためには、N ≠ N + 1であるN = N<sup>^</sup>となる新しいNなのです。NをN<sup>^</sup>に変化させていく推論（論理）が求められていくことになります。あるいは、N = N<sup>^</sup>をしっかりとイメージするための研究と言い換えてもいいでしょう。したがって、ここではもはや客観性による普遍化は重視されません。あくまで当事者的な問題との向き合い方における直観の発動が重視されるようになります。そして他の研究者 A、B、C に理解してもらうことではなく、A、B、C が「私」と存在を共有し、当事者的な自覚をもち問題解決・克服の実践を支援し、できうるなら各自の直観を発動するために、問題の解決・克服の実践に参加することが重要になります。

実は、実践型地域研究には、地域、地域に暮らす人々の主体性を認め、地域という場に自ら飛び込んでいこうとした前提から、実践への意識が自覚を確立させ、存在の共有を方法論とする直観の発動による問題の克服・解決にむけた研究という道筋が必然的に備わっているともいえるのです。この研究の仕方は、帰納法ではありません。事象の普遍性を追求しているのではなく、あくまで事象の個別性、存在が固有であるという主体性を前提と

した、演繹によって導き出されています。演繹とは「前提を認めるならば、結論もまた必然的に認めざるをえないもの。数学における証明はその典型」(広辞苑第五版)もしくは「一般的な原理から、論理の手続きを踏んで個々の事実や命題を推論すること」(Microsoft Bookshelf Basic Version 3.0)と説明されていることから明らかでしょう。つまり、演繹でいうところの前提ないし一般的な原理とは、地域の人々との存在の共有であり、当事者的な自覚であるのです。地域の人々の主体性を認め、地域と人々の存在が、「私」によって絶対肯定されることで、主体と客体という関係は存在しなくなります。そして客観性という分析に意識が向かうのではなく、地域場に存在するという当事者的な意識を「私」に芽生えさせます。実践を意識することで、当事者的意識は、自覚へと確かなものになっていくことでしょう。この自覚こそが問題克服・解決への直観を働かせる原動力となるのです。自覚が研究を実践のうちに明確に位置付けるのです。そして、地域や人々の存在をさらに持続的なものにしていく「研究」に自らをかりたてていくこととなります。

実は、実践型地域研究は、研究が人間に備わった本能的な行為だと考えているところからも発想されています。食べられる野草や薬草の発見、作物栽培、野生動物の野生化などは、研究を実践の中に位置付け生きていくための行為だからこそ、人間は世代を超えて命をつなげてこられたはずです。時には、毒草を間違えて食べて命を落とした人もいたことでしょう。生きていくために本能が行う研究は、生活の中で身近にあり、誰もが日々大なり小なり行って来たはずです。だからこそ農耕が生まれました。近代農学が発達する以前の伝統農業の時代においては、多くは無名の人々の研究によって農業技術は発展してきました。しかし、近代農学が例であるように、人間の活動に分業化が起き、大学や研究所など、研究を職業としている集団の中に身を置くことで、いつの間にか、研究という行為・実践が本来もっていた生きるための力をどこかに置き忘れてしまっているように私は思えるのです。今では、私は研究は図3のように二つに大別することが可能だと考えています。

### 本能が行わせる研究

人間の生存を維持するために、食べたり、眠ったり、セックスしたりする行為と同じく、人間の本能として備わっている行為。究極的には、直面する問題の克服を試みている当事者の人々の実践に学んでいこうとする研究。

### 研究のための研究

義務や、オリジナリティを追及するという、契約的あるいは競争的な意志が行わせる行為。究極的には、狭い意味での研究者自身の自己満足に向かっている研究。

図3 二つの研究 (Ando (2010) を修正引用)

オリジナリティが大切だ、他の研究者がやっていないことをやるのが重要だ、他の研究者に分かってもらう、客観性が重要である、等々。大学院生や研究者には日常的に、耳にタコができるほど聞かされている言葉です。たしかに、職業的な契約行為としての研究を行う上では、こうした観点は重要であると私も思いますが、しかしそれも度を過ぎると、研究者が研究者である前に人間である事実を奪っていくことになるのではないのでしょうか。生きることは絶えず自分が直面する諸問題に当事者であり続けることです。生き続けるためには、客観性よりも当事者性が重要なのは誰の目にも明らかなのです。研究者も人生を生きていかなければならない一個人の人間です。人間性から研究を再構築していく必要性を私は痛感しているのです。研究の原点は、他者との比較や、ましてや、他者との競争にあるものではないはずです。オリジナリティは、あくまで結果でしかないと思います。「研究は生きていくために、寝たり、食べたり、セックスしたりすることと同じくらい、あたりまえのことだ。そうでなければ、食べられる野草の発見も、農耕も生まれなかつただろう」と自信を失いがちな大学院生に私は説いています。研究という行為を、意識的に、本能という生命の源に戻し、その感覚を覚醒させていくことで、現在の日本の社会、私のまわりに漂っている閉塞感を打ち破っていく生きる強さを、私自身が取り戻していきたいと願っているからでもあるのです。生きてみようとする歩みを一歩前にすすめてくれる気力をふるいおこしてくれる地域研究です。私はそのためには研究の原点は人々の生命をつなげる実践にあるという立場（生存基盤科学）から意識的に地域研究を専門化させてみたいのです。

京滋フィールドステーション事業で行われている実践型地域研究は、どれもが私が当初予定していたもの以上に、本文で指摘した実践と自覚の課題がよく研究内容に表れていると自負しています。また、守山、朽木、亀岡の各FSの研究員、ならびにNPOや行政、住民の関係者の方々との協働活動が実践型地域研究として軌道にのっていると確信しています。生存基盤科学は従来の分析を中心とする帰納法の科学である必然性はないはずです。生存は帰納法の科学のみによっては扱うことができない領域です。したがって直観の演繹法による「科学」の可能性を実践型地域研究で探っていきたいと考えています。また、この場をお借りし、協力をおしみなくして下さっている関係各位に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

#### 【参考文献】

Ando, K. (2010) "Traditional Agriculture as a Thought", Keynote Speech for International Workshop 'The Alternative Value of Traditional Agriculture for Education, Research and Development', 17-19 February 2010, Faculty of Agriculture, National University of Laos. Vientiane, Laos.

# 守山フィールドステーション



Field Station MORIYAMA

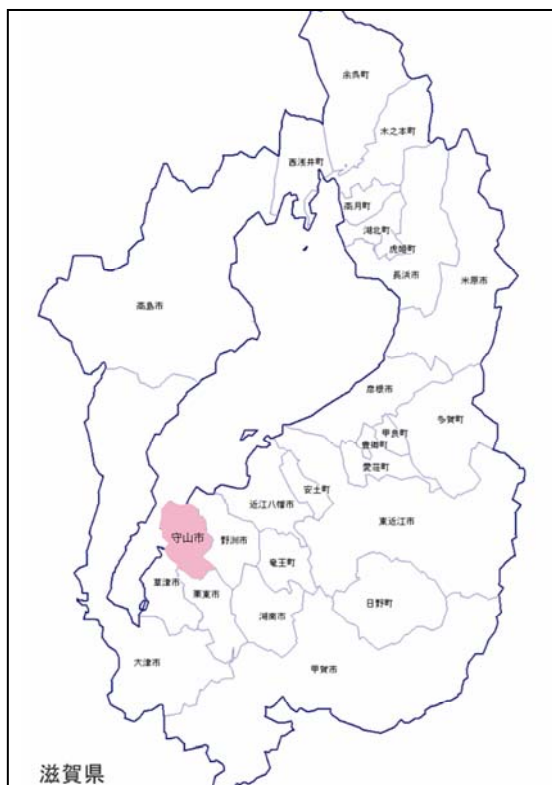
## 守山フィールドステーションの活動概要

守山 FS では、望ましい守山市の将来像を求めて研究をしています。

守山市は 3 つの性格の違った地区からなっています。駅前を中心とした市街地と、琵琶湖と、その中間にある農村地帯です。それぞれの地区に適した将来像を得たいと考えていますから、3 つの地点で調査をしています。しかし実際には、それぞれの地点で極めて難しい問題を抱えているのです。

例えば市街地です。ここでは活性化ということが大きな目標になっています。国も市も何とかしてここをもう少し賑やかな所にしたいたいということで頑張っています。閉じたままになっているシャッターを、何とかして開けるようにしたいなどといって、まちづくり会社などを作って頑張っているのです。しかし、実際に住民に聞いてみると、もうウチは開けたくないなどという家も少なくはないのです。こうなると私などは困るのです。本当はどちらに行くべきなのか？

こんな中で私達の仲間の一人は、とりあえずは市街地の空地にソバを作ってみようというので、ソバを栽培しました。参加してくれる市民などもあって、その人達との接触から本当に進むべき方向を少しでも見出すことができないか。そんなことを考えているのです。



守山フィールドステーションの活動地域

湖地帯にも農村地帯にも、おなじような根本的な問題がひそんでいます。湖だと、湖は誰のものかという問題です。農村だと、日本人は本当に農業を好んでやる人間などいるのだろうか、などといった問題です。私などは、琵琶湖は皆のものだが、今それを守っていてくれるのは漁師だという考えです。だから漁師の人達を少しでも応援したいという思いです。小さいながらも農地を所有しながら、それをよく耕作し得ていない私にとっては、農村と農地の問題は自分自身の切実な問題でもあります。

平成 21 年にはいって、守山市と京都大学生存基盤科学研究ユニットの間で「日本の都市・農村の将来像に関する地域研究」の推進ということで、協力し合うための協定が成立しました。いよいよ、本腰を入れて研究を進めるつもりです。(高谷好一)

## 漁師のスシ桶から見えるもの ―資源としての琵琶湖在来魚の再検討―

守山 FS 研究員 嶋田 奈穂子

守山市において、私は二つの研究を行ってきました。一つは中心市街地での農の活用、もう一つは琵琶湖沿岸での「資源としての琵琶湖在来魚の再検討」です。どちらも、地域が独自に抱える問題・課題に対して、提案や将来像を得るための研究です。この研究の過程で私が常に意識してきたことは、いかに地域の人と共に取り組むことができるか、という点です。ここでいう「地域の人」とはつまり「当事者」のことです。当事者から学ばず、当事者を置き去りにした研究は、このような分野ではあまり意味がないと考えているからです。中心市街地での農の活用については、巻末資料のニューズレターでその詳細を述べてありますので、ここでは、「資源としての琵琶湖在来魚の再検討」について、詳しく述べたいと思います。

### 研究概要

この研究は、琵琶湖在来魚の資源としての価値を再確認・再検討し、琵琶湖や琵琶湖漁業が直面している問題、特に外来魚問題や消費者の在来魚離れに対して、対策とその取り組みに向けた一つの道筋を作ることが目的です。簡単に言うならば、これまでずっと頂いてきた琵琶湖の魚の恵みを、もう一度、皆でちゃんと頂こう、そうすれば、琵琶湖と私たちの生活が少し近くなる。そして琵琶湖が抱える多くの問題について、本当に大事なことは何か、しなければいけないことは何かを皆で考えることができ、行動できるのではないか、という試みです。具体的には、琵琶湖在来魚を使ったナレズシを作っています。そのナレズシを核にして、漁の方法・季節・問題点、その年の漁獲量や魚の種類、市場の動き、食べる人の反応や考えなどを調査し、在来魚のナレズシがもつ可能性について考えています。この研究に対し、多くの貴重な機会や助言を与えてくださるのが、漁師の戸田直弘さん、



写真1 守山漁協に並ぶ、ナレズシが漬けてある桶



写真2 ナレズシは、琵琶湖からあげられた魚をさばき、数ヶ月塩漬けにする。その後、塩を洗い流して少し干し、飯に漬けかえる。魚の腹と頭にも飯を詰める

守山湖友会の皆さん、守山漁業共同組合女性部「このみ会」の皆さんです。どこかの大学のキャッチフレーズではありませんが、まさに、「キャンパスは琵琶湖、テキストは漁師」を実践しています。

## 背景 — 漁師のスシ桶から見たもの —

滋賀県のナレズシというと、多くの場合、それは「フナズシ」を連想されます。滋賀県で食される淡水魚と飯の発酵食品をナレズシといいます。時間をかけて発酵させ、米粒が残らないものを「本ナレズシ」、短い発酵期間で飯が粒で残るものを「生（き）ナレズシ」と呼んでいます。中でも、ニゴロブナの本ナレズシ、つまりフナズシがその代表格とされ、味、食感ともに最高といわれています。そのため、フナズシは滋賀県無形民俗文化財にも指定されており、ニゴロブナの漁獲量が減少した今では高級珍味として名高いものになりました。



写真 3 飯入れをしている時のスシ桶。飯と魚を交互に漬けていく

さて、なかなか手に入りにくくなったニゴロブナですが、さすがに琵琶湖の漁師さんの家のスシ桶にはごろごろとフナズシが漬かっているのでは？と想像してしまいます。が、そのスシ桶をのぞいてみると予想外、いや予想以上の中身でした。ニゴロブナがいません。代わりに漬かっていたのは、コイ、カマツカ、ギンブナ、オイカワ、ハス、ワタカなど、形や大きさが違う豊かな琵琶湖在来魚です。「うちとこの桶には 10 種類以上の湖魚が漬かっている。ゴモクズシやで」と、漬けた漁師さんが誇らしげに言いました。なぜ、漁師さんの漬けるナレズシが、フナではないのか？ コイなどは、あまりに大きいため、三枚におろして漬けてありますし、カマツカやオイカワなどは小さすぎて、鱗や内臓を取り除くのがとても面倒だと言われます。ではなぜ、10 種類以上ものフナ以外の在来魚を漬けるのでしょうか？ そもそも美味しいのでしょうか？ それでもなぜ、漁師さんは誇らしげに言うのでしょうか？ これらは私が率直にもった疑問ですが、漁師さんが答えた理由は、たった一つでした。「漁師として、自分が皆に食べて欲しいのは、琵琶湖で育った在来魚である。外来魚の料理でも、外国産のフナズシでもない」。

この答えに、私は、琵琶湖が抱える環境問題、特に外来魚問題の深刻さ、それに対する一般論と漁師の論のギャップや、近江の伝統といわれる食文化の発信の仕方に対する漁師の疑問などを目の当たりにすることになりました。

ここで私が見聞きした琵琶湖の諸問題の現実や、それに対する漁師の見解については次に詳しく述べますが、ああ、こんな事実や見方があったのか、と目からうるこのものや、こんな考え方がなかった、と理解するのに時間がかかるものもありました。どち

らにせよ、漁師さんの話の全てが新鮮である一方、我々（消費者）の生活が琵琶湖や漁業からずいぶん離れてしまっていることを痛感せざるを得ませんでした。

## 漁師の論理

### 1. 外来魚について ― 一般論と漁師のギャップ―

天ぷら、ムニエル、バーガーなど、琵琶湖の外来魚を用いたメニューは今や珍しくありません。県などは、琵琶湖の外来魚駆除の一環として、釣り人に対して外来魚のリリースを禁止し、catch & eat と称して外来魚を食べることを勧めています。県庁や県立博物館の食堂でも外来魚メニューが扱われているのは、そのためでもあります。この動きの根底にあるのは、「外来魚を減らし、琵琶湖の水産資源を守ろう」という目的です。この目的は、日々外来魚駆除に努力している琵琶湖漁師にも共通したものです。しかし、外来魚撲滅を目指す県と漁師の「姿勢」に生じているギャップに、皆さんはお気づきでしょうか。それは外来魚駆除を目指す手段に現れています。



写真4 琵琶湖の漁師・戸田直弘さん

先に述べた通り、県と漁師は外来魚駆除の目的に対して様々な努力をしています。そこで県は外来魚料理をPRし、外来魚を食として消費することを勧めています。

一方の漁師は、実は、外来魚を食べることについては決して納得はしていません。ひとたび食べてしまえば、それは「資源」となりかねない、という可能性があるからです。漁師の戸田さん（写真4）の言葉をお借りすると、つまり「在来魚を食い荒らす外来魚を水産資源としてみなせば」、琵琶湖での外来魚の存在を認めることになります。そうなれば、「これまでの長い歴史で自分たちに恵みを与え続けてくれた琵琶湖在来魚のバチが当たる」、というのが、外来魚を資源とみなさない立場をとる漁師の考えです。そしてそれは、外来魚の料理をPRするよりも、在来魚の美味さを知ってもらうことで外来魚駆除を進めたい、という漁師の論理に結びついています。

しかしながら、この漁師の「外来魚は食べない」という姿勢を、多くの方々はなかなか理解しにくいのではないのでしょうか。私などは、まずすぐには理解できなかった上に、外来魚駆除に対する双方の姿勢にこのようなギャップがあったことすら知らずにいたのが正直なところでした。ただこのギャップが、琵琶湖の諸問題を考える上で、極めて重要なことなのではないかという直感があっただけでした。



## 2. ブランド「フナズシ」よりも琵琶湖の「ナレズシ」

滋賀県でナレズシとして食されてきたのは、もちろんフナだけではなく。「琵琶湖の魚は塩漬けさえしておけば何でもおいしく食べられる」とさえいわれ、様々な琵琶湖の魚がナレズシに用いられてきました。滋賀県の神社では、神事や直会膳にナレズシが用いられますが、その魚の種類がフナ、ハス、ウグイ、モロコなど様々であることから、古来、多種の魚のナレズシが食されてきたことがわかります。(滋賀の食事文化研究会編 1995)

近年、味や食感が最高だといわれるフナズシ、特に子持ちのフナズシが持てはやされ、材料のニゴロブナの減少から高級珍味となり、「子持ちのフナズシ」といえばある種のブランドのようになっています。ただ、現実には琵琶湖産のニゴロブナを使ったフナズシというのは全体から見れば本当に希少で、多くは県外産のフナや外国産のフナを使ったものです。外国産のものは、塩漬けの形で輸入し、滋賀で飯に漬け直します。フナズシの加工業者の方に外国産のフナズシについてお聞きしたことがあります。「外国産のフナは、漬ける前は琵琶湖のフナと同じ形をしているが、漬けたあとは全くの別物のよう。歯ごたえ、骨の硬さなどが全く違う」と知りながらも、琵琶湖産のフナがなかなか手に入らず、9対1の割合で外国産のフナを多く漬けておられる業者さんや、「昔から琵琶湖のフナを食べてはる人は、琵琶湖以外のものは臭くて食べれんと言う」との理由で、かつての規模より相当縮小しつつも琵琶湖産のフナだけを扱う業者さんがおられました(2008年)。味や風味、食感が本来の琵琶湖のフナズシと違うことは承知しつつ、県外産のフナを使うことは、やはり「フナズシ」を求める消費者の需要に応えるための業者の苦肉の対応かもしれません。

滋賀県無形民俗文化財としてのフナズシを考えたとき、このような市場の流れや消費者のニーズに対して疑問をもつのが先の漁師さんです。琵琶湖の外で育ったフナを使って、本来の味とは異なるフナズシを出すことが、本当に近江の文化の発信なのか。それならば、もっと他の琵琶湖で育った在来魚を使ったナレズシの方が、よっぽど美味しいし、本物の文化である。彼はそう考えています。

### この研究がめざすもの

琵琶湖にまつわる諸問題に対して、以上2つの漁師さんの論理を見ていただきました。これらの論理をかたちにしたものが、漁師さんの漬けたスシ桶なのだと思います。このスシ桶には、在来魚の資源としての価値を最大限に引き出し、それが滋賀の伝統といわれる食文化の本質を支え継承するという大きな魅力と役割があると私は考えています。

「在来魚が減って、外来魚が増えてきたから、外来魚を食べる。フナズシが人気なのに、琵琶湖にフナがないから、他所のフナを使う。このような小手先の対処をしていると、取り返しがつかなくなる」こう漁師さんは言います。事実、去年は琵琶湖のある地域でニゴロブナが良く獲れました。長年の放流や、外来魚駆除が成果を見せ始めたのかなと、喜ぶのもつかの間、漁師さんの顔が曇りました。値が付かないのです。ここ数年の間、すで

にフナズシの加工業者などは県外や国外とのフナの流通を確立しており、一時琵琶湖のニゴロブナが増えたくらいでは、手を出さないといわれます。漁師さんは、何年も前からこの事態を恐れてきました。

何のために、外来魚駆除や琵琶湖の保全に努力しているのか、それは皆に琵琶湖の魚を食べてもらうため。この考えを後押しするように、守山漁協女性部「このみ会」の皆さんは、様々な機会に湖魚の料理を作り、その味を伝え広める活動をしておられます。

このような背景のもとで、私は、琵琶湖や漁業と我々の生活にできてしまっているであろう距離と、それが原因となることができる両者のギャップについて考えています。そしてその距離を少しでも埋めていくことが、私がこの研究で目指していることです。もう少し、消費者としての我々が琵琶湖や漁業と近くなって、両者が共通の認識をもって琵琶湖の諸問題に対応できるようになるために、その可能性を滋賀の伝統文化であるナレズシに見ているのです。



写真 5 守山 FS では、毎年ナレズシを一から漬ける体験会を行っている。先生は、漁師の戸田直弘さん。魚の種類と形について、話を聞く参加者



写真 6 体験会で漬けた、ワタカのナレズシ。ワタカはかつて、水田の稲を食い荒らす害魚であったという。ナレズシにすると、クセがなく美味しい

#### 【参考文献】

滋賀の食事文化研究会編（1995）『ふなずしの謎』サンライズ出版

## 在所の方から学ぶ野洲川流域調査

守山 FS 研究員 藤井 美穂

### はじめに

現在、「河川の治水と利水をめぐる公共事業と住民の知恵」というテーマで、滋賀県の野洲川流域の農村を事例に、河川の治水をめぐる公共事業によって農村社会はどのように変化を余儀なくされ、それを地域住民がいかに克服していったのかを研究している。

滋賀県守山市開発（かいほつ）に住み、同地域の土地改良組合に関わってきた A さん（84 歳、男性）に、同地域を案内していただき、野洲川改修事業、土地改良事業および集落の暮らしについて話をうかがっている。

ここでは、開発集落の調査をとおして、地域研究を専門とする私が在所の方々から学んだ多くの「気づき」の一部を紹介したい。こうした「気づき」の蓄積は、今後、どのような実践型地域研究を地域の人々と研究者が共同で行っていくのかを考えていく契機になると考える。

### A さんとの出会いと調査方法の変化

現場では、「わしはこの土地で生まれ育って 80 年や。それで、ここのことがちょっと分かってくるんや」という A さんには記憶に鮮明なポイントがいくつかあり、私はそれを写真に撮っている。被写体を選ぶのはあくまでも A さんであり、私は写真を撮るだけである。写真を撮り終わると、A さんが撮影した場所について、何故その場所を撮影してほしいと思ったのか話してくれるので、それをメモに残している。

写真撮影は、2 回目の調査の時、「あんた、ええカメラもってんな。ちょっと、これ撮ってくれへんか」と A さんに言われてから始まった。最初の被写体は、A さんの在所にある乙爾乃（こじの）神社の若宮とそれを囲んでいる低い丸石の石垣だった。撮影後、A さんは、この若宮は太平洋戦争で戦死した在所の方を祀っており、彼の兄も祀られていると話してくれたのである。1955 年、この若宮が建てられた時に、遺族会の人たちが、戦死した人に思いを馳せて、川から石を一つずつ拾ってきて積み上げたという。私にとってはどこにもあるような石垣だし、研究テーマとは全く関係がない。しかし、その石垣には、A さんや在所の人たちの大切な思いが込められていたのだ。

A さんに頼まれて写真を撮影する際に、その理由を聞いたり、撮影後に説明を求めたりしなかった。撮影者は私だが、被写体に A さんの思いが込められていると察するようになったからである。その後、A さんと一緒に彼の友人の家、寺社、石碑、農地、旧野洲川堤防跡などを訪れて写真を撮った。上に述べた神社で A さんに被写体について性急に質問をしたら、A さんの協力を得ることはおろか、写真撮影はできなかつただろう。



写真1 灯明で飾られた菜蒔盆



写真2 集落の各組の菜蒔盆への思いが書かれている



写真3 菜蒔盆に飾られた若宮

写真1~3 「菜蒔盆あるさかい写真頼むわ」。Aさんから写真撮影を依頼された菜蒔盆(2009年9月20日撮影)

撮影した後、Aさんは私に必ず質問する。例えば、川の小型堰を撮影した後、かつて堰があった場所から現在の位置に移された理由を問われた。すぐに回答を与えてくれないのだ。「あんた、なんも分かってないな」というのが私に対するAさんの思いやりのある口癖だ。

研究者が調査資料にならないとみなすものが、当該地の人々にとって重要な意味があるという自明なことを、Aさんに手伝っていただいて写真を撮るたびに具体的に突き付けられている。

研究者は、現地で自分の研究テーマを探すのに忙しい。一般に、何らかの理論で現地調査から得た情報を「ふるい」にかけている。それは研究者の一方的な都合ではないだろうか。そして、研究者の論理だけが一人歩きをして、研究者が読むための論文を書く。研究成果は、研究者だけのものとして共有されるが、調査地で話した人たちと分かちあうことはほとんどない。だから、論文には調査地の人々の顔がなかなか見えてこない。

「何故、多くの論文には、村で関わった人たちの顔が見えてこないのだろうか」。

長年、私のなかでくすぶっているこうした自分自身の研究と調査方法に関する問いに対して、先に述べた A さんと共に行う写真撮影と調査の方法は、在地の人びとが「ふるい」にかけて情報を、研究者が得るという一つの新しい取り組みといえよう。

## 在所への思い

「わしは体が動くまで、ずっとコメをつくるんや。戦争中の食糧難のことが死ぬまで体にしみついとる」。現在、A さんは、7 反（1 反は 10 アール）の水田と 6 反の畑を耕作している。毎日、早朝から昼過ぎまで畑に行き、スイカ、カボチャ、スイートコーン、ササラゴボウ、トマト、ナスビ、サツマイモをつくってきた。守山市の聴覚障害者助産所の「みみの里」の数人の聴覚障害者の方を農作業のアルバイトとして雇っている。農業の経験がない方もいるため、一から教えなければならぬこともあるという。だが、A さんは煩をいとわない。「在所に世話になったもん（者）が恩返しをするのは当たりまえのことや」と語る。

これまでの調査の過程で、在所の人々が「在所に世話になる」こと、そして「在所への恩返し」という「在所への思い」を抱えていることが、少しではあるが感じられるようになってきた。

最初に、「河川の治水と利水をめぐる公共事業と住民の知恵」というテーマで研究をしていることを述べたが、こうした A さんたちの「在所の思い」を「住民の知恵」と一括していいのか問いなおしている。

雨が降るなか水田の用排水路を 1 つずつ歩き写真を撮り終わった後、「あんた、こういう地道なことは目立たへん。そやけど長持ちするんや。わしの経験からやけどな」。調査のたびに、A さんから心に響く言葉をいただき、懐の深さを感じ入る。こうした A さんが世話になり恩返ししたいという在所とはどういう所なのか考える契機を、A さんから与えられた。

## 野洲川流域にある水害に関する史跡を前にして

A さんは、選んだ被写体に対して、選択した理由をいつも話されるとは限らない。野洲川流域にある水害に関する史跡では、A さんはほとんど何も語らなかった。

水害の史跡はおおよそ 3 つに分類できる。

1 つ目は、防災祈願や水害からの復旧を願って建立されたり、植樹されたりしたもので、3 つのうちで一番多く見られる。神社が 2 か所、祠が 1 か所、そして神社などの植樹が 2 か所ある。ほかに、水災記念碑がある。これは、1913 年 10 月、台風によって増水した野洲川が、笠原町で決壊し、死者 32 名の被害がでたことを忘れないように、再び悲惨な水害を繰り返させないようにと願いを込めて建てられた。

2 つ目は、水害にあたり殉職したりした人々を弔った碑であり、3 つ目は、水害対策に尽力した人々をたたえた碑である。双方とも、2 つの碑があった。

この地域に生まれ育ち、野洲川とともに生活してきた A さんは、これらの史跡の石碑に触れ、碑文をじっくりと読んでいる。「これも写真撮っという」と告げるだけで、A さんは何も語らない。私にとって、野洲川流域の水害の史跡は、災害が繰り返されてきた地域の人々の苦闘や防災の祈願を知る手掛かりになる。だが、各々の史跡は、A さんのなかに深く沈潜している水害の記憶を確認させるものなのだろう。

史跡の前にたたずむ A さんの静かな沈黙を、私自身がいかに感じ、読み取ることができるのかが問われていると思う。

すでに A さんと撮影した写真は約 200 枚におよぶ。今後、その写真を撮った場所を各年代の地図で A さんとともに確認し、A さんの生活史および地域の歴史を検討するための資料を作成する予定である。

# 朽木フィールドステーション

朽木

Field Station KUTSUKI

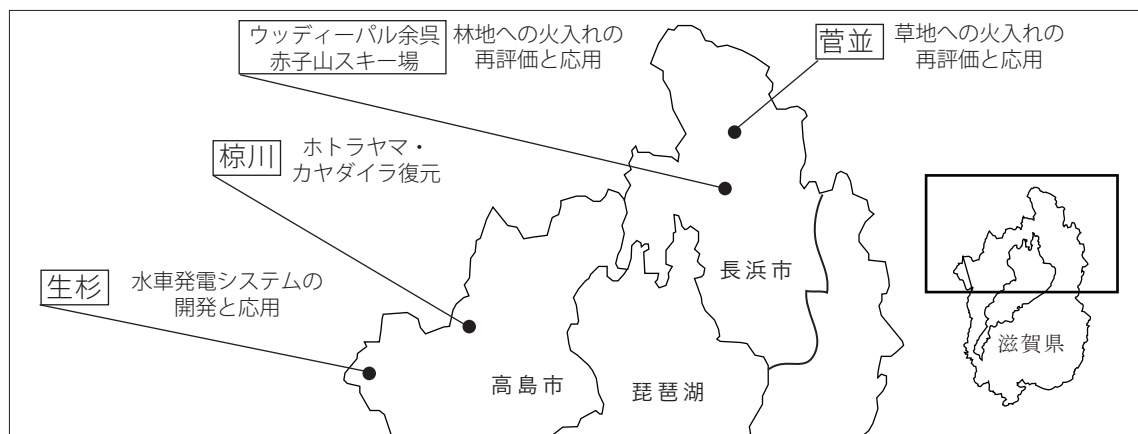
## 朽木フィールドステーションの活動概要

朽木FSでは、滋賀県湖西・湖北地方の山里で「くらしの森」づくりに取り組んでいます。びわ湖源流域では、1960年代まで周りの山々から恵みを得ることで日々のくらしを立ててきました。そこでは山の恵みを一方的に受けとるだけではなく、人の側も山の潜在力を引き出すための知恵や工夫をこらし、技を磨いてきました。このような人と自然との相互関係を通じて人のくらしを支えてきた山林原野を、私たちは「くらしの森」とよんでいます。

しかし、工業化社会は山の奥へも浸透してきました。山の恵みに代わる品々が身近になってきました。農業機械が普及し、薪炭林は人工林に変わり、山に依拠するくらしが薄れてきました。さらに、過疎化や野生動物による食害が深刻になり、「くらしの森」の手がかりは失われつつあります。このようななかで、時代にかみ合った「くらしの森」をつくりだすことが必要です。新しい「くらしの森」の再生は、将来世代が山の村でくらししていくための素地をつくることにもつながるでしょう。

朽木FSの取り組みは、「くらしの森」づくりを試みるための山林原野を確保することから始まりました。いくつかの山里を歩いて費やした時間は実践研究そのもので、今後のための貴重な体験となりました。そして、雑木の二次林、原野、休耕田、草地などに縁をいただき、実験地として使わせていただけるようになりました。山の恵みを活かしたしごとづくりが可能となる広さの森。そこへ至る前進基地として、4ヶ所で取り組んでいます。

古来より、山がもたらし、山に活かせる術の素として、「水」と「火」があります。これらに注目し、山里にのこる技に現代の技術を組み合わせることで、「くらしの森」を育てる<道具=システム>として活かすことができます。たとえば、「水」のエネルギーを使いやすくしたものが水車装置であり、これは朽木で実験をおこないます。「火」のエネルギーの実験地は椋川と余呉です。椋川では湖西の伝統的なホトラ山の雛形を造成し、余呉では2008年から火入れの試みを始めました。具体的な取り組みについては、続くページで紹介します。（今北哲也）



朽木フィールドステーションの活動先



# 「くらしの森」を再構築する

## －火と水のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくり－

朽木 FS 代表・滋賀県立大学 黒田 末壽  
朽木 FS 研究員 今北 哲也・増田 和也

### 1. 山間地＝源流域での持続的な生業基盤づくり

朽木 FS は、山間地のかつての暮らしを支えていた先人の知恵を受け継ぎ、そこに現代の環境技術を加えて持続的な生活を取り戻すことを目標に掲げている。

源流域（山地・山間地）は、環境保全、国土保全、また、生活文化の点でも重要な位置を占める。かつては源流域でも多くの人々が暮らし、耕地や山林を管理・保全していた。しかし、高度経済成長期以降人口が流出して過疎化し、放置林と耕作放棄地が増え、そこに獣害が加わって、多くの源流域が荒れてきている（写真 1, 2）。木材価格の低迷で生業も成り立ちがなくなっているから若者は出ていく一方で、暮らしの維持も困難な集落が多くなっている。

耕作放棄は用水路や河川管理放棄をともない、放置林とともに土砂崩れの要因になる。山間地の耕地面積はすでに明治期のおよそ半分ほどになっているが、現時点でいう山間地の耕作放棄率は 15%（6 万 ha）にのぼる（中間農業地と合わせた中山間地では放棄率 13%、21 万 ha、全国的には 10%、38 万 ha。2005 年の農林水産省「生産農業統計」）。一方、山間地の農業生産額は全国総額の 8%を占める。現状のまま荒廃が進めば、国土保全、食料生産上も大きな負の影響をもたらすことになる。若い世代を山間地に呼び込む、魅力ある山村生活はいかにして可能になるか、これが問題である。



写真 1 シカの食害で裸地になった森。幼樹もなく森林更新しない。（高島市）



写真 2 シカの食害で裸地になった場所が土壌流出している（高島市）

## 2. 「くらしの森」をとりもどす

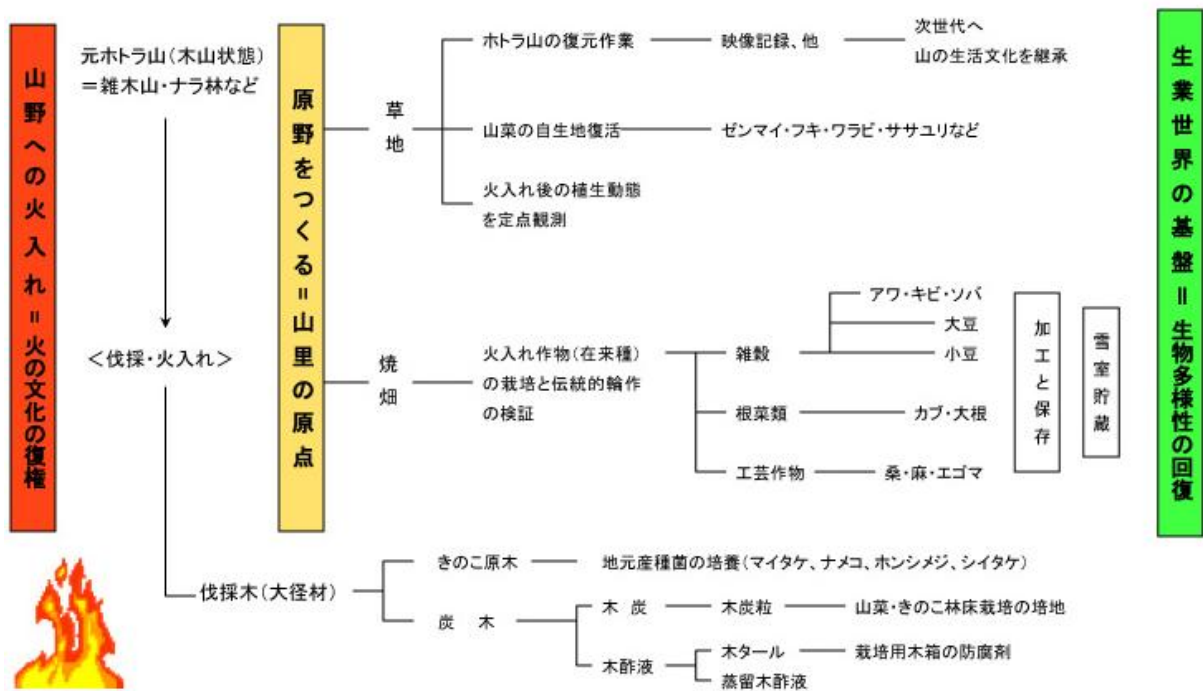
考えてみれば、1960年代ごろまでは、山間地では食糧も大半は自給でき、収入も木炭や木材生産によって平地農家より多く得ていた地域が少なくなかった。くわえて栗・山菜・キノコ・果実・狩猟の獲物など山の恵みを楽しむ暮らしができていた。村人は、山の生産力を最大限に引き出すための働きかけをし、さまざまな資源を多角的に利用していた。そうして山林が保全され生物の多様性が維持されていた。この人と自然の相互関係で生まれ人の暮らしを支えてきた林野を、私たちは「くらしの森」とよんでいる。

「くらしの森」は、山間地の文化の産物であり、生物の多様性を保証し、衣食住にわたる人々の生活の糧となり代々といのちをつないでいく持続可能な資源であった。私たちは、「くらしの森」を現代に合う形で再現し、新しい世代を農山村に呼び込むなりわいの森にできないか、と考えている。

それには、まず、「くらしの森」を生んだ先人の山利用の知恵を学び、新しい技術も取り入れてできるところを復元すること、その持続可能性を生態学・農学で検証することが必要である。

## 3. 「火のエネルギー」と「水のエネルギー」+百姓力

「くらしの森」の実践的イメージは、先人の知恵や技に現代技術を組み合わせた農林業である。それを、「火のエネルギー」と「水のエネルギー」に注目して統合的に示したのが、図1、図2である。



注) ホトラ山: 1950年代まで瀬西一帯ではホトラヤマと呼ばれる肥草山を管理し、田を養う元手としてきた。ホトラ(春の山焼きあとに萌芽したナラの幼木を主とした柴草)を夏に刈りとり、牛の敷草とし、熟成させて春田に鋤きこんだ。山と牛と田の循環型農業。

図1 「くらしの森」火のエネルギー・ファイアーエコロジーと生業世界への展開<近山=里山城>

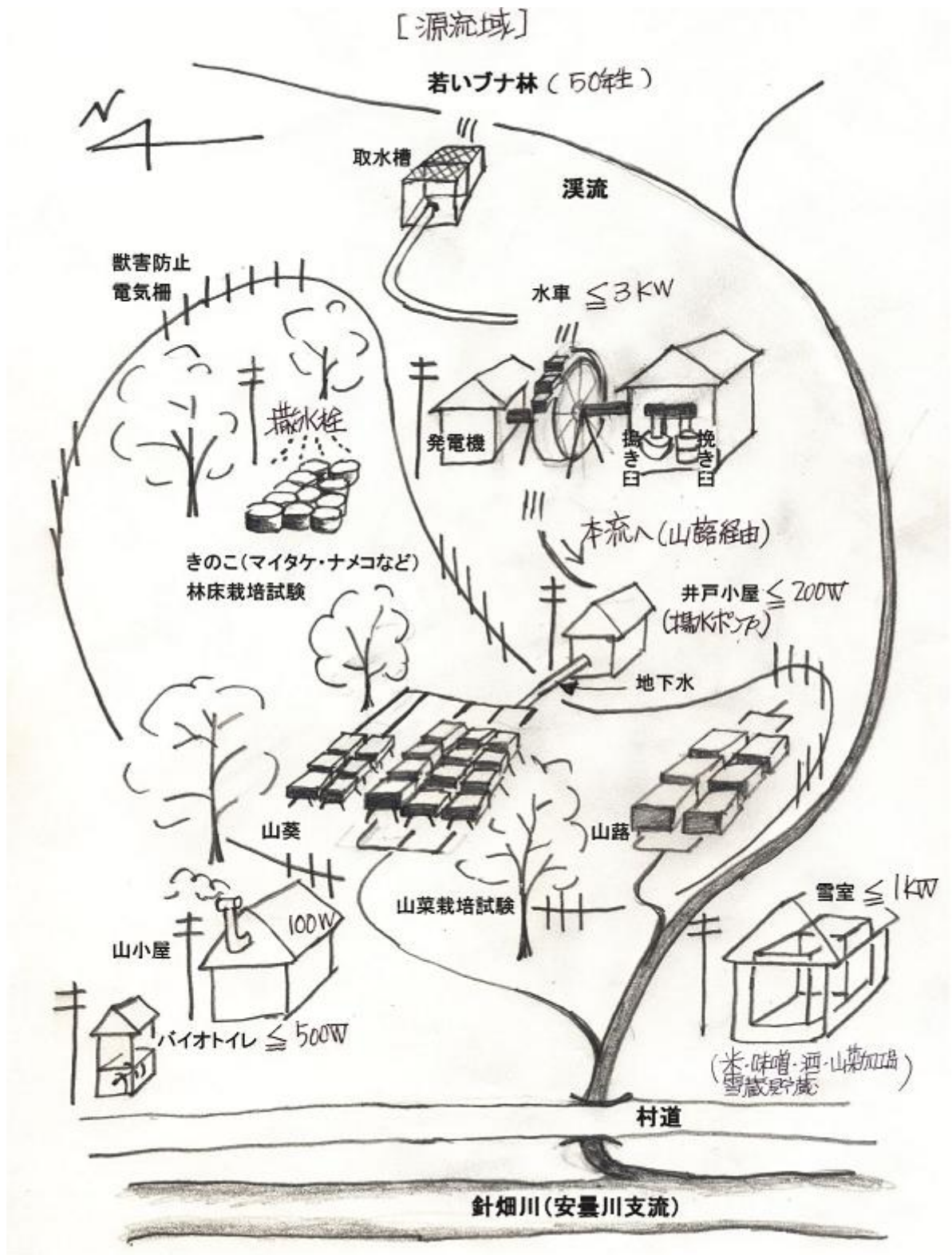


図2 <くらしの森>水のエネルギー・システム模式図

先人の山の活かし方には、火入れで植生を若返らせ生産力を最大限に安定的に引き出す工夫が含まれていた。図 1 は、火入れを適度に使い、山を総合的に利用する一つのケースである。図 2 は、山にふんだんにある水のエネルギー利用の構想である。かつての山村では、どこでも谷川の水で水車やがったり<sup>1)</sup>を動かし、精米や製粉をしていたし、発電機を回していたところも少なくない。「くらしの森」の復活には、水のエネルギー利用が不可欠である。ここに表現された「くらしの森」を充実するには、まだ多くの事業が考えられる。

私たちが山の火入れを構想しているのは、次の考えによる。火入れでは、木材は利用し枝葉や草、落ち葉を燃やす。これらは再生可能なバイオマスなので、CO<sub>2</sub> の増加カウントにはならない。また、今、山の腐植土層は厚くなる一方で、松林でかつては痩せ地であったはずの場所でも、緩傾斜地では 10-20cm ぐらい溜まっている。これは微生物によって CO<sub>2</sub> の発生源になっていると考えられる。これらをむしろ適度な間隔で燃やし、肥料化して作物をつくる過程を挟んだのち、また林地に戻すほうが合理的である。さらに、伐採・火入れによって、伐開地を作り、植生を若返らせることによって、生物多様性を維持し、山菜や工芸用植物など人間に有用な植物採集地が生まれるのである。

図 2 の各事業要素は、それぞれに専門的だが、個人や少数集団で企画・実行でき、機器もハイテク要素を含むが個人で補修できるようなものが多い。全体としてきわめてローテクの性格が強い機器と多方面の知識からなる、自立的で持続的なシステムになっている。図 1、図 2 の事業を運営するには、多面的な知識と、自然や機械の微妙な変化に気づく感性、新しい工夫やわざをためす好奇心も要求する。しかし、それも一昔前までの農山村の人々に共通した能力であり、「くらしの森」に組み込まれた技能であった。男は山仕事・農業・家の補修・漁・猟など普通にこなしていたし、女も農では男以上の存在であったし、山仕事もし、衣と食を自分で用意し、そこにおける個々の事情を互いに承知していた。こういう能力を「百姓力」と呼ぶ。現代の「くらしの森」も百姓力で作られるし、百姓力を育てる生業システムである。

## 4. 具体的取り組み

### 【火のエネルギー】系

滋賀県の湖西・湖北地域では、火を介して林野を焼畑・草肥地・茅場として利用してきた。湖西では朽木と椋川地域で、厩肥用の柴（コナラの萌芽）や草、屋根材用の茅を効率よく確保するため、昭和 30 年代の終わりまで林野に定期的に火を入れていた。春の火入れでこれらの成長を促し、また刈りやすくしただけでなく、山菜採集地としても利用した。こうした空間は、ホトラヤマやカヤダイラとよばれ、この地域の原風景を構成してきた。一方の湖北では、焼畑によってカブラや雑穀類が栽培され、ヤマグワを植えて耕作放棄後

---

<sup>1)</sup> シシオドシの原理で水を使って杵をつく精米装置。バッテリーの名が一般的。

は養蚕用の桑葉を取っていた。平成に入っても細々ながら継続していた。それによって、ヤマカブラと呼ぶ在来品種が守り続けられてきた。

朽木 FS では、湖西の高島市今津町椋川、湖北の余呉町（2010年1月より長浜市に合併）を活動先として、次のような取り組みをおこなってきた。

### (1) ホトラヤマとカヤダイラの復元（写真3, 4, 5）

シカの食害で丸裸になった、高島市椋川の裸地状の斜面（幅約 65m、長さ約 80m）において、地主の了解を得て、2008年12月から数回に分けて茅とコナラを移植している。これは、ホトラヤマとカヤダイラの復元とともに、在来種による裸地の緑化手法の実験も兼ね、さらには、シカの食害の深刻さを明瞭にする展示的作業でもある。実験地には、シカによる食害を防ぐ防獣ネットを周囲に設置した。また地域の間伐材を杭として利用できるよう、今北哲也研究員が、焼杭用の簡易窯を埋設し更に、効率よく製作するための移動式窯を開発した。2008年の春には、シカが獣害防止ネットを破って侵入し、茅株に被害が出たが、ネットを強化した結果、秋にはススキが穂を出し裸地の周囲と対照をなす草地になった。コナラも苗をカラスにほじくられるなど被害を受けたが、活着したものはまずまずの成長ぶりである。是永宙協力者の家族ぐるみ、ECC 学園高校の生徒たちの協力も得て、2009年の秋に大量のドングリを植え込んだ。第一段階は計画通りに取り組めたといえる。まだ実験地から茅や柴は刈り取りや火入れができる段階にないが、やがては産出されたものを牛の飼育や農業、茅葺き屋根の葺き替えなど、地域資源として活用していく予定である。



写真3 カヤダイラづくり



写真4 今北式焼杭器



写真5 秋のカヤダイラ実験場

### (2) 焼畑

#### <余呉>（写真6, 7, 8, 9, 10, 11）

永井邦太郎協力者の尽力で地元の協力を受け、菅並集落の財産林および赤子山スキー場の草地において焼畑耕作に取り組んだ。2009年5月から7月にかけて、菅並林の伐採と野間直彦協力者による植物調査、埋土種子調査。しかし、菅並では火入れができず、ウツデ



写真6 焼畑の伐採の無事を祈る(菅並)

イパル余呉の協力で、8月10日に赤子山スキー場の草地にスギ枝を持ち込んで焼畑をおこなった。地元および京都大学からの応援で上下2箇所、計20aほどに火入れした。朽木FSは、上部8aほどに、在来品種のカブラ複数種と大根を播種。あわせて、土壌調査。

獣害防止ネットで、シカとイノシシの被害はほぼなかったが、サルの食害が1/10ぐらいに出た。害虫はほとんど出ず、問題にならなかった。雑草は、ヨモギ、イタドリ、ゴマナが秋にもかかわらず芽吹き、急速に大きくなってカブラの芽吹きと成長を圧迫した場所ができたので、雑草取りを二度ほどおこなったが、たいした労働量ではなかった。これらの雑草は食用にもなるもので、秋に新鮮なものが取れるという意味では、使い道を考えてプラスに転換できるものである。

スギ枝を燃やす焼畑は、山形県の朝日町藤沢地区でおこなわれている。スギ林を伐採したあと、地拵えを兼ねて枝を燃やし、1年だけカブラ畑にし、また、スギ苗を植えるのである。赤子山の土壌は貧困と思われた予想を覆し、8月20日までに播種できたものはおおむね良好な育ちであった。より詳細な土壌調査が必要だが、この方法の成功は、全国のスキー場の夏・秋の利用法を開発するものである。

また、上下40mほどの斜面を利用したことから、わかったのは、肥料分が流れてくる下部には多肥性の品種を植えた方がよいことである。今回は大きく育った下部の大根に、多肥によると推測される縦に裂けたものが多かった。カブラには上部と下部で違いはあまりなかった。今北研究員が収穫物でつけものの試作をしている。

市場開拓に有効そうな、ルッコラ、ミニ大根、ニンジンも小面積作付けした。ルッコラは香りが高いものがよくできた。ミニ大根は問題なくできたが、ニンジンはうまくいかなかった。余呉方式の焼畑は、火入れ後3-4年作付けし、7-8年休ませ（その間にヤマグラを採集）、そしてまた、伐採・火入れのサイクルだった。火入れの技術は、ほぼわかったが、市場の需要が



写真7 伐採。このエノキはヒラタケ養殖に使った。(菅並)



写真8 火入れ(赤子山)



写真9 鋤入れして種を蒔く(赤子山)



写真10 一ヶ月後の焼畑(赤子山)

多い作物を試すこと、作物の作り直し法、持続可能性の検定など、多くの課題が残されている。

### < 椋川 > (写真 12)

2009 年 9 月 3 日に休耕地 0.4 a に、製材端材と古ヨシで火入れをし、焼畑的環境を造り出してカブラ・大根を栽培した。ここでも獣害防止ネットが必要である。

土が固く締まっており、火入れ後、浅く耕起して播種した。5cm にも満たない浅耕であったが、鋤入れできていなかった場所のカブラ・大根に比べると、あきらかに一回り大きかった。

収穫物を 2009 年 11 月の「おっきん！椋川」に出品した。小ぶりであったが、現代家族には、扱いやすいサイズであり、通常より遅めの火入れでも市場に出せる収穫が得られるとわかった。また、土壌が締まった休耕地でもカブラ・大根が簡単に栽培でき、十分な収穫を得ることができると判明した。

なお、余呉・椋川ともに、山形大学農学部の江頭宏昌教授から分けていただいた山形の在来カブラ 3 種を植えて、ヤマカブラとの違いをみている。



写真 11 一ヶ月後の間引き・収穫。左から 2 本が大根、1 本が升田カブラ、3 本が赤倉カブラ、3 本がヤマカブラ



写真 12 椋川の火入れ地、中央から手前に灰紫色の牛房野カブラが植えてある

### 【水のエネルギー】系

溪谷の水流を活かした水車発電システムの開発と応用をおこなう。春から秋にかけての需要期に安定した電力を得る対策として、太陽光発電を組み込んだハイブリッド式発電システムを検討し、2008 年度に製作した。2009 年度に鉄製水車の製作発注先である小森鉄工所で発電実験をおこない（写真 13）、水の上掛け方式で 200-250Wh 発電が得られた。発電機は、風力発電用のトルク量が小さいもので、これを使うと比較的よい成績が得られるとわかった。発電量を上げるには、増速機の改良が必要になる。

上掛け方式の水車は、取水口を上方に設け、大量の水を流すか数十 m 以上の落差を確保するかしなければならない。谷川で取水口を作る場合、砂や落ち葉を簡便で確実に除く方法はいまのところない。また、落差を得るには、導水管を設置するわけだが、大口径のものにしなければ管内の水流に生じる抵抗が無視できなくなり、資材費が大変高価になる



写真 13 出来上がった水車発電システム。まずは、ホースで水をかけて発電実験

とわかってきた。一方、下掛け水車は、用水路などにより簡便に設置でき、あまり場所を選ばない。

そういう認識を得て、現在、高島市朽木針畑川上流での設置に向けて取り組んでいる。上掛け方式に加え下掛け方式でも稼働できるよう改造中である。それに対応して水車による回転動力を、発電だけでなく、精米や製粉など、伝統的な仕掛けにも使えるよう装備する。電力は防獣用電気柵や山菜・きのこ栽培のための地下水くみ上げなどに活用の予定である。ローテクとハイテクの山の百姓的組み合わせである。



## 研究活動の背景 — 草地に注目して —

朽木 FS 研究員 今北 哲也

### 活動の主体

「滋賀県立大学伝統農林業研究会」（彦根）と「火野山ひろば」の構成メンバーによって担われている。「火野山ひろば」は「NPO 市民環境研究所」（京都）に事務局を置き、2005年1月、活動をはじめた。

山や野への火入れを実践している。地元の風土に根ざした「くらしの森」の再生を提案し、実験地を拓くことを目指してきた。びわ湖源流域の村里で取り組んでいる。椋川、余呉、朽木の三箇所である。

<キーワード>くらしの森、火入れ、ホトラ山、原野、焼畑、草地、生き物多様性、獣害、自然再生、山の恵み

### 1960年代までのくらしの山をイメージする

「火野山ひろば」がはじまる2年ほど前から朽木村針畑谷のおばあさん達と付き合いがはじまっていた。年配者達の身体に染み付いたホトラ刈り体験をせめてイメージだけでも共有したいと私たちは考えていた。村に住むメンバーが20年前に採集していた聞き書き記録を手掛かりにした。針畑川源流の山野に展開されてきたくらしの世界を改めて年配者たちから聞くという時間を現地で重ねた。県立大の学生ゼミと組んだワークショップも試みた。おばあさん達を誘い、針畑と縁の深い小浜市の若狭歴史資料館や三方五湖畔の縄文博物館へ研修を企画した。

### ホトラ山世界の断片

吹雪の針畑通いが功を奏したのか、ほとんど聞き取りでしか手立てのない私たちの間でホトラ山世界のイメージがようやくおぼろげながらも共有できるようになった。断片を記してみる。

山にコボシ（タムシバ）が目立つ春、苗代の種まきが終わる。山焼きの惣普請に入る。そして火入れ跡。真っ黒な原野から萌え出るヨモギ、ワラビ、ゼンマイ、イタドリ、カヤ、カリヤス、山の草々。その賑やかな光景を想像する。サツキ（田植え）の合間、谷筋をめぐりフキ採りに励むおばあや若嫁達。実にフキは飢饉を凌ぐ大事な糧であった。また、ササユリ咲く梅雨の晴れ間、熊を怖れながらキイチゴをたべ、弁当箱に詰める子供達。やがて土用を迎える。ホトラの主演、コナラの株はじりじり照りつけるおてんとうさんに枝葉をひろげ、女達の刈り干し歌に山は賑わう。草刈山（原野）→牛（厩）→田んぼと、春夏秋冬しごと舞台を移しながら在所にひらける田の土を養ってきた湖西のホトラ山慣習は、1960年代に入り牛と共に消える。

## ホトラ山から木山（キヤマ）へ

百姓のかたちが変わり、田を養う元手の草刈山は不要になった。くらしのかたちも変わりタキモン山は太るにまかせられた。ホトラ山は藪になりおばあ達が嫌った木山にかえていった。林野官は低質林といい、ナラや雑木はスギ、ヒノキに林種転換されていく。若い木山の木漏れ陽にのぞいていたゼンマイも新たな植えスギの陰に消えた。やがて、在所まわりのどこもかしこもスギ山、木山の風景に一変する。1990年代、老猟師には鳴き声も珍しかったシカが目立ち始める。数年を経ず、田、畑、山、つまりは全域がシカだらけの村に様変わりする。サンショウ、クマザサ、ワサビ、ウド、ミョウガ、ゼンマイ、ワラビ、ゴマナ、ヨモギが次々と姿を消す。追い討ちをかけるかのようにナラ枯れが湖西にも広がる。

「山が荒れてきた」といわれて反発を覚えない村の人間はいないだろう。でも、とうとう山は荒れてきたんだ、と感じてしまうナラ枯れの光景だった。立ち枯れあとは倒木である。うっかり山歩きできない。

シカに食い尽くされすっかり見通しが利くようになった林床はどうみても異様である。しかし初めての人にとっては昔からの変わらぬ姿であるかのように映るのかもしれない。針畑入りして1年の青年を湖北・余呉の山に誘った。4月の山裾を被う圧倒的な草々、木々に彼は驚いたのである。

## 山のたのしみを取り戻す

山菜採りから遠ざかって久しい。それはさびしいことである、と実感する。すでにみてきたようにまわりの山々の木山化とシカの跋扈のせいであることは明らかである。それらが実は人間のワザに因るものだというのもまた在所なかで共通の認識である。

ホトラ山時代の村の人らは一様に山の木の芽や草の葉っぱを食べ慣れ、時によって救荒食糧にさえしてきたからだろうとおもう。どうして消えたのかは、だから愚問なのだろう。

2009年春。雪解けの朽木針畑谷、ある屋敷の一コマである。消えた山菜たちは例えばその家まわりの休耕田や転作田で生き延びている。畑の仲間入りである。ここではフキやミョウガ、ヤマウドである。難しいとされるワサビもみえる。シカの群れはカモシカの餌場を侵した挙句、奥山のワサビは「針畑絶滅危惧種」となったのだ。

雪降りのある日、皆で話を聞かせてもらったホトラ山時代の若嫁は80代である、この家のおばあさんである。元気にヨメのフキ畑やミョウガ畑の世話に出る。キイチゴ採りに遊んだ子供（息子）は一家のあるじになっている。キノコの原木を伐り、ナラ山跡をネットで囲む。

「おばあがうるそうゆうてきかんのや」

「ええゼンマイ山やったさけえ。シカに食われんよう、早うにかこといてくれ。そのうちあっちゃこっちゃからのぞいてくるさけえ」

その近山はかつて草刈り山であった。木山も含め数十年なじんできた山のことである。草を刈り柴を刈りした身体の記憶とともに谷々の筋の山の恵み、例えばフキ、ゼンマイがあるからだとおもう。

### 朽木の記憶と余呉の出会い

2009年8月下旬、私達「火野山ひろば」は余呉の草山に火入れさせてもらうことができた。冬場はスキー場としてつかわれている小高い草地であった。燃え草が十分でなさそう、というわけで私達の師匠でもある地元の永井邦太郎さんの指示で他所から枝條を運び込んだ。火入れ跡、ダイコン、紅カブラなどの野菜を播いた。間引きに入った9月半ば、やわらかそうな草がもさもさとひろがっている。予想はしていたけれど、目の当たりにしてみても感動モノであった。失ってみてはじめてわかる、というわけでカブラ、ダイコン、イタドリ、ヨモギ、ゴマナ、ゼンマイ、ワラビが私の目に映り、作物と雑草の区別さえないほどにワクワクするひとときであった。



写真1 余呉火入れ地の山菜～ゴマナ



写真2 余呉火入れ地の山菜～ヨモギ・フキ・カブラ

### 草地、原野の世界からくらしの森の実験地へ

シカの勢いにただ押され続け、諦めかげんの事態からは山のたのしみは取り戻せないとわかってはいるけれど。そんなおもいのなか、未だシカの害がとるに足りない余呉の山によくぞ出会えたと感謝している。

湖西の山々、異様な林床、その惨憺たる風景と対極にあるかのような湖北・余呉の緑。双方の際立った姿が私達のエネルギー源になりそうである。ホトラ世界の山とのつきあい方、焼畑世界の山とのつきあい方。つまるところ、火を不可欠の手立てとして草地、原野を繰り返し造成してきた湖西と湖北。山とのつきあい方をあらためて微に入り細に入りおしえてもらわねばと、つい欲張りになる。

2年間の実践に取り組んで、草地の世界、あるいは原野的世界の位置づけ、価値が少し実感されてきた。それは過度な「森林の時代」に対してもうひとつの「山の世界」を示すことにつながっていくのだろうか。

くらしの森への道筋、そこへ至る実験地の意味が浮き彫りになるように、シカよ！荒らさないで！



写真3 余呉実験地へ収穫した紅蕪と防獣用ソーラー電池



写真4 余呉・火入れ実験地。紅蕪を収穫する中嶋周さん(朽木FSスタッフ・在椋川)

## 地域と関わっていくということ ―余呉での取り組みから―

朽木 FS 研究員 増田 和也

朽木 FS の活動先の一つに、滋賀県・余呉町（現：長浜市余呉町）がある。余呉では焼畑を軸にした取り組みを始めている。文化人類学を専攻してきた私は、これまでも国内外のいくつかの農山村に通い、地域の方々から話を伺ったり、日々の作業や行いに同行させていただいたりしながら、地域の暮らしや社会のあり方を学ばせていただいていた。しかし、今回のように、現地に焼畑を拓き、そうしたアクションを通じて地域と関わる、というスタイルは初めてであった。そのために、これまでのプロジェクトを振り返ると反省点もいくつか思い浮かぶ。以下では、余呉での取り組みをまとめながら、その過程で考えたこと、発見したことなどを整理し、今後の方向性を示したい。

### これまでの経緯：焼畑、そして余呉との出会い

私と余呉との関わりは、すでに 3 年になる。2006 年ごろより、焼畑耕作あるいは火入れによる林野利用に関心をもつ者たちが集まり、国内の農山村を訪ねたり、勉強会を開いたりするようになった。やがて、この集まりは「火野山ひろば」とよばれるようになり、そのメンバーを中心として現在の朽木 FS は構成されている。

私は 2000 年よりインドネシア・スマトラの森林地帯の村に通い、そこで焼畑耕作に出会った。調査村では大規模開発にともなう森林減少や商品経済の拡大により、自給自足的な焼畑を拓く世帯はすでにわずかであった。しかし、その耕作過程を調査しながら村びとの作業を手伝うなかで、私は焼畑に惹き付けられた。現地社会では、焼畑耕作には細やかな慣行が数多くあり、それらに反すると焼畑の精霊によって不幸がもたらされると信じられていた。また、私が過去のことを村びとに尋ねると、焼畑と結びつけて語られることもしばしばで、現地社会において焼畑という行いは現地の社会や文化のありようと深く結びつき、食糧生産という目的以上のいとなみであると強く感じるようになっていた。

とくに印象的だったのは、焼畑への火入れ作業であった。火を入れる前、焼畑の持ち主は私に対して、点火していく順路や万が一の場合の逃げ道などを説明し、そして火入れの恐ろしさについて体験をふまえながら語った。実際に、切り開いた林野に火を入れると、立ち上る炎は激しい音を立てながら私の背丈以上もの大きさにもなり、肌に刺すような熱



写真 1 焼畑の火入れに圧倒された(インドネシア・スマトラ・リアウ州)

を放っていた。焼畑の持ち主は火が大きくなるように風を呼び寄せるための呪文を唱えながら、裏返ったような高い声を上げていた。

しばらくすると、通りがかった村びとも立ち止まり、この他にも立ち上る煙で火入れを知った数人が集まってきた。そして、皆、世間話をしたり、冗談を言い合ったりしながら、炎が焼畑予定地を包み込んでいくのを見守っていた。このとき私が感じたのは、火入れは恐ろしいものである一方で、人を引き寄せるものでもある、ということだった。また、火入れという行いに恐怖や畏怖と同時に、ある種の高揚感を感じた。それまで火入れについては書物や映像を通じて知ってはいた。しかし、実際に火入れの場に接して、そうしたメディアが伝える以上のものを全身で感じ、圧倒されたのであった。

帰国後、焼畑は日本でも数十年ほど前まで山間部で行われており、関西圏でも滋賀という比較的身近なところでも焼畑が行われていたということを知り驚いた。こうして私は「火野山ひろば」に参加するようになった。メンバーの一人が余呉で焼畑をしているということを知り、余呉で焼畑を長らく続けてこられた永井さんを訪ねた。永井さんは、ご自身の暮らす集落で「摺墨（するすみ）山菜加工生産組合」を立ち上げ、焼畑で生産された山カブラを漬け物として加工し、その他にも地域の産物を出荷されていた。こうして、我々は余呉と出会うことになったのである。

我々が余呉に通うようになった最初の 2 年間、永井さんは余呉町内でもっとも北端に位置する中河内（なかのかわち）集落の山の斜面に焼畑を拓かれた。急な斜面の一面で、冬季は雪崩の発生するところだという。そこは雪崩が運んできた岩石が堆積しており、植生も藪状の場所であった。余呉の焼畑での主な作物はカブラである。余呉の山間部の集落には在来品種のカブラがあり、山カブラとよばれていた。カブラを漢字で書くと「蕪」である。つまり、葉（草冠の部分）が無い、という構成である。永井さんによると、カブラは葉がないものの方が根の部分が大きくなり、よいカブラなのだという。そして、こうしたガレた地質がカブラ栽培には適しているのだ、という。このようなことを伺いながら、胸を高鳴らせながら余呉に出かけた。



写真 2 余呉・中河内での焼畑(2007年11月)

## 菅並での取り組み

永井さんによると、焼畑を拓く場所はこうした雪崩跡の急斜面に加えて、山林を拓くこともあったという。京滋 FS プロジェクトが開始されると、ぜひ山林に焼畑を拓き、あわせて火入れによる植生や土壌の変化なども研究したいという意見がメンバーから上がった。永井さんに相談したところ、協力していただけることになった。永井さんは町内の知り合

いにも声をかけてくださり、焼畑のための候補地をいくつか挙げてくださった。2009年1月下旬、メンバーは候補地を見て廻り、菅並集落内の林野にある一画を選んだ。

菅並集落は高時川沿いの広い谷間に位置する。2010年2月の世帯数は41戸だが、空き家も含めると70戸ほどの家々が並び、比較的大きな集落であるといえる。明治期には高時川上流部で構成されていた行政村の中心でもあったという。実験地としてお借りしたい場所は、集落から高時川をはさんだ対岸に広がる財産区林の一画で、集落からもすぐ一望できる場所である。集落から近い方がアクセスもよいし、また地域の方々からも我々の取り組みの様子がわかりやすいだろうということを考えての選地であった。選んだ場所は40年生ほどの広葉樹林で構成されている。

菅並の林野の一画をお借りし、焼畑を拓きたいという願いは、2009年の春先に開かれた集落の寄り合いで諮られ、承諾をいただくことができた。そして、4月の初旬、余呉湖畔の余呉湖観光センターで菅並の区長さんや財産区の方々、摺墨の方々と顔を合わせを行うとともに、菅並区とは覚え書きを交わした。そして5月後半に作業を開始した。余呉では、8月の盆前後に火入れを行い、11月ごろにカブラの収穫時期を迎える。カブラは、霜が降りる季節に入ると味が締まるという。このような農耕暦にしたがって盛夏に火入れを行うには、我々の作業開始はやや遅いといえる。というのも、伐開した樹林の幹や枝を燃やすには、これらが十分に乾燥するための期間が必要であるからである。ましてや梅雨の時期をはさむことになり、条件はよいわけではない。こうしたこともあり、我々は当面、森の伐開作業に集中することになった。

作業には、区長さん・財産区長さんと在所の方がもう一人の計3人が加わってくださった。こうして8月初旬にかけて計5回ほど菅並に通い、伐開作業を行った。作業は午前9時過ぎごろから始まり、お昼休みをはさんで夕方まで続いた。作業の合間には菅並の方からの差し入れもあり、これらをごちそうになりながら菅並についての話を伺った。また、伐開作業と平行して、「火野山ひろば」のメンバーである野間直彦さん（滋賀県立大学環境科学部）が植生調査を、本プロジェクトの助教である鈴木玲治さんが土壌調査を行った。7



写真3 伐開作業。作業地の向こうには、菅並の集落が広がる(2009年7月)



写真4 焼畑予定地として伐開された林野(2009年7月)

月末ごろには、焼畑耕作地とその周囲の防火帯を含めた面積を何とか拓くことができ、火入れを8月10日と定めた。

しかし、火入れを直前にした8月5日、区長さんより集落の中から火入れを心配する声があるということを知った。FSメンバー内で相談した結果、集落に一人でも火入れを心配される方がいる中で実施するのではなく、集落の方々ともう一度話し合おうということになった。菅並では、数十年前に萱場で大きな山火が発生し、それ以来、菅並では焼畑も含めて、萱場や林野への火入れは行っていないのだという。我々は火入れを行うにあたり、万一の場合に備え、周囲の森に延焼しないよう防火帯をつくり、集落の消防用のポンプとホースを用意し、作業地のすぐ下を流れる高時川から水を取れるように河川沿いの藪を払うなどの準備をしていた。しかし、山に火を入れるということをめぐる思い浮かべるものは、地域の方々と外部者の間では異なる、ということあらためて感じた。

こうしたこともあり、我々の実験地は急遽、移されることになった。余呉町内には「ウッドイーパル余呉」というレクリエーション施設がある。その内にあるスキー場の無雪期の活用について、永井さんは支配人から相談を受けており、スキー場の草地に焼畑を拓くことを提案されていた。そこで8月中旬に草刈りを行い、8月20日に火を入れた。FSではその一面をお借りすることになり、複数種のカブラやダイコンを播種した。こうして、焼畑耕作を行うことはできたものの、急遽、場所を移したこともあり、個人的には、ただ焼畑を行ったということだけに終わってしまった気がした。

こうした経緯をふまえ、これまでの取り組みを思い返してみた。それまで私は何度も菅並に通ったものの、ひたすら伐開作業に始終しており、作業に加勢してくださった3名の方以外の菅並の方々とはまったく話をする事がなかった。そして、私たちの取り組みの目的や目指すことなどについて、集落の方々に対して具体的に説明する機会も設けてこなかった。4月に顔合わせの場をもち、作業には集落の3名の方が加勢に来てくださったこともあり、地域との関係はでき上がっていると勝手に思い込み、私の関心は時期的に遅れ気味の伐開作業に向かっていた。また、私の調査スタイルでは地域の方々との聞き取りによる情報が重要な位置を占める。にもかかわらず、この間の私はすっかり伐開の作業要員と化し、まったく自分なりのスタイルで菅並集落に関わる事ができていなか



写真5 赤子山スキー場の草地に開いた焼畑で収穫(2009年11月)



った。さらには、当面の関心が焼畑だけに偏り、菅並での暮らしを広い視点でみていこうという姿勢も失われていた。あらためて振り返れば、実践型地域研究として焼畑耕作というアクションは起こしながらも、多くの方々との関わりのなかで取り組みを展開していく視点がまったく欠けていた。私はまったく地域と向き合っていなかったのである。

## 広い視点で関わっていくこと

火入れ延期を機とした反省もあるが、じつは作業の休み時間に菅並の方との雑談のなかで得られた発見もある。それがヤマグワのことである。

伐開の作業をしていたときのこと。作業の合間の休憩時間に、作業の加勢に来ていた地元の方々と雑談を交わすなか、ふいにヤマグワのことが話題となった。余呉の焼畑では、1年目にカブラ、2年目以降にはソバもしくはアズキを育てた。そして、こうした一年生作物の後には桑を収穫していた、と伺っていた。当時、桑の葉は、蚕



写真 6 山の中の焼畑跡地の脇には桑の木が残っている(2009年9月)

のエサとして収穫されていた。余呉町の間部から木之本町、湖北町を経て琵琶湖に流れる高時川の流域一帯では、明治期から1970年頃まで養蚕が盛んであった。そのために桑はきわめて重要であった。焼畑地の選定のことを尋ねると、まず道路に近いことが条件に挙げられた。これは焼畑で収穫した桑の搬出を考慮してのことだという。こうした話を聞いて、焼畑後に桑の苗を植えているものだと、私は考えていた。というのも、焼畑で幾種類かの作物を栽培した後に多年生作物を植える、ということは広く報告されているからである。たとえば、かつて四国・高知の山地ではミツマタが、山形・温海ではスギやヒノキが、はるか遠くインドネシアのスマトラの村ではパラゴムノキ(栽培ゴム)が焼畑地に植えられてきた。私はこうした事例を思い浮かべながら、焼畑後に桑を植えるものだと思ったのであった。

けれども、菅並の方によれば、こうした桑はヤマグワとよばれ、焼畑を拓いても桑の根が土中に残っているのだという。ただし、それが自生のものなのか、昔の人が植えたものかどうかは不明である。また、人によっては桑を植えていた場合もあったかもしれない。ヤマグワの葉は常畑の桑とは栄養価がちがうためか、ヤマグワを与えた蚕は病気になりにくいということで、ヤマグワの葉は高く売買されていたそう。菅並でも戦後しばらくまで養蚕をしていたが、菅並の人はヤマグワの葉を自宅の蚕に与えるほかに、川下の商人に売買してもいたようだ。こうした会話のなかで、菅並の方々から養蚕にまつわる話はずいぶんつぎと上がってくるのであった。ヤマグワだけでは必要量をまかなえないため、当時は畑

以外にも土手や河原などのわずかな空き地にも積極的に桑を植えていたこと。今でも集落脇の河原には桑の株が残っているが、草刈りのときに一緒に刈られてしまうため大きくなることはないこと。当時の家の中は蚕棚だらけで、子供たちは蚕棚の横で丸くなりながら寝たこと。当時の菅並の暮らしと焼畑・蚕・桑の結びつきは想像以上に深いものようだ。

こうした驚きとともに、すぐに思い浮かんだことが「火入れは山の潜在力を引き出す」ということであった。これは朽木 FS の今北研究員がよく口にする言葉だが、菅並ではその一例がヤマグワなのだろう。林野への火入れ（あるいは伐開）によって、それまで息を潜めていた植物がむくむくと姿をみせるということは、植物生態学で学ぶ植生遷移として位置づけられ、さして驚くことではないかもしれない。けれども、こうして、焼畑や養蚕という人びとの暮らしと特定の植物種とのつながりが具体的に浮かび上がってくると、新鮮な驚きと興味が湧き上がってくるのであった。

その後も永井さんから話を伺ううちに、一口に桑といっても、じつは幾つもの品種があることがわかった。たとえば、シンザエモン。この名は、昔、シンザエモンという人物がこれをこの地域に持ち込んだことに由来するという。これは、田畑の端や河原に植えられている。一方、山にヒトリバエするのがヤマグワとギラである。ギラの名は、その葉の表面に光沢があり、陽の光をギラギラと照り返すことに由来する。かつて焼畑跡にはギラばかりが生えてくるところがあり、そのようなところはギラバタケとよばれた。ヤマグワとギラの葉を食べた蚕は、糸の検収率がよく、高値で取引された。しかし、これらの葉は薄く、籠にいっぱい詰めても荷は軽く、嵩はあっても蚕は瞬間に食べ尽くしてしまう。そのため、1日に数回も焼畑跡まで葉を摘みに出かけたという。

このように、食糧生産のために拓いた焼畑は、桑の自生を促し、しかも野生桑は栽培種よりも高い価値をもっていた。このため、人びとは焼畑休閑後も桑の葉を摘むために焼畑跡へ何年間も通った。そして、桑の樹が大きくなり葉を摘みにくくなると、桑を切り倒してふたたび焼畑を拓いたという。つまり、焼畑－桑畑－焼畑というサイクルが生み出され、余呉の焼畑はこの地の生態的条件と当時の地場産業とが上手く適合した生産システムの一例であった。もっとも、焼畑は桑がよく生えるところをわざわざ選んで拓いていたわけではないというので、このようなサイクルがみられたのは、ごく一部であったかもしれない。

以上のように、私は余呉における焼畑を含めた山林利用に対して新鮮な驚きと興味をもつようになった。そして、この間の反省もあり、ふとヤマグワを手がかりにして今後の取り組みを再構成してみてもどうかと思うようになった。現在では、焼畑



写真7 「シンザエモン」の葉(2009年9月)

も養蚕も過去のものと思われている。山には人工林が広がり、林業の低迷で近年は山に入る人も少ない。けれども、余呉の自然環境の特色は山であり、そこから得られる恵みであろう。そこで、ふたたびヤマグワに注目してはどうだろうか。

まず、桑や養蚕を手がかりにして、かつての農作業や山林利用について話を深めていく。これは、菅並の方々との交流を深めることにもつながる。また、せっかく自然科学系の研究者と共同で研究をしているのだから、伐開地でヤマグワがどのように、そして、どの程度ヒトリバエするのかを具体的に検証することもできよう。そして、養蚕やヤマグワに注目しながら、かつての余呉における山林利用がどうであったのかを検討する。と同時に、実践型地域研究として、こうした成果を地域とつなぐことを試みたい。

今日、桑の葉に蚕のエサとしての需要はないが、桑には昔から薬用効果が知られ、一部では健康茶として販売されている。果実もおいしい。ならば、養蚕において栽培種よりも高い評価であったヤマグワは、飲食や薬用にもうってつけではないだろうか。何よりも、ヤマグワは森を拓けばヒトリバエしてくるのであり、この地域に根ざした資源である。もちろん、商売として成立させるには、多くの課題があるにちがいない。しかし、ヤマグワは、この地域で盛んであった養蚕、焼畑、その他の山林利用を結びつけるものであり、当時の暮らしを具体的に伝える郷土史の資料ともなりうるであろう。また、ヤマグワのために森を拓くことは植生を更新させ、多様な植生状況が生み出されるために生物多様性にも寄与するとも考えられ、ヤマグワを新たな価値とともに位置づけることができるかもしれない。

## 終わりに

フィールドワークの楽しみは、それまで思いもしなかったことがらに出会うことである。余呉において、私がもっとも心を躍らせたのは、ヤマグワとの出会いであった。焼畑だけが余呉の山林利用の特徴なのではない。ヤマグワに注目してみると、焼畑にとらわれない幅広い視点で、暮らしと結びついた余呉の山林利用を見つめ直すことができるかもしれない。今後は、ヤマグワを手がかりにして余呉に向かおうと考えている。

# 亀岡フィールドステーション

亀岡

Field Station KAMEOKA

## 亀岡フィールドステーションの活動概要

保津川（桂川）が貫くように流れる亀岡盆地。そこで育まれてきた歴史・文化は、保津川とともにあったといっても過言ではないだろう。亀岡盆地は、条里制水田の遺構が見つかるように古くから稲作の盛んな土地であり、水田を中心とした水田生態系と人々の暮らしは密接であった。また、保津川では、山や農地の生産物を運ぶ水運が盛んに行われ、川を中心とした流域の人々の暮らしが形成され、発展してきた。

原田早苗は、保津川（桂川）という自然の流れをうまく利用した流筏・舟運の歴史を振り返り、近世・近代・現代、筏・荷舟・遊船といった保津川の水運に関わってきた人々の対立・協調・調整といった関係性を読み解き、「したたか」に生きる人々の姿を探っている。今年度の研究として、近世の筏の歴史の分析を通じて、保津川の輸送ルートを支配したい山方（荷主）、独占的に保津川の筏収入を得ることができる保津・山本の筏問屋、急流を下る技術を有する筏士といった主体が、自分たちの利益を考え、対立・協調・調整を行う「したたか」な関係を見てきた。

河原林洋は、保津川の前筏士への聞き取り等を通じて流筏技術を研究し、筏組や筏流しのイベント等を通じて実践的な流筏文化の普及活動を行ってきた。また、南丹市八木町において「葉枯らし伐採」という伝統的な伐採方法、亀岡市京町では唯一となった鍛冶屋において筏組に使う金具「カン」の製造など流筏に関わる流域の文化を研究し、京都・嵯峨の車折神社の玉垣改築に代表されるように流筏で使われた木材利用を模索してきた。流域の諸団体が構成される「京筏組」において、地域住民とともに、流筏を中心とした「山・川・まち・ひと」の関わりを研究しながら、今ではなくなりつつあるその関わりをあらたに再構築し、流域活性化への道筋を模索している。

大西信弘・高橋藍子は、亀岡盆地において「亀岡の農業と自然」をテーマに、水田耕作と水田生態系の関わり、又は水田生態系と人の暮らしの関わりを考察している。水田生態系の生き物たちは、一昔前まで水田漁労が行われていたように、人々の生存基盤として重



保津川（桂川）流域図（河原林作成）

要な役割を果たしてきた。稲作とともにある自然やそうした自然とのつきあい方には、多面的な環境利用の知恵があり、人々の暮らしと自然が乖離せずにある様を見ることができる。水田生態系は米だけでなく他の多くの生物資源を育む生産性があることを生存基盤という観点から見つめなおす必要があるであろう。

亀岡 FS では、亀岡盆地さらには丹波地域において、自然とそのつきあい方を生存基盤として生きてきた人々の営みの「知恵」を探求している。（河原林洋）

## 近世の筏にみる「したたかさ」

亀岡 FS 研究員 原田 早苗

上大堰川、上桂川、大堰川、大井川、千歳川、保津川、桂川。川の流れは一つであるが、この川は、流域の人々によってその呼び方は様々である。このうち亀岡フィールドステーションが取り上げている「保津川」は、一般的には亀岡から嵐山までの約16kmの区間を指す。1896年（明治29年）の旧河川法制定以降は行政上の呼称は桂川に統一されるが、それ以前は、行政上では嵐山までの区間を「大堰川」、嵐山から下流を「桂川」と呼んでいる。本報告では、主に近世の嵐山までの区間の川の利用を取り上げることもあり、「大堰川」としよう。大堰川は京都市左京区広河原の山中を源流とし、そこから京都市右京区京北、京都府南丹市日吉町、八木町を経て、亀岡へと流れ、嵐山へと続く全長約108kmの琵琶湖・淀川水系の一級河川である（図1）。



図1 大堰川流域図（原田禎夫氏作成）

本報告では、この大堰川、保津川を事例として、この自然の流れを上手く利用した筏の歴史を振り返り、保津川、大堰川の筏に関わる様々な主体間の対立、協調、調整といった関係性から、「したたか」に生きた筏に関わる人々の姿を探ってみる。

## 筏の歴史

大堰川、保津川の歴史は、平安京の寺院建築において丹波の材木が保津川を経て、嵯峨まで流されていたことがわかっており、約1200年ということになる（林家・上田 1961）。また、足利尊氏は1342年（康永元年）に天龍寺造営に際して大堰川の筏流しにより大量の材木を運ばせている。また、1583年（天正11年）の大坂城築城では、羽柴秀吉が保津（現亀岡市保津町）の筏士15名に対して、朱印状により諸役を免除し丹波材の流送に集中させ、さらに1586年（天正14年）には保津の筏士10名を増やすことも命じている。また、1588年（天正16年）には上流の宇津（京都市右京区京北下宇津町）や保津・山本（亀岡市篠町山本）の筏士50名にも材木輸送を命じたほか、世木（南丹市日吉町大字天若）、田原（南丹市日吉町田原）、保津、篠村の筏士65名に飯米を与えた上、筏流しのため召集することを命じている（亀岡市史編さん委員会 2004）。

近世になると、木材需要の急激な増加とともに、一部の木材は山越えによる陸送も行われていたが、そのほとんどは大堰川を利用した筏による輸送が最も重要な流通手段となり、江戸時代末期には年間 60 万本を越す木材が大堰川を通じて京都へと運ばれている。

自然の流れを利用しているとはいえ、保津川の上流である上大堰川は、もともと水量が乏しく、川幅もせまく、突出した岩などもあり、筏流しに適した川ではなかった。そこで、灌漑用水を引くための井堰を利用し、筏を流す際に堰を切り次の堰まで鉄砲水で流す、という方法が採られていた。また、筏による材木輸送が活発となった 1596 年（慶長元年）から浚渫工事が山国・黒田の農民たちの手により始まった。その工事費用は郷割といって村落単位で分担され、その分担額は村高、移出筏数、旧名主の負担などに応じて決められた。のちに下宇津・周山・弓削といった下流や支流の農民も加わり、1753 年（宝暦 3 年）まで行われた。藤田（1973）の分析によると、郷割の中でも旧名主が負担する割合が大きく、費用を多く負担することで、大堰川の利用権を掌握しようとしていた様子がうかがえる。また、下宇津・周山・弓削などは、単に下流、支流に位置していたからではなく、黒田・山国同様に丹波材の移出のために上桂川、大堰川を利用したかったため、浚渫工事に参加したと分析している。

また、浚渫工事以後も、洪水などにより水の流れは常に変わることから、毎年、筏流しが始まる前に川作（かわさく）と呼ばれる川の整備が大堰川全体で行われ、筏の流路の整備を行っていた。「日吉町誌」（日吉町誌編さん委員会 1987）によると、水量があっても深さは 20cm ほどにすぎない浅瀬では、蛇籠を置き流水幅を狭めた。また、川の流れが遅く浅い場所では、川柵を設置し、川の中央に水を寄せていた。また護岸堤防や沈床を設置し、洪水被害を最小限にとどめるようにしている。川柵や沈床の松杵は 30 年ほどで朽ちてしまうため、このような作業を毎年行い、川柵や沈床を作り変えながら、筏が流れるようにしていたのである。また、川柵、堤防、沈床は巨大な石で組み立てられており、人工魚礁として、ウナギ・ギギ・フナ・ハヤなどの魚を育てる場所としての役割も果たしていた（日吉町誌編さん委員会 1987）。ほかにも、固定堰には筏水路（いかだみと）と呼ばれる水路が設け

られ、筏の流下を妨げない工夫がなされていた。

このような水運を念頭においた河川改修は低水工事と呼ばれ、一定の洪水は許容しながら、筏や舟の航路の確保が図られたのである。このような人々と川との関わり方は、結果として定期的な攪乱を河川環境にもたらすとともに、河川そのもの、あるいは河川と水田の連続性を途切れさせることもなかった。このことが、現在もなお豊かな生態系が残る独特の大堰川の河川環境を形成したといえよう。

さて、丹波山地より筏で移出された材木は、クリ、マツ、キリ、竹もあったが、スギ・ヒノキが中心であった。藤田（1973）によると、黒田・山国地域から移出される筏は、商品価値の高いスギが大半であり、例えば、黒田・山国で常に移出筏数が最も多かった大野村の1862年（文久2年）の記録では、スギ筏が55%となっている。

中世までは貢納輸送が中心であった筏流しであるが、近世になると商業木材の流通が活発となる。近世における筏の主体の関係を図式化したものが図2になる。丹波材の多くは、京北などを中心とする支流も含めた、山方52ヶ村（のちに84ヶ村）といわれる生産者（筏荷主）に大堰川での筏流しの権利があり、京都の嵯峨・梅津・桂の三ヶ所材木屋（材木問屋）へ販売していた。まず、丹波材は山国・黒田などの大堰川上流の本流や支流でいった



図2 近世の筏流しにおける主体

1) 例えば京都府亀岡市内の保津川とその支流は、国内で2か所しか確認されていない国の天然記念物であるアユドキの生息地として知られている。ほかにも大堰川は良質のアユの産地としても古くから知られており、特に上流の世木のアユは、世木ダムが完成するまでは日本一のアユとして知られ、皇室にも献上されていた。



ん大小様々な筏として組まれて流され、流通増加に伴い近世初期に成立したといわれる中継点となる筏問屋まで運ばれた。筏問屋は、宇津・上世木・殿田・保津・山本に設けられ、それぞれの筏問屋を中継して京都の三ヶ所材木屋まで運ばれ、大阪にも運ばれた（小谷1984）。筏流しは、実際には筏問屋に隷属していた筏士（指子、差子ともいう）により行われた。保津・山本までは、「平川造」や「平川組み」と呼ばれる筏として組まれたが、保津・山本からは、巨岩や巨石が散在し、急流である最大の難所となる保津峡を通過しなくてはならなかった。そこで、保津峡を下ることになる保津・山本の筏士によって、宇津根浜（京都府亀岡市宇津根町）などで「荒川造」あるいは「荒川組み」といわれる筏に組み直されて急流を下った<sup>2)</sup>。

商業木材の増加により、1640年（寛永17年）以降1650年（慶安3年）以前ごろから運上木という商人材筏に対する税金（原木）の徴収が始まる。運上木は筏1乗につき20分の1運上と定められていた。藤田（1973）の考察によると、この運上は幕府運上として徴収され、1664年（寛文4年）に亀山藩が徴収事務の委託を受けるようになり、亀山藩宇津根運上所で徴収された。その後、徴収された運上木は入札により嵯峨・梅津・桂・淀などの材木屋が落札することが多かった。

このように保津川、大堰川の筏は、1760年（宝暦10年）に元木・元板あわせて63万3647本が流されたという記録からも、近世の重要な流通手段として発展し、以後1950年（昭和25年）まで山国・黒田といった上流からの筏流しは続き、それ以後も保津峡谷内では筏流しが行われてきたのであるが、1958年（昭和33年）をもってその歴史は途絶えた。

## 筏に関わる主体の対立・協調

### （1）山方と筏問屋

近世初期は山方の勢力が強い。筏問屋は輸送を委託されているにすぎず、山方からの依頼がない限り仕事はない。例えば、1667年（寛文7年）、上世木の筏問屋が山方の許可を得ずに筏に薪を乗せ、筏を流出させる事件を起こし、山方は上世木の筏問屋に委託するのを一時中止している。その後、上世木の筏問屋や筏士から薪などを決して筏に積まないという約束手形を山方に提出し決着している。また、筏の規格（大きさ）と輸送費について近世を通じて幾度となく山方と筏問屋の対立が生じているが、当初は山方の主張が通ることが多かった。輸送費は山方が負担していたが、山方としては、少しでも安くするために、筏の幅を広げ、長くして流した。一方、保津・山本の筏問屋にとっては、急流の保津川を下るため、大きく長い筏ほど危険を伴う。さらに、荒川造に組み替えるのに日数を要すること、筏が大きくなることで輸送料からの利益も減ることから、筏の大型化は受け入れ難いものであり、山方に対して異議を申し立てた。その後、1682年（天和2年）、材木問屋

<sup>2)</sup> 「荒川組み」と呼ばれる、保津峡を下る筏は、それより上流の「平川組み」と呼ばれる筏に比べていくつかの特徴的な構造を持っていた。たとえば、「カセギ」と呼ばれる、筏の背骨のような役割を担う構造は、筏が曲がりすぎるのを防ぎ、曲がりくねった急流の続く保津峡で筏が破損するのを防いだ。（河原林 2009）

の仲裁により山方と保津・山本の筏問屋の間で筏の規格についての協定が成立することとなった。規格は、幅が従来通りの1間2尺(約2.4m)、長さは雑木筏の場合、従来通りの25間(約45m)としたが、スギ筏は、山方の主張を反映し30間(約54m)となった。これより長いものは、切り取り、超過分に対しては増銀された。

保津峡を下る筏の輸送による運賃は、上流の筏士の宿泊費を含む筏問屋の預り賃と保津峡を下る筏士自身の指賃から構成されている。運賃を負担するのは山方であるが、山方から筏問屋へ直接支払われるわけではなかった。運賃は、山方から三ヶ所材木屋へ一旦支払われ、筏問屋は毎年2月と8月に受け取り、指賃は筏士の労働に応じて、保津・山本の筏士に支払われた。山方としては、運賃を筏問屋に直接支払う方法に変えることで、運賃の引き下げの交渉を行いたかった。1696年(元禄9年)、山方は運賃の支払を「奥にて」直接支払うから奥に受け取りに来るようにと指示したが、保津・山本の筏問屋は、指賃は昔から三ヶ所材木屋で受け取っていたので、今後もそうしたいという依頼を送付し、山方が運賃の直接支払者になることを阻止している。これは、支払い・受け取りに際して、中間に三ヶ所材木屋を置くことで、山方の意向に添った運賃改定を難しくしていたとも考えることができる。このように、保津川の筏流しを独占している保津・山本は、徐々に発言力を増していったことが伺える。

しかし、同じ1696年(元禄9年)には、保津川の筏の運賃に関して山方と保津・山本の筏問屋が対立する。山方によると、殿田の筏士が保津・山本まで筏を運ぶ場合、3名で2日かけて運ぶ。その運賃は、1日1人当たり銀9分であり、総額5匁4分となる。一方、保津・山本の筏士は、3名で1日かけて三ヶ所材木屋まで届けている。その運賃は計算すると、1日1人当たり4匁2分であり、総額で12匁6分にも及び、輸送区間として短いにもかかわらずその価格は2倍以上であり、高額ではないか、というものである。これに対し、保津・山本の筏問屋は、12匁6分のうち、4匁6分は上流の筏士の宿泊費を含む筏問屋の預り賃であり、残り8匁は、荒川造にするのに3名で2日を要すること、場合によっては保津峡谷内で筏が岩に乗り上げ破損し、難所の通行は容易ではないことなどから、筏造り賃も考慮すれば、筏士1日当たり1人前で2分程度であると反論している。山方は、運賃が安くないのであれば、筏を大きくすることも訴えたが、京都奉行所の裁定により、1682年(天和2年)の規格となった。その後も度々、規格、運賃について筏問屋、さらには発言力を増していく保津・山本の筏士と対立するようになり、上流の筏士にそのまま保津川を乗り通させるという強硬手段にも及んでいる。

## (2) 保津と山本の筏問屋

筏問屋は1672年(寛文12年)には保津に14軒、山本に3軒あったが、筏問屋は村内の長百姓により独占され、村内の下層の百姓が筏士として筏問屋に隷属する形で筏流しに関わっていた。上流からの筏をすべてこの2村の筏問屋が引き受けるため、当初は、保津・山本の間での競争や対立が激化することとなった。まず、大堰川上流から流されてきた筏は、保津村のすぐ近くにある宇津根運上所で一旦停泊し、運上木の徴収を受けなくてはな

らなかった。そのため、保津村より下流となる山本村の筏も保津村領内にとどまる必要があった。1639年（寛永16年）以降、この筏繋ぎ場に関して両村で度々対立が起きる。1672年（寛文12年）に近隣の宇津根村、余部村の者による仲裁により、2村の筏繋ぎ場の場所が定義され、山本村の筏問屋が利用する区画については、山本村の筏問屋が毎年地代銀30匁で借りることで決着している。

筏問屋は山方から材木の輸送を請け負っているにすぎないが、どの筏問屋を指定するかは山方が決定していた。保津と山本の筏問屋は前述のように山方との筏の規格・運賃の交渉に関して対立することもあり、1672年（寛文12年）と1681年（天和元年）に連帯責任と平等的発展を基調とした規約を作っている。しかし、保津・山本の筏問屋の中には、少しでも移送を多く請け負いたいため、上流へ足を運び、規約に違反して勝手に山方の意向を受け入れたりする筏問屋もあった。1848年（嘉永元年）から1868年（明治元年）までの両村が請け負った筏を見てみると、長年にわたる取引を通じて、山本は黒田、保津は山国という分担が成立するようになる（林家・上田 1961）。

### （3）筏士の台頭

筏流しの最大の難所は、巨岩や巨石が散在し、曲がりくねった急流がある保津峡であり、保津・山本の筏士は、筏問屋に隷属している身分ではあったが、この急流を下る技術を唯一有していたことから、次第に筏問屋や山方に対しての発言力を強めていくことになる。前述の通り、山方と筏問屋は、筏の規格と運賃に関して度々対立しているのだが、1782年（天明2年）の筏の規格に関わる筏問屋と山方の対立では、筏問屋が筏士から出された要求をそのまま山方に提案している。これは、亀山藩の財政悪化に伴い、これまで亀山藩を支えてきた保津・山本の地主である筏問屋の経済的勢力も衰え、筏士を統制することができなくなったためである。筏士はその後も発言力を増し、ついに、1826年（文政9年）には筏問屋の会議に指子惣代5名までの参加が認められ、筏問屋の意思決定機関に参加するまでとなった。

このように、近世の筏流しは、保津川の輸送ルートを支配下したい山方、独占的に保津川の筏収入を得ることができる保津・山本の筏問屋、急流を下る技術を有する筏士の3主体が自分たちの利益を考え、対立・協力し、「したたか」に生きた姿を伺うことができる。

#### 【参考文献】

- 小谷正治（1984）『保津川下り 船頭夜話』文理閣  
亀岡市史編さん委員会（2004）『新修亀岡市史本文編第1巻』京都府亀岡市  
河原林洋（2009）「保津川の筏の構造」『保津川筏復活プロジェクト2009報告書』京筏組  
藤田叔民（1973）『近世木材流通史の研究』新生社  
林家辰三郎・上田正昭編（1961）『篠村史』篠村市編纂委員会  
日吉町誌編さん委員会（1987）『日吉町誌』京都府船井郡日吉町

# 保津川の筏流しを通しての地域の知恵とそのつながり

亀岡 FS 研究員 河原林 洋

## 1. はじめに

約 1200 年の歴史を持つといわれる保津川（桂川）の筏流し。その歴史を通して、筏流しは地域の産物を運ぶ流通手段であり、山とまちを結ぶ経済的大動脈でもあった。流域の産物が川下へと運ばれ、まちの生活を支え、まちの文化などが川上へと運ばれ、流域の生活を支えた。筏流しの拠点は栄え、数多くの地域住民が筏流しの恩恵を受けてきた。保津川を中心に、可視・不可視的に流域住民が密接にリンクし、互いに支え合っていたのであ



写真 1 保津川を下る筏

る。しかし、筏流しは、昭和 20 年代を境に、急激に減り、現在ではその姿を見ることはなく、流域住民によってその技術・歴史・文化を顧みられることは少なくなった。

経済・文化の大動脈であった保津川は、農業や保津川下りをはじめとする観光業のみが恩恵を受ける河川となり、多くの流域住民との関わりは消えつつある。川のにぎわいは影を潜め、川はただの洪水、生活水、ごみなどを垂れ流す一種の排水路と化した。「生きた」川ではなく、「死んだ」川へと変貌しつつ、山・川・ひとのつながりはかつてないほどに乏しくなった。

保津川の流れによってつながっていた流域住民をもう一度その姿に戻し、あらたなる人の交流・ものの交流へと発展させるべくいろいろな活動が保津川流域で展開されている。その一つが、私の「保津川の筏流しの研究」である。

今こそ、流域住民が再び山や河川とつながりあうことで、流域の発展はさらなる展開を見せるのではないだろうか。流域の諸団体や住民の方々とともに、これら諸問題を討議し、問題解決の糸口を探り、地域の発展の一役を担えればと考えている。

## 2. 筏流しを地域の知恵・財産に

筏流しを単なる衰退した一つの流通手段と見るのではなく、流域の産業形成、都市形成を支え、発展させてきた産業とみなし、その中で培われた流域の歴史・文化を流域住民の財産とする活動を行ってきた。この活動は、一人の研究者のみで行うことは難しく、多くの流域住民の参加が不可欠である。そこで、京筏組と呼ばれる団体を流域の諸団体、住民とともに結成し、プラットフォームとして、各々が活動の輪を広げている。

ここでは、平成 20～21 年度の筏流しの研究活動を紹介する。

## 京筏組（保津川筏復活プロジェクト連絡協議会）

京筏組は、戦後途絶えた保津川の筏流しの歴史と文化を再構築し、地域の歴史・文化の発展、地域活性化を目的とした団体。前身は平成 20 年に発足した「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」。平成 21 年度、保津川に限らず、桂川全体を視野に入れた活動を目指し、現団体名へ変更。主な参加団体は、京都府南丹広域振興局、亀岡市文化資料館、南丹森のエコミュージアム、NPO プロジェクト保津川、保津川の世界遺産登録をめざす会、森林環境ネットワーク、株式会社アオキカヌーワークス、天若湖アートプロジェクト 2009 実行委員会、桂川流域ネットワーク、カップ研究会、京都学園大学歴史民俗研究会、京都大学生存基盤研究ユニット・東南アジア研究所（順不同）。

## 元筏士への聞き取り調査

南丹地域に健在の元筏士は 3 名を数えるだけとなり、その年齢は 80 歳を超える。まさに今、その技術は途絶えようとしている。「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」において、亀岡市保津町在住の元筏士 2 名に聞き取り調査を行い、筏の技術、筏士の生活などを調査した。先人の知識と技術は多様性に溢れ、現代に生きる私たちへの「知恵」として活用されるべきではないだろうか。



写真 2 元筏士の聞き取り調査

## 保津川の元筏士

平成 20 年 5 月より、亀岡市保津町在住の元筏士である上田潔氏と酒井昭雄氏に筏組・筏流しの技術について聞き取り調査をしてきた。元筏士はこの地域では 2 人だけとなった。

上田氏は、大正 9 年 4 月 29 日、亀岡市保津町生まれ。昭和 23 年頃筏士となる。酒井氏は、昭和 2 年 5 月 3 日、亀岡市保津町生まれ。16 歳より祖父の勧めもあり、筏士となる。2 人とも昭和 32～33 年頃まで、保津峡から筏を流していた。



写真 3 上田氏(右)と酒井氏(左)

筏流しは、主に農閑期の冬期、保津峡と呼ばれる峡谷内の足場の悪い中で行う寒さと危険を伴う過酷な仕事であった。ここで当時の筏士の日を紹介する。

朝、7時半ごろ山陰本線の亀岡駅を汽車で出発し、保津峡駅で下車し、保津川の現場へと向かう。主に筏士は4～5名で、木馬<sup>1)</sup> や車（牛に曳かせる）で川辺に運ばれた木材を川に落とす者、木材を太さや長さによって並べ替える者、1連ずつ筏に組む者、組まれた連を1枚の筏につなげる者、とそれぞれ役割分担がなされていた。平均12～13連をつないで1枚の筏とした。筏を組み終わるのは、14時頃で、それから筏で嵯峨へ向かうのである。上田氏はこの時「やれやれ」という気持ちになったそうだ。それだけ急斜面、急流での筏組は危険な重労働であった。嵯峨まで下ると、筏は筏仲仕<sup>2)</sup> に引き渡し、筏士は嵯峨駅へと帰途に向った。

### 保津川の筏

元筏士への聞き取りのなかで、実際に筏を組み下す方法を学んでいる。一般的に筏というと、木材を単に横にならべたものと思いがちだが、狭小で歪曲な急流を下る筏を組み下すことは、長年培われてきた技術と経験が必要である。

ここでは紙面上の都合もあり、昭和20年代の保津川の筏組と筏流しの概略のみとする。

保津川における筏のサイズは、保津峡の川幅の狭さや流れの激しさ等により、幅約2.7m、長さ約55m<sup>3)</sup>までとされた。筏を細分化すると約12～13連の筏で構成されている。直径9cm以上、長さ約4mの木材を縦に並べ、各木材の両端にコウガイ（カシの木等）と藤蔓を横に並べて、U字型のカンという金具を縦に打ち込み、両者を押さえ、両端を藤蔓でくくる。これで幅約2.7m、長さ4mの筏が出来上がる。これを「連」と呼ぶ。これらを縦に12～13連、藤蔓のみでつないでいき、全長約55mの一枚の筏が完成する。1連目からハナ、ワキ、ソウと呼び、特に重要視した。なぜならば、これらの部分に筏を操舵するときに必要な舵が取り付けられるからだ。舵を取る筏士は、ワキの筏に乗り込みハナの部分に取り付けられた「カジボウ（ねじ木）」と呼ばれる舵を上下左右に動かすことで筏の舵を取っていた。

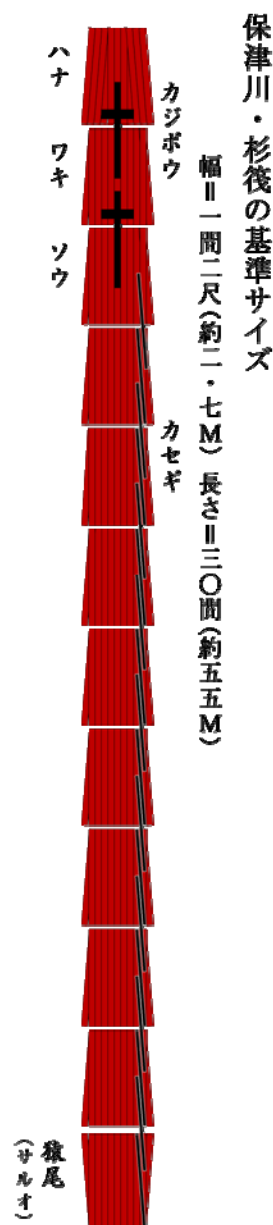


図1 保津川の筏の構図

1) 木馬(きんま)…木材を運ぶそりみたいなもの。

2) 筏仲仕…筏を解体し、嵯峨の貯木場まで運ぶ。

3) スギ筏は幅1間2尺×長さ30間が江戸時代(延宝期)以来の協定規格であった。(藤田1973)



写真4 連を組む



写真5 連をつなぐ

かつては、筏を2～3人で操舵し、1人目は、ハナに乗り、岩などにあたらないようにヒノキの竿で岩や川底を突き、2人目はワキで舵を取り、3人目は筏の後尾で筏が岩に当たらないよう竿を突いた。

全長約55mある筏を組み下すことは、熟練した技と豊富な経験に裏打ちされた伝統的な筏組・操舵技術によってなされるものである。それらは日々筏を組み下すことで培われ、伝わっていくものである。元筏士の年齢を考えると実際に筏の上で学ぶことはかなわない。いかに、机上に置いてその技術と経験則を学び、後世に伝えていくかが課題であろう。

### 筏組・筏流しの実践

平成20年9月、私が参画する保津川筏復活プロジェクト連絡協議会主催の筏流しのイベントを行った。それまで元筏士より聞き取ってきた筏組の技術の継承と筏流しという地域財産を流域住民に伝えることを主眼とした。亀岡市立保津小学校と京都府立南丹高等学校の生徒を対象に、筏組の体験教室、試し乗りを行い、子供たちの歓喜の声が保津川にこだましました。筏を見て、触れて、感じることで保津川の歴史・文化の一端に触れ、保津川に対する認識も変わったのではないだろうか。



写真6 筏体験教室(平成20年)

元筏士の指導の中、保津川下りの船頭衆11人で幅約1.5m、全長約18mの6連の筏組を行った。木材は保津小学校に保管されていたものを利用した。各工程を元筏士に確認してもらいながらの作業となった。保津川の筏は、急流を下るため、荒波にも強い筏を作ることが必要だ。筏組に必要なものは、木材、カン、コウガイ、藤蔓の4要素である。各要素がお互いに調和して初めて強い筏となる。しかし、ここにおいて、強いという言葉は、一般の意味とは若干異なる。組まれた筏は、隙間があったり、藤蔓は緩かったりと一見頼り

なく思える。実際、筏に乗ってみても、木材は1本1本動くし、隙間に足が挟まりそうになる。また、連と連とをつなぐ藤蔓も緩く、前後の筏が流れごとに離れたり近づいたりする。しかし、これらのことが肝要なのだ、元筏士は言う。もし、隙間なくしっかり作りすぎると、荒波に反発するため、どこかに負担がかかり支障が出る。荒波の力をうまく受け流すように「ゆるみ（あそび）」がなければならない。これが強い筏なのである。反面ゆるみすぎてもうまくいかない。この加減は長年の経験知で判断されるのだ。「ゆるみ」が「つよさ」を生む。「つよさ」を「つよさ」で抑え込まない。ここに、先人の自然と接する術を垣間見たように思う。

川の流れを熟知するベテラン船頭6人で、保津川下り乗船場から亀岡市篠町山本まで約3kmの筏流しを行った。これには現役の船頭衆の存在が不可欠であった。川の流れを知らぬ素人では、到底実現不可能であったろう。一瞬の判断で流れを読み、安全な流れへと筏を導かなければならない。400年培われた船頭衆の技術で、1200年続いた筏士の技術を継承しようとしている。乗り物の形は違うが、今も川で生きている人々の存在は大きい。しかし、山本まではまだ穏流部で、そこから始まる保津峡の急流の筏流しは次の年への課題となった。まだまだ、元筏士への調査不足と筏流しの技術の認識不足が課題であった。



写真7 筏流し(平成20年)

平成21年度、何度か筏の試作品を作る機会を得ながら、元筏士への筏組・筏流しの技術の調査を行った。保津川下りの船に乗船し、船下りの約16kmの行程の映像を撮り、急流毎に、筏を流す方向、筏の操舵方法を元筏士より聞き取っていった。これらの技術は、私自ら保津川下りの船頭であるという経験も加味でき、理論上はほぼ理解できた。しかし、船と筏とは、構造上まったく異なる。船の全長は11m、筏の全長は最大で55m。船は一体型であるのに対し、筏は12連だと11の節をもつまさに蛇のようなもの。先頭部と後部では全く逆の動きをする。また、川の流れは、緩流と急流が繰り返され、55mある筏を操舵する場合、それらの兼ね合いも考慮に入れる必要がある。つまり、筏の前部が急流に入ると、筏は先へと引っ張られるが、後部はまだ緩流である。そこで連同志が引っ張り合い、筏全体の流れ方が大きく変化する。特に、流れが大きく曲がっているところではこの変化が顕著になる。操舵を誤ると、筏士言葉で「ネズミとり」といわれるように、筏が折れ曲がって大破してしまう。全長約55mの蛇のような筏を操舵する技術は、一朝一夕では習得できない。

上記の課題を考慮し、平成21年9月、2度目の筏流しは、急流部でも多少緩やかなコースを選択し、筏の長さは昨年と同じ6連、全長は約24mと決めた。1連の長さ約4mは昔



の筏流しの規格である。

今回は、保津峡内の落合から嵯峨嵐山までの行程である。落合は、川縁に林道が通り、木材の搬入も簡単にでき、緩やかな流れで筏が組みやすい場所である。筏流し前日、地元の材木会社に発注した木材と南丹市八木町筏森山で伐採した木材計 80 本を川辺に搬入した。そこから当日、川に木材を落として、筏に組む予定にした。これが当日ハプニングを生むこととなる。

今回は足場の悪い峡谷ということもあり、高齢の元筏士の指導は依頼しなかった。また、元筏士の方から、自分たちだけで筏組することを勧められた。その分、身をもってわかることが多いだろう。なにごとにも自らの経験であると。



写真 8 木材を川に落とす

木材を川に落とす作業に船頭衆 12 人とボランティアスタッフ約 10 名で取りかかった。約 30 分程度で終える予定であったこの作業が難航を極めた。木材に不慣れなこと、木

材が十分に乾燥していないこと、木材が思った以上に太かったことなどが原因であった。トラック輸送であれば通用する乾燥状態は、筏流しには不適切である。また、木材の寸法を末口 10cm、長さ 4m に設定していたが、用意したヒノキの間伐材は、太いところで直径約 30cm になることもあった（末口とは木材の細い方の呼び名である）。重量も長さも千差万別であり、木材を調達するにも、多くの知識と経験が必要である痛感した。

また、それらの木材を筏組する場合、その重量、長さによって、各連ごとに振り分ける作業も大切であることも痛感した。重量・長さのちぐはぐな連が各作業員で作られ、あとから、長さの調整が必要な筏や他よりも沈みこむ筏が見られた。

かつては、木材を落とす、木材を選別する、木材を筏に組む作業を各筏士が分担していたが、これらの作業も長年の知識と経験が必要であり、実際の作業の困難さを痛感した。先述したように、元筏士が筏組を終えると「やれやれ」と感じたことは当然であった。筏を組むことばかりに注目しすぎて、最も重要な木材の仕分け行程を見落としていた。規格の揃った製品ばかりに取り囲まれ、作業マニュアルに慣れている現在の私たちにとって、自然の生成物をいかに取り扱うか、そこには先人の知恵が必要であろうことは想像に難くない。

また、筏流しにおいても、経験のなさが露呈する場面もあった。筏の後部が岩にあたりながら岩をよけていったこともあった。今回 6 連の筏だったのでよかったが、これが、12～13 連というかつての筏の長さであれば、どうなっていたかわからない。元筏士の方が「6 連やったら、(船頭でも) なんとかなるやろ。12 連はちょっと難しいやろね」と常々言っていた。その通りであった。かつては筏士になって 1 年以上は舵を持てなかったそうだ。1 年

以上かかって初めて川の流れ、筏の動きをある程度まで把握できるのである。

このように、今回の筏組・筏流しは、実に私にいろんな教訓を与えてくれた。聞き取りだけで得た知識は、実践の中では単なる知識でしかない。実践で初めて活用してみても真にその意味が理解できるのである。また、元筏士のなにげない言葉の中に真実が含まれ、その真実は、実践を通してしかわからないものもある。



写真9 筏流し(平成21年)

元筏士の聞き取りにおいて知りえた伝統技術をただ知識としてのみに残すだけではなく、実際に筏を組み下すことで、当時の筏流しの技術の知識を知恵として理解し、地域の財産とすることを主眼に置いてきた。しかし、その道のりは遠い。いかにして知識を知恵へと昇華していくのか試行錯誤の毎日である。

### 3. 筏流しを通しての地域のつながり

筏流しの調査研究にとどまらず、筏流しに付随する産業も研究の対象としたい。平成21年度は、主に、筏流しを形作る各要素を一つの流れとして検証してみた。つまり、木材の伐採、筏組用備品の調達、筏組・筏流し、木材の利用である。その他にも要素はあるであろうが、今回はこの4点に絞った。

#### 木材の調達

衰退の一途をたどるといわれる日本の林業。伐採、出荷しても先行投資に見合う収入が得られず、さらなる投資を困難にさせ、放置するしかない状況と聞く。放置林は、採光のない暗い森林となり、土壌を疲弊させ、人工造林地帯は、がけ崩れなどの危険性を内包するといわれる。地域の山にある放置林を活用し、商品価値のあまりないといわれる間伐材に価値を生み出そうと考えている。

南丹市八木町筏森山において、地主の方の了解を得て間伐する機会を得た。筏森山は、伝説上、丹波地方が湖だった時代、神様が筏で漂着した場所といわれる。筏との関わり深い伝承を持つ山において、京都府、八木町森林組合、地元団体等の協力を得て、約30本のヒノキを間伐した。伐採方法は昔ながらの「葉枯らし伐採」とい



写真10 葉枯らし伐採

う方法。伐採後、へら状の道具で木皮をめくり、木の先の枝は残す。枝葉を残すことで乾燥を促す方法である。京都府農林水産技術センター調べでは、伐倒 4 日目に 70%程度であった含水率が、25 日目には 40%程度に低下しており、山の中での乾燥としては適当とされた。これらの木材は、8 月、9 月の筏流しに活用した。

### 筏組用備品の調達

かつて、筏を組む時必要な U 字型の「カン」は、地元の鍛冶屋から調達した。昭和 20 年代、亀岡市内には約 17 軒の鍛冶屋が各村々にあり、地域の農業を始めとする産業を支えた。昭和 30 年代以降の農機具の機械化・量産化の中、次第に鍛冶屋は姿を消した。しかし、亀岡の旧城下町にはいまだに 1 軒の鍛冶屋が奇跡的に残っている。京町にある「片井鉄工所」で、主人は片井操氏（79 歳）である。普段は住宅などの鉄筋を主に扱うが、鍛冶場で知人の農具を修理することもある。偶然、この鍛冶屋が、約 60 年前まで保津の元筏士の下にカンを納めていた。1 回の筏流しに使うカンの数は約 250～300 個、そして、毎回、川や貯木場で紛失するカンが約 5～10%で、定期的に補充が必要であった。

平成 20 年度の筏流しに使用したカンは 60 年前のもので、貴重であり、数も少ない。そこで、あらたにカン 300 個を発注した。片井氏は、60 年ぶりにカンを作ることを喜び、私の技術が文化的にお役に立つのであればと、快く受けていただいた。そう、片井氏も昔の技術の喪失を憂いでいたのである。

地域の産業を支えてきた技術は、地域の文化を支えてきたと同義である。この鍛冶技術をいかに残していくのかも、今後の課題の一つであろう。一度失った技術は二度と元には戻らない。



写真 11 60 年ぶりのカン打ち

### 筏流しの広がり

南丹市日吉町で 7 月に筏組教室、8 月に筏流しを行った。南丹市八木町の森林環境ネットワーク主催の子ども対象の行事である。

筏森山と府民の森で間伐された木材を 4 連の筏に組み、日吉ダム下流を下った。子どもたちは、筏組の段階では、本当に水に浮くのだろうかかと半信半疑だったが、いざ漕ぎだすとみんな元気に筏と川と戯れ、歓声が湧いた。山や川に触れることが少なくなった現代の子どもたち。後世に山や川



写真 12 日吉町での筏流し

の大切さを伝えるには、子どものころの原体験が不可欠だ。それによって、将来、山や川を見つめる目が養われると思う。

子ども、さらには、大人の心と体を引きつけるシンボルとして、筏流しは存在価値があるのでないだろうか。筏流しを橋渡しとして、地域の山や川に人々の心が集まることを願ってやまない。

#### 筏木材の利用

筏流しに使用した木材をただ放置しておいても意味がなく、それでは、立木と同義である。何かに利用して初めてその価値は生まれる。木材の嫁入り先探しが始まった。一つは亀岡市篠町自治会の長尾山の里山事業、そして、京都市右京区嵯峨の車折神社である。長尾山の里山事業では山小屋に、車折神社では大国主命を祀る社の玉垣に使用される予定である。このように地域の産物を地域で利用する。この図式が確立すれば、無駄な輸送料やCO<sub>2</sub>の排出量も削減され、また、山へ経済的に還元されれば、人工林の更新も促進される。CO<sub>2</sub>の吸収率が上がり、建材として何十年も使われれば固定率も上がるであろう。役目を終えた建材は燃料となり、灰となり、畑の肥やしにもなる。

#### 4. まとめ

放置される山、ごみだらけの川、それに無関心な人々。いつからそうなったのであろうか。私は昭和30年代が分岐点であったと思う。そう、保津川から筏の姿が消え、農業、林業形態が変わり、鍛冶屋も消えていった。昭和30年代に戻ろうとは思わない。しかし、それ以前の生活様式を再考してみたい。山と川と人々がともにつながり暮らしていた時代を。それぞれが恩恵を受けていた時代を。その時代を象徴するものが「筏」ではないだろうか。

今後も、「筏」を通して、流域の人々とともに、流域の歴史・文化を考え、流域活性化の道筋を考えていきたい。

#### 【参考文献】

藤田叔民（1973）『近世木材流通史の研究』 新生社

写真 1…亀岡市文化資料館提供

写真 2～12…京筏組提供

## 亀岡の農業と自然

京都学園大学 大西 信弘・高橋 藍子

### 稲作と自然

保津峡を抜けて亀岡盆地に出ると一面に水田が広がる。亀岡は、古くから水田耕作が盛んな地域だったようで、条里制水田の遺構もみつまっている。米の他にも農作物の豊かな地域で、紫ずきん、賀茂なす、壬生菜など京野菜、丹波大納言（あずき）、丹波栗、亀岡牛など、地域の特産品に恵まれた地域である。こうした栽培品種の他にも、最近収穫量が減っているが丹波松茸や、放流ものではあるがアユなど、豊かな食材に恵まれた地域である。こうして亀岡の特産品を並べてみると、水田、山、川のあらゆる場所が様々な地域の特産品の生産地になっていることがわかる。

こうした農業を紹介するだけでも話題に事欠かないが、この地域の農業と風土は、農作物だけでなく自然も育ててきた。農業が自然を育てるといって違和感を感じるかもしれない。しかし、身近な自然というのは人の手が入っていない自然ではなく、人が活動している地域に暮らす生物たちなのではないだろうか。作物の生産性が高い農地は、他の生物にとっても暮らしやすい環境になっていることもあるだろう。農地には農業害虫や雑草だけでなく、水田周辺を産卵場所に利用する魚たち、水田に繁殖にやってくるカエルやイモリ、水田の魚やカエルをついばむサギ類など、農業に伴ってさまざまな生き物が育まれていく。最近、話題となった、再導入されたコウノトリが繁殖したというニュースや、トキの再導



写真 1 水田でエサを探すチュウサギ。亀岡では最も良く見かけるサギだが、環境省のレッドリストの準絶滅危惧、京都府のレッドリストの準絶滅危惧種にランクされている。以前、地元環境教室で、チュウサギを絶滅危惧種として紹介していたら、ある参加者が「将来はサギもコウノトリのように保護されるんじゃないかしら」と言っていた。再導入されたコウノトリが繁殖したことがニュースになる時代に轍を踏んではならないのではないだろうか（2008年7月6日撮影）

入などについてみても、コウノトリやトキが水田生態系のシンボルとしてあつかわれているように、その生息場所は人の手の入っていない自然ではなく、人が手をかけて維持している水田なのである。コウノトリもトキも特別天然記念物に指定されており、コウノトリは国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで「絶滅危機」、環境省のレッドリストで絶滅危惧 IA 類、トキは国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで「絶滅危機」、環境省のレッドリストで野生絶滅とされている。水田生態系は、このような本当に数の少なくなった生物たちの生活場所でもあったのだ。亀岡でも、天然記念物のアユモドキが生息している。天然記念物に指定される以前は、川にたくさんいて、普通に食べていたという。アユモドキも、水田生態系のメンバーで、その繁殖生態は亀岡の水田耕作と密接な関係が知られている。

水田生態系の生き物たちは、単に絶滅が危惧されるから重要な訳ではなく、人々の生存基盤として重要な役割を果たしてきた。アジアの稲作圏に視野を広げれば、今なお、水田生態系が育む様々な生物はその地域の食料資源として重要な役割を担っている。ミャンマー、ラオス、バングラデシュ、北東インドの農村を訪れたことがあるが、どの地域に行っても水田や水田周辺の水路、河川、沼沢地では村人が魚を獲り、その日の食卓を飾ったり、市場で売られたりしている。

亀岡でも、一昔前までは、水田漁撈も行われ、水田の自然は人が利用する身近な資源だった。しかし、昭和 30 年代終わりから 40 年代にかけて、農薬が使われるようになると、水田で獲れる魚のなかに、奇形の魚が多く混じるようになり、淡水魚が食材ではなくなってしまった。今でも、保津川の魚は大丈夫だけど、田んぼの周辺の魚は食べられないと考えている人も少なくない。それほどに、農薬の影響が厳しかったのだろう。

稲作と共にある自然や、そうした自然とのつきあい方（例えば、水田で稲を作りながら水田の周りに育つ魚も食べる）には、多面的な環境利用の知恵があり、人の暮らしと自然が関わりを持ち続けている状態を見ることができる。水田漁撈が盛んだった時代には、じゃこ田と呼ばれる魚の良く獲れる水田があったという。じゃこ田と名前が付けられるように、水田で魚が獲れることが重要だったのだといえるだろう。また、ある地域では、用排水路に漁業権が設定され、入札が行われていたという。そしてこの入札によって集められたお金で村の祭りが営まれていたという。単に、水田が生物の多様性を育てただけでなく、その資源を利用することが村の制度や祭りとも関連していたというのだ。

## 保津川の湧水

亀岡市内には、湧水の湧き出している場所がいくつもある。京都学園大学の近くでも、湧水の湧き出している場所がいくつもある。農家の方に聞くと、以前は、渇水時に農業用水として湧水を利用していたのだという。どれほど水不足になろうとも、枯れることの無い湧水があり、それを利用してきたのだという。大学の近くにある、ある湧水は、木枠で囲われ水深 2m 程だろうか。この湧水は年中、コバルトブルーに輝いている。水田の中に、

まるで熱帯の海のような真っ青な水を見るというのも違和感があるのだが、そこには大きなコイやフナがたくさん泳いでいるということも驚きだ。

保津川の河川敷も湧水が豊かな場所なのだそうで、村の年配の方々に聞くと、保津川で砂利を採取したあとの窪地などは、夏でも冷たく、きれいに澄んだ水がたまっていたという。今は、そうした砂利の採取地は見かけないが、本流に流れ込む細流に湧水を見ることができる。保津川の湧水が出ている場所では、春になると、農家の方が畑でとれたネギを洗う姿を見ることができる。それだけではない。昨年、12月にNPO法人プロジェクト保津川で、恒例（といっても2回目だけれど）の川魚食文化を体験する環境教室を開いたとき、地元の川漁師さんが寒バヤ（オイカワ）を獲りにきたのもこの湧水が出ている場所だった。漁師さんがすず網（刺し網）をかけると、魚が鈴なりに獲れるほど、たくさんのハヤが集まっている場所である。

この湧水を利用しているのは、人と魚だけではないらしい。冬鳥であるクイナやベニマシコなどもこの湧水の近くで見かける。温かい湧水のまわりは冬越しをする動物たちにとっても重要な環境なのかもしれない。北に渡る途中のヒレンジャクも、湧水に立ち寄っているようだ。

川の中から水が湧き出ているので、ぱっと見ただけではなかなか気づきにくいですが、人も鳥も湧水に依存して暮らしている。野菜を洗ったり、川魚を獲ったりすることで、こうした環境が維持されてきたのだろうか？ 川に入る機会や川の水に触れる機会があれば、冬は温かく、夏は冷たい湧水を体験するのは簡単なことなのだろうが、こうした川との接点を失いつつある現代では、失われたことすら気づかれることの無い環境なのかもしれない。



写真 2 保津川のオイカワ。亀岡では、ハヤと呼ばれ、11月、12月頃、寒くなった時期には脂がのって、寒バヤとして好まれる。網から外したときに、おなかを指で押し独特の方法で内臓を抜く（2007年10月6日撮影）



写真 3 保津川の湧水で冬越しをしたクイナ。京都府では絶滅危惧種に指定されている。驚くほど透明な水が湧水の水質を物語る（2009年3月31日撮影）



写真 4 冬鳥のベニマシコ。湧水は、保津川周辺に暮らす生き物の生息場所に大きな影響を与えているのではないだろうか (2009年3月31日撮影)



写真 5 3月、北に渡る途中に保津川の湧水周辺に立ち寄ったヒレンジャク (2009年3月27日撮影)

## 亀岡市の水田と鳥類

亀岡の水田周辺には、魚類だけでなく鳥類もたくさん見ることができる。春先、水田や麦畑にヒバリがさえずり、田植え前の水田ではケリが繁殖している。ダイサギ、チュウサギ、アオサギなど、大型～中型のサギ類が採食している姿もよくみかける。冬になれば、ノスリやチョウゲンボウといった猛禽類が越冬に訪れたりもしている。特に、サギ類は、トラクターで田畑を耕していると、トラクターによってほじくり返されてしまった生き物たちを食べるために集まってくる。鳥たちも農業と密接な関わり合いをもって暮らしている。

亀岡の水田にはどのような鳥が訪れて、水田の状態や周辺の環境は出現に影響するのか、時間帯によって出現する種や個体数に違いはあるのか。これらのことを知るために、亀岡市の特徴の1つである水田地帯での鳥類調査を始めたのは、今年6月のこと。

亀岡市は農業の地として歴史が深く、京都府内最大の面積を有している。現在も一部の地域では石垣を組んだ棚田が残っている中、近年圃場整備が行われ亀岡の農環境は変化しつつある。

調査を行ったのは、亀岡市曾我部町西条と同市保津町保津新田の2か所。8月末までに各調査地で40回ずつ行った調査で記録した鳥類は計42種、9368個体(曾我部町35種4280個体、保津町36種5088個体を記録)に上った。調査は日の出から日の入り(4:30～19:30)までを1時間半毎に区切り、曾我部町2.1km、保津町2.5kmのルートセンサスを行った。



鳥類調査から見たことは、特定の時間帯に集中して出現する傾向は見られなかったこと。一般に鳥類は早朝に頻繁に行動すると言われているが、今回の調査では最もよく見られた上位3種を見ても、日の出から日の入りまでまんべんなく観察することができた(図1)。森林での鳥類観察は、障害物が多く鳴き声が頼りとなる為、轉りがよく聞かれる早朝が観察に適していると言われるのだろうが、視界が広い水田では、鳴き声に頼らず観察できることが今回の結果に大きく影響したのだろう。

また、環境別に鳥類の利用率をみると、農地に最も多く出現した上位3種は曾我部町と保津町で同じであったのに対し、河岸、上空、電線・電柱、その他(竹林・民家)での上位3種は調査地間で異なるものとなった(表1)。これは、曾我部町の調査地の川は幅が狭く浅瀬で、近隣に竹林があるのに対し、保津町の調査地の川は幅が広く、アオサギやスズメがねぐらにしている林が近隣にあるといった地域間の環境の違いが、同じ「水田」でありながら出現する鳥類の種類や数に差を生んだと考えられる。また、曾我部町は保津町に比べて水田1枚の面積が小さく、農道が狭いなど、水田の環境にも違いがある。鳥の生活には、河川や竹林、民家の有無だけでなく、稲作や畦の草刈りや中干しなどのような人間が水田を利用することで起きる変化も影響しているだろう。

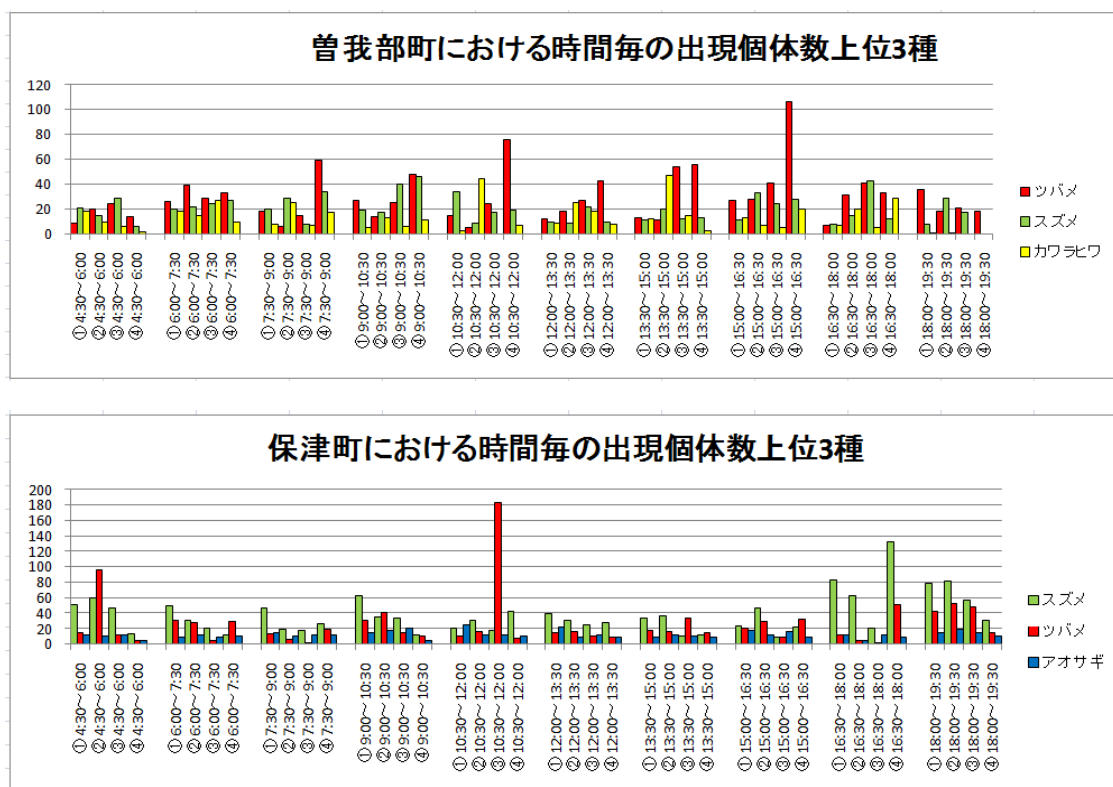


図1 曾我部町と保津町における時間毎の出現個体数上位3種

表 1 曾我部町と保津町の環境別出現率上位 3 種

環境別優占種上位3種(出現回数4回以上の種の利用率上位3種)										
曾我部町	農地	出現率(%)	河岸	出現率(%)	上空	出現率(%)	電柱・電線	出現率(%)	その他(竹林・民家)	出現率(%)
1	ヒバリ	96.3	キセキレイ	100.0	トビ	63.9	ハシボソガラス	56.0	ウグイス	98.7
2	セッカ	87.2	オオヨシキリ	92.3	ゴイサギ	42.3	ムクドリ	51.2	ヒヨドリ	91.8
3	チュウサギ	80.6	ハクセキレイ	61.5	ドバト	30.2	ハシボソガラス	50.0	モズ	50.0
保津町	農地	出現率(%)	河岸	出現率(%)	上空	出現率(%)	電柱・電線	出現率(%)	その他(竹林・民家)	出現率(%)
1	ヒバリ	95.3	カワセミ	100.0	ゴイサギ	60.0	オオタカ	66.7	ヒヨドリ	88.2
2	セッカ	91.7	カワウ	71.1	トビ	28.8	ハシボソガラス	45.7	ウグイス	53.7
3	チュウサギ	79.0	コサギ	57.1	カルガモ	54.5	キジバト	43.1	スズメ	23.8



写真 6 曾我部町で撮影したホオジロ。春から夏にかけて、枝先で轉る姿がいたるところで見られた (2009年4月12日撮影)



写真 7 曾我部町の農道で砂浴びをするヒバリ。春は上空で轉る姿が、夏には道路脇で砂浴びする姿がよくみられた (2009年7月1日撮影)



写真 8 保津町の電線で撮影したモズ。10月から11月にかけて、高鳴きがよく聞かれる (2009年10月20日撮影)



写真 9 保津町で撮影したアオサギ。刈り取り後の水田に飛来していた (2009年10月20日撮影)

今回の調査では、曾我部町と保津町のどちらでも色々な種類の鳥が色々な場所で採食をしたり囀ったり日光浴をしている姿を見ることができた。今後の調査では、秋冬に飛来する鳥類の移り変わりと共に、調査地を増やし、環境ごとの鳥類の出現傾向をみていこうと考えている。

## おわりに

京都学園大学は、亀岡市曾我部町南条大谷という場所にある。この南条という地名。条里制水田のあった地域につけられたのだという。亀岡市内には、京都市よりも古い、1300年の歴史のある神社がいくつかある。こうした古くから、農耕地として栄えてきた地域に、今なおさまざまな鳥や魚が農業と関わり合いながら暮らしている。現在の日本では、水田生態系の生物多様性や希少生物は、それ自身の価値を認める人たちによって保全されつつある。それと同時に、農地に見られる自然は、以前は、水田漁撈のように生存基盤として重要な役割を担っていたことを忘れてはならないのではないだろうか。水田生態系は、米だけでなく他の多くの生物資源、特に人が利用可能な生物資源を育む生産性があることを、生存基盤という観点から見つめ直す必要があるのではないだろうか。

# 海外での取り組み

## 海外関係の活動の経過報告

生存基盤科学研究ユニット 矢嶋 吉司

東南アジア研究所 安藤 和雄

京都大学東南アジア研究所が担当する生存基盤科学研究ユニット京滋フィールドステーション事業であるサイト型機動研究「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」(以下、京滋 FS 事業)では、フィールドステーション(FS)における実践型地域研究の一環として、アジアの開発途上国の人々、とくに友人や知人たちとの連携・交流を通して、互いに学びあい理解を深めるための活動を実施しています。

活動は、1. 海外からの研修員と見学者の受け入れ(アジアの開発途上国の友人たちを対象とした日本農村と文化に根差した農村開発の試みの見学プログラム)、2. 海外関連の活動(ラオス農村での伝統文化の保存による農村開発)、の2つがあります。訪問・見学先の住民や行政機関の関係者の方々や FS 関係者の協力・支援を受けて活動が継続されています。

### 1. 海外からの研修員と見学者の受け入れ

#### アジアの開発途上国の友人たちを対象とした日本農村と文化に根差した農村開発の試みの見学プログラム

京滋 FS 事業では、海外、特に、アジアの開発途上国から来日した友人・知人に、高齢化と過疎が進む日本の農村の現状と地域の文化に根差した新しい農村開発の試みを見学してもらっています。アジアの途上国の人々が、日本の経済発展の陰で衰退した日本農村の失敗を繰り返さないために、日本の農村の苦い経験や再生の活動を学び、それぞれの国における農村開発に活かしてもらいたいと考えています。

京滋 FS 事業が開始されて以来、これまで、JICA カウンターパート研修への協力、アジアの開発途上国からの見学者の受け入れなど5回のプログラムを実施しました。

#### (1) 2008年10月、JICA カウンターパート研修への協力

国際協力機構(JICA)がバングラデシュ農村公社(BRDB)に協力し実施中の「行政と住民のエンパワメントを通じた参加型農村開発プロジェクトフェーズ2(PRDP-II)」のカウンターパート研修(平成20年10月5日~11月1日)に、安藤と矢嶋が協力しました。研修の目的は、日本の地域振興策とそれに対する地方行政と住民参加の役割を学び、プロジェクト運営に活かそうとするものです。

研修員はBRDBのアミヌル・イスラム・カーンさん(Mr. Khan Md. Aminur Rahman、リンクモデル推進室課長)とハサヌル・ホック・モラさん(Mr. Molla Muhammad Hasanul Hoque、タンガイル県カリハティ郡プロジェクト副担当官)の2名で、亀岡 FS の京都学園

大学で「プロジェクト保津川」関係者と懇談し、市民、行政、大学関係者のネットワークによる市民活動の現状を紹介していただきました。

10月14日から21日までの京滋地区の研修では、農村の過疎の現状や地域の文化に根差した地域振興の事例として、京都府亀岡市役所及び篠町自治会、南丹市美山支所と北集落、滋賀県甲良町役場及び自治会において、地方行政と住民自治、美山町北集落の地域振興活動などを見学しました。10月22日から26日は、広島平和公園見学の後、広島県中国山地の中山間地で、過疎高齢化地における地域振興策と、女性たちの生活改善事業を訪問しました。10月29日から31日まで、研修のまとめとしてアクションプランを作成しました。その間、10月15日に東南アジア研究所東棟1階会議室で、「『行政と住民のエンパワメントを通じた参加型農村開発プロジェクト（フェーズ2）』とBRDB、日本での研修」研究会を開催し、研修員がバングラデシュでの活動を発表しました。

帰国前に「日本の田舎で会ったのは年配の人々ばかりだった」と研修員が感想を述べていましたが、経済発展が成功し、アジアの途上国にとって目標である日本の農村の現状は彼らの目にどのように映ったのでしょうか、気になるどころでした。



写真1 亀岡FSにおける研修

## (2) 2009年2月、バングラデシュ・ラオス・ミャンマーの見学者受け入れ

ラオス国立大学農学部の教員3名、バングラデシュ3名、ミャンマー1名のNGO関係者、計7名が2月25日から3月13日まで来日し、亀岡市文化資料館、篠町自治会、南丹市美山町知井自治振興会、守山市野洲町などを訪問し、伝統文化の保存の必要性、自治会活動、過疎と高齢化が進む日本農村の現状視察と住民交流、生存基盤科学研究ユニットFS活動、河川改修事業などを見学しました。3月5日に亀岡FSを訪ね、プロジェクト保津川の活動と保津川舟運の歴史を聞いた後、保津川遊船の船頭さんとバングラデシュの参加者との竹竿操舟などの交流が行われました。守山FSには3月7日から10日まで滞在し、守山漁協の婦人部の食品加工作業を視察した後、漁師さんたちの琵琶湖保全活動の説明を聞き、琵琶湖で漁船に乗せてもらいました。3月8日の守山FSの研究会では、各国の参加者がそれぞれの活動について発表しました。また、野洲川河川改修事業、野洲川の水系、高谷先生の開発集落を見学させていただきました。その間の3月4日に広島平和公園を訪問しました。これらの見学には、安藤と矢嶋が同行しています。なお、3月5日から7日の3日間は、京都大学「アジア5カ国からの若手招へい研究者によるワークショップ『人間と自然との新パラダイムー地域研究の最前線ー』」の海外からの参加者のエクスカージョンとの合同見学でしたので、大盛況でした。

3月11日、京都大学東南アジア研究所「生存基盤研究ユニットでの生存基盤にもとづく農村開発ワークショップ」で、日本訪問の経験を発表しました。参加者にとって過疎が進む日本農村の現状は、かなり大きな衝撃だったようです。また、伝統文化や景観の保全を通じた農村振興、伝統的な技術や知恵、道具類の保存の必要性や、戦争や原爆の悲惨さや残酷さに対する素朴な怒りなどを、日本訪問の印象として述べられました。



写真2 守山 FS、漁港での記念撮影

#### 見学者の氏名と所属先

バングラデシュ・JRDS(NGO 職員)

モハマッド・ミザヌール・ラーマン(Mohammad Mizanor Rahman)

エムディ・アジム・ウッディン(Md. Azim Uddin)

エムディ・ショヒドゥール・ラーマン・ミア・(Md. Shahidur Rahman Miah)

ラオス国立大学農学部ラオ伝統農具農民博物館・教員

イントン・ソンプー、(Mr. Inthong Somphou)

ブントン・カオチャンダ (Mr. Bounthone Kaojanda)

スパボン・ラッタナラシ(Mr. Souphaphone Rattanasasy)

ミャンマー 在ヤンゴン日本語学校・教員

キン・オンマル・フトエエ (Mrs Khin Ohnmar Htwe)

#### (3) 2009年8月～9月、バングラデシュ NGO 職員の見学受け入れ

2009年8月25日～9月5日まで日本滞在

8月28日の東京で開催された「社会的ソフトウェア構築ワークショップ ～『世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業：南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究』成果報告会～」で発表するために来日したバングラデシュの NGO 社会奉仕協会 (Society for Social Service: SSS) 職員ビモル・コンティ・クリさん(Mr. Bimal Kanti Kuri)とナズムン・ナヘル・カイザーさん (Nazmun Naher Kaizer; Shampa) の2名が、伝統文化を通じた新しい農村振興、過疎と高齢化が進む中山間農村の問題などを見学するため、8月29日から9月3日まで、滋賀県守山市(FS)、亀岡市(文化資料館、篠町自治会)、南丹市美山町(北集落、知井自治振興会)、山口県周防大島町を訪問しました。訪問には安藤と矢嶋が同行しました。南丹市美山町知井自治振興会や山口県周防大島町の NPO との意見交換では、住民だけでは集落の暮らしを維持できない過疎農村の現状を打開する解決策の一つとして、途上国の農村再生ボランティアの受け入れが

話題に上りました。具体的には、美山町では造林地の手入れを手伝う山林ボランティア、周防大島町では耕作放棄された段々畑を再生し、農村景観を維持する農業ボランティアの構想が出されました。労働力を海外に送りたいバングラデシュと生活環境の維持が急務の日本の関係者の利害が重なっているのでしょうか、話は大いに盛り上がり、可能性を検討することになりました。

周防大島町の耕作放棄された段々畑や斜面に一面に生い茂り、長い間手入れもされず荒廃するままになっている竹藪を見て、竹が重要な資材として現在も使われているバングラデシュに輸出すればいいのにと、バングラデシュの友人はつぶやきました。



写真3 守山FSの報告検討会

#### (4) 2009年11月、インドのアルナチャル・プラデシュ州の見学者の受け入れ

11月27日、インドのアルナチャル・プラデシュ州のリンチン・ツェリンさん(Mr. Rinchin Tsering, Brokpa の人たちの社会福祉協会会長)、ダニ・ドリさん(Mr. Dani Duri, Dirang 県保健局局长)を招いて、京滋FS事業の研究会を開催しました。リンチンさんとダニ・ドリさんが、それぞれ「Brokpaの人と社会福祉協会の活動」、「Dirang県の医療と健康」というタイトルで報告しました。

11月28日、29日に、南丹市美山町知井地区北集落、知見集落を訪問し住民の方と交流する機会を持ちました。その際、過疎が進み耕作放棄地が増えている農村の現状を目にした見学者から率直な感想が聞かれました。また、広島市の平和公園を見学し、戦争と原爆の悲惨さに悲しみをこらえきれないようでした。詳しくは巻末資料1のニューズレター第13号を参照してください。



写真4 美山町北集落での記念撮影

#### (5) 2010年1月、ミャンマーからの見学者訪問

2010年1月25日から2月4日まで、ミャンマーのキン・ウさん(Khin Oo, Yezin Agricultural University)とレイ・レイ・カインさん(Lay Lay Khaine, Pwint Phyu State Agricultural Institute)の2名の方が来日され日本の農村を見学されました。1月27日から2月3日まで、京都府南丹市美山町、守山市、山口県周防大島町などを訪問し、過疎の進む農村の見学や住民との意見交換を行いました。その間、1月29日に守山FSの第19回研究会で、1月31日に第



135回生存圏シンポジウム・第5回国際研究集会「南アジアの気象環境と人間活動に関する研究集会」でそれぞれ報告をしていただきました。

「守山の広々とした耕地の景観は、オーストラリアやドイツに似て美しい」とはキン・ウさんのコメントです。守山の広々とした耕地では、放棄され雑草が生い茂る耕地や、水田や畑から、杉などの林地への転化が皆無なことが、キンさんに守山の耕地景観の美しさをこのように表現させた理由であったのかもしれませんが。詳しくは、巻末資料1のニューズレター第15号を参照してください。

## 2. 海外での活動

東南アジア研究所実践型地域研究室では、急激な経済的発展が進むラオスの農村で、実践型地域研究として実施している伝統的な文化、農具や民具を保存する集落民俗資料館の設置を通じた新しい農村開発の試みと、京滋 FS 事業との連携を進めています。京滋 FS 事業の成果や日本の農村振興策の経験や知識を、ラオスの農村開発に活かすとともに、交流を通してお互いの理解を深めることを目指しています。この活動に関連して、2009年2月～3月、ラオス国立大学農学部ラオ伝統農具農民博物館の先生3名が、京滋 FS 事業を訪問し、日本の農村の現状と文化に根差した新しい農村開発の試みを見学しています。その際、見学者を受け入れてくださった亀岡市文化資料館、篠町自治会、南丹市美山町北集落、知井自治振興会の方々、FS 関係者には大変お世話になり、感謝しています。

### ラオス農村での伝統文化の保存による農村開発

東南アジア研究所実践型地域研究室が実践型地域研究として実施するトヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラムの助成プロジェクト「農村文化・歴史を重視するアジア農村発展モデルの提唱ーアジアの開発途上国と日本の実践的ネットワーク構築による農村文化再創造活動ー(代表安藤和雄)」は、世代を超えて受け継がれてきた生活の知恵や生業の知識、伝統的な祭りや協働の習慣などを積極的に再評価し、人々の「村に暮らす誇りや生きがい」を育て、精神的な結束を強化する文化の創造・再創造活動をアジア的な人的交流のネットワーク活動として実践することを目的としています。具体的には、日本の農村で現在実践されつつある、文化と歴史を再評価する農村振興、地域おこし活動を企画実践する日本の住民組織、NPO、地方自治体、大学関係者と、文化と歴史の再評価を農村開発、地域社会開発に取り入れていこうとしているラオスの村の住民組織、NGO、地方自治体、大学関係者とのネットワークを構築し、日本とラオスでの研修やワークショップを通じた相互学習により、それぞれの運営方法や農村文化・歴史をアジア的視点によって評価し、各々の計画、実践に活かしていこうとしており、ラオス国立大学農学部の協力のもと実施されています。

京滋 FS 事業は、ラオスと日本の村人、NGO、NPO、地方行政、大学関係者がつくる国際的ネットワーク活動の一環として、日本の農村住民の主体的地域おこしの知見を活かし、日本とラオスの関係者が各自の農村文化をアジア的視野で相対的に評価・学習する機会を

設けています。

プロジェクトの期間は、2008年11月～2010年10月の2年間です。2008年11月に開始されて以来、これまで、プロジェクトの実施体制と協力のための打合せ、農学部カウンターパートの日本招へい、プロジェクト開始、村の活動、インターナショナルワークショップの開催など活動を進めています。

### (1) プロジェクトの実施体制と協力のための打合せ

ラオス国立大学農学部（以後、農学部）と現地 NGO、PADETC がカウンターパートとして活動に参加しています。特に農学部と京都大学東南アジア研究所は、学术交流協定を締結するなど、これまで10年を超える協力関係を維持してきました。農学部「ラオ伝統農具農民博物館（以後博物館）」とは、発足当時から運営支援などを続けています。

プロジェクトの実実施計画、協働体制を確立するため、農学部と PADETC とは、それぞれ数回の打ち合わせを行い、2009年1月7日農学部、PADETC の関係者が、プロジェクトの構成と人員、事務所の設置場所などについて打合せました。農学部長トンリー氏(Mr. Thongly Xayachak)、PADETC 代表ソムバト氏 (Mr. Sombath Somphone) がそれぞれラオス側プロジェクト代表、アドヴァイザーに、博物館のイントン (Mr. Inthong Somphou)、ブントン(Mr. Bounthone Kanjanda)、スパポン(Mr. Souphaphone Rattanasasy)の3氏がプロジェクト担当に決まりました。博物館内にプロジェクト事務所を置くこと、担当者3名が2009年2月25日から3月13日まで日本を訪問することが承認されました。

その後、2009年10月、農学部と PADETC の打ち合わせの結果、村の資料館に収集する道具や文化、村人の聞き取りなどの調査と情報収集や村人参加の促進、農学部学生のボランティアの組織を PADETC が指導することに決まりました。



写真5 農学部ラオ伝統農具農民博物館



写真6 PADETC との打合せ

### (2) 農学部カウンターパートの日本招へい

2009年2月25日から3月13日まで滞在し、文化に根差した農村振興や日本の農村の現

状を見学しました。美山町北集落のかやぶきの里民俗資料館では、伝統家屋を活用した集落民俗資料館の設立経緯、運営などの話を聞きました。日本訪問と農村見学の経験は、帰国後、村人やサイタニ郡役所の担当者に、プロジェクトの目指す民俗資料館について説明する時などに大いに役立ったということを知っています。



写真 7 守山 FS、開発集落での記念撮影

### (3) プロジェクトの開始に向けて

農学部は、プロジェクトを実施する村として、農学部キャンパス周辺のドンバン村とタチャンパ村を選んでいきます。この二つの村でプロジェクト活動を始めにあたって、2009年6月15日、農学部の属しているビエンチャン特別市サイタニ郡役所及び、ドンバン村、タチャンパの2村を訪問し、プロジェクト内容の説明と、協力を要請しました。東南アジア研究所実践型地域研究室から安藤と矢嶋が、農学部からイントン氏ほか2名、PADETCから担当のセンスリー氏が参加しました。サイタニ郡役所の関係機関ではプロジェクトに対する協力が了解され、ドンバン村、タチャンパ村訪問には、郡役所副局長と村のある行政区の副地区長など政府の役人が同行し、村人に文化の保全や、農具や民具の保存の重要性を話した後、住民自身で何が出来るか考えるように助言してくれました。村からは、村長、党の村書記、副村長、長老、女性同盟役員などの村役が出席し、村でのプロジェクト活動が認められました。ドンバン村は150年以上前に人々が入植した古い村である一方、タチャンパ村は20年前に人々が移ってきて開かれた新しい村です。

翌16日、農学部会議室でサイタニ郡役所の関係部局の担当者、ドンバン村、タチャンパ村の村長と村の役員、PADETC代表を招き、農学部、東南アジア研究所の関係者が出席して、プロジェクト開始に向けた打合せワークショップが開催されました。農学部のイントン氏が日本の農村で見学した内容を報告しました。打合せでは、ドンバン村、タチャンパ村におけるプロジェクト活動の承認と全面的な協力の再確認がされました。



写真 8 プロジェクト開始ワークショップの参加者

### (4) 村の活動：タチャンパ村集落民俗資料館の建設とドンバン村の動向

2009年8月、タチャンパ村の村役、農学部博物館の担当が打ち合わせ、小学校のグラウ

ンド脇の土地に、集落資料館の設置が決定されました。建物は2階建てで伝統的なデザインにすることとし、白アリ被害を防ぐため1階部分をコンクリートに、2階の壁と屋根は竹材にするなど仕上げを決め、村役が中心となってデザインし建築金額を見積もりました。2009年10月、建物の最終デザインが承認され、建設スケジュール、村人の役割分担と建設委員（監督、資材調達、建設）委員選出などが行われました。当初2010年2月に完成する計画でしたが、2009年12月にラオスが主催して開催された東南アジア体育大会（SEA Games）のため工事が遅れ、4月のラオス正月に合わせて、開所式を行うことに変更されました。2010年2月現在、1階や2階の躯体工事、壁や屋根工事が終わり、仕上げ工事が進んでいます。3月中に完成する予定であると村長さんは述べておられました。完成式は、タチャンパ村及び周辺の村の参加を得て、地域の物産や文化、農具を展示するイベントを行う計画があります。

一方、ドンバン村は東南アジア体育大会の終了後、政府の文化村事業で正式に登録されたのを受け、現在、農学部がPADETCの支援を受け今後の計画を立てています。

#### (5) インターナショナルワークショップの開催

G-COEのイニシアティブ2、G-COEラオスFS、トヨタ財団アジア隣人ネットワーク、科研「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」との合同による国際ワークショップが、ラオス国立大学農学部ナボン・キャンパスにおいて、2010年2月17日から19日まで開催されました。農学部博物館の担当者が、中心となってワークショップの運営をしました。

International Workshop on “The Alternative value of Traditional Agriculture for Education, Research and Development”というタイトルで開催されたワークショップでは、ミャンマー、インドネシア、日本、ラオスの9名の研究者が報告を行いました。

ワークショップ第2日は、タチャンパ村を訪問し集落資料館の建設工事や、農業や機織りなど村の生業を見学しました。ラオス南部の伝統芸能ラムの演奏会が村で開催されました。



写真9 タチャンパ村集落資料館建設模型



写真10 集落資料館建設工事

第3日は、農学部教育に伝統農業をいかに活かすのか、農学部博物館の活用法について、国際的な大学、NGOとのネットワークの立上げと協力体制について、出席者が討論しました。そして、ワークショップのまとめとして、実験室における理論学習に加え農民のために実践的研究を行う方法論の導入、農学部教員の学位取得プログラムの試験的立ち上げ、ミャンマー・インドネシア・ラオス・日本の大学間ネットワークの構築、農学部に附属研究所を設け国内外研究者の客員教授の招へいプログラム導入、ラオ伝統農具農民博物館の教育への活用法の模索などが提案されました。以上のことを目標に、今後国際ワークショップの継続的な開催が決定されました。



写真 11 ワークショップ記念撮影

## 地域の将来像をどう描くのか ―2年間の活動を振り返って―

生存基盤科学研究ユニット 鈴木 玲治

京都大学生存基盤科学研究ユニットのサイト型機動研究において、東南アジア研究所が主導するプロジェクトである「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」が立ち上げられてから、約2年が経過した。当プロジェクトの活動は、守山、朽木、亀岡にある3つのフィールドステーション（FS）を拠点とし、研究者、地域住民、地方自治体、地元NPO等、立場の異なる人々が協働しながら、日本の農山村の望ましい将来像を共に構築していくことを目指している。

本報告では、この2年間の活動を通じて知り合った多くの人々の中から、琵琶湖漁師の戸田直弘氏、亀岡の鍛冶職人の片井操氏、余呉で焼畑を営む永井邦太郎氏の3人を紹介しながら、本プロジェクトの意義や将来の展望について考察する。

### 琵琶湖の漁師と在来漁法 ―漁師が培ってきた経験と勤―

2009年10月3日、琵琶湖漁師の戸田直弘氏を京都大学総合博物館に招いて、「琵琶湖に生きる」と題したトークイベントを行った。なお、本トークイベントは、巻末資料2に添付した京大博物館学術映像博2009の一環として行われた。また、本トークイベントについては、巻末資料1のニューズレター第12号で嶋田研究員が執筆しているので、そちらも参照されたい。

このトークイベントの中で、戸田氏はエリ漁、エビタツベ漁、刺し網、追いサデ網など、琵琶湖で現在営まれている在来漁法を紹介され（写真1）、長年培われてきた漁師の経験や勤がそこに活かされていると語ってくれた。その言葉には、琵琶湖の漁師として生きる強い自負が込められているように感じた。一方、近年は琵琶湖の漁船の半数程度が魚群探知機を使って漁をしているとも説明され、戸田氏はそのことを嘆いていた。超音波で魚の居場所を教えてくれる魚群探知機の存在は、これまで培ってきた漁師の経験や勤を無意味なものにしてしまう。確かに、魚群探知機を使えば、短期的には効率的な漁ができるかも知れない。しかしながら、魚群探知機への依存が高まれば、長い年月をかけて培われてきた漁師の経験や勤はやがて失われていくだろう。

漁師は自然の変化に対する魚の習性を熟知しており、琵琶湖の環境に異変があれば、魚を通じていち早くそれを感じとることができる。我々研究者が様々な分析データを解析しながら、外から琵琶湖の環境を論じようとするのに

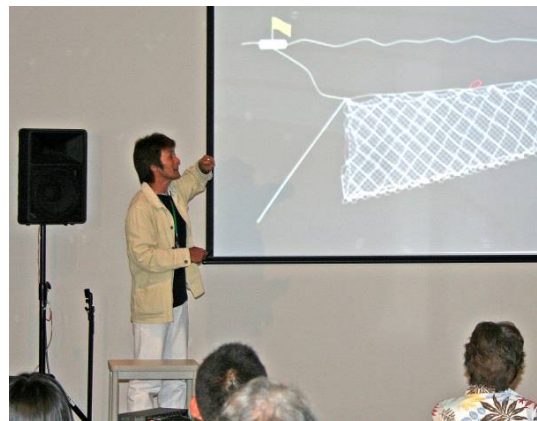


写真1 刺し網漁について説明する戸田氏

対し、漁師は琵琶湖での生業を通じ、日常生活の中で琵琶湖の自然環境を感じとっている。本報告書の「守山フィールドステーションの活動概要」で高谷氏は「今、琵琶湖を守ってくれているのは漁師だ」と述べているが、在来漁法の衰退に伴って漁師の経験や勘が失われていけば、琵琶湖の環境を長い間守り続けてきた最後の砦が崩れるきっかけになるように思えてならない。在来漁法に受け継がれてきた漁師の経験や勘のもつ様々な意義や価値については、今後も議論を重ねていきたいと思う。

また、このトークイベントに参加してくれた関西在住の若者が、「琵琶湖にはブラックバスとブルーギルとごくわずかの在来魚がいるだけで、琵琶湖の漁で生業を立てている漁師さんがいるとは思ってもいなかった」と語ってくれたのが印象的であった。外来魚による琵琶湖の生態系の破壊が様々なメディアで取りざたされている反面、琵琶湖の環境を守りながら生業としての漁を続けている漁師の姿はあまり知られていない。本プロジェクトでの様々な活動を通じ、琵琶湖に生きる漁師の姿や思いを多くの人々に知ってもらい、琵琶湖の望ましい将来像を漁師と共に考えていくきっかけをつくっていききたいと思う。

## 筏流しを支える鍛冶職人 一人と人とのつながりの再構築がもたらすもの一

かつて保津峡を越えて丹波山地の木材を京の都へと運んだ保津川の筏流し。その筏を組むためには、「カン」と呼ばれる U 字型の金具が必要であり、地元の鍛冶屋がその制作を担っていた。筏流しが途絶えると共にカン制作も途絶えたが、亀岡には約 60 年前まで実際にカンをつくっていた鍛冶職人がいる。片井鉄工所の片井操氏（79 歳）である。

片井氏は、現在でも知人の農具修理などで鍛冶を続けており、保津川筏復活プロジェクトで使用するカン 300 個の制作を快く引き受けていただいた。60 年ぶりのカン制作は地元の話題になり、京都学園大学の学生や教員、近所の小学生、保津川下りの船頭、マスコミ関係者など、様々な人々が片井鉄工所を訪れるようになった。そして、片井氏のご希望で、実際にカンを使っておられた亀岡在住の元筏士である上田氏と酒井氏も片井鉄工所を訪れた。彼らが現役であった頃を懐かしみながら談笑する三人であったが、60 年前には筏士の方々と片井氏が顔を合わせることはなかったという。材木と材木とを繋ぐカンが、時を越えて人と人との繋がりをもたらしたと見える。



写真 2 片井鉄工所でのカン制作。熱した鉄の棒を槌でたたいて U 字に曲げていく

片井氏は常々、これらの出会いに対する感謝の言葉を口にする。自分のかつての営みが必要とされ、その技術に再び注目が集まっていることに対する生きがいや喜びが、その言葉から感じられた。片井氏は既に 79 歳と高齢ではあるが、このカン制作を通じて、若かりし頃の活力を取り戻しているかのように、私の目には

映る。亀岡 FS では、筏を通じた流域の山、川、地域、人の繋がり再構築を目指しているが、その過程で、かつての筏流しを支えてきた元筏士や鍛冶職人など、現在では高齢となった方々のもつ技術や知恵に目を向けてきた。筏流しに限らず、日本の農山村の生業は様々な技や知恵に支えられてきた。このような技や知恵は、現代生活の中で失われようとしているが、農山村の高齢者の方々の記憶の中には今でも確かに残っているだろう。このような技や知恵に再び目を向け、それを若い世代へと伝えていくことで、高齢者の中に眠っている活力を呼び覚ますきっかけをつくっていくことが、高齢化・過疎化に悩む農山村を活性化するための一つの鍵ではないだろうか。新たな人と人との出会いが活力を生み出す。このプロジェクトを通じて、様々な立場や地域の人と人との繋がりをさらに深めていきたいと思う。

### 余呉の焼畑 ー 荒廃する森林再生の鍵となれるかー

かつての日本では、日本海側と四国・九州の山地を中心に焼畑が広範に営まれていた。戦前から戦後にかけて焼畑の総面積は減少したが、これは各農家はその経営する焼畑の一部を保持しつつ、残りの大半を放棄するという形態をとって進行した(佐々木 1972)。1936年に全国で約 77,000ha あった焼畑は、1950年には約 10,000ha にまで激減したものの、この間に焼畑を完全に放棄した農家は全体の 3 割以下にとどまり、1950年時点でも約 11 万世帯が焼畑を営んでいた。焼畑地ではソバ、アワ、ヒエ、ダイズ、アズキなどの穀類や豆類を中心に、地域の自然環境条件に適した作物が栽培されてきた。また、戦後はこれらの穀類や豆類に加え、カブ、ナタネ、ダイコンなどを栽培する小規模な焼畑の割合が増加した。その後、高度経済成長期以降の生活様式や価値観の変化に伴い、焼畑を営む農家の数は大きく減少し、1970年代には日本の焼畑はほぼ消滅したといわれる。

現在の日本では、山形県鶴岡市、新潟県山北町、福井県美山町、宮崎県椎葉村など、伝統的な焼畑が今なお継承されている地域がわずかに残っている。しかしながら、そこで焼畑を営む人々の大半は高齢で、後継者もほとんどいないのが現状である。朽木 FS が活動を展開している滋賀県長浜市余呉町もその例に漏れず、余呉町で現在でも生業として焼畑を営むのは、永井邦太郎氏(73歳)1人になってしまった。

余呉町の焼畑では、火入れ直後に鍬で地面を 10cm ほど耕す。永井氏の話では、耕すことで地表面付近の有機物や焼却灰が土にすきこまれ、作物の生育にとって良好な状態になるとのことである。私はこれまで、東南アジアのミャンマーを中心に焼畑の調査研究を行ってきたが、耕起をする焼畑をみたのはこれが初めてであり、非常に驚いた。ミャンマーでは、雨期の激しい降雨による土壌侵食を避けるため、焼畑で開いた斜面は決して耕さず、堀棒で開けた小さな穴に播種していく。作付け期間中の降水量の違いが、このような違いを生んだのであろう。日本と熱帯地域とでは、気候や土壌などの自然条件が異なるため、熱帯での体験を日本の焼畑にそのまま当てはめることはできない。永井氏の焼畑から、日本の焼畑にまつわる様々な技術や知恵を学ばせていただきたいと思う。





写真3 余呉町の焼畑。横一列に並んで、斜面上部から徐々に火を入れていく



写真4 余呉町の焼畑。斜面に敷きつめたスギ枝が勢いよく燃える

焼畑は決して原始的で時代遅れの農法ではなく、山地の生態資源を活かした、石油資源への依存度の低い持続的な食料生産手段である。樹木の焼却で生じる灰は無機養分を作物に供給すると共に、土壤酸性を緩和する。また、土を十分に焼くことで土壤有機物の無機化が促進され、作物に無機態窒素を供給する。これらの効果で、化学肥料の投入を前提としない作物栽培が可能となる。また、火入れによる埋土種子の焼却は、雑草の繁茂を抑制する。さらに、休閑期には多様な植物が自然に再生し、様々な有用植物の採取も可能となる。そして、十分に地力の回復した休閑林は、再び焼畑に拓かれるのである。しかしながら、現場での焼畑伝承が途絶えてしまえば、長い年月をかけて焼畑農耕に蓄積されてきたこのような先人の技術、知識、経験はいずれ風化し、それらを後世へ伝える機会は失われてしまうだろう。確かに、現在の日本でかつてと同規模に焼畑を復活させることは困難であろう。しかしながら、荒廃する山林の再生に焼畑を活用するとともに、地域の自然を活かした特産品の生産、無農薬農業や地産地消の重視など、市場経済原理とは異なる価値を付加できれば、焼畑の作物の需要を再喚起することは可能だと思う。そして、その実現には、日本の焼畑をよく知る永井氏のような人々の知識と経験を体系化しながら、次世代へと引き継いで行くことが不可欠である。

### 「ざいちのち」を科学する

本プロジェクトでは、日本の農山村の暮らしの中で伝統的に培われてきた知識や技術に目を向け、それを現代の暮らしにどのように活かせるかを考えながら、地域の将来像を描こうとしている。では、我々研究者はその実現に向けて、どのような貢献ができるだろうか。そもそも在地の知識や技術は、どこまで科学的に明らかにされてきたのだろうか。

Rambo (2009)は、「伝統的な農業に対する肯定的な考えが、実証的検証を伴わない観念的な信条へと変化していくことが問題である」と述べている。また、同氏はこれまでの研究では、在来の農業生態学的知識を記録することに労力が注がれ、その精度と信頼度の検証は軽視されてきたことを指摘している。私は、精度や信頼度の検証手段が確立されていないことこそが問題だと考えている。従来の農学的な手法による野外調査では、個別事例のデータを積み上げ、そこから普遍性を導き出そうとする帰納的な手法がとられてきた。しかしながら、環境条件を一定に設定できる屋内実験とは異なり、野外的自然は同じ環境を繰り返すことのない「歴史的、地理的な一回性」(川喜田 1967)を帯びている。このため、個別事例のデータの積み上げから、在地の知識や技術に対する普遍的な結論を導くことはほとんど不可能といってよい。そもそも、このような環境の不確実性に適応しながら、長い年月をかけて培われてきたのが、在地の知識や技術なのである。

私は、在地の知識や技術を科学的に捉えなおすには、演繹的な手法が不可欠だと考えている。そして、演繹の前提となる理論の構築には、戸田氏や永井氏のような方々の長年の経験と知恵を言語化し、体系化していくことが必要だと思う。この言語化や体系化にこそ、研究者が果たすべき役割がある。ただし、このような理論の構築や言語化・体系化は、研究者が実践の場に深く入り込み、地域の中で実践者と場を共有できるようになって初めて可能になるものだといえる。この過程で、断片的な個別事例の積み上げではみえなかった在地の知識や技術の本質に気づくことができれば、その全体像を体系的に構築することが可能になるだろう。そして、目の前にある特定の時間・場所での個別事例を、体系化された知識や経験の全体像の中で位置づけることで、農学や生態学分野の手法を用いた野外調査によるデータが意味をもつようになるだろう。例えば、伐採地の植生や土壌条件が毎年変わる焼畑耕作において、個別データの積み上げからその全体像を構築することは難しいが、実践者との場の共有を通じてその地域の焼畑にまつわる様々な知識や技術を体系化できれば、個別事例である土壌や植生のデータを、その体系化された知識と照らしながら論ずることができるようになるからである。そして、その結果に応じて理論を再構築しながら、仮説形成と検証を繰り返すことで、在地の知識や技術の科学的な意味づけが可能になると思う。このことは、ある地域の知識や技術を他地域へ展開する際の助けにもなるだろう。

## おわりに

前述のように、在地の知識を科学的に意味づけていくことは、研究者がこのプロジェクトに参加することの一つの意義であろう。しかしながら、研究者と様々な立場の人々が出会い、共に地域の将来像を真剣に考える場を創出していくことこそが、本プロジェクトの活動の最大の意義だと思う。例えば、守山 FS で現在取り組んでいる市街地でのソバ栽培(巻末資料のニューズレター第 14~16 号参照)は、当プロジェクトの研究会終了後、懇親会での雑談の中から生まれた安藤准教授の発想を、嶋田研究員の尽力と守山市職員の松永氏を

はじめとする様々な人々のご協力を得て、実現にこぎつけたものである。このように、新たな人と人との繋がりが新たな発想を生み出し、そこから新たな展望が開かれていくと思う。

地域の将来像をどう描くのか。当プロジェクトの活動によって、各々の地域に関わる様々な立場の人と人々とを繋ぎ、各自の思いをぶつけ合い、新たな思いを紡ぎ出す場を創出することで、21世紀に求められる新たな地域像を描くための第一歩が踏み出していけるのではないかと思う。

#### 【参考文献】

川喜田二郎（1967）『発想法』中央公論社

佐々木高明（1972）『日本の焼畑 その地理的比較研究』古今書院

Rambo, A.T. (2009) "Are the farmers always right? Rethinking assumptions guiding agricultural and environmental research in Southeast Asia" *Asian Pacific Issues, Analysis from the East-West Center* 88: 1-11

## 編集後記

早いもので、本プロジェクト「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」がスタートしてから、2年が過ぎようとしています。振り返れば、あっという間に過ぎ去った感のある2年間でしたが、地域の人々、地方自治体、地元NPO、大学関係者など、多くの方々に支えられながら中身の濃い充実した活動が展開できたことを、本当にありがたく感じています。4年間のプロジェクトの折り返し地点を迎えるにあたり、お世話になった関係者の方々をはじめ、多くの方々に我々の活動の目指すものとこれまでの活動の成果を知っていただきたいと思い、この中間報告書を取りまとめました。是非ご一読いただき、感想をお寄せいただければ幸いです。また、編集作業をお手伝いいただいた京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科大学院生の浅田晴久さんに、この場をかりてお礼申し上げます。なお、本報告書や毎月発行のニューズレターのタイトルである「ざいちのち」には、まちやむら、そこに暮らす人びと（＝ざいち）の知恵や生きる力（＝ち）に学び、実践することの意味が込められています。今後とも、「ざいちのち」をよろしく願いいたします。（鈴木玲治）

# 巻末資料1

実践型地域研究ニューズレター「ざいちのち」



編集・発行：京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室  
住所：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46  
URL：<http://www.shigafu.cseas.kyoto-u.ac.jp>

## 地域の人々との協働による実践型地域研究の試み 東南アジア研究所長・研究プロジェクト代表 水野広祐

東南アジア研究所は、京都大学の4つの研究所(化学研究所・エネルギー理工学研究所・生存圏研究所・防災研究所)とともに生存基盤科学研究ユニットをつくり、既成科学の学問的な枠にとらわれない自由な発想に基づく、人類の生存のための科学を築く研究活動に参加しています。東南アジア研究所は、従来、東南アジアを中心とする海外地域を主なフィールドとして地域研究を行ってきました。生存基盤科学研究ユニットでは、人々とともにある地域研究の理念をきっかけ、サイト機動型研究の一つの柱として、これまでの海外での研究で蓄積された知見を日本の地域社会に活かそうという目標を立てました。滋賀県立大学、京都学園大学、NPO プロジェクト保津川、美しい湖国(NPO もやいネット)、NPO 市民環境研究所、火野山ネット、守山市、亀岡市、高島市などの諸団体と地元の皆さんと一緒に地域の問題を考

え行動する「在り地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」プロジェクトを立ち上げました。具体的な実践型地域研究の場として滋賀県の朽木、守山、京都府の亀岡が選ばれ、フィールドステーション(FS)が設置され、対象を外から観察するだけではなく、内側から問題を把握し解決の方策を地域の皆さんと一緒に考えます。朽木FSでは、「水と火のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくり」、亀岡FSでは「筏をシンボルとした人・山・川・町(都市)のつながりの再構築」、守山FSでは「琵琶湖の漁業と食文化の復興」など、FS担当の研究員を中心に、地元住民・NPO・地方自治体との協働による実践的な研究活動に取り組んでいます。本プロジェクトが円滑に目的を達成するためには、是非とも地元の皆様、関係団体の皆様、ユニット関係者の皆様のご協力とご理解、そしてご参加が必要です。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

## 11月の催し

### ■姫田忠義さん(民族文化映像研究所)を招いた上映会と交流座談会

1. 日時:11月15日(土)14:30~
2. 場所:ECC 学園高等学校(旧・今津西小学校椋川分校)
3. 内容:上映会・交流座談会  
①上映会「奥茂庭～摺上川の流れとともに～」(14:30~)  
福島市北部を流れる摺上川。この流域の男振・梨平・名号の三集落は市営ダム建設により沈みました。摺上川の流れとともに年月を刻み、蚕を飼ひ、炭を焼き、シナダを織って、山に営々と生きてきた茂庭の人たちの、四季に対応した生活をおった記録です。  
②交流座談会「山里で子どもはどう育ってきたか」(15:30~)
4. 入場料:500円(定員60名・要申込み)  
主催・連絡先:「結いの里・椋川」事務局(担当:是永)Tel:0740-24-8101

### ■「おっきん! 椋川」

1. 日時:11月23日(日) 9:30~16:00頃
2. 場所:椋川集落内 (JR 湖西線「安曇川」「新旭」駅、京都バス・江若バス「朽木学校前」より送迎バスあり)
3. 内容:「椋川の風景画」展など  
「おっきん」とはこの地方の言葉で「ありがとう」という意味。「おっきん! 椋川」は椋川集落を一日開放して、街の人と交流し、椋川の暮らしや人た

と直に交流できる山里のてづくり収穫祭です。椋川までのアクセス、当日の主な催し、送迎バスの時刻については、下記のホームページをご覧ください。「結いの里・椋川」事務局までお問い合わせください。(むくがわの里 HP <http://mukugawa.korekore.org>)

主催・連絡先:「結いの里・椋川」事務局(担当:是永)Tel:0740-24-8101  
後援:高島市・高島地域観光振興協議会

### ■プロジェクト保津川 第11回定例清掃会

1. 日時:11月9日(日) 7:50集合 8:00~9:00頃
2. 集合場所:月読橋下河川敷(月読橋球場下の河原。無料駐車場あり。JR 千代川駅から徒歩約10分。)
3. 内容:保津川の清掃活動  
プロジェクト保津川では、第2日曜日に定例清掃会を実施しています。今回は、「月読橋」一帯(亀岡市千代川町・馬路町)で開催します。会員の皆様以外のご参加も大歓迎ですので、ふるってご参加ください。多くの方のご参加をお待ちしております。保険については、事務局にてボランティア保険に加入します。長袖、長ズボンの動きやすい服装でお越しください。長靴でお越しただくと清掃範囲が広がります。雨具、軍手(ゴム製が望ましい)、長靴、防寒着などは各自ご持参ください。ゴミ袋、火バサミなどの清掃に必要な道具は事務局にて用意いたします。
4. 参加費:無料  
ご不明な点につきましては、事務局までお問合せください。  
主催・連絡先:「プロジェクト保津川」事務局(担当:中野)  
Tel: 0771-22-1616, Fax: 0771-25-2382 E-mail: [info@hozugawa.org](mailto:info@hozugawa.org)

# 守山フィールドステーション

## フィールドステーション守山の近況報告

聖泉大学 高谷好一

守山はどのような歴史的展開をしてきたのか、将来はどのような地域にすることが望ましいのか。この2つのことを守山フィールドステーションでは調べようとしています。守山市は、3つの地区からなっています。中山道沿いの市街地、琵琶湖周辺、それにこの2つには含まれた農村地区です。このステーションでは、この3つの地区について次のような研究活動をしようとしています。

まず市街地ですが、ここでは守山市が中心市街地活性化計画というのを進めています。私たちはこれと連携して研究を進めようとしています。月1回の合同研究会を予定していますが、すでに「守山のまちづくり」（9月24日）、「守山宿の文化」（10月8日）をやりました。こうした研究会の他に、もっとソフトなものとして、中山道の町家でオカリナの集

いなども行っております。広く市民をまきこんで、地域を考える、というのが狙いです。

琵琶湖では、ひん死の状態にある琵琶湖漁業をいかにして復活させるかが緊急の問題です。フナやモロコといった在来の魚を増やし、それらを利用した食文化を取り戻すということを考えています。これには漁師の戸田直弘さんを先生にして、FS 研究員の嶋田奈穂子取り組んでいます。

中間の農村部では、さしずめ戦後の変容を詳しく調べるつもりです。ここは高谷好一の生まれた場所でもあり、同級生などが多いため、その人たちの協力を得て、研究を進めるつもりです。



琵琶湖のエリ漁の風景  
網を外側から順に揚げている

## 滋賀県の水辺の生活を考える -漁師のフナズシ-

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

フナズシは、滋賀県無形民俗文化財にも指定されている、高級珍味として名高い近江の伝統食です。滋賀県で食される淡水魚と飯の発酵食品をナレズシといいます。時間をかけて発酵させ、米粒が残らないものを「本ナレズシ」、短い発酵期間で飯が粒で残るものを「生ナレズシ」といいます。中でも、ニゴロブナの本ナレズシ（フナズシ）がその代表格とされ、味、食感ともに最高といわれます。しかし、滋賀県ではオイカワ、アユ、ハス、モロコなど様々な琵琶湖の魚がナレズシに用いられてきました。

「琵琶湖の魚は塩漬けさえしておけば何でもおいしく食べられる」とさえいわれるといいます。要するに、滋賀県が誇るべき文化はフナズシだけではなく、「湖魚のナレズシ」ともいえるのです。

「ワシとこの桶には10種類以上の湖魚が漬かっている。ゴモクズシや！」と誇らしげに話す漁師さんがいます。現在、滋賀県で市販されているフナズシ

のフナは、多くが県外産です。外国で塩漬けにされたフナを滋賀で飯漬けにする場合もあります。「これが、本当に近江の文化の発信なんやろか」漁師さんは言います。「フナでなくても、琵琶湖で育った琵琶湖の魚を漬けてあるものが、それが滋賀の文化と違うのか」

繁殖が進む外来魚を食べてみたり、獲れなくなったニゴロブナを外から持ってきたり、そんな応急手当ではなく、今琵琶湖にいる、ずっと滋賀の漁業と食文化を支えてきた在来魚に今一度目を向けてみる。琵琶湖を生活の場とする漁師さんの声をもっと聞いてみる。そんな中から滋賀県の水辺の生活について考えていこうと思っています。



琵琶湖のエビ大豆と炊き合わせた「エビマメ」は、滋賀県でよく食された

## 朽木フィールドステーション

### 源流域における「くらしの森」の再生に向けて -水と火のエネルギーを活かした生業基盤づくり- 朽木FS 研究員 今北哲也

生業基盤づくりとは大それた課題です。

私たちは、今 70～80 歳代の村の先輩たちが予想もしなかった山の姿に出会っています。たとえば広葉樹林。50 年を越えようとするヒネた（過熟な）雑木山。広がる檜や松の枯れ木立。鹿に食べ尽くされ、異様に見通せる林床風景。そして、失われた山藪、山葵、ぜんまい、茸。飢饉の冬、むらの命を繋いできた山野の菜。無謀にも、それらの復活に取り組むことが「くらしの森」の再生を象徴すると考えるに至りました。「くらしの森」の再生とは山で暮らしを立てる生業基盤をつくっていくことです。地域社会への展開という、さらに大それた目論見はさておいて、まずは朽木フィールドステーションでのささやかな取り組みの意図と背景について述べます。

#### 山野の恵み

1960 年代頃まで、山里では山や原野の恵みを糧とし暮らして来ました。木出し（天然スギ・栗など家・小屋材料の伐出）、タキモン（薪）伐り、ネソ・フジ（結束材）伐り、山菜や茸採り、溪流魚などの川漁、熊・猪・山鳥などの狩り、山野からの刈敷き採取……。山は衣食住、百姓百品を産み出す源（みなもと）でした。

#### 山野へのはたらきかけ

採るだけでなく、伐採・火入れ・刈払い・採取を繰り返す営み。そして、火入れに代表される山へのプレッシャー。そのようなつきあい方の結果として、様々な「山野の恵み」がもたらされていました。40～50 年前まで湖西のあちこちでは、山野に火を放ち、檜や茅に特化された原野風景が広がっていました。このように山野への絶えざる人間の働きかけによって安定的に生み出される生業（なりわい）空間を、私たちは原野も含め「くらしの森」とよぶことにしました。

### 新たな生業（なりわい）がみえるモノづくり

しかし、かつての山の暮らし世界は近代化という荒波を被ることになります。そして限界集落です。私たちは源流域の風土に立ち、小さな規模ながらも、明日につながる「くらしの森」の再生に取り組みたいと考えました。そして、山野から食べ物を生み出す手だて＝脅威であり恵みでもあった火と水のエネルギー、に注目しました。山の先輩たちが培ってきた智恵や技（ローテク）に立ちながら、現代の技術（ハイテク）を仕込み、生業基盤づくりを目指したいと考えています。

#### 次世代との協同作業

フィールドは湖西・湖北の琵琶湖源流域です。ここでは都会育ちの若者たちがもうひとつの暮らしの世界を求めて新规定住に挑戦しています。何人かは私たちの取り組みのサポーターになってくれると期待しています。フィールドでの実験や研究、地域に学ぶワークショップなどは地元のベテランと若者たちをつなぐ現場でもあります。

#### 生物多様性の回復と生存基盤

直接的には鹿害による今日の惨憺たる林床の姿が、賑やかでワクワクする山野によみがえれば、山に楽しみが戻ってくることでしょう。しごとを創ってくれる多彩な生き物たちが顔を揃えてくれるのです。山が若くて元気であることは、いずれ若者たちのエネルギーとなり、ひいては在所（むら）にも新陳代謝が生まれてくるのではないのでしょうか。

これからの研究活動、フィールド体験、ワークショップなど様々な現場を通してご意見、提案をいただきたいと思っています。次回は研究内容とメンバーについてお伝えします。



原野履歴のナラ二次林と田圃—朽木・針畑川源流



### 「筏」をシンボルとした「人・山・川・町(都市)」のつながりの再構築 -研究の概略とこれまでの動き-

亀岡 F S 研究員 河原林洋

丹波地域を流れる保津川(桂川)は、かつて筏や舟により物資が京都・大坂へと運ばれ、流域住民の生活は河川と密接なかかわりを持っていた。明治期には英国の写真家、H・G・ポンティングにより景勝地として紹介されるなど美しい景観が保たれていた。しかし、現在は、ゴミの不法投棄、漂着ゴミの大量発生、水質悪化や水生生物の減少などさまざまな問題を抱えている。これらの問題は、筏流しに代表される山や川での流域住民の営みが薄れ、また、河川工事などにより人によって人の近づけない川へと変わりつつある中、流域住民の山や川のつながりの希薄化の表れではないだろうか。

この研究は、流域をつなぐ物資輸送の魁でもあった「筏」をシンボルとして流域の「人・山・川・町」のつながりの再構築を模索するものである。そのため筏士をはじめ、農林水産業を生業としてきた流域住民の伝統技術・文化・風俗などを調査し、かつての「人・山・川・町」のつながりの「記憶」を現在に活用できるつながりの「知恵」として再構成する。また、「筏」をテーマとしたイベントの実施等を通じて流域間交流を深め、森林従事者、河川従事者、各種市民団体、企業、学校など多種多様な組織の共同体を構築し、材木の地産地消、自然豊かな河川環境、世代間のつながりなどの再構築を模索する。



筏組の様子

今年度はこれまで、筏流しの計画を立案し、亀岡市文化資料館・黒川館長に計画を提案。両者とともに協力参加団体を打診し、2008年5月14日「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」(以下筏協議会)を発足。行政、企業、各種市民団体、教育機関など約19

団体の参加、協力をみる。

この筏協議会において亀岡市保津町在住の元筏士、酒井昭雄氏(80歳)と上田潔氏(89歳)を対象とする筏の歴史・文化・風俗の聞き取り調査を計4回実施。主に筏組みの技術、当時の筏流しの様子などを調査。平行して筏流しのイベントを計画。イベントの運営計画、材木の丸太の調達、材木をつなぐ部材の調達、又は筏を実際に組みあやつる予定の現役の船頭(保津川遊船企業組合)の人選などを実施。亀岡市文化資料館における筏組みの予行練習を経て、2008年9月10日(水)「保津川筏復活プロジェクト2008」を実施。筏組みの聞き取り、現役船頭による筏組み技術の習得(6連の筏を作成)、地元亀岡市の保津小学校・南丹高校の生徒対象の体験型歴史文化教室の開催(生徒数86名)、その後保津川遊船乗船場前河川敷から山本浜まで約3キロの筏流しを再現した。また、流域住民の見学会も行われ、平日にも関わらず約70名の流域住民の参加をみた。筏流しに使われた材木の一部は亀岡市篠町自治会の長尾山における里山事業に再利用される予定である。

今後は更なる元筏士の聞き取り調査による「人と川」とのつながり、材木の丸太の調達による「人と山と川」のつながり、調達した材木の再利用を通して「山と町」のつながりを模索していきたい。



保津川を60年ぶりに下る筏



歴史文化教室の様子



編集・発行：京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室  
住所：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46  
URL：http://www.shigafs.cseas.kyoto-u.ac.jp

## 朽木フィールドステーション

### 牛がおしえる山里の暮らしと文化

「結いの里・椋川」事務局 是永宙（椋川在住）

椋川は滋賀県の北西部、福井県境に近い山里です。炭焼きに熱心に取り組んだ地域で、最盛期には県内でも指折りの産地だったようです。1960年の燃料革命により炭焼きはすっかり廃れてしまいましたが、まだ1軒の方が炭を焼いておられます。

さて、椋川では3年前から滋賀県立大学・火野山ひろば・地域の方々の協力を得て、牛耕や休耕田での焼畑、麻糸織りなど、さまざまな活動を行ってきました。今回はとくに牛耕についてお話しします。

牛耕を再現する取り組みは、たんに牛で田んぼを耕すことだけが目的ではありません。かつての山里の暮らしに牛はとても重要な役目を担っていました。すぐに思い浮かぶのは、1)田んぼを耕す、2)糞が田畑の肥やしになる、3)牛の背や牛車で重い荷物を運ぶ、といったことです。こうして仕事をこなせる幅が増え、生産性が上がり、より多くの家族を支えることができるようになります。



牛に犁を引かせて、田を起す。そのためには牛の訓練も必要。

しかし、牛の力はそれだけではありません。牛を使役牛として扱うには、そのための道具が必要です。たとえば、ワラよりも丈夫なシナや麻から繊維を取り出し縄を織ります。ここにはシナや麻を活かす世界がありました。

また、稲ワラは、草履や縄、炭を出荷するための袋など暮らしに欠かせない素材であるため、牛の餌や敷料にまわす余裕などなかったのです。こうして山里では、春山に火を放ち黒焦げの野から萌え出た草木を真夏の土用の頃にカリボシ・ホトラとして刈り集めました。つまり、山里には広大な草山があったのでした。今日の椋川の山々では牛が消え、草山にはスギ・ヒノキが植えられたり、あるいはそのまま広葉樹の林に移り変わり、40～50年が経ちました。見渡せば木山ばかりの景色に様変わりです。その他に、牛を養うということは家屋の形態にも影響し、牛と家族同様に暮らすことにより育まれる精神性ということにまで話は及びます。



椋川遠景。かつて集落後方の山は尾根まで草山だったという。

このように、人々の暮らしや文化にとどまらず、山里の景観形成にも大きく関わっていたのです。あえて牛を飼い田んぼを耕すことによって、山と田と里（人）はつながっているという感触を得て、失われようとしている山里の暮らし・文化の中身を実感し、学びながら、いわゆる過疎化・高齢化が著しい椋川の村づくりに活かしていきたいと思っています。現在、椋川には2頭の牛（名前はサカエとハルエです）がいます。最近、子牛も誕生しました。牛に逢いに椋川へお越しください。

# 亀岡フィールドステーション

## ハツエさんから見た筏

亀岡FS研究員 原田早苗

上桂川、大堰川、大井川、千歳川、保津川、桂川。川の流れは一つですが、流域の人々によってその呼び方は様々です。このうち「保津川」というのは、一般的には亀岡から嵐山までの区間を指します。ここではひとまずこの一つの川を「桂川」と呼びますが、桂川は京都市左京区広河原の山中を源流とし、そこから京都市右京区京北、京都府南丹市日吉町、八木町を経て、亀岡へと流れ、嵐山へと続きます。

この自然の流れを上手く利用したのが筏です。古くは、平城京の寺院建築において丹波の材木が使われていたことから、その歴史は約1,300年ということになります。現在の京都市右京区、南丹市、亀岡市などの木材が筏流しにより都へと運ばれて行きました。山陰本線（鉄道）の開通、トラック輸送の普及、上流の世木ダムの建設などにより次第に衰退し、1948年には完全に途絶えてしまいました。

今回は、保津川（桂川）から少し上流に視点を向けて、筏をキーワードとした流域の人々のかつての生活風景を描いてみたいと思います。

京都府南丹市日吉町の小山ハツエさん（82歳）。ハツエさんは、私の主人の祖母にあたります。はっきりとは覚えていないといいつつも、ハツエさんは筏の話を語ってくれました。義母のマサさんは、田原川から筏に乗って現在の亀岡市旭町あたりに女中奉公に行ったそうです。奉公先は、おそらく農家で子守をしていたのではないかと、いうことでした。当時の筏流しは、木材や物資だけではなく、人の移動にも使われていたこと



ハツエさん

になります。正確な時期はわかりませんが、義母が結婚する前だとして明治中ごろの話ではないでしょうか。

また、義母マサさんの姉は、現在は日吉ダムにより水没しましたが、同じ日吉町大字天若の楽河という集落に住まれて

いました。まさに桂川が目の前に流れているところです。山から伐り出された材木は、宇津（京北下宇津町）、世木（日吉町大字天若）、殿田（日吉町殿田）で筏として組まれていました。ハツエさんは、義母の姉の家は世木に近かったこともあり、筏士が泊まる簡易な宿屋も営んでいたこともお話してくださいました。正確な時期までは特定できませんでしたが、明治末期から大正ころではないでしょうか。その後、1950年に世木ダムが建設されたことで、京北からの筏流しは途絶えました。

ハツエさん自身の生活では直接、筏が関係していたわけではありません。それは、1910年（明治43年）に鉄道が開通し、最寄りの殿田駅（現在の日吉駅）が貨物駅となったことが大きな理由です。筏とは直接関係ありませんが、ハツエさんの夫、幸助さんは、木馬曳（きんまひき）を1958年（昭和33年）ころまで行っていました。木馬曳というのは、牛を使って車が入ることができる道沿いまで山林から伐採した木材を運ぶ仕事でした。また、ハツエさんの義父、利兵さんは、べた（牛）曳きといって、現在でいう運送業に従事し、現在の美山町に電気が通るときには、電柱に使う材木を分水嶺の峠を越えて運んだりもしたそうです。筏だけではなく、車がない時代にもどのようにして物資が流通していたのかを示す貴重なお話でした。



田原川

最後に、ハツエさんに「桂川」以外の呼び方を聞いてみました。「大川が世木川かなあ。」支流の田原川流域に住む小山さんたち住民にとっては、桂川は、大きな川、すなわち大川であり、世木を流れる川なので世木川なのでしょう。

（聞き手：原田早苗、原田禎夫）

## 守山フィールドステーション

### 漁師の論理 —外来魚を食べてくれるな— 守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

天ぷら、ムニエル、バーガーなど、琵琶湖の外来魚を用いたメニューは今や珍しくなくなった。釣り人に対して外来魚のリリース禁止を定着させる一環として、県は catch&eat と称して外来魚を食べることを勧め、県庁の食堂や県立琵琶湖博物館でも外来魚メニューが扱われている。この動きの根底には、「外来魚を減らし、琵琶湖の水産資源を守ろう」という目的がある。これは、確かに琵琶湖の漁師とも共通する目的ではある。しかし、目的へと向かう県と漁師のアプローチに生じている“ズレ”に、どのくらいの人が気付いているだろうか。

「守山の弥生時代の集落遺跡から、フナの頭の骨がたくさん出ているといます。私らが 2000 年も前から琵琶湖の魚に生かされてきた証です。そんな琵琶湖の魚がここ数年で外来魚に食い荒されている。漁師や滋賀県の食文化を支えてきた琵琶湖の恵みが危機に瀕している。それやのに、在来魚が減ったんなら、外来魚を食べたらええというのは違います。私らは外来魚を食べて欲しくない」と、守山の琵琶湖漁師、戸田直弘さんは話してくれた（2008 年 10 月 24 日守山 FS にて）。漁師は、外来魚を食すること、水産資源として扱うことを決して勧めてはい

ないのである。

このズレの原因は、何か。

戸田直弘さんは、大学や研究会などで話して下さる際、必ず前置きをされる。「漁以外のことになると、ワシなんか陸に上がったカップみたいなものですさかい……」。戸田さんにとっては謙遜の言葉なのだろうけど、私は大いに納得したのである。ズレの原因は、人間とカップの違いにあるのではない。カップにとっては、琵琶湖は職場や遊び場ではなく、生きる場である。フナやアユは、同じ場に生きてきた仲間なのである。そこにやって来た外来魚は、カップの仲間を食い荒らし、どんどん繁殖していった。そんな外来魚は本来琵琶湖に住むべき者ではない。まして水産資源にするというのは筋が通らない。二千年続いてきた仲間との生活を返してほしい。これがカップの実感なのだろうと思う。“カップ”には、琵琶湖に暮す漁師の論理と誇りが現れているのである。



エリ漁でとれた外来魚。

大きな口をしたブラックバスとブルーギル。

### 野洲川の勉強会はじまる

聖泉大学 高谷好一

10 月の研究会で、亀岡の河原林さんが筏流しの話をして、大変面白かった。その直後に行われた「バンングラデシュと京滋地方の生存基盤」（萌芽研究）の打合わせでも川が中心的な話題でした。私たちの守山にも近江太郎・野洲川があります。野洲川をやれば、亀岡とバンングラデシュとも比較研究できるのではないかということで、今回の勉強会を始めることにしました。

都合のよいことに、守山には恰好の参考書があり

ます。田村喜子著『野洲川物語』（2004、サンライズ出版）です。洪水常襲地帯の野洲川下流部に新川が掘削された時のことが詳細に語られているのです。この大事業を行おうとした時の官と民の葛藤などがいきいきと描かれています。幸いなことに、この守山には津田義郎さんがおられます。大変もめた官民の葛藤の中であって、体を張って調停役を引き受け、大事業を成功に導いた方です。同時に『物語』の影の著者でもあります。10 月 10～11 日にかけて行った勉強会での津田さんのお話はさすがに臨場感のあるものでした。今後、定例的に勉強会を続けるつもりです。ご参加を歓迎します。

## 12月の催し

### ■プロジェクト保津川 第2回環境教室〈亀岡FS〉

1. 日時：12月13日(土) 午前7:50集合 午前8時～12時ごろ
2. 場所：京都府亀岡市 曾我谷川流域、ガレリアかめおか  
ガレリアかめおか(道の駅かめおか)駐車場集合 無料駐車場あり。  
電車利用の場合:JR 亀岡駅から京阪京都交通、バスで約10分「JA 京都本店前」下車、コミュニティバス「ガレリアかめおか」下車。またはタクシーですぐ。
3. 服装：川での網漁の実演をご覧くださいませので、暖かい服装でお越しください。
4. 参加費：大人1,000円、小人(小学生)500円  
\* 曾我谷川周辺で簡単な清掃活動もあわせて実施します。勝手ながら、環境教室のみのご参加はご遠慮ください。清掃活動とあわせてご参加いただけますよう、よろしく願いいたします。清掃時汚れることもあります。各自着替え等ご持参ください。

### ■茅刈り作業〈朽木FS〉

1. 日時：12月14日(日) 9:30-15:30
2. 場所：高島市内

### ■茅葺き屋根葺き替え作業〈朽木FS〉

1. 日時：12月下旬まで
2. 場所：椋川集落内

茅刈り作業、茅葺き屋根葺き替え作業の詳細は、「結いの里・椋川」事務局までお問い合わせください。(電話:0740-24-8101 ECC 学園高等学校椋川校内、e-mail:mukugawa@korekore.org)

### ■カヤダイラ復元(茅株の移植)作業〈朽木FS〉

1. 日時：12月中旬
2. 場所：椋川集落内  
カヤダイラ復元作業の詳細は、「火野山ひろば」事務局までお問い合わせください。(e-mail:kamasu@mine.email.ne.jp)

### ■第7回 定例研究会

1. 日時：12月26日(金) 14:00-16:00
2. 場所：守山FS(滋賀県守山市梅田町12-32)
3. 発表者：安藤和雄(京都大学東南アジア研究所)
4. 発表内容：

「絶対肯定の農村研究哲学の提唱:日本の過疎問題に関する読書ノート」

- ①はじめに一問題提起—
- ②外国人がみた現在の日本の農村に対する疑問
- ③過疎と離農問題の捉え方
- ④おわりに一宮本常一の静かな怒り—

## 在地の自覚と実践型地域研究

東南アジア研究所 安藤和雄

在地をキーワードに、研究をすすめています。在地とは、辞書的には「(1)住んでいる土地。(2)いなかの土地。在郷。在所」(goo 辞典国語)と理解されています。在地という言葉は、土地とそこに暮らしている人々の関係を表現したもっとも簡単で適確な日本語だと20年来思い続けてきました。「私たちの暮らしは、この土地に、存在し、持続していく」のだという現在進行形の関係なのです。10年ほど前、中国広州の中山大学で農村開発に関する科研のワークショップでのことでした。中国のカウンターパートを前に、「農村開発事業が持続性をもつことは、事業内容が在地化されることである」という趣旨の発表を行いました。中国のカウンターパートから「在地は中国語にはない」という指摘を受け、驚いたことを鮮明に記憶しています。在地は、和製熟語なのです。在も地も中国語にもあります。しかし日本語の在には、中国語にはない「いなか。在郷。在所」という意味が挙げられています(goo 辞典国語)。日本語にとっては、在=ある、いる、は暮らしに通じ、暮らしは、いなかに通じているのです。また、長年アメリカで勉学と研究を続けてきた日本人の農村開発研究者の友人からも、「在地は英語でどう表現するのか」と問われました。どうも英語にもじっくりいく単語はないようです。私の農業・農村開発研究、地域研究が、きわめてこの日本語の感性を出発点にしていることをあらためて知らされる機会となったのです。私はこの感性を大切にしたいと思いつけています。生存基盤科学研究に参加するようになり、それはますます強くなっています。在地という日本語をあみ出し、使ってきた人々は、ある、いる(生存と読みかえてもいいでしょう)の実

体は、土地につよく結びついた暮らしにあると考えてきたようです。

在地という言葉を強く意識しはじめたのは、1986年から始まったJICAの研究プロジェクトで、バングラデシュの村に定着し、農業・農村開発研究をフィールドワークによって行うようになってからです。すでに伏線は青年海外協力隊員時代の経験にありました。私は、1978年8月～81年4月まで、青年海外協力隊員としてバングラデシュの南部の氾濫原の農村で暮らしながらNGOの農村開発事業にNGOの一員として参加していたのです。その時の問題意識を1986年からの研究プロジェクトで考えてみたかったのです。1978年～86年、バングラデシュの農業・農村開発は、近代と伝統、外来と在来、の二つの視点から比較考察されることが一般的でした。開発もしくは発展が近代化、外来化であることは容易に想像されるでしょう。近代化の問題が指摘される場合も、伝統、在来との不整合という捉え方によって理解されていました。しかし、農村の現場での数年におよぶ日常的な農村開発事業への参加と、フィールドワークの実践経験は、外部者である私を、無意識のうちに、当事者的に農村にかかわらせていくことになりました。そして、私に在地の自覚を芽生えさせ、私を二元論の呪縛から解放してくれました。近代と伝統、外来と在来、に拘ることなく、村人たちが社会のあり方、生活様式や稲作などの生業に工夫を凝らし、村に暮らしつづけていっている実体が、私に飛び込んでくるようになったのです。まさに、村人たちは、在地という一元論の世界でダイナミックに、主体的に生きていたのです。説明という外的な見方から脱却し、自覚という内省を研究の視点として持ちえた瞬間でした。実践型地域研究にこめられた私の期待です。



## 亀岡フィールドステーション

### 亀岡の農業と自然(1)「稲作と自然」

京都学園大学 大西信弘

保津峡を抜けて亀岡盆地に出ると一面に水田が広がる。亀岡は、古くから水田耕作が盛んな地域だったようで、条里制水田の遺構もみつまっている。米の他にも農作物の豊かな地域で、紫ずきん、賀茂なす、壬生菜など京野菜、丹波大納言（あずき）、丹波栗、亀岡牛など、地域の特産品に恵まれた地域である。こうした栽培品種の他にも、最近収穫量が減っているが丹波松茸や、放流ものではあるがアユなど、豊かな食材に恵まれた地域である。こうして亀岡の特産品を並べてみると、水田、山、川のあらゆる場所が様々な地域の特産品の生産地になっていることがわかる。

こうした農業を紹介するだけでも話題に事欠かないが、この地域の農業と風土は、農作物だけでなく自然も育んできた。農業が自然を育むという違和感を感じるかもしれない。しかし、身近な自然というのは人の手が入っていない自然ではなく、人が活動している地域に暮らす生物たちなのではないだろうか。作物の生産性が高い農地は、他の生物にとっても暮らしやすい環境になっていることもあるだろう。農地には農業害虫や雑草だけでなく、水田周辺を産卵場所に利用する魚たち、水田に繁殖にやってくるカエルやイモリ、水田の魚やカエルをついばむサギ類など、農業に伴ってさまざまな生き物が育ま

れていく。一昔前までは、水田漁撈も行われ、水田の自然は人が利用する身近な資源だった。

こうした稲作と共にある自然や、そうした自然とのつきあい方（例えば、水田で稲を作りながら水田の周りに育つ魚も食べる）には、多面的な環境利用の知恵があり、人の暮らしと自然が乖離せずに在る様を見る事が出来る。稲作文化圏では、稲作がこうした自然との関わり合い方を作り出してきたのではないだろうか。亀岡の稲作と自然の関わり合い方から、いろいろと学んでいきたい。



写真解説：

水田でエサを探すチュウサギ。亀岡では最も良く見かけるサギだが、環境省のレッドデータリストの準絶滅危惧、京都府のレッドリストの準絶滅危惧種にランクされている。以前、地元環境教室で、チュウサギを絶滅危惧種として紹介していたら、ある参加者から将来はサギもコウノトリのように保護されるんじゃないかしらと言っていた。再導入されたコウノトリが繁殖したことがニュースになる時代に轍を踏んではならないのではないだろうか。

# 守山フィールドステーション

## 「湖魚のナレズシ」漬け込み体験

守山FS 研究員 嶋田奈穂子

2008年6月21日と8月9日の2日間をかけて、ニューズレター11月号で少しご紹介しました“漁師のフナズシ”の漬け込み体験を行いました。両日も守山漁協において、琵琶湖漁師の戸田直弘さんにご協力いただき、6月は11人、8月は12人の方にご参加いただきました。

6月21日には、はじめに戸田さんに琵琶湖と漁についてお話いただきました。琵琶湖の中でも場所によって棲んでいる魚は異なることや、漁師も納得する外来魚の活用について教えていただきました。その後、当日の早朝にエリで獲れた7種類の湖魚（ワタカ、カマツカ、オイカワ、ハス、ウグイ、ニゴロブナ、ギンブナ）を、シオキリ（塩漬け）しました。ウロコ、エラ、目玉、内臓を取り除いて塩に漬ける作業です。内臓を取り出す際の、浮き袋が破れる音、卵はお腹に残しておく、苦い玉（胆のう？）



朝とれた7種の魚の説明を受ける（6月21日）



魚のウロコ・内臓を取り除く（6月21日）

は漬さないで取り出す……こうした作業は、ほとんどの方にとって初体験で、とても賑やかに行いました。塩漬けによって、魚の余分な水分が抜け、同時に殺菌が出来るのです。

7週間後の8月9日、塩漬けした魚を飯に漬け直しました。塩を洗い落とし、タワシで魚を磨きます。皮についた不純物を完璧に取り



シオキリ後の魚  
中央がワタカ（8月9日）

除くことで、臭みのないナレズシになるといいます。磨いた後のワタカなどはとてもきれいな色を見せました。洗った魚の水分は充分にきります（一晩干しても良いのです）。少し塩を入れて硬めに炊いた飯を冷まし、水をきった魚の腹につめ、桶に漬けていきます。桶には、魚と飯を交互の層にして漬けます。その際、手水にするのは清酒です。こうして漬けた魚が、年末にはナレズシになるわけです。

大量の塩と米、そして手間と時間をかけて作るのがナレズシです。今回は多種の湖魚を漬けてみました。魚の種類ではなく、“琵琶湖の魚”という点にこだわりました。漬け上がったものを見たとき、実際にこれは立派な近江の伝統食品であると実感してもらえるものと期待しています。

この体験会は毎年続けていきたいと考えています。2009年も、どうかご参加・ご協力ください。

## 『湖国小宇宙』の刊行

聖泉大学 高谷好一

2008年12月上旬に、高谷好一『湖国小宇宙一日本は滋賀から始まった』（サンライズ出版、198頁、¥1260）を出しました。

1章：湖国小宇宙、2章：高い農業生産力を持つ平野、3章：情報の結節、琵琶湖、4章：強い地縁的結合、5章：近江商人、6章：安心と納得の風土、7章：琵琶湖利用史、8章：琵琶湖総合開発、9章：「美しい湖国」を求めて、の9章からなっています。

滋賀県は他府県と比べてどんな特徴があるのだろう、その特徴を活かしてどんな将来像を描けばよ

いのだろう。こんなところをはっきりさせたいと思って書きました。最初の3つの章は、主として生態環境を中心に、次の3つの章は人と社会を中心に、そして最後の3つの章は琵琶湖総合開発以降の変化と将来像について書いています。

右の写真は、守山フィールドステーションの研究仲間、戸田直弘氏がエリで仕事をしているところです。これは最終章に「天職に生きる人たち」として紹介したものです。



## 朽木フィールドステーション

### 焼畑でつながる人と人

火野山ひろば 増田和也

滋賀県の最北部、高時川の上流部に位置する余呉町の山地では、焼畑により山カブラとよばれる赤カブがつくられています。1960年代まで多くの家々が焼畑を拓いていましたが、山への植林が進み、今でも焼畑を拓くのは一人となってしまいました。摺墨（するみ）集落の永井邦太郎さん（摺墨山菜加工生産組合）です。かつては集落ごとにカブラの品種があり、同じ町内の鷲見集落が高時川ダムの建設に向けて離村することが決まった時、永井さんは山カブラを絶やすまいと種を分けてもらい、以来、ご自身の集落の種とともに育てています。

焼畑の耕作サイクルは、7月の下旬ごろまでに山野を切り開き、お盆の前後に火を入れ、そして種まき。その後は、間引きを何度かおこない、山が色づきかける頃に収穫が始まります。初霜が過ぎ、朝晩の寒さが増すにつれて、カブラには独特の甘みや辛みが出て味がのるといいます。



急斜面の草木を伐開し、火を入れる

永井さんがお話くださったことのなかに、もうひとつ興味深いことがあります。カブラを漢字で書くと「蕪」ですが、これは「くさかんむり」に「無」という字を組み合わせたものです。つまり、「葉が無い」ということです。こうした字のつくりのごとく、カブラは葉が小さいほど大きく立派になるのだといえます。石の多い急斜面の上に育つカブラを見ると、たしかに葉は小さく、それによって安定して生えているように思えてきます。カブラには多くの品種があるので、これは一概には言えないかもしれ

ません。けれども、昔の人びとがカブラの特性をつぶさに把握し、それを漢字のつくりに入れてきたのだとしたら、そのまなざしの深さにはあらためて心動かされます。



山カブラの種を播く永井邦太郎さん

さて、焼畑にかぎらず、山野へ火を入れるというおこないは、かつての日本の山地では広くおこなわれていました。火野山ひろばは、このような火を介した山と人の関わりに関心を寄せるグループです。私たちは、滋賀という身近な地域で現在も焼畑が続けられていることに強く惹かれ、昨年から京都市内で学習会を開くとともに、永井さんのもとへ通いながら焼畑の一連の作業を体験しています（NPO市民環境研究所との共催による「環境塾」）。夏の盛りにおこなわれた伐開と火入れの作業には、学生や市民が20名ほど、さらに地区の方々も加わりました。ありがたくも、作業後の昼食には地元の手料理をふるまっていたいただき、にぎやかで格別な場となりました。火を入れるという作業は危険で怖いものです。そこで、火入れでは安全に作業を終えるためにも人の力を合わせる必要があります。こうして、火入れの場には人々が集い、作業の前後には世間話や笑い話が交わされます。火は怖いものではありませんが、一方で人を寄せ集めるものでもあるのです。

昨シーズンの収穫の場には地元放送局や新聞社の取材も入りました。滋賀県立大学の卒業生も作業風景の映像を記録しています。こうした周囲からの関心の高まりに、永井さんはすでに来シーズンの焼畑のことを思い描いているようでした。むらで地道な取り組みをしている方々と外部者をつなぐ。それも生存基盤のひとつだと思いながら、今年も焼畑に向かいたいと考えています。



## 催しのご案内

### ■次世代へつなぐ南丹地域文化フォーラム 「美」と「和」で「輪(むす)」ぶ南丹文化ジョイントプログラム 2008 「ワイワイがやがやミーティング」

1. 日時:平成 21 年 1 月 31 日(土) 13:30~
2. 場所:南丹市国際交流会館 地階コスモホール  
(南丹市園部町小桜町 62 番地の 1 Tel: 0771-63-1771)
3. 主催:京都府南丹広域振興局 (Tel: 0771-24-8430)
4. 内容

「つなげよう!桂川流域の願いと夢ー保津川筏流し復活への挑戦ー」  
平成 20 年、60 年ぶりに復活した保津川筏流しに関わられた方々に、ねらい、復活までの経過、感想、今後の目標などについて、映像を交えながら語り合っていました。

(企画協力:NPO法人 プロジェクト保津川)

\*その他、企画展示、ワークショップなどが行われる予定です。

詳しくは、京都府南丹広域振興局 企画振興室までお問い合わせください。

Tel:0771-24-8430 Fax:0771-24-4683

### ■第8回 定例研究会

1. 日時 :平成 21 年 1 月 30 日(金) 16:00-19:00
2. 場所 :守山 FS (滋賀県守山市梅田町 12-32)
3. 発表者 :戸田直弘(琵琶湖漁師)
4. 発表内容

「漁師納得の外来魚活用ー防災備蓄食糧としての缶詰ー」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室  
(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

## JICA の研修員に同行して

### 生存基盤科学研究ユニット研究員 矢嶋吉司

10 月 14 日から 10 月 31 日まで、JICA(国際協力機構)のバングラデシュ国別研修員に同行して、京都府亀岡市、南丹市美山町、滋賀県甲良町、広島県神石郡神石高原町、庄原市東城町の地方行政、住民自治組織を訪問、地域振興活動を視察しました。

研修員は、バングラデシュ農村公社 (BRDB) が JICA の協力を得て、タンガイル県カリハティ郡で実施している住民参加による地域振興推進事業「行政と住民のエンパワメントを通じた参加型農村開発プロジェクト-フェーズ 2 (PRDP-2)」の BRDB 職員モハマッド・アミヌル・ラフマン・カーンさん (Mr. KHAN Md. Aminur Rahman ; リンクモデル室課長) とムハマッド・ハサヌル・ホク・モッラさん (Mr. MOLLAH Muhammad Hasanul Hoque ; カリハティ郡副農村開発官) の 2 名でした。研修目的の一つは、日本の地方行政と住民自治が協働で推進する地域振興の現場を視察し、日本の知見を PRDP-2 プロジェクトに活用することでした。

京都、滋賀での研修は行政と住民自治組織の協働で進められている地域振興を、広島では住民による地域振興の実例を視察しました。亀岡市では、生存基盤科学研究ユニット亀岡フィールドステーション京都学園大学で「プロジェクト保津川」関係者との懇談機会があり、市民、行政、大学関係者のネットワークによる市民活動の現状を紹介していただきました。訪問先ではたくさんの方々にお目にかかり、いろいろなお話を聞きましたが、日本の住民自治が歴史や地域によって住民組織の形態や住民参加の仕方が大きく異なっていること、都市近郊農村と中山間地農村の住民組

織、地域振興の取り組みの違いがあること、経済活動とともに伝統、文化、景観や環境などソフト的な活動が地域振興の重要な取り組みとなっていることなど、多くの興味深いことがありました。また、都市近郊では住民組織である自治会組織の中に地域振興を進める組織がおかれています。中山間地域では地域振興組織が個々の住民自治組織の枠を越えて結成されています。中山間地は高齢化と人口減少で個々の住民自治組織すら維持できないのが現状のようです。その中で、南丹市美山地区では、自治会や振興会、公民館など既存の住民自治組織を統合するとともに、行政職員が出向して「振興会」という新しい制度が導入されていました。行政サービスが住民の近くにあるとともに、組織統合で役員数を減らすなど、過疎地における将来の新しい住民組織像を提示するものではないかと感じました。このように、今回は日本の地方の問題とそれに対して進められる取り組みに、あまりにも無知な自分に気づく機会でもありました。今後機会があれば、生存基盤科学研究ユニット京滋フィールドステーション事業でもこれらの問題に目を向けていけたらと思います。

最後に、「日本の田舎であったのは年配の人々ばかりだった」と研修員が感想を述べていましたが、経済発展が成功しアジアの途上国にとって目標である日本の農村のこのような現状を目の当たりにして、発展について彼らが再考する機会となればと期待しています。



研修員と亀岡フィールドステーション、プロジェクト保津川の関係者



## 守山フィールドステーション

### 野洲川と生きる－青竹の配水管による水利用－ 京都大学地域研究統合情報センター 研究員 藤井美穂

滋賀県守山市は近江盆地の南に位置し、琵琶湖に面している。滋賀県最大の野洲川が同市の東部を流れている。かつて野洲川は川幅が狭く、下流部では河床が周辺の地盤より高い天井川であり、守山で南北に分流していた。下流域では、台風や雨が降ったりすると堤防が決壊して度々洪水にみまわれた。流域の人びとは野洲川を「暴れ太郎」と呼び、水害に苦しんできた。

1953年9月の台風13号による大災害を契機に、流域住民が野洲川改修の請願を滋賀県に行ったことを発端とし、建設省により1971年に改修工事が開始され1979年に完成した。河川改修により、これまで南北に分流していた川は廃止され、分流の分岐点から新しい河川が琵琶湖に注ぐようになった。ついに流域の洪水は1953年の台風が最後となった。



旧野洲川南流の堤防。掘削されて、家屋より低くなった。

「川（旧野洲川南流、以下南流と記す）がなくなり、心配がなくなってうれしい」。北野長和（ひさかず）（65歳）さんは、母親（88歳）の口癖だという。北野さんは南流沿いに位置する守山市洲本町開発（かいほつ）で生まれ育った。2008年10月から北野さんからこの集落の暮らしについて話をうかがっている。台風13号の際、南流の堤防が決壊し、開発は洪水の被害にみまわれた。屋根まで水に浸かった家屋があった。開発の人びとは、神社に灯明を供え

なかった年に大きな災害を被ったとして、その後、神社の灯明は欠かすことがないという。野洲川は「暴れ川」であるが他方、人びとはこの川を多様に活用してきた。ここでは、開発集落における水利用についてのべたい。

かつて開発の周辺の堤防にはウサギ、タヌキ、キツネが生息できるほど松林や竹藪がうっそうとしていた。この集落では堤防の竹と松を利用して配水管を作り、堤防下の湧水を溜めた親池から百メートルほど離れた各家に配水していた。この湧水はおいしく、まるやかなお茶が飲めたという。竹の管は松の木の四角いジョイントでつながれ、洪水によって流されないように地下に埋められた。近隣の約10戸がひと組になり、この竹の管からさらに支線をだして各家の井戸に給水していた。配水管には青竹だけを用い20年に一度、竹の管は取り替えられた。竹や松の伐採から竹の配水管の設置、修理は組の人びとが総出で行った。1960年代、集落に上水道が設置されたため、竹の管による配水がなくなった。

開発における竹の管による配水は「暴れ川」と長い間付き合ってきた人びとの知恵だといえよう。さらにその知恵を実現する行動力と住民同士の団結が配水を成功させた。現在、すでに野洲川は「暴れ川」でなくなった。開発の集落では人びとの知恵がいかに継承されてきたのか、今、どのような知恵が芽生えようとしているのかを考えていきたい。



旧野洲川南流。公園として利用されている。

# 朽木フィールドステーション

## 「くらしの森」の一步 -火入れの前に-

朽木FSS研究員 今北哲也

### ・ホトラヤマの復元と原野世界の見直し

止んでしまった慣行がたとえば数十年を経て復古する、というのはまずありえない。とりあえず、むら人の記憶に潜り込んでみる。

琵琶湖には118本の川(1級河川)が流れ込んでいるという。1950年代、川を辿り溯れば辺りには煙たなびくクサ屋根集落があらわれ、牛・馬が田畑を耕している。なかでも、湖西(現高島市)の山懐には近山から谷奥のセコ(斜面)にクサ山が広がる。家畜の踏まし肥田になり田を養うホトラヤマ、屋根葺きのクサ刈り場であるカヤダイラ。春、火入れあとに萌え出た芝草(ホトラ)を夏の土用に刈る。季節の風に種を放ち、枯れ立つカヤ。刈り集め、ニューウ<sup>①</sup>が立ちやがて雪。山・牛・田と人が織りなす濃密な四季の情景が顕れる。

2008年12月、湖西・今津町・椋川集落。雪解けの春を待ちホトラヤマの復元を目指す椋川サイトの「造成」が始まった。ホトラヤマの主役はコナラの萌芽。周りにはツツジ、クサボケ、イバラ、キイチゴ、イタドリ、ウド、ゼンマイ、ワラビ、フキ等々、枚挙に暇ないにぎやかな親しい草波があった。まずナラの団栗をポットに埋める。山出し苗<sup>お</sup>が生がるまでに裸地サイトをカヤ草地に。「くらしの森」を遠望できる踊り場＝「原野世界」に出会いなおしたい。

### ・カヤ原造りから

カヤダイラ復元のため、朽木の奥、林道残土を埋めた瘠せ地のカヤをもらい、掘起こしにかかる。2008年師走の暮れも20日。根雪を気にしもって日待ち。うまい。晴れ間までのぞくおだやかな曇り日だ。参加者は、朽木の地元組、宮内と今北。街からの応援、辻さん。夏、余呉の火入れにも参加した人。



重機でカヤ株を掘る。

重機はやかましくカヤを起こし、唐鋤は株を割り、ほぐし、土が振るわれる。

翌21日、掘起こしたカヤを移植するため椋川へ。日の暮れには天候がくずれらしい。”椋川しぐれ”、ちょっと忙しい気分。今日は4人。京都から黒田、鈴木。朽木から宮内、今北。林道工事の残土で埋まり、整地された谷あい斜面にカヤを植える。唐鋤、バチヅルを振り、ガラっぽい土やら石やら起こしもってつい考えてしまう。植えるなんて。ひょっとして気が変になった？日曜日とはいえ、天の皮あくまで厚く、風冷っこい。こんなケシキに在所のバアもジイもひやかに来んやろう。「そないなもんへっつけて、どないするつもりじゃ」って。



根土を振るってカヤ株を小割りする。



カヤ株を植えるための穴を掘る。

鹿にそっぽを向かれ、あちこちに生い茂るカヤ。ただし、この同じカヤ、若い芽立ちの折には鹿も好むらしい。椋川の年配者らと一緒に、カヤ原だったこの斜面に火入れをしたのは3年前の春のこと。火入れ跡のカヤの萌芽は美味しそう。鹿の餌場になってカヤが絶えたのか？いずれにせよ、雪下から「植えカヤ」の新芽が露わになる前、鹿除けネットの構築作業に入る。2月、間伐材(支柱)の段取りがはじまった。

「こりゃええカヤじゃ」。文化財指定に漕ぎ着けた椋川の民家の屋根から職人の声が飛ぶ。ゆくゆく、そんな光景につなげたい。裸地からの出発、カヤダイラ復元。そこへ入るコナラ苗。2011年春、草木が茂れば火入れの舞台。ホトラヤマを実感する手掛かりになるはず。

### 脚注

- [1] 足元にホトラを敷き、糞尿まみれをふせぐ。厩から掻き出しては積み込み春のカタ雪の田に櫛で散らし、雪解けあと人の足で踏み込む。牛を介し山と田が有機的につながっている。
- [2] 刈ったカヤをツガイワラ(穂先<sup>ひろ</sup>どおしを番)で束ねしめ、さらに何把も寄せ立てる。定まった<sup>ひろ</sup>尋の縄で巻く。大きなトンガリ帽子のニューウが在所まわりのあちこちに雪を被って突っ立っている。

# 亀岡フィールドステーション

## 保津川筏流しの聞き取りレポート①

亀岡FS研究員 河原林洋

昨年5月より、月1回、亀岡市保津町在住の元筏士である上田潔氏と酒井昭雄氏に聞き取り調査を行ってきた。元筏士はこの地域ではお二人だけとなった。



向って左が酒井昭雄氏、右が上田潔氏。

上田氏は、大正9年4月29日、亀岡市保津町生まれ。16歳より保津川下りの船頭となるが、昭和15年に入営、各地を転戦し、パラオ島で終戦を迎える。帰国後、昭和

23年頃筏士となり、昭和25年頃から船頭と筏士をかけもちし、75歳の定年まで船頭に従事していた。

酒井氏は、昭和2年5月3日、亀岡市保津町生まれ。16歳より祖父の勧めもあり、筏士となる。上田氏同様、昭和25年頃から筏士と船頭のかげもちをし、75歳の定年まで船頭に従事していた。

お二人とも昭和32～33年頃まで、時々、保津峡から筏を流していたそうだ。約半世紀以上、保津川の水運を支えてこられたのである。

今回は、聞き取り調査で明らかになった、昭和20年代前半の筏士の1日を紹介する。

毎朝7:30頃、亀岡駅より列車に乗り、保津峡駅を下車し、作業現場へと向かう。当時、鉄道・トラック輸送の発達とともに保津峡より上流から筏が流れることは少なく、主に保津峡を現場としていた。主な現場は、鵜飼ヶ浜、鷗谷であり、その現場まで駅から徒歩で向かうのである。

主に筏の作業員は4～5名で、木馬<sup>[1]</sup>や車（牛に曳かせる）で川べりに運ばれた材木を川に落とす者、材木を太さや長さによって並べ替える者、1連ずつ筏に組む者、組まれた連を1枚<sup>[2]</sup>の筏に繋げる者、とそれぞれに役割分担がなされていた。そして、平均12～13連に繋いで1枚の筏<sup>[3]</sup>として、保津川を嵯峨まで流していたのである。また、筏は現地の材木屋の「親方」が検分し、送り状を書いていた。

1枚の筏を組み終わるのは、14時頃で、それから筏で嵯峨へ向かうのである。上田氏はこの時「やれやれ」という気持ちになったそうだ。それだけ急斜面、急流での筏組は危険な重労働であったということだろう。

嵯峨まで下ると、筏は筏仲仕<sup>[4]</sup>に引き渡し、亀岡に戻るため、嵯峨駅へと向かうのであるが、列車を待っている間、駅前の店で酒を飲んだり、また、帰りが遅い時は、知り合いの嵯峨の嵐山通船の船頭の家泊めてもらうこともあった。

特に冬期は筏の最盛期であり、嵯峨の船頭が筏組の手伝いに来ていた。筏流しに使う竿（ヒノキ材）は長く列車に持ち込めないため、彼らに保津峡の現場まで徒歩で運んでもらうこともあった。また、筏で使った「カン<sup>[5]</sup>」などは、帰りに次回の現場を通りかかった際に走行中の列車から落として帰ることもあったそうである。

お二人は「ようこんな仕事しとったなあ～。冬は冷たくて辛かったなあ～」という言葉を繰り返しておっしゃっていた。筏流しは命がけの仕事で、特に冬期は、寒さ厳しい過酷な仕事だったことが伺える聞き取り調査であった。



昨年9月10日、再現された筏6連。この倍の12連の筏を組み、保津峡を下ったのである。そのスケールがおわかりいただけるであろうか？

### 脚注

- [1]木馬（きんま）…木材を山から運ぶそりみたいなもの。
- [2]筏全体を「枚」とよんでいた。
- [3]全長約50m、1連4m×12連。
- [4]筏を解体し、嵯峨の貯木場まで運ぶ。
- [5]筏を組み時に使う道具。嵐山に到着後、筏を解体する際に筏仲仕が保管しており、次回、嵐山に下ると返してもらう。

## 催しのご案内

### ■第9回 定例研究会

1. 日時 : 平成 21 年 2 月 27 日 (金) 16:00-19:00
2. 場所 : 守山 FS (滋賀県守山市梅田町 12-32)
3. 発表者 : 永井邦太郎 (摺墨山菜加工生産組合)

### 4. 発表内容

#### 「湖北・山里の水と生き物と人のかかわり」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室  
(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

## 農山村の将来をどう描くのか？

### 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

約 40 年前から既に日本で認識され始めていた農山村の過疎化は、今や大きな社会問題となっている。65 歳以上の人口比が 50%以上となる、いわゆる限界集落は急増し、日本人の衣食住を支えてきた農山村の伝統的生業とその基盤となる生態資源は危機に瀕している。食物自給率がカロリーベースで 40%に満たない日本の生存基盤は、長期的には非常に不安定であり、衰退しつつある第一次産業の見直しが急務といえる。

話は変わるが、私は 8 年程前からミャンマー・バゴ一山地の村落で調査研究を行っている。そこでは、タケの再生をうまく活用した焼畑耕作が営まれ、村人は日常生活に必要なだけの糧を森や川から得て暮らしている。弱者を支える相互扶助の精神も根強く、孤独死するような老人はいない。ここには、現代の日本で失われつつある人と自然、人と人との密接な繋がりが生きている。しかしながら、このような自給的生活を営む村人に経済的な余裕はほとんどなく、村には電気や水道もない。また、病院は村から 40km 以上も離れた町にしかなく、マラリヤなどを患っても治療を受けられる人は少ない。ミャンマーの農山村での生活にある種の憧憬を抱く自分がいるのは確かだが、自身がそこに永住するような覚悟はない。

日本の農山村における伝統的生業の重要性や魅力を訴えることは容易いが、都市部に生活の基盤をもつ外部者が、農山村の魅力のみを訴えても重みや説得力は生まれにくい。農山村の将来像を描くには、まず、そこに生きる当事者たちが何を考え、どのような問題に直面し、何を目指しているかを十分に理解することから始める必要があると思う。

当プロジェクトでは、地元住民、地方自治体、NPO、研究者等が協働しながら、日本の農山村の望ましい将来像を共に構築していくことを目指している。過疎化が進む農山村ではあるが、都会での仕事や人間関係に

疲れ、田舎での生活を指向する人たちも少なからずいる。世界的な金融危機の影響を受け、都市部には仕事や住居を失った人々が溢れかえっている現状を鑑みれば、農山村の重要性はますます高まっていくと思う。それ故、伝統的生業と生態資源が失われてしまう前に、その継承を繋ぐ架け橋となりたいと思うのである。

当プロジェクトの活動は、亀岡・守山・朽木にある 3 つのフィールドステーション (FS) を中心に行われている。亀岡 FS では、筏をシンボルとした流域の人・山・川・町のつながりの再構築を試みており、かつて丹波山地で切り出した材木を京の都へと運んだ保津川の筏流し復活のため、元筏士の方々の指導の下、昨年 9 月に筏を組んで保津川を下った。元筏士達は既に 80 歳を超えており、彼らの知識・経験を継承するために残された時間は長くはない。守山 FS では、外来魚が猛威を振るう琵琶湖で生息数が激減し、食卓にのぼる機会がめっきり減ってしまった琵琶湖の在来魚を用い、地元の漁師の協力の下、ナレズシ漬け込みの体験会を行っている。地元漁師との交流を通じ、近江の伝統的な食文化を学びながら、在来魚を食べること、さらには外来魚を食べることの意味を考えている。朽木 FS では、火入れと共にあったかつての山野の暮らしを再現するため、カヤ株移植によるカヤダイラの復元を試みている。また、奥山の溪流を活用した水力発電システムを構築し、火と水のエネルギーの活用による、伝統的生業と現代の技術を組み合わせた新たな生業基盤の確立を目指している。

都市生活を営み、大学に勤務し、研究を生業とする私に、日本の農山村がかつての活気を取り戻すためにどのような貢献ができるのか、明確な答えはまだない。しかしながら、地域に根ざして力強く生きる人たちと共に汗を流し、議論を交わし、お互いの立場の違いを超えた理解が生まれた先に、その答えがみえてくるのではないかと思う。



編集・発行：京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室  
住所：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46  
URL：http://www.shigafas.cseas.kyoto-u.ac.jp

## 朽木フィールドステーション

### ホトラとベーラ：土地に根ざした野山の名前

火野山ひろば 増田 和也

「ホトラ山って、ベーラ山のようなものかしら？」

神奈川県川崎市宮前区土橋（つちはし）地区。ここに生まれ育った小倉美恵子さんは、朽木のホトラ山のことを知り、こんなことを尋ねてきました。土橋周辺では、堆肥・薪・炭の原木にするナラやクヌギなどの雑木を「ベーラ」、その林を「ベーラ山」とよんできたといいます。

現在の土橋付近には東名高速道路や東急・田園都市線が走り、閑静な住宅地が広がっています。しかし、小倉さんの記憶をたどると、1970年代以前の土橋には農村風景が広がっていたそうです。

ホトラとベーラ。似たような言葉の響きに誘われて、ベーラ山を訪ねてみました。今でもその様相をとどめている地域があると、小倉さんは川崎市・横浜市・町田市の境にある寺家（じけ）地区へ案内してくれました。一帯には関東地方に広く見られる谷戸（やと）地形が広がり、谷あいには水田、その両脇の斜面には雑木林や竹林が広がっています。

ベーラ山の中を歩いてみました。木々に目をやると、根元から何本も幹が分かれて株状になっています。



谷戸とよばれる地形。関東平野によく見られる。



ベーラ山の木は幹が根元から何本も分かれています。

それは、炭や柴として切った木々が、切り株から萌芽を何本も伸ばして育った姿であり、一本の木を

長い時間のなかで何度も利用してきたことを伝えていきます。

横浜市では、この景観の保全のために補助金を出しているとのことで、現在でも林のなかの下草はきれいに刈られていました。一方の町田市側では、ベーラ山は下草もそのままにすっかりと放置され、一部では竹が侵入しています。その対照的な様子は印象的で、ベーラ山は人との関わりのなかで維持されてきたことがあらためて意識されます。

ホトラにベーラ。生活と身近に結びついてきた野山は、それぞれの土地で独自の呼び名がありました。けれども、最近では「里山」という言葉が独り歩きして、人が暮らしのために関わってきた雑木林は「里山」として一括りにされてしまいます。「里山」という言葉では、それぞれの地域で営まれてきた人と自然の関わり方の個別性や多様性が消し去られてしまうのではないか。それぞれの地域で親しみ深く伝えられてきたことを、まずは丁寧にみていくこと。そこから、土地土地の暮らしを支える原点が見えてくるのではないか。小倉さんは、そう考えているようです。

\*今回のベーラ山訪問は、NGO「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク」がトヨタ財団の研究助成を受けて進めているプロジェクト(インドネシア・中スラウェシで映像記録を軸に山村文化を学びあう活動)の一環として可能となりました。

土橋の土蔵にはオオカミを刷り込んだ護符が貼られています。それは奥多摩の御岳山から毎年運ばれてくるものです。その護符を出発点に、小倉さんと由井英さんは、この地域の土地に根ざした暮らしを映像作品として描き起こしました(『オオカミの護符—里びとと山びとのあわいに—』)。ベーラ山はそのなかにも登場します。ぜひご鑑賞ください。詳しくは「ささらプロダクション」まで(<http://www.sasala-pro.com/>)



御岳山から毎年運ばれてくる護符

# 亀岡フィールドステーション

## 舟運文化が守る川

大阪商業大学 原田禎夫

亀岡盆地を貫くように流れる保津川は、古くから水運が栄え、丹波の豊かな恵みを京の都にもたらしてきた。かつての水運は観光川下りに姿を変え、今もなお多くの人を魅了し続けている。

松尾芭蕉の有名な句、「五月雨を あつめてはやし最上川」でその名を全国に知られる山形県・最上川もまた、舟運文化が今なお流域各地に色濃く残り、「母なる川」として人々に愛されている川である。



雪の最上峡。かつては物資を満載した船が行き来していた。海からの強い風を利用して、上り船は帆を張って航行していたという。

古くから水運が栄えていた最上川であるが、1693年（元禄6年）、京都の商人・西村久左衛門による上流部の開削で大量の物資輸送が可能になり、紅花や青苧（あおそ）といった特産品<sup>[1]</sup>が上方に運ばれ、出羽地方は大きな経済発展を遂げた。

今、最上川を訪れると、川漁師の船や川下りの観光船を除けば、かつて盛んに行き来していたであろう船の姿を見ることはほとんどない。しかし、現地での調査を重ねる度に感じるのが、流域を通じた人々の意識の“つながり”である。上下流、あるいは遠く京都との物資・文化面での交流を、実に多くの人が強く意識しているのである。

そして、この“つながり”は、河川環境に対する流域の人々の取り組みにも特徴的に表れている。河川環境をはじめ、治水、利水など川に関するさまざまな問題は、地域を越えた複雑な利害関係が絡む、非常に複雑かつ繊細なものである。このような複雑な問題を孕む川の環境保全に取り組むために「美しい山形 最上川フォーラム」が設立された<sup>[2]</sup>。

このフォーラムは県民をはじめ、企業や行政機関、大学などの研究機関によって運営されているのだが、その大きな特徴は、すべてのメンバーが完全に対等なパートナーであるという点にある。例え

ば、住民が川で何かイベントを計画したとしよう。その際には、河川管理者である行政機関への申請や資金の確保など、非常に面倒な手続きが必要であるが、このような川を人々から遠ざける社会のあり方が、人々の川への無関心を助長し、各地で河川環境の悪化をもたらしてきたという一面もあろう。し、



「美しい山形 最上川フォーラム」事務局での聞き取り調査の様様。左から柴田洋雄会長、伊東憲昭事務局長、事務局スタッフの平野沢果氏。

かし、最上川においては、流域の地域ごとに設置された部会において、住民も行政機関も完全に平等な関係性のもとで徹底した議論がなされ、それぞれが「出来ること」をお互いに模索する中で、ベストな答えを見出す努力がなされているのである。

山形には「芋煮会」という風習がある。秋になると河原に集まり、里芋を使った鍋料理を、家族や友人、同僚らとともに食べる伝統行事である。この芋煮もまた舟運がもたらした文化のひとつであるが、大人から子供まで、川という共通の舞台を持ち続けていることが、最上川モデルともいべき河川管理のあり方を実現しているともいえよう。

今、我々は保津川において筏流しの復活を通じて、流域の人・山・川・町のつながりの再構築を目指しているが、最上川をめぐる人々の関係性には、大きなヒントが隠されているのではないかと感じている。



かつて舟運の中継地として栄えた大石田町の最上川。洪水防止を目的に1965年（昭和40年）から特殊堤防が整備されたが、この堤防整備により町並みと最上川は断絶してしまった。そこで、住民の要望をもとに2001年（平成13年）から、かつて立ち並んでいた屏蔵の風景を再現する修景事業が実施された。

脚注

[1]西陣織など高級織物の染料として珍重された。

[2]2001年（平成13年）設立。  
<http://www.mogamigawa.gr.jp/>

## 守山フィールドステーション

### “湖魚のナレズシ” 桶開き

守山FS 研究員 嶋田奈穂子

2008年6月から9月にかけて行いました、「湖魚のナレズシ」の漬け込み体験（詳細はニューズレター1月号）で作ったナレズシの桶を、先月10日に開きました。体験会に参加された方々を中心に、自分たちで漬けたナレズシを賞味しようというものです。当日は、滋賀県豊郷町にある酒造会社「岡村本家」さんにご協力いただき、地酒とともに近江の田舎料理を味わえる料理屋として当蔵が営んでおられる「遊亀亭」で試食会を行いました。

オイカワやカマツカなど、小さな湖魚は少し酸味がきつく、これが次回の漬け込みへの課題であることがわかりました。ワタカやフナなど大きな魚になれば酸味も適度で、旨みがあり、「これは箸が止まらない！」という声があがるほど。今回、ナレズシを初めて食べるという方もおられましたが、「思ったより臭くない」「食べやすい」「うまい！」と上々の評価をいただきました。

体験会に参加してくださった中村力三さん、八重子さんご夫妻は、体験会の後日、復習を兼ねてご自宅でナレズシを漬けられたそうです。残念ながら都合がつかず、桶開きには参加いただけなかったのですが、「来年度の体験会を楽しみにしています。友達を誘って行きますね！」と、嬉しいコメントをいただきました。

琵琶湖から水揚げされたばかりの湖魚をさばいて、塩漬けから飯入れへと時間と手間をかけたナレズシの漬け込み体験会は、そのナレズシを口に入れてみることで、はじめて完結したようです。



桶から出したばかりのナレズシ

### 中山道守山宿の歴史文化シンポジウム

聖泉大学 高谷好一

すでに報告していますように、守山FSでは市街地と農村と琵琶湖の3地区で活動をしています。今回は、このうちの市街地での活動の様子を報告します。

守山市では中心市街地活性化基本計画を進めています。どのようにすれば地元住民のニーズにあったものにするのが出来るのか。この点に狙いを定めて市役所の人たち、住民、FS関係者の混成メンバーで定期的な研究会を行っているのが、この活動の内容です。具体的には月一回のペースで研究会を開いてきました。その内容は以下の通りです。第1回「守山市における中心市街地活性化基本計画について」（宮本和宏、9月24日）、第2回「中山道守山宿の歴史」（川端弘、10月8日）、第3回「守山宿の古民家に住む者として」（山本正之、10月22

日）、第4回「中山道守山宿歴史文化保存会の活動」（川端美臣、11月19日）、第5回「守山市の地場産業と教育」（清原健・井上純作・山倉雅雄、12月16日）、第6回「守山宿の町家の可能性」（濱崎一志、1月22日）、第7回「中心市街地活性化基本計画再考」（舟橋和夫、2月18日）。以上が、今までに行ったものですが、これを総括し、また広く市民の皆さんにもこの活動と中身を知ってもらおうと、3月14日にシンポジウムを予定しております。皆様のご参加をお待ちしております。



中山道守山宿研究会のようす（2月18日 守山FSにて 参加者18名）



## 催しのご案内

### ■守山活性化フォーラム

1. 日時：平成 21 年 3 月 14 日(土) 13:00-16:30
  2. 場所：エルセンター（守山市勝部三丁目）
  3. テーマ：地域資源の活用による中心市街地活性化
    - ・基調講演Ⅰ「滋賀県と守山の自然的・歴史的特徴」  
高谷好一氏（聖泉大学総合研究所長 京都大学名誉教授）
    - ・基調講演Ⅱ「中山道守山宿の概説」～正しい歴史を踏まえて～  
川端弘氏（前守山市教育長）
    - ・意見発表
    - ・パネルディスカッション
- 主催：株式会社みらいもりやま21 共催：京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所守山 FS、守山市、守山商工会議所  
（詳しくは <http://moriyama21.jp/?p=906>）

### ■第 10 回 定例研究会

1. 日時：平成 21 年 3 月 25 日（水）11:00～14:00 頃
  2. 場所：保津川(10:30 に JR 亀岡駅北口にお集まりください。)
  3. 発表者：上田潔（元筏士）、酒井昭雄（元筏士）  
河原林洋（亀岡 FS 研究員）
  4. 内容：保津川における筏組の実演、試乗会  
かつて保津川(桂川)は物資の一大流通経路であった。その一役を担っていたのが材木を運ぶ「筏」である。今回は、元筏士のお話を聞きながら、昭和の「カン筏」を実際に組み、試乗する。(通常は 12 連=約 50M の筏であるが、当日は 3 連=約 10M の筏を再現予定)  
昼食：地元の食材を使ったお弁当を用意いたします。(実費負担)  
服装：動きやすい服装。濡れる場合もございますので、着替え等ご持参ください。ウォーターシューズ等があれば便利です。
- \*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室  
(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

## ラオス出張報告

### 生存基盤科学研究ユニット研究員 矢嶋吉司

12 月 21 日から 1 月 10 日まで、トヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラムの助成プロジェクト「農村文化・歴史を重視するアジア農村発展モデルの提唱ーアジアの開発途上国と日本の実践的ネットワーク構築による農村文化再創造活動ー(代表:安藤和雄)」(以後、プロジェクト)の活動の一環として、ラオスに出張しました。

このプロジェクトは、世代を超えて受け継がれてきた生活の知恵や生業の知識、伝統的な祭りや協働の習慣などを積極的に再評価し、人々の「村に暮らす誇りや生きがい」を育て、精神的な結束を強化する文化の創造・再創造活動をアジア的な人的交流のネットワーク活動として実践することを目的としています。具体的には、日本の農村で現在実践されつつある、文化と歴史を再評価する農村振興、地域おこし活動を企画実践する日本の住民組織、NPO、地方自治体、大学関係者と、文化と歴史の再評価を農村開発、地域社会開発に取り入れていこうとしているラオスの村の住民組織、NGO、地方自治体、大学関係者とのネットワークを構築し、日本とラオスでの研修やワークショップを通じた相互学習により、それぞれの運営方法や農村文化・歴史をアジア的視点によって評価し、各々の計画、実践に活かしていこうとしています。

ラオス国立大学農学部(以後、農学部)と現地 NGO PADETC がカウンターパートとして活動に参加します。ラオス国立大学と京都大学は、学術協定を締結するなど、これまで 10 年を超えて協力関係を維持してきました。特に、農学部の「ラオ伝統農具農民博物館」(以後、博物館)とは、その発足当時から運営支援などが続けられています。

今回の出張は、関係者と実施計画を打ち合わせて協



農学部ラオ伝統農具農民博物館の看板と遠景

働体制を確立することと、日本農村スタディツアーへのラオスの招へい者を推薦してもらうことが目的でした。

1 月 7 日に農学部、PADETC の関係者が集まり、プロジェクトの人員構成と事務所について話し合いました。農学部学部長の Thongly XAYACHAK 氏、PADETC 代表の Sombath SOMPHONE 氏がそれぞれラオス側のプロジェクト代表、アドヴァイザーにつき、博物館の Inthong SOMPHOU 氏、Bounthone KEOJANDA 氏、Souphaphone RATTANARASY 氏の三氏がプロジェクト担当に決まりました。そして、博物館内にプロジェクト事務所を設けること、上記の担当 3 名が 2 月 25 日から 3 月 13 日まで来日し、京滋地域の農村を訪問することが決まりました。亀岡 FS、守山 FS にもお世話になります。日本の農村や都市近郊のみなさんとの交流をとおして、地域の取り組みを実感・体感して、母国での活動に役立ててもらいたいと考えています。

余談となりますが、今回、現地で何度か農村を訪問する機会がありました。ラオスの村には、まだ昔の生活の雰囲気があちこちに残されています。高床式の家の床下には、使わなくなった伝統的な道具や農具が無造作にかけられていました。

しかし、伝統的な衣装をかたくなに守っている北部のある村を訪れた際、その衣装を脱ぎ洋服を着る人たちが現れてきたことや、ある村人は、病気で町の病院に入院した際、町の人たちに自分の衣装を遅れたもののように見下すような眼差しを向けられ、それを機会にその人は洋服を着始めたとの話を聞く機会がありました。このように、人々の誇りが失われていくのだなーと考えさせられました。



村の服装。この村でも洋服を着る人が出てきた。伝統的な服装が遅れていると見なされることも多い。



民家で見せてもらったかなり古い花嫁の頭にまく布。おばあさんから渡されたものだといふ。

まちやむら、そこに暮らす人びと(=ざいち)の、  
知恵や生きる力(=ち)に学び、実践する活動です。

# ざいちのち

実践型地域研究ニューズレター No.6 2009年4月



京都大学  
生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所  
「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町 古浜

## 亀岡フィールドステーション

### 「したたかさ」というレジティマシー (1)

亀岡 FS 研究員 原田早苗

毎年 30 万人が訪れる「保津川下り」は、筏・舟運を起源とし、丹波の材木や農作物を中心とする輸送から現在は観光へと形を変えて今日まで続いている。その歴史は日本の主要な川下りと比べても長く、また戦後、京聯や阪急といった企業による経営を経て、昭和 45 (1970) 年から保津川遊船企業組合として船頭自ら経営されているという点からも他の川下りとは異なる。それは船頭たちが生活をかけて闘った結果とも言えるが、さらに古い時代まで遡ると、筏士や船頭たちがコモンズとしての保津川に関わることで地域での発言力を強めていったレジティマシー(正統性・正当性)獲得の歴史と見ることもできる。今回は 1 回目として、近世の保津川の筏流しの様子を文献資料から読み解き、筏を通じて「したたか」に生きた筏士や筏に関わる人々の姿を探ってみたい。

筏は近世以降に丹波材の需要が増加し流通業として発展を遂げる。山方と呼ばれる生産者(筏荷主)の材木は、大堰川の本流、支流でいったん筏として生まれ、宇津、上世木、殿田・保津・山本の筏問屋を通じて、京都の嵯峨・梅津・桂の三ヶ所材木屋まで運ばれて行った。実際に筏を流すのは、筏問屋に雇われていた筏士(指子、差子ともいう)であった。

レジティマシーの視点で近世の筏の歴史を見てみると、近世初期は山方の勢力が強い。筏問屋は輸送を委託されているにすぎず、山方からの依頼がない限り仕事はない。例えば、筏の規格(大きさ)と輸送費について近世を通じて幾度となく山方と筏問屋の対立が生じているが、当初は山方の主張が通ることが多かった。輸送費は山方が負担していたが、少

しでも安くするために、筏の幅を広げ、長くする傾向があった。急流の保津峡を下るため、大きく長い筏ほど危険を伴う。延宝 9 (1682) 年の協定では幅が従来通りの 1 間 2 尺(約 2.4m)、長さは山方の主張を反映し、5 間長くなり 30 間(約 54m)となる。

筏流しの最大の難所は、巨岩、巨石が散在し、急流である保津峡であり、保津・山本の筏士のみが、この急流を下る技術を有しており、次第に筏問屋や山方に対しての発言力を強め、組織化されていく。天明 2 (1782) 年の筏の規格に関わる筏問屋と山方の対立では、筏問屋が筏士から出された要求をそのまま山方に提案している。これは、亀山藩の財政悪化に伴い、それを支えてきた保津・山本の地主である筏問屋の経済的勢力も衰え、筏士を統制することができなくなったためである。筏問屋は、円滑な輸送により収入を確保するために、山方の提案を受け上流の筏士を受け入れることを決定した。筏士はその後にも発言力を増し、ついに、文政 9 (1826) 年には筏問屋の会議に指子惣代 5 名までの参加が認められ、筏問屋の意思決定機関に参加するまでになった。

このように、近世の筏流しは、保津川の輸送ルートを支配したい山方、独占的に保津川の筏収入を得ることができる保津・山本の筏問屋、急流を下る技術を有する筏士の 3 主体が自分たちの利益を考え、対立・協力し、「したたか」に筏流しに対するレジティマシーを獲得していく過程と見るることができる。



保津川遊船企業組合の発足時に船頭たちが植えた桜の木。



明治・大正期の筏。

# 守山フィールドステーション

## 守山活性化フォーラムの報告

聖泉大学 高谷好一

3月14日(土)には、株式会社みらいもりやま21の主催、京都大学守山FS、守山市、守山商工会議所の共催で、表記のフォーラムが行われました。これは、守山市が中心市街地活性化基本計画なるものを進めておりますが、それをなるべく地域住民の意向に沿ったものとして実現したい…ということで行ったものです。同時に、これまで繰り返し述べてきた通り、生存基盤科学研究ユニットの守山FSが行っている、守山市街地プロジェクトの中間発表として行ったものでもありました。守山FSでは、この狙いで毎月一回の勉強会を開いてきましたが、その過去一年間の統括ということで行ったものがあります。100名を超える市民の方々が、ご参加くださいました。

フォーラムでは、2つの基調講演と、それに続く3人の意見発表があり、続いてパネルディスカッションが行われました。



基調講演

基調講演では、私の「滋賀と守山の自然的・歴史的特徴」と川端弘氏(前守山市教育長)の「中山道守山宿の概説」がありました。

守山の活性化は、単なる科学的手法だけに頼るものではなく、その貴重な歴史・文化的遺産を生かしたものであるべきだ、というのが2つの講演の主張でした。

意見交換では、最初に濱崎一志氏(滋賀県立大学)が「守山宿の町家について」と題して中山道守山宿に残る町家の価値を建築学的立場から述べました。続いて山本正之氏が「守山の古民家に住む者・所有するものの立場」と題して文化財的民家に住む同氏の、自分の家に対する愛着と、それにもかかわらずその維持が大変に苦しいことを率直に訴えました。井上純作氏は「町家活用の事例から考える」として、他地域での町家活用の例を紹介しながら、生きた活

用のためには市民自身が息長く続けるソフト面の充実が求められるのだと述べました。一住民として自分が日ごろ感じている所を、これも率直に述べました。



意見発表・守山の建築資産として「町家」を捉えた発表

最後に、舟橋和夫氏(龍谷大学)をコーディネーターにして、中條忠文氏(守山学区長)、濱崎一志氏、石田みち代氏(ループプランニング代表取締役)

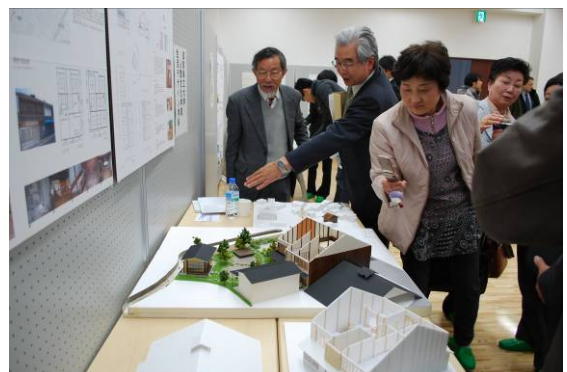
役、清原健氏(みらいもりやま21代表取締役)、山倉雅雄氏(同、取締役)が意見を述べ、フロアからの意見に応じました。



パネルディスカッション

ブースでは滋賀県立大学、立命館大学、近畿大学の学生による、古民家活用模型や小学校建替え案などが展示されました。

これまで守山FSで行ってきた研究会は、今年度も継続し、多くの方々と守山独自の資産を利活用したまちの活性化を考えていきたいと思っています。皆様のご参加をお待ちしております。



学生の展示

# 朽木フィールドステーション

## 溪流発電装置の試験稼働 -「水のエネルギー」を活かした生業づくりに向けて- 生存基盤科学研究ユニット研究員 増田 和也

朽木FSでは、『くらしの森』の再生を目標にしています。これは、山の恵みで暮らしを立てる生業基盤をつくっていくことです。私たちは、「火のエネルギー」と「水のエネルギー」に着目して、この目標に取り組んでいます。このうち「火のエネルギー」については、2月号でお伝えしましたように、滋賀県高島市今津町椋川地区でカヤ株移植によるカヤダイラの修復試験を始めています。もう一つの「水のエネルギー」では、奥山の溪流において水車を用いた水力発電システムを構築し、そこから取り出したエネルギーを山菜栽培や雪室などに活用できないかと構想しています(図1)。

くらしの森> 水のエネルギー・システム模式図

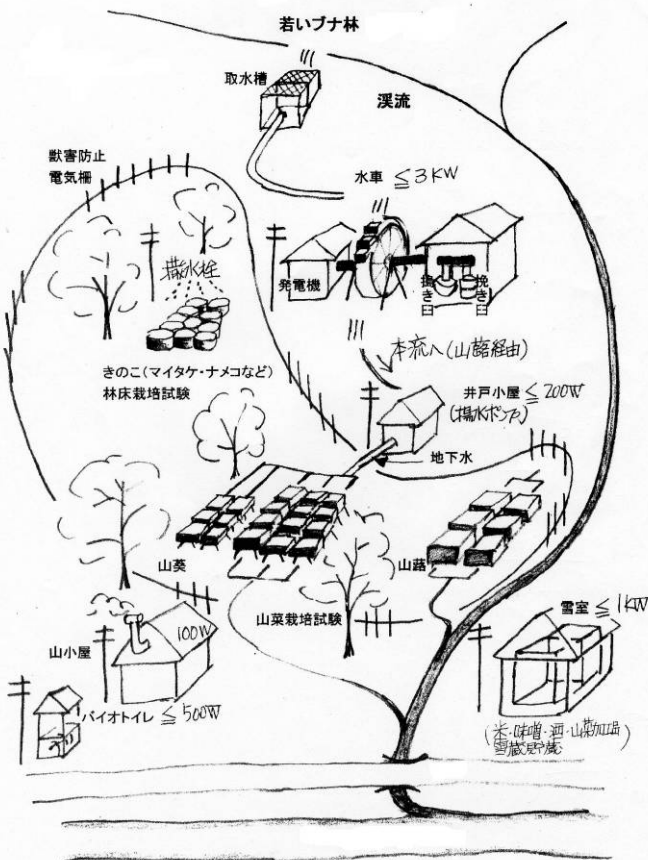


図1 水のエネルギーを活かした「くらしの森」再生の構想

渇水期など溪流の水量減少による発電量の低下に備えるために、計画では太陽光パネルも併設し、

水のエネルギーと太陽のエネルギーを合わせたハイブリッド式発電装置とします。水車という昔ながらの技術と最新の発電装置を組み合わせたという意味で、これはハイブリッド・テクノロジーともいえそうです。

山の恵みを活かす新しい技術の確立を目指して、これからも模索と実験を続けていきます。



でき上がった水車発電システム。まずは、ホースで水をかけて稼働実験。



制御盤。過度に電流が流れないように制御します。



蓄電池。発電した電流をストックします。

ハイブリッド式溪流発電装置を実際に稼働しながら、現段階での課題と今後の展望について検討する会を下記のとおり開催します。ぜひ、ご参加ください。

日時:平成 21 年 4 月 18 日午後 2 時から  
会場:小森バイオ研究所(滋賀県大津市真野大野 1-6)  
参加ご希望の方は朽木 FS 研究員の今北(090-8651-0739)までご連絡ください。詳細をお伝えします。

## 催しのご案内

### ■第11回 定例研究会

1. 日時：平成21年4月24日（金）16:00-19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）

## 日本の農村、農業、漁業の存在をアジアに発信する意義 —3月5-7日のエクスカージョンの報告— 東南アジア研究所 安藤和雄

「日本にも農村、農業や漁業があった。それを学べただけでも、大変意義深かった。ありがとう」と、Novaty Eny Dunga（以下、ノバティ）さんは、エリを見に行つた船上で波しぶきをあびながら話してくれました。彼女は、インドネシアのハサヌディン大学で、農業・農村開発を専門として研究と教育に従事されており、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と東南アジア研究所が実施した若手研究者交流支援事業により、今回はじめて日本を訪れたのです。この交流支援事業と、生存基盤科学研究ユニットの萌芽研究、トヨタ財団のアジア隣人ネットワーク事業との合同で行われたエクスカージョンには、彼女の他に、ミャンマー、ラオス、インドネシア、バングラデシュ、インド、カンボジアから総勢二十数名が参加し、3月5-7日の3日間、亀岡、守山のフィールドステーションが受け入れとなり、京滋の農村部を訪れました。参加者の中でも、ノバティさんは旧美山町北集落かやぶき屋根の里の民俗資料館や守山漁業協同組合の関係者の話に熱心に耳を傾け、質問をしていました。「日本は、工業の発達した国だと聞いていたので、都市や工業ばかりだろう、と想像していたのです」と、驚きの理由を説明してくれました。彼女は、日本では農村、農業、漁業がまとも存在していないと思っていたようです。

3月5日の午後に、NPOプロジェクト保津川と保津川遊船企業組合の協力を受け、亀岡フィールドステーションが企画した、保津川下りの歴史と木船や木船操作に関する現役船頭さんからの実演と熱のこもった説明からエクスカージョンは始まりました。その日は、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた美山町北集落の民宿に泊まりました。6日の午前には、雨で肌寒い朝でしたが、北集落の伝統農家屋群と、集落住民の保存会が運営するかやぶき農家に生活用具や農具を陳列した民俗資料館を見学し、いろいろ端での館長さんの説明に、参加者は聞き入っていました。午後は琵琶湖環境科学研究センターで講義を受け、琵琶湖博物館を見学しました。7日は、守山フィールドステーションの企画で、守山漁業協同組合の婦人会のみなさんによる琵琶湖の日本在来の淡水漁調理実演を午前に見学し、交流をかねた昼食会後、現役漁師の戸田直弘さんから琵琶湖の環境や外来魚問題の危機的状況に関する話を聞き、戸田さんと、同じく現役漁師である今江光夫さんの二隻の船に分乗し、強風のなか、琵琶湖の漁業の現場である小鮎のエリや、新旧の野洲川河口の見学にでかけました。ノバティさんは、この時私と同じ船に

3. 発表者：井上純作（前守山市教育部長）

4. 発表内容：

「守山活性化フォーラムを終えて —住民がつくる守山—」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

乗り込みました。そして、「新しい考え方を学べたのはよかった」とエクスカージョンの感想を締めくくってくれました。内心、私は大変嬉しかったのです。この一言を日本の農村部で農業や漁業、林業と向かいあって生きている人々にぜひとも届けたいのです。アジアの開発途上国といわれてきた国々では、現在でも、農村部での問題は、社会経済開発であると認識されていることが一般的です。しかし底流では、高等教育やインフラ整備などの充実により、皮肉なことに、日本が経験したように、農業、農村離れの現象がすすみつつあります。ノバティさんは、日本の工業化、都市化社会の中での農村、農業、漁業が抱えている問題が、単なる生産の問題としてではなく、暮らしと社会、文化の問題として、「在地の人々」に捉えられ、農村振興の基本にあることを実感できたのでしょうか。都市に追いつくことが農村開発ではなく、農村文化の良さ、重要性を「在地の人々」が自覚することこそが、現代の農村部が抱えている問題を自ら克服していく糸口となっています。このことを、美山町や亀岡市、守山市など現在の日本の農村、農業、漁業を支えている人々の実践は教えてくれています。日本の農村振興の現状を、世界に、特に、アジア諸国に発信していくことは、世界の農村に住む人々をかみならず勇気づけるでしょう。地球の生存基盤を考えることは、文化の問題でもあるということ、私たちは発信していきたいのです。

3日間のエクスカージョンに参加したバングラデシュの村のNGOの3名、ラオス国立大学農学部の教員3名、ミャンマーのサイクロン被災村復興ボランティアの1名は、2月27日から3月12日の期間に、亀岡市文化資料館と美山町知井振興会における研修と交流プログラムに参加する機会を得ました。エクスカージョンをはじめ、これら全てのプログラムを実施するにあたり、関係者の皆さんには大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。特に、3月7日の朝は、悪天候で他の船は出港を見合わせたにもかかわらず、戸田さん、今江さんに漁にでいていただきました。琵琶湖在来魚をエクスカージョン参加者に味わってもらいたいというお二人と、守山漁業協同組合のご協力とまごころに感謝致します。皆様のご協力のおかげでプログラムを無事終了でき、日本での思い出を招聘者の皆さんに自国に持ちかえっていただくことができました。ありがとうございました。

### ニューズレター編集室からのお知らせ

今月号より、タイトルヘッドをリニューアルいたしました。「ざいちのち」には、まちやむら、そこに暮らす人びと(=ざいち)の、知恵や生きる力(=ち)に学び、実践することの意が込められています。また、背景の写真では、季節に応じたフィールドステーション周辺の風景を紹介していきたいと思っております。今後とも、実践型地域研究ニューズレター「ざいちのち」をよろしくお願ひいたします。

まちやむら、そこに暮らす人びと(=ざいち)の、  
知恵や生きる力(=ち)に学び、実践する活動です。

# ざいちのち

実践型地域研究ニューズレター No.7 2009年5月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所

「在りと都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町 古浜

## 守山フィールドステーション

### 守山フィールドステーションへようこそ！ “梅田町ホタル通り”

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

#### マンション群に舞うホタル “梅田町ホタル通り”

初夏の夕暮れどき、守山市梅田町に明かりがポツポツと灯り始める頃、ホタルが一斉に光り始めます。

滋賀県最大の河川である野洲川のデルタに位置する守山市は、その分流が多いのです。梅田町にも水質の良い小河川が多く、マンションの林を縫うように流れています。これがゲンジボタルの生息地なのです。その一角に、守山フィールドステーション（以下、守山 FS と記す）があります。



ホタルが生息する河川。守山 FS の横を流れている。

#### ホタル通り商店街

梅田町は JR 守山駅前一帯の地域で、いわゆる中心市街地にあります。京都や大阪のベッドタウンに最適なことから、梅田町には高層マンションが立ち並ぶようになりました。今日も、マンションを建設する音が聞こえてきます。そんな梅田町に、小さな商店が軒を連ねる通りが一本あります。ホタル通り商店街です。子供達が真剣に 10 円や 20 円のお菓子を



ホタル通り商店街の様子。

選ぶ店、ガラス棚に色々なおかずが並ぶ食堂、ゲーム台のある喫茶店。守山 FS は、この商店街から路地を少し入った所にあります。

隣人で、私たちの研究協力者でもある井上純作さんは、この商店街の帽子屋の息子さんでした。「昔は本当に賑やかやった。うちの向かいには靴屋があって、そこで碁を習った。隣は洋服店。果物屋も魚屋もあった。『3丁目の夕日』は、ここにもあったんやで」と言われます。

#### 守山フィールドステーション

2008年10月にスタートした守山 FS では、すぐに、守山市のまちづくりの中核を担う株式会社みらいもりやま 21、市役所、そして地域住民の方々との研究会が始まりました。守山のまちづくりにあたって、この地域に潜在する歴史文化や歴史資産を再認識するための会です。また、朽木・亀岡 FS との定例研究会、琵琶湖漁師の戸田さんを講師に招いた講習会や、野洲川についての勉強会も始まりました。そういった慌しさの中で迎えた年末の深夜、「カーンカーン、火の用心！！」と、ものすごく威勢の良い声と拍子木の音が、冷たい深夜の空気に響いていました。梅田町恒例の夜警だそうで、「良いまちで研究ができる」と思った瞬間でした。

#### 2009 年度

昨年度から始まった研究会、勉強会は、4月に入ってそれぞれに新たな局面を迎えようとしています。随時、このニューズレターでもお伝えしていこうと考えています。ですが、百聞は一見にしかず。興味を持たれた方はぜひ一度、守山 FS へお越しください。琵琶湖と川とまちについて、一緒に考えていただけると嬉しいです。



守山フィールドステーションは、この看板が目印です。

# 朽木フィールドステーション

## 朽木F S、春の便り

火野山ひろば／あいあいネット 島上宗子

黒澤明の『七人の侍』をご覧になったこと、ありますか？ 1954年の映画ですが、インドネシアのNGOの友人たちの間では今も人気です。七人の侍たちに自分たちNGOの役割を重ね合わせているようです。そうした意味で見直してみるのもおもしろいですが、私にとって強く印象に残ったのは、舞台となった村の周りに広がる草山の風景です。

「村の人は、草山が木山になるのを嫌ったんやで」。朽木に暮らして来た今北哲也さん（朽木FS研究員）の言です。30～40代以下の世代にとっては、スギやヒノキが植林された山の姿が当たり前で、山の仕事といえば林業といったイメージが強くなっていますが、かつて山の姿、山の利用のあり方はもっと多様であったようです。田んぼの肥草（こえぐさ）をとったホトラヤマや屋根葺きのカヤを刈るカヤダイラは、毎年火を入れることで草刈り山として維持されてきました。そこには「ツツジ、クサボケ、イバラ、キイチゴ、イタドリ、ウド、ゼンマイ、ワラビ、フキ等々、枚挙に暇ないにぎやかな親しい草波があった」といいます（本ニューズレター2月号参照）。山に火を入れることで賑やかで親しみのある「くらしの森」を取り戻したい。そんな思いで進めている朽木F Sの最近の動きを二つご報告します。

### ■カヤダイラ、そしてホトラヤマの復元作業（椋川）

カヤダイラの造成を元・今津西小学校椋川分校（現・ECC学園高校）裏の斜面で進めています。掘り起こした原野のカヤ株を年末に移植。雪が解けた3月から4月にかけて、ヒノキの間伐材の焼き杭を支柱に打ち込んで鹿除けネットを設置し、5月の連休中には昨年末に続いてカヤの植え込みを行いました。林道工事の残土で埋め立てられた谷合斜面は、石がゴロゴロしていて固く、重機で穴をあけ、堆肥を混ぜながら一つ一つカヤ株を植えていきます。すくすくとカヤが育ったら、来秋にはカヤを刈



ヒノキの間伐材の皮をむき、焼き杭をつくる。



カヤ株植えに飛び入り参加してくれた、NGO あいあいネット事務局の高田さん。

れるかな、と期待しています。その後火入れをし、火入れ後に育ったカヤとそうでないカヤの比較を行う予定です。

### ■湖北・余呉での焼畑

琵琶湖の北、余呉町摺墨（するすみ）周辺は、1960年代頃まで、焼畑で在来のヤマカブラの栽培がおこなわれてきた地域です。焼畑は途絶えていましたが、休耕田などでヤマカブラの種を守り続けてこられた摺墨山菜加工組合の永井邦太郎さんと火野山ひろば（「くらしの森」づくりの実践グループ）との出会いがきっかけとなって、2年前に山の火入れが復活しました。私たちは焼畑作業に参加しながら山の恵みを活かす知恵と経験を教えていただいています。

永井さんのご紹介で余呉町の菅並（すがなみ）集落の共有林（現在、菅並の生産森林組合が管理）の一角（約二反）をお借りできました。40年ほど前まで菅並の方々が柴や薪を採ってきたタキモンの山です。5月から6月にかけて伐倒し、8月にはいよいよ火入れの予定です。



8月に火入れ予定の菅並の山。

## 亀岡フィールドステーション

### 亀岡の農業と自然（２）「保津川の湧水」

京都学園大学 大西信弘

川の水がどこから来るのか考えてみたことがあるだろうか？ 保津川に限った話ではないが、川の水のすべてが上流から流れてきているかのように思える。しかし、川の中をよく見てみると、川底の砂が吹き上げられている場所があり、浸透水が湧き出ているのを見ることができる。

保津川の湧水が出ている場所では、春になると、農家の方が畑でとれたネギを洗う姿を見ることができる。それだけではない。昨年、12月に NPO 法人プロジェクト保津川で、恒例（といっても2回目だけれど）の川魚食文化を体験する環境教室を開いたとき、地元の川漁師さんが寒バヤ（オイカワ）を獲りにきたのもこの湧水が出ている場所だった。漁師さんがすず網（刺し網）をかけると、魚が鈴なりに獲れるほど、たくさんのハヤが集まっている場所である。

この湧水を利用しているのは、人と魚だけではないらしい。冬鳥であるクイナやベニマシコなどもこの湧水の近くで見かける。温かい湧水のまわりは冬越しをする動物たちにとっても重要な環境なのかもしれない。北に渡る途中のヒレンジャクも、湧水に立ち寄っているようだ。

川の中から水が湧き出ているので、ぱっと見ただけではなかなか気づきにくいですが、人も魚も鳥も湧水に依存して暮らしている。野菜を洗ったり、川魚を獲ったりすることで、こうした環境が維持されてき



保津川のオイカワ。亀岡では、ハヤと呼ばれ、11月、12月頃、寒くなった時期には脂がのって、寒バヤとして好まれる。網から外したときに、おなかを指で押し独特の方法で内臓を抜く。(2007年10月6日撮影)

たのだろうか？ こういった川の利用が今後も湧水を維持していくことにつながるのだろうか？ 川に入る機会や川の水に触れる機会があれば、冬は温かく、夏は冷たい湧水を体験するのは簡単なことなのだろうが、こうした川との接点を失いつつある現代では、失われたことすら気づかれることの無い環境なのかもしれない。



保津川の湧水で冬越しをしたクイナ。京都府では絶滅危惧種に指定されている。驚くほど透明な水が湧水の水質を物語る。(2009年3月31日撮影)



冬鳥のベニマシコ。湧水は、保津川周辺に暮らす生き物の生息場所に大きな影響を与えているのではないだろうか。(2009年3月31日撮影)



3月、北に渡る途中に保津川の湧水周辺に立ち寄ったヒレンジャク。(2009年3月27日撮影)



## 催しのご案内

### ■第12回 定例研究会

1. 日時：平成21年5月29日（金）16:00-18:00
2. 場所：小森バイオ研究所（滋賀県大津市真野大野1-6）

## 環境サステナビリティのためのローカル・ノレッジを用いた琵琶湖の漁業を見学しました 天理大学 アミ・アミナ・ムティア

琵琶湖の漁業におけるローカル・ノレッジを知るため、私は琵琶湖のエリ漁業を用いた漁法を見学しました。エリ漁業とは小型定置網漁の一種で、湖岸から沖合に向かい矢印型に網を張り、湖岸によってきた魚の習性をうまく利用して、「つぼ」と呼ばれる部分に誘導し閉じこめて漁獲する方法として知られています。エリとは、河や湖沼・内湾で、よしずや竹垣を魚道に迷路のように張り立てて、魚を自然に誘導して捕らえる定置漁具です。エリ漁は古くから伝わり琵琶湖のものが有名です。

2009年2月、ある寒い日の早朝、私は「守山湖友会」の戸田直弘さん、今江光夫さんおよび、浦谷善次さん達の組の船に乗せていただくために、守山にある岬船だまりに行きました。岬船だまりは守山漁業組合の管轄下にあり、琵琶湖大橋の近くに 있습니다。

私が到着するとすぐに船は岬船だまりから出ました。船は、大きい船（長さ14m）と小さい船（長さ8m）の二隻があり、両方とも幅2.5mです。大きい船の上に魚槽（2m×2m×1m）、発電機、ランプが置いてあります。この船はガラス繊維からつくられており、とても安定しています。私たちが向かうのは第2種共同漁業権・第134号のエリです。このエリは海岸から長さ最大500mの距離にあり幅200mです。深さは7~9mです。

エリに着くと、二人の漁師は小舟に乗りかえて、その中に入りました。まず、エリの周りのバラスト（おもり）を引き上げました。一つをつぼの中に30個のバラスト（重さ8kg）が入っています。このバラストはつぼを固定するためのものです。戸田さんもバラストを引き上げながら、水を水槽の中に入れました。この水槽には、酸素を入れています。

獲った魚を入れる水槽の中は、大小の2つに仕切られており、各々の底に一番目の細かい網（目の直径2mm）がはってあります。そして、小さい水槽には細かい網の上に粗い網（目の直径15mm）の網が置いてあります。一方、大きな水槽には、中程度の目の網（目の直径7mm）が据え付けてあります。こうすると7mm以下の魚が選り分けられます。

バラストを引き上げて、今度は三人で小舟に乗りました。そして三人が一緒に網を引き上げました。引き上げた網は、片側に寄せました。小舟は大きな船に向かって同時に魚を同じ場所に集めているように見え

3. 発表者：小森 清喜（小森バイオ研究所）

4. 発表内容：「湖西・真野の暮らし今昔」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

ました。小舟と大きな船の近くで魚がたくさん集まる姿が見られました。エリの網の穴は3.5mmなので、小さい魚がたくさん獲れました。大きな魚も獲れました。コイとブラックバス以外の大きな魚はフナとビワマスです。コイはすぐに放ちましたがブラックバスは放してはいけません。1キロぐらいのコイが4匹獲れました。

戸田さんはエリから手ダモ網で魚を獲って、小さな水槽の上に張ってある粗い目の網の上に魚と水を流します。そうすると、大きさ15mm以上の大きな魚は粗い目の網に残り、小さな魚は小さな水槽の細かい目の網の中に入ります。小さな魚の多くは稚アユでした。

次はこの稚アユを手ダモ網で、大きな水槽に張ってある、網目の直径7mmの網に入れました。そうすると、7mm以上（もちろん15mm以下）の魚はこの網の中に残り、7mmより小さい稚アユはこの網を通して2mmの網の中に選り分けられます。今度は7mmより大きなアユを棒間3.5mmのトオシ（通し）で二つのサイズに分けます。トオシとは昔からの道具で、これは魚に優しい道具です。魚が擦れないように工夫されているのです。稚アユの大きさは三つに分けられます。一番小さいものは「マッチ棒サイズ」と呼ばれ、その次の2つのサイズはおのおのタバコの半分ぐらいの大きさと中指（約10cm）の長さです。

このように、穴の目の異なった網やトオシを用いると、大きさの違う魚を簡単に選り分けられるのです。こうした魚をより分ける方法を「通しをかける」といいます。その意味は選り別ける選別作業です。この方法は、魚を網で傷つけないのです。私は、この通しをかける作業は、琵琶湖の漁師たちが、祖先から受け継いできたローカル・ノレッジの1つであると思いました。

エリのつぼは三か所にあります。二か所のつぼは大きく（外周は65m、深さは約9m）、残りのつぼは小さい（外周は50m、深さは7m）のです。三つのつぼから獲れた稚アユは計約35キロでした。その日、アユ以外で獲れた魚はフナ、ビワマス、ワカサギ、モロッコ、ゼゼラ、ハス、ヒガイ、ブルーギルとブラックバスでした。このエリというローカル・ノレッジを利用して琵琶湖の魚をたくさん獲ることができました。琵琶湖の魚を守るために、漁業におけるローカル・ノレッジを守るべきだと改めて感じました。



網をすり抜ける魚。

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の、  
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

No.8 2009.06.

京都大学  
生存基盤科学研究ユニット  
東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市 木浜

## 朽木フィールドステーション

### 余呉町で焼畑の山開き

滋賀県立大学／朽木 FS 黒田末寿

#### 雑木林での焼畑

朽木 FS と「火野山ひろば」は、機械化や過疎で利用が放棄された土地、忘れられつつある農林業技術を新しい技術と結合して復活させることを目指しています。その柱の一つが焼畑で、前（本ニュースレター第3号、第7号）にも報告したように、私たちは摺墨（するすみ）山菜加工組合長の永井邦太郎さんと2年前から、余呉町中河内（なかのかわち）の雪崩場で焼畑を行っています。この現場は、昔、焼畑をしていた場所で、土もまずまず肥えている焼畑適地なのですが、雪崩でほとんど木が育たないところなので、3年で焼畑を放棄した後の利用法がウド・ワラビ・山芋など山菜の採集ぐらいに制限されます。そこで、伐採雑木の利用、放棄後に利用できる作物の植栽、自然植生回復の観察などが行える、雑木林での焼畑の復活を永井さんに相談していたところ、今年から、余呉町の菅並（すがなみ）で区有林の一部を使わせていただくことになりました。

4月12日に、菅並生産森林組合（横山拓三組合長）と1反（10アール）の貸借契約を交わし、菅並・摺墨・中河内の皆さんと焼畑を共同で行うことが正式に決まりました。5月5日には、地元との懇親の意味も兼ねて摺墨の田植えに出かけ、前日は余呉上丹生のお祭り（茶碗まつり）だったこともあって、大歓待でした。

#### 山開き

5月12日に第一回目の伐採、焼畑の山開きです。現場は40年ほど前まで薪炭林だったということで、胸高直径20～30センチメートルのケヤキ、エノキ、コナラなどが生えた南西向き急斜面です。木材として利用するには、冬に伐採しなければならないのですが、今回それはできません。この日の伐採木は、滋賀県でヨノミノキと呼ばれるエノキで、永井さん

が木之本町の施設にヒラタケの原木として持っていく予定になっています。伐採は午前から始まり、事前に火野山ひろばメンバーの野間さんが植生調査を、永井さん、今北さん、菅並の横山さん、杉山さんが伐採を、増田さんが運び出しの力仕事を行い、夕方からはこぬか雨の中での作業となりました（写真1）。用事で出遅れた黒田が現場に着いたときは、中・小木が10本近く倒され、ヨノミノキは輪切りになり、ケヤキを軽トラックで斜面下に引きずり下ろしているところでした。4時頃、作業を終え、山の神様にお供えをして永井さんが祝詞をあげ（写真2）、山仕事の無事と焼畑の豊穰を祈って、直会<sup>[1]</sup>をしました。

#### 作業日程

今年の作業予定は、6月中頃から7月にかけて、今年火入れする5畝分の伐採をします。もうかなり伐っているわけですが、防火帯部分の伐採と、日当たりをよくするために南東側の木の枝払いも行う必要があります。小枝は火入れ用に残し、太い部分は炭焼きします。7、8月に火入れ準備と山小屋作り、火入れと種蒔きは、お盆前後になりそうです。余呉の在来品種である山かぶらを主体に、大根、人参を始めさまざまな作物を作って利用を考えることを課題にしています。山小屋は、火入れによる野山の再生と利用、雪の利用の拠点にしたいと思っています。

#### 脚注

[1] 直会（なおらい）：神事のあとお供え御神酒をいただく宴会



写真1:伐採地はかなりの急斜面。対岸に見えるのが菅並の集落(写真撮影:野間直彦)。



写真2:作業終了後、伐採地に向かって祝詞をあげる永井さん(写真撮影:野間直彦)。

# 亀岡フィールドステーション

## 保津川筏聞き取りノート② -筏の構造①-

亀岡FS 研究員 河原林洋

### 【筏の基本構造②】

(上から見た図)

今回は筏の部材と名称そしてその役割を見ていきたい。筏はただ材木を並べて組めばいいというわけではない。特に保津峡の急流を流す場合、筏の幅や長さはその時の水量などの諸条件と筏士の経験で多少変化したようだ。ここでは基本的な筏の形を見ていくことにする。

保津峡における筏は上流部の筏とは違い、川幅の狭小さもあり、幅約4m、長さ約50mほどであった。筏全体を「枚」と呼び、上流から筏が来た場合、「今日は3枚来た」などと勘定していたそうだ。1枚の筏を細分化すると、幅約3寸(約9cm)長さ3間(約4m)の材木を横に10~12本並べ、「カン」、「藤蔓」または「ネソ」、「コウガイ」で括り組んだ。(筏の基本構造①参照)この組んだものを「連」と呼んだ。さらに先頭の連から「ハナ」「ワキ」「ソウ」、最後尾を「猿尾」と呼んだ。それが12~15連、連なって1枚の筏となるのである。(筏の基本構造②参照)「カン」とは各材木を横につなぐときに使う備品でU字型をした金具である。この金具を材木の先と後に一本ずつ打ちつけ、木とU字型のカン金具の間にできた穴にコウガイと藤蔓を通し、各材木をくくりつけるのである。

### 【筏の基本構造①】

(前から見た図)



**カン** 直径10mm×長さ23cmの鋼鉄の棒をU字型に曲げ、先をとがらせる。



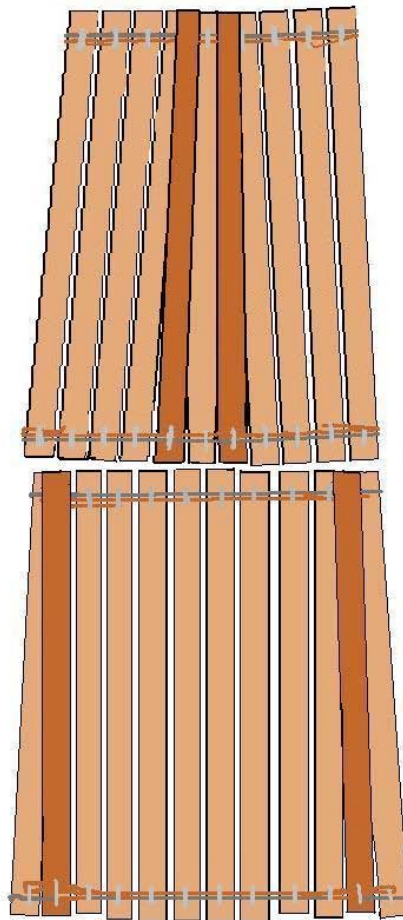
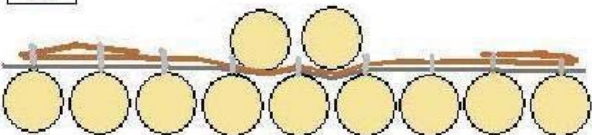
**コウガイ** 主にカシの木が使われた。筏の幅に合わせて切り揃える。



**藤蔓** 1尋半~2尋に切られた藤の蔓。両端のカンに巻きつけて捻じってくられる。※尋とは、両手を左右に伸ばした時の、指先から指先までの長さ。1尋は約1.8m。



**材木** 主にスギ、ヒノキ、マツが選ばれた。



ハナ = 1連目

1連目は、真ん中の材木の両脇に材木を2本置き、前は重ね、後はかまして後尾の幅を広げる。これは後でカジボウ(舵)を設置するとき利用する。(わかりやすいようにわざと色を変えています。)

ワキ = 2連目

2連目からは両端の1本内側に1連目と同じ要領で材木をかまし、後尾を広げる。

上図のように、前を狭く、後ろを広く扇形にすることで、前は水の抵抗をやわらげ、後は水の流れを抱き、推進力を確保する。

※他の藤蔓で括りつける部分は図をわかりやすくするため、割愛しています。

「コウガイ」は固く粘りのある木が最適で、主に樫の木が選ばれた。太さ親指くらいで長さは筏の幅ほどに切り、カンで押え据え付ける。コウガイには主に材木が上下して外れないように固定する役目があるようだ。

「ネソ」や「藤蔓」は材木が広がらないようにするロープ的な役目を担っている。材木とカンの間にできた穴に通し、両側の材木において、藤蔓をカンに巻きつくように捻じって括り固定する。こうすることで材木が水の抵抗を受けても横に広がらないのである。

このように材木、カン、藤蔓、コウガイを使って、連をこしらえ、縦につなぐことで1枚の筏が完成するのである。

# 守山フィールドステーション

## 野洲川の新河川建設：放水路

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

滋賀県の最大の河川である野洲川(延長約 65km、流域面積 387km<sup>2</sup>)は、鈴鹿山脈を源流として、杣川(そまがわ)と合流し、かつて、守山市の川田町の地点(河口から約 5km)で南北の2つの川に分かれて、琵琶湖に注いでいた。1971年から8年間におよぶ河川改修工事により、1979年、2つの川(南流、北流と記す)は、放水路として1本の新しい河川となり、南・北流は廃川になった。河口まで延長7km、河川敷幅 370m(堤防法線幅 330m)の放水路の完成によって水害の心配はほとんどなくなった。すでに、本ニュースレター(第4号)で野洲川は、流域に暮らす人びとにとって生活用水や灌漑用水を与えてくれた豊かな川だったが、水害をもたらす「暴れ川」であり、下流域に暮らす人々を苦しめてきたことを触れた。ここでは、新しい河川である放水路について紹介したい。

野洲川の川幅は、中流部で約 500mあるのに対して、南流と北流はかなり狭く、双方をあわせても 150m~250m しかなかった。さらに、南・北流は、川床が周辺の集落の地盤より約 2m 高い天井川となっていた。よって、大雨が降ると、この流域は堤防が決壊して水害が繰り返されてきた。

1953年9月25日の台風13号によって、北流の右岸堤防が180m決壊し、周辺の集落は一瞬にして水没した。水防作業をしていた3名が亡くなった。被害は流出または半壊した家屋が約700戸におよび、田畑は約500haが流出または埋没し、300haが冠水した。この大災害を契機に、流域住民による野洲川改修にむけた取り組みが始まった。1958年、建設省は、住民の野洲川改修工事の請願を受け入れ、河道計画の検討を行った。以下の3つの改修案が比較検討された結果、中流案が選択された。

1つ目は、北流の川幅を広げ、曲がった場所を直線に改修する北流案である。周辺には居住者が多いため移転の問題があった。川床が高いので、大量の土砂を掘削する必要があり、土層が砂礫であるため

に漏水の危険があった。2つ目は、北流と南流の川幅を広げ、曲がった場所を直線にする現河道案である。北流案と同様の問題があった。3つ目は、北流と南流を廃川にし、双方の川の間新しい河川をつくる中流案である。移転家屋が少なく、土層は粘土質であるため技術的に適していた。川の延長が最短であり、掘削量が少なくてすんだ。だが、「米どころ」と呼ばれる豊かな水田地帯を潰すことになった。

放水路の建設によって、家屋の立ち退きを強いられるだけでなく、農地が取り上げられて生活が奪われるとして、周辺住民がこの計画案に反対した。また、工事によって失う農地の代替地や移転先の補償問題の解決は簡単ではなく、地道な住民への交渉が行われた結果、ようやく改修工事に取りかかることができたのである。従って、放水路の建設のために、住宅42戸が立ち退き、190haの水田が提供された。また、工事中に発見された弥生時代の服部遺跡は調査が行われた後、放水路の川床に埋没した。

聞き取り調査をしている守山市洲本町開発(かいほつ)は、廃川となった南流の堤防周辺の集落である。現在、南流の河川跡の約42haの土地は「びわこ地球市民の森」として整備が進められており、森を再生するために植樹活動が行われている。また、河川敷を利用したスポーツや放水路におけるいかだ下りなどのイベントが開催されている。このような人びとの野洲川への新たな関わり方をおして、同河川に対する新しいイメージが形成されている。

だが、先祖から受け継がれてきた家屋と土地を手放さなければならなかった人たちの苦渋の選択および、長い期間を要した河川改修の請願から放水路の完成に至るまでの人びとの努力と貢献を忘れてはならないと思う。



旧北流左岸堤防跡の雛鶴(ひなづる)稲荷神社。250年前、野洲川堤防の守護祈願のために、川がU字型に大きく向きを変える所に建立された。

## 催しのご案内

### ■第13回 定例研究会

1. 日時：平成21年6月26日（金）16:00~19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：河原林洋（亀岡FS研究員）
4. 発表内容

「保津川筏研究 ―モノのつながり、ヒトのつながり―

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

### ■琵琶湖在来魚のナレズシ漬け込み体験 <守山FS>

1. 日時：平成21年6月20日（土）、27日（土）、7月4日（土）  
8:30~13:00（3日間とも、体験内容は同じです）
2. 集合：車でお越しの方は守山漁港に8:30、電車でお越しの方はJR守山駅改札口に8:00までにお集まりください。
3. 内容：守山漁港の朝市で魚を仕入れた後、漬け込みの第一段階である魚の「塩きり」（塩漬け）を行います。
4. 参加費：500円（材料費実費）  
\*参加希望者は、守山FS研究員の嶋田(nshimada@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

## 里山の保全 ―誰のために何を守るのか？― 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

里山<sup>[1]</sup>の生態系の重要性が世間の耳目を集めるようになったのは、1980年代の後半頃からであろう。1989年、日本で初めてのレッドデータブック<sup>[2]</sup>が出版され、里山に生育する植物にも絶滅が危惧される種が多いことが明らかとなり、人の手が頻繁に入ることによって維持されてきた里山のような二次的自然が、様々な生物の重要な生育環境になっていることが認識され始めたのである。2003年にはメダカが環境省のレッドデータブックによって絶滅危惧種に指定されるなど、かつてはどこにでもみられた人里の生物が急速に減少していることに大きな関心が寄せられ、近年は、里山保全のための様々な活動が各地で営まれている。

里山は、薪炭の生産、落葉・下草の採取による堆肥の生産、山菜の採取など、農山村における人々の日々の営みが生み出してきた半自然的環境であり、原生的自然には生息できない様々な生物種の生存を支える重要な環境でもある。しかしながら、これらの生物種のほとんどは、人間が意図的に保全してきたものではなく、人為的な攪乱に適応した結果定着したものであり、伝統的生業の副産物であるともいえる。したがって、伝統的生業が廃れつつある現在、生業とは無関係な人手を加えてその副産物のみを保全しようと試みることは、本末転倒であるように思う。一旦絶滅した生物種が二度と蘇らないのと同様、伝統的生業も一度その伝承が途絶えてしまえば、先人の知恵と経験はいずれは失われてしまう。里山で“絶滅”の危機に瀕しているのは、生物種だけではない。

里山における人と自然との関わり方は、地域によって様々である。例えば、朽木には水田用の厩肥<sup>[3]</sup>

の原料を採取するためのホトラヤマがあり、かつては山地と農地の間に有機的な繋がりが認められたが、化学肥料の導入に伴ってホトラヤマは失われていった。現在、朽木FSではホトラヤマの復元を試みているが、このような取り組みがなければ、地域に固有の営みは、いずれは人々の記憶からも消え去ってしまうだろう。生態系と調和した伝統的な生業をかつてと同規模で復活させることは難しいといわざるを得ないが、各々の地域における人と里山との関わり方の歴史を丁寧に掘り起こし、在地の知恵や経験に学ぶことは、地域の自然条件と社会条件に適した生業を再構築する上で極めて重要である。戦後の燃料革命や農山村の過疎化など、人々の生活様式の変化に伴って里山は放棄されてきたが、食物自給率が40%に満たない資源小国の日本が持続的な生存基盤を確立していくには、里山や休耕田を再び生物資源の生産の場として見直していく必要があるだろう。

誰のために里山の何を守るのか、里山に関わる人それぞれに違った思いがある。そして、生物多様性の保全、景観の保全、伝統文化の伝承、自然体験など、様々な役割を里山に求めがちな外部者と、現実の里山に生きる人々との間にある意識の乖離も決して小さくはないだろう。当プロジェクトの活動によって、里山に関わる様々な立場の人と人とを繋ぎ、各々の思いをぶつけ合い、新たな思いを紡ぎ出す場を創出することで、21世紀に求められる新たな里山像を描くための第一歩を踏み出していきたいと思う。

### 脚注

- [1] 里山には様々な定義があるが、ここでは里山を「人里近くにある二次林や二次草地」とする。
- [2] 絶滅のおそれのある野生生物種についてのデータをまとめた情報集。日本で最初のレッドデータブックは、1989年11月に財団法人日本自然保護協会・財団法人世界自然保護基金日本委員会が発行した「わが国における保護上重要な植物種の現状」である。
- [3] 家畜小屋の糞尿と敷藁とのまじったものを腐敗させた肥料。

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、  
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

No. 9 2009.07.

京都大学  
生存基盤科学研究ユニット  
東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市 木浜

## 亀岡フィールドステーション

### 「したたかさ」というレジティマシー (2)

亀岡 FS 研究員 原田早苗

今回は、前回(本ニューズレター第6号)に続き、近代の保津川舟運に焦点を当て、人々がどのように舟運にかかわるレジティマシー(正統性・正当性)を得て、「したたか」に生きていったのかを探してみたい。

保津川の舟運の歴史は、慶長11年(1606年)の嵯峨の豪商、角倉了以による保津川開削によって始まった。了以は、江戸幕府より許可を受け、私財を投じて約6カ月間で開削を成功させた。また、了以は、開削後、備前(津山や美作と推測される)吉井川中・上流から急流を下り、上流へ船を曳き上げる技術を持ち合わせていた船頭と下流の牛窓付近から造船技術を持ち合わせていた船大工を呼び寄せ、高瀬舟を造り、保津川および上流の各村で操船技術などを教えさせていたとされる<sup>1)</sup>。

文献では「角倉による保津川支配」と表現されるように、明治2年(1869年)まで263年に渡り、舟運は角倉家にレジティマシーがあると見られることもできる。すべての舟は角倉の所有物であり、上流の奥5カ村(中・殿田、上河内、鳥羽、川関、宇津根)の舟30艘は各村の土豪、また、山本の10艘は村全体の共同責任で預かり、実際の運営を任されていた<sup>2)</sup>。船が古くなると、角倉家が船を引き取り、新造船を渡している。

また、角倉家が運賃(運上)を独占的に徴収することが幕府より認められていた。奥5カ村から積み出された荷物は、宇津根浜で角倉の家来分にあたる庄左衛門により検分を受け、抜荷の有無、送り状の発行、道上げ(検分などで荷物の積み下ろしに要する費用)の計算が行われた。次に、約4キロ下流の保津浜まで運ばれ、積荷は全て降ろされ、同じく角倉の家来分にあたる村上五郎助の屋敷に納められ、この保津番所で米・雑穀・荒物(檜皮、砥石、綿種、

油粕、竹の皮等)の運賃を徴収した。また、下流の嵯峨番所では、炭・材木などの運賃と道上げ分を徴収した。そして、徴収した運賃の一部は、幕府に運上銀として納めており、正徳年間(1711-16年)の記録では保津川舟運分として幕府に毎年銀20枚を上納している。

一方、船主は、「下百姓」といわれる村内の身分の低い農民を加子(船頭)として雇用し、実際に荷物を運んでいた。角倉家が徴収した運賃のうち、角倉の取り分を差し引いた分は、加子に支払われたが、さらにその1/5を船徳として船主が受け取っていた。このように庄左衛門や村上五郎助のような地元有力者も角倉からレジティマシーを認められることで、舟運に関わることができた。

しかし、江戸中期の明和4年(1767年)に保津の加子たちがこの船徳に対し角倉に不満を訴えたため、角倉は村上氏へ別途支払いをするとし、加子の訴えに応じている。また村上氏に属していた31名の加子はこの時期に支配を離れたという。これは、筏同様、保津峡を下るのは保津・山本の加子のみであり、激流を乗り越える専門的な操業技術により発言力を増し、舟運におけるレジティマシーを強めていったと見ることができる。



大正時代の荷舟。



吉井川の支流、和気川の現在。

#### 脚注

- [1] ただし、吉井川に保津峡ほどの急流はなく、本当に船頭を連れてきたのか疑わしい、という見解も見られる。  
[2] 中と殿田は合わせて運賃などの関係で1カ村として扱われていた。また、保津の14艘については、船主に関する史料は見つかっておらず不明。

## 守山フィールドステーション

### ブラックバスの子離れ

守山FS 研究員 嶋田菜穂子

ツボ（図1）では、湖面からアユが飛び跳ねていた。

6月の早朝、琵琶湖のエリ漁に連れて行ってもらった。守山漁協・湖友会の浦谷善次さん、今江光夫さん、そして戸田直弘さんの船である。

船に付けられたライトをツボの方へ照らすと、中には魚の背がたくさん見えた。

「水面に近い方の小さいのは、ワカサギの子。深い方の大きいのはアユやで」

ツボに下ろしていたおもりを上げながら、戸田さんが教えてくれた。エリには2艘の船で行く。一艘がツボの内側に入って、どんどんと網を上げていき、外側の船とで挟み撃ちにするのである。網が狭くなるにつれて、水の中が魚でいっぱいになる。2艘の船の間が1mまで狭まると、まず、網の中に浮いているゴモク（ゴミ）を除く。次に、外来魚を揚げる。アユやワカサギはかからない網の目の粗いタモを入れ、ゆっくりと左右に動かし、引き上げる。タモにはギッシリと外来魚が詰まっている。

おおかたの外来魚を揚げた後、先ほどよりも網の目の細かいタモでアユやワカサギを揚げる。ツボか

ら揚げられ、塩水の張った水槽に放されたアユは、何事もなかったかのように、また泳ぎ出していた。活魚のまま、陸に揚げられるのである。

その瞬間、ビシッとツボの中で水がはね、巨大な魚の背が現れた。ブラックバスである。ツボの底の方に潜んでいたブラックバスが出てきた。腹がパンパンに膨れ、体長60cm以上はある。ツボの内側の船に乗る善次さんと光夫さんが水しぶきをかかわしながら、目の粗いタモでバスをすくいながら言った。

「沖に出て来よったな」

「もう子供の守りは済んだんやろ」

「そやろな」

ブラックバスの親は湖岸のヨシ群生地に卵を産み、子供を守り育て、子供が成長すると沖に戻ってくる。

「今度はミツオの守りしたろ。ミツオとナオヒロの守りしたろ、言うて戻って来よったんや」

そう言って、重そうにタモを揚げる善次さんが笑う。

「ナオヒロはしっかりしとるから、もう（来なくて）エエわ」

一番若い戸田直弘さんは言いながら、“きんまい腹”（パンパンに張った腹）をしたブラックバスを見て苦笑いした。

水から揚げられてもなお、のたうち回っていたバスは、多くのブルーギルと共にトロ箱にあげられた。

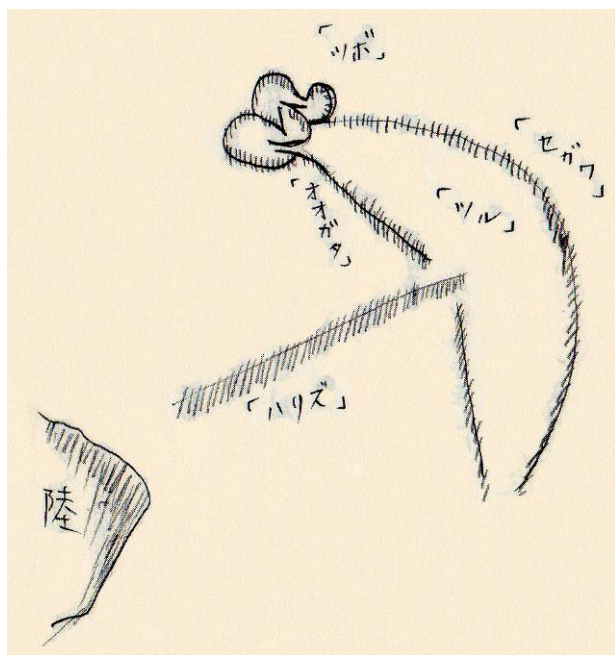


図1：エリ漁の構造（戸田直弘『わたし琵琶湖の漁師です』2002 光文社 p.59より）。



湖岸のヨシ帯。琵琶湖の魚・鳥の産卵の場。

# 朽木フィールドステーション

## カヤダイラ復元の道程

朽木 FS 研究員 増田和也

朽木 FS の取り組みのひとつに、カヤダイラ・ホトラヤマの復元があります。フィールドは、高島市椋川にある林道建設の残土を埋めた斜面で、現在は荒れ地状になっています。当面の目標はカヤダイラとホトラヤマの造成で、いずれはカヤ葺き民家の維持や牛耕など、山・牛・田が結びついたホトラヤマの世界へ展開させたいと考えています。これまで、2008年12月には用地の一部にカヤを植栽しました（本ニューズレター第4号）。また、ホトラヤマの優占種であるコナラの原野を造成するため、周辺でドングリを集めて苗の育成に取りかかり、今年5月初旬にはカヤを追加植栽しました（本ニューズレター第7号）。今回はその後の展開についてお伝えします。

近年、湖西一帯でも大きな問題となっているのが、農地や山地での野生動物による食害です。林床の低木類や山菜はすっかりと食べ尽くされ、大半の田畑はぐるりを電柵で囲う有様です。害をもたらすのはサルにイノシシ、そして、近年増加しているのがシカです。あまりの食害の大きさに地域では耕作意欲を失い、それが山間での耕作放棄あるいは縮小の要因ともなっている、と伺ったことがあります。近年の獣害は、それほどまでに深刻なのです。そうした状況は私たちの復元実験でも同様です。一般にシカはカヤをあまり好まないものですが、林床の植物が減少した昨今では、芽吹いたばかりのカヤは格好の食べものになっています。

復元地への獣害はあらかじめ想定されたので、雪解け直後の3月に防獣ネットを周囲に張りめぐらせました。しかし、敵もさるもの。シカはネットと



写真1：シカに荒らされたカヤの移植株。

地面のわずかな隙間を見つけては入り込み、カヤの若芽を食すのでした（写真1）。すぐにペグと丸太でネットを厳重に固定し、シカの侵入を

防いでいます。

しかし、新たな敵が登場。今度は横ではなく上からやってくるのでした。当初、育成中のコナラは、シカに食べられないよう、建物のすぐ脇に置き、上から金網を置いて用心していました。また、地元スタッフが何度も夜間に見廻りをしていました。ある日、獣害ネットを厳重にしたので、その中にコナラの苗を移したところ、何者かによって荒らされてしまう始末に。どうもカラスの仕業のようです。

こうして、苗は数えるほどになってしまいました。今度は森からコナラの実生を集め、大きく育ったところで復元地に移植することに作戦を変更。6月中旬、雨の降るなか、付近の森でコナラの実生を集めました。落ち葉や土をかき分けると、割れたドングリから瑞々しい若葉を広げています（写真2）。地表ではひょろりとした苗も地中ではとたんに太くなり、しっかりと根を伸ばしています。慎重な手つきで実生を取り上げ、付近で採った土を入れたフラワーポットに実生を移し、その上にチップ堆肥を、さらに付近の地表を覆っていた落ち葉を敷きました（写真3）。そして、苗床は実験地に設けた覆いの下に並べています。鳥獣害を防ぐとともに、コナラの幼苗を乾燥から守るためです。「たかがコナラに」と思われるかもしれませんが、こうした手厚い世話をしています。

時として、私には思いもしなかったことが起きます。けれども、根が活着したカヤ株の瑞々しい葉を見ると、取り組みが少しずつかたちになっていることが感じられます。いずれ荒れ地が緑に覆われ、屋根材や牛の踏みし肥になるカヤやホトラが生み出されることを思い描きながら、椋川に通っています。



写真2：森の中で葉を広げるコナラの実生。



写真3：コナラの実生をフラワーポットに移植する。



## 催しのご案内

### ■焼畑の伐開・火入れ体験(朽木 FS)

朽木 FS の活動先である余呉町菅並集落の原野で焼畑を拓きます。以下の日程で作業をおこないますので、ぜひご参加ください。

#### 1. 日時・内容

7/6(月)・7/10(金): 雑木切り  
7/15(水)・7/28(火): 山小屋建て  
8/9(日): 火入れ準備、8/10(月): 焼畑火入れ  
8/20(木): 耕作・種まき、8/21(金): 電柵設置  
11 月初旬～中旬: 収穫

#### 2. 場所: 滋賀県余呉町菅並地区

#### 3. 持ち物: 軍手、作業に適した服装・靴(現場はかなりの急斜面です)、帽子、タオル、飲み物、(7/6-8/9 の作業では、あ

ればナタ、カマ、ノコギリ)

#### 4. 参加費: 700 円 (8/10 は 1,500 円) 昼食代・保険代を含みます。

\* 参加希望者は、各日の 2 日前までに朽木 FS 研究員の増田 (kamasu@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

### ■第 13 回 定例研究会

#### 1. 日時: 平成 21 年 7 月 31 日 (金) 16:00~19:00

#### 2. 場所: 守山 FS (滋賀県守山市梅田町 12-32)

#### 3. 発表者: 嶋田奈穂子 (守山 FS 研究員)

#### 4. 発表内容

「守山宿だるまそばプロジェクト —都市農園の可能性—」

\* 参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当: 鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

## 百姓仕事という実践の楽しみ

東南アジア研究所 安藤和雄

「百姓しごとには段取りがいる」「次の仕事を考えて、今の仕事をしておかななくちゃいかん」とは、私の母の教えです。以前ほど、注意されなくなりましたが、数年前までは、一緒に百姓仕事をすると、一度は、このことばを聴かされました。例えば、稲刈りの時です。コンバインやバインダーを使っている、機械が入らない田の角やブロック塀沿いの 1~2 列の稲は、鎌を使って手で刈らなければなりません。一株を左手で握りながら、右手で鎌を握って一株ずつ刈っていきます。数株を一束(たば)にして脱穀用の束にして刈った場所に横たえておきます。この時、一束の上にもう一束を交差するように置きます。日干ししてあった稲藁で一束ずつ束ねます。その時、刈り取った稲を平らに横たえて置くと、束ねにくいのです。一度に束ねることができず、刈り取られた稲を束ね直さねばなりません。二重の手間となるのです。刈った一束の稲を小山のように重ねておくと、さっと一度に一つの脱穀用の束を結ぶことができるのです。

刈った稲の量にも注意が必要です。若い頃は、早く稲刈りを終わりたいので、手をつかめるだけの株をつかみ一束にしたものでした。そうすると、後で束ねる人が、一株がちょうど手ごろな株の量なるように、刈り取られた稲株を分け、束をつくらねばなりません。手間ばかりがかかります。「こんなことして、段取りが悪い」とよく、私は叱られました。

「百姓仕事は段取りがもっとも大切だ」というのが母の哲学なのです。すでに父はなくなって 9 年たちますが、母は 79 歳の現在も、現役のお百姓です。私は、百姓仕事の手仕事は、母から段取りとともに教えられることが多いのですが、休日のたまの手伝い百姓なので、いつも間違いばかりをするのです。本当に「段取りの悪い」にわか百姓に映っていることでしょう。

この手記を書いていた 2009 年 4 月中旬は、ちょうど夏のトマトやナスなどの野菜の定植の準備で忙しかったです。実家の百姓仕事では、私はもっぱら、

耕うん機や小型のトラクターで田んぼや畑を耕すかかりですが、4 月 19 日の日曜日には、トマトの支柱づくりを母と二人で行いました。3 畝(約 3 アール)の水田を、今年は畑として使い、2 年ぶりでトマトとナスをつくります。最新農業技術事典(農文協)によれば、連作 2~4 年で病害が出始めるといわれています。我が家では、水田の転作をかねて、トマトは田畑輪換でつくっています。こうすることで、連作障害を防ぐための休閑期間を短くしています。家庭菜園のような規模ですが、トマトの 3 本の畝をつくりました。一畝の両側に約 50cm 間隔で、定植していくのです。この日は支柱のみつくりました。木槌で杭を打っていくのです。結構、腕が疲れます。「百姓をする気があるのなら、40 代でやりはじめなくちゃ、いかん」というのも、母の口癖です。たしかに、百姓仕事は、機械化されたといえ、手仕事、中でも、力仕事がありとあります。力仕事はコツが大切で、こればかりは、体で覚えていくことが大切なようです。技術とは本来そんなものなのでしょう。段取りも体で覚えなければなりません。単なる労働ではないと、いつも思い知らされます。とはいえ、私は、もくもくと体を動かすのが嫌いではありません。頭のもやもや(苦と煩惱)がいつのまにか去っていくのです。春、4 月はじめ、トラクターを使った田んぼの春おこしでは、かならずトラクターの後にムクドリや、セキレイ、カラス、スズメが歩いてつづきます。耕された土からでてくるミミズや、虫の類を狙っているのです。私の人間の気配も消えていってしまっているのでしょうか。昼、仕事の手を休めて、鳥たちの仕草を眺めながら、田んぼの片隅でおにぎりを食べます。

百姓は辛い仕事の側面があるのは間違いありません。市街地の中の田んぼですが、鳥や雑草、作物の成長により、人間の生存基盤である、「自然と生命」を感得することができることも確かなことでしょう。百姓仕事という実践の楽しみです。



食べ物を探すムクドリ。  
(2009 年 5 月 4 日撮影)

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、  
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

No. 10 2009.08.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市 椋川

## 守山フィールドステーション

### 古絵図による勉強を始めました

聖泉大学 高谷好一

守山FSでは、2009年度の月例研究会を始めました。その6月の例会では、「古絵図を囲んで、みんなで語ろう」というのをやりました。これが大変面白いことになり、「古絵図勉強会」なるものをスタートさせよう！という勢いにあります。

守山の市街地には、今のところ3種類の古絵図があります。一つは、いわゆる「地券取調総絵図」です。これは、明治新政府が旧村に命じて作らせた、旧村ごとの絵図です。ひとつの旧村が、畳1枚から4~6枚ぐらいの大きさに作られています。土地利用がちゃんと色分けされていて、番地なども入っています。二つ目は、故宇野宗祐氏が1951年(昭和26年)

に作った一種の鳥瞰図です。市街地の部分が畳1枚ぐらいに描かれていて、中心部では1軒ずつの同定が可能です。三つ目は、守山駅前だけの限られた部分ですが、1955年(昭和30年)頃に作られた、一種の住宅配置図です。これは、故木村善光氏の作ったもの



図1:昭和30年代の守山駅前絵図部分(木村善光氏作)。

(図1)で、各家の屋号などが描き込まれています。

土地の古老に参加してもらって、これらの地図を見てもらったところ、賑やかな話が広がっていきました。この手法で、情報を集積していきたいと考えています。この数年が、この手法で情報を得る最後の時期かな、と考えています。

### 「琵琶湖在来魚のナレズシ」漬け込み体験

守山FS 研究員 嶋田奈穂子

6月20日、27日の2日間にわたって、琵琶湖在来魚のナレズシの漬け込みを行いました。守山FSでは、去年に続いて2回目の体験会です。両日、早朝4時出発のエリ漁と、9時からの朝市を見学し、その後、漁師さんから提供していただいた琵琶湖在来魚をさばいて塩漬けにしました。琵琶湖から揚げた魚をさばき、塩漬けにする今回の工程を“塩切り”といいます。「今から塩切りやと、ちょっと遅いさかい、小ぶりの魚がエエな。大きいのは三枚におろしたらエエわ。」と、戸田さんからのアドバイス。塩切りは、魚の余分な水分を抜き、殺菌するための工程です。数ヶ月はみておく必要があり、魚が大きければ大きいほど日数が必要になります。その次は、塩切りした魚の塩を洗い流して天日干しにする“塩抜き”、それを飯に漬けかえる“本漬け”という工程があります。本漬けしてからナレズシが完成するまでに数ヶ月が必要と言

われています。これを逆算すると、今の時期の塩切りでは、少し遅い…ということになるのです。今回、体長20cmほどの小ぶりのフナは、形そのままにウロコとエラノド骨、腹ワタを取り除いた状態で、体長50~60cmのニゴイやハスは三枚におろして塩切りしました。その他にも、オイカワ、ワタカ、カマツカなどを漬け、桶4つ分の塩切りができました(写真1)。使った塩は25kg!このように、ナレズシには多くの手間と時間、そして塩が必要なのです。にもかかわらず、滋賀の伝統食といわれるように、受け継がれてきた理由はいったいどこにあるのか。美味しさだけではないでしょう。この工程を通して、考えてみたいテーマです。

梅雨の晴れ間の暑いなか、ご参加くださった皆さん、そしてご協力いただいた守山漁協・湖友会の浦谷善次さん、今江光夫さん、戸田直弘さん、ありがとうございました。



写真1:塩切りした桶。塩と魚を交互に詰め、重石をおく。

# 朽木フィールドステーション

## 森を拓けば

朽木 FS 研究員 増田和也

### ■森の伐開を完了

これまで地元の協力者・永井邦太郎さんの紹介で、焼畑地を菅波地区の財産区（共有林）に決定し、4月中旬に地元の方々と顔合わせをしました。林野の伐開作業の開始は遅れたものの、6月から7月にかけて林野を拓きました（写真1、2）。今は、伐採した草木がよく燃えるように太陽の日差しの下で乾燥中です。火入れは8月10日。ぜひお越しください。



写真1: 焼畑予定地、伐開前の状態(2009年5月)。点線あたりを拓きました。



写真2: 伐開作業もいよいよ終盤(2009年6月)。

### ■ヤマグワのこと

伐開の作業をしていたときのこと。作業の合間に、加勢に来ていた地元の方々と雑談を交わすなか、ふいにヤマグワのことが話題となりました。

余呉の焼畑では山カブラやソバ、アズキなどの一年生作物の後に桑を育てた、ということ、これまで伺っていました。また、焼畑地の選定のことを尋ねると、まず道路に近いことが条件に挙げられ、これは焼畑で収穫した桑の搬出を考慮してのことだといいます。焼畑で幾種類かの作物を切り替えながら栽培した後に多年生作物を植えるということは、余呉にかぎらず広く報告されています。たとえば、かつて四国・高知の山地ではミツマタが、今日でも山形・温海ではスギやヒノキが、はるか遠くインドネシアのスマトラの村ではパラゴムノキ（栽培ゴム）が焼畑地に植えられてきました。そのために私は、桑は焼畑後に植えられていたのだと思っていたのです。

けれども、菅並の方によれば、「焼畑を拓くと桑はヒトリバエしてくる（自然に生えてくる）」とい

うのです。そして、こうした桑はヤマグワとよばれるのだそうです。ヤマグワの葉は常畑で栽培する桑とは栄養価がちがうためか、これを与えた蚕は病気になりやすく、ヤマグワの葉は栽培桑よりも高い値で売買されていたそうです。菅並でも戦後しばらくまで養蚕をしていましたが、菅並の人はヤマグワの葉を自宅の蚕に与えるほかに、川下の商人に売っていたようです。

こうしたちょっとした会話のなかで、菅並の方々から養蚕にまつわる話は次々と上がってくるのでした。当時は河原やわずかな空き地でも桑を栽培していたこと。今でも集落脇の河原には桑の株が残っているが、草刈りのときに一緒に刈られてしまうため大きくなることはないこと。当時の家の中は蚕棚だらけで、子供たちは蚕棚の横で丸くなりながら寝たこと。当時の菅並の暮らしと焼畑・蚕・桑の結びつきは想像以上に深いものようです。

こうした驚きとともに、もうひとつ思い浮かんだことが「火入れは山の潜在力を引き出す」ということでした。これは朽木 FS の今北研究員がよく口にする言葉ですが、菅並ではその一例がヤマグワなのでしょう。林野への火入れ（あるいは伐開）によって、それまで息を潜めていた植物がむくむくと姿をみせるということは、植物生態学で学ぶところの植生遷移として位置づけられ、さして驚くことではないかもしれません。けれども、こうして、焼畑や養蚕というかたちで、人びとの暮らしと特定の植物種とのつながりが具体的に浮かび上がってくると、新鮮な驚きと興味が湧き上がってきます。これから、ヤマグワを切り口に菅並の暮らしについて深く話を聞いていこうと思っています。

この他にも、それまで眠っていた植物が焼畑によって目を覚ましてくるかもしれません。焼畑地では、滋賀県立大学の野間直彦先生が植生調査を併行しています。どのような植物相の移り変わりがみえてくるのか、乞うご期待。



写真3: 昨年の火入れの様子。

# 亀岡フィールドステーション

## あかりがつないだ、村と川の記憶

大阪商業大学経済学部 原田禎夫

昨年、60年ぶりに復活した保津川の筏流しは、その後、筏に必要な材木の伝統的な伐採技術や金具の製作技術の再現など、流域文化の再発見ともいべき取り組みに発展しているが、その原点は2年前に行われたあるイベントにあった。

そのイベントとは、保津川の上流にある日吉ダム（京都府南丹市日吉町）で毎年夏に行われている天若（あまわか）湖アートプロジェクトである。このプロジェクトは、ダム建設によって水没した集落の夜景を、昔の地図をもとに湖面に浮かべた「あかり」によって再現しようというものである。

日吉ダムは1998年（平成10年）に完成した多目的ダムで、天若湖と呼ばれるこのダム湖の下にはかつて5つの集落があった。在りし日の村の姿を記録した「日吉ダム水没地区文化財報告書」（日吉町編、1998）には、文字通り川とともに生きた、実に豊かな人々の生活文化があったことが記録されている。天若湖アートプロジェクトとは、「あかりがつなぐ記憶」をテーマに、このような地域の営みをアートで現在に伝えようというものである。

そんな中、かつて丹波山地から京の都まで材木を運んでいた筏を、流域をつなぐシンボルとして作ろうというアイデアが出された。当初は、筏を浮かべて子供たちに乗ってもらおう、あるいはミニチュアでかつての長大な筏の姿を再現しよう、と喧々譁々の議論が交わされたのだが、保津川下りの船頭衆から「かつて保津川を下った伝統的な筏を作りたい」という声が上がった。さらには、筏流しを経験したことのある元筏士は京北町と亀岡・保津町にたった3人しか健在でないこともわかった。スタッフの間でも「今、この技術を記録しなければ」と危機感が強まり、この川に伝わるホンモノの筏を作ろう、ということになった。

そして2年前の8月19日、日吉ダムに設けられた公園で、「荒川組み」と呼ばれる保津川独特の筏が元筏士の酒井さんの指導により再現された。わず

か3連であったが、忠実にかつての筏を組むことが出来た。しかし、その筏は水に浮かべることが出来ず、川を下る筏の姿を期待して集まった観客からは「水に浮かべへんだら、筏と違う」という声も聞かれた。その時の悔しさを胸に我々は「保津川に筏流しを再び」と取り組んできたのである。

今年の天若湖アートプロジェクトは8月8日（土）・9日（日）の2日間行われる。今年是最後まで残った上世木集落も加わり、初めて5集落すべての「あかり」を再現する予定である。この上世木は、かつて筏の中継地として栄えた地でもある。川と共に生きてきた人々の暮らしを、夜の湖に浮かぶあかりの中に見出すことが出来るのではないかと楽しみにしている。



写真1:天若湖アートプロジェクト2007で筏組みを指導する元筏士の酒井さん(左端)。この経験が、保津川筏復活プロジェクトを進める大きな力となった。



写真2:天若湖アートプロジェクトのこれまでが本にまとめられた。『あかりがつなぐ記憶：天若湖アートプロジェクト』（天若湖アートプロジェクト実行委員会編、キョートット出版、本体800円＋税）

## 催しのご案内

### ■焼畑での火入れと耕作(朽木 FS)

朽木 FS の活動先である滋賀県余呉町菅並集落の原野で焼畑を拓きます。以下の日程で作業をおこないますので、ぜひご参加ください。

1. 日時: 8/9(日) 焼畑火入れ準備  
8/10(月) 焼畑火入れと播種  
各日とも午前9時半に現地集合。収穫は 11 月初旬~中旬を予定。
2. 場所: 滋賀県余呉町菅並地区
3. 持ち物: 軍手、作業に適した服装・靴(現場はかなりの急斜面です。また、化粧の衣服は熱で溶けやすいのでご注意ください)。

4. 参加費: 8/9 は 700 円、8/10 は 1,500 円 (各日とも昼食代・保険代を含みます)

\*準備の都合上、参加を希望される方は、8/7(金)までに朽木 FS 研究員の増田(kamasu@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。また、現地までの交通についても増田までお問い合わせください。

### ■まちの畑で蕎麦の種まき(守山 FS)

1. 日時: 8 月 22 日(土) 10:00~
2. 集合: JR 守山駅に 9:30
3. 内容: 守山市中心市街地の伝統的な畑地で、蕎麦を栽培します。今回は、その種まきです。
4. 参加費: 無料

\*準備の都合上、参加を希望される方は、守山 FS 研究員の嶋田(tamalovestama@hotmail.com)までご連絡ください。

## ラオス出張報告 2

### 生存基盤科学研究ユニット研究員 矢嶋吉司

今年 2 月 25 日から 3 月 13 日まで、トヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラムの助成プロジェクト(代表: 安藤和雄)で、ラオス国立大学農学部から 3 名を招へいし、守山 FS、亀岡 FS を中心に日本の農村や都市が抱える問題や取り組みについて、特に、南丹市美山民俗資料館、亀岡市文化資料館の文化や伝統保全を通じた地域振興策の視察研修を実施しました。その際には多くの関係者の方々の協力をいただきありがとうございました。

ラオスに帰国後、3 名は日本での見聞や経験を、農学部で報告したそうです。特に、人口減少と高齢化が進む過疎問題が印象深かったようです。近年、ラオスでも急激に開発が進み、伝統文化の喪失や農村社会の変容が問題となり始めているからでしょうか。

ラオスではプロジェクトを実施する 2 村を選び、関係行政の協力を得て、5 月に現地です業を開始する予定でしたが、豚インフルエンザのため、予定より一カ月ほど遅れて、ようやく、6 月 15 日にビエンチャン特別市サタニー郡庁舎、ドンバン村、タチャンパ村の訪問ができ、翌 16 日に関係者の顔合せ兼オリエンテーションワークショップを行うことができました。

ワークショップには、日本から東南アジア研究所の安藤、虫明、矢嶋の 3 名、農学部からトンリー学部長、副学部長 2 名、学科長 1 名とプロジェクト担当 3 名、現地 NGO の参加型開発研修センター(PAETC) から代表と担当者の 2 名、行政サイドからサイタニ(Xaithani) 郡副郡長、行政地区長、行政副地区長、農業普及員など 5 名、村の関係者それぞれ 2 名が出席しました。農学部と東南アジア研究所の協力の経緯、経済中心の農村開発の問題点と伝統や文化を通し



ワークショップ参加者。

た日本の地域振興、日本研修視察旅行の経験と学んだこと、健全な社会発展のために果たす文化、精神の重要性、アタプー県の村の文化保存活動の事例、村でのプロジェクトの活動内容などが説明された後、出席者から伝統や文化の保存の必要性、農村開発、村の発展への協力の必要性などの意見が出されました。関係者の協力も得られワークショップを終えました。

最後に、プロジェクトを実施する 2 村を紹介いたします。ラオス国立大学農学部はビエンチャン市から北東に 30km の新パサップ(Phaxap-Mai) 村、通称ナボン(Nabong) 地区にあります。

ドンバン(Dongbang) 村は、農学部から西に約 7Km、約 150 世帯、住民のほとんどが仏教徒で大きなお寺があります。村は、約 200 年前に出来たと言われ、何度か疫病が流行し離散、再定住を繰り返してきました。村の周囲は開墾され森はほとんど残っていません。大きな敷地に家が建てられ、ゆったりとした生活ぶりがうかがえる村です。農業は機械化が進みましたが、現在でも伝統的な古い農具が村のあちこちに残されています。

一方、タチャンパ(Tajampa) 村は、農学部の北東 5Km ほどのグム川(Nam Ngum) の対岸にあります。20 年ほど前、北のシエンクワン(Xiangkhoang) 県から移動してきた黒タイ族の人たちが作った村です。最近もたびたび人が移入しています。88 世帯が暮らし、精霊信仰のため仏教のお寺はありません。以前、灌漑プロジェクトが実施され、耕運機や灌漑ポンプなど農業機械が普及しています。用水路が張り巡らされた田んぼもありますが、村の周りには森が残り今でも時々焼き畑が行われています。日本では自殺する人が毎年 3 万人以上もいるという話が出されると、「ラオスでは住む家と食べるコメ、それに家畜があれば、くよくよと悩む心配ごとは何もない」いう言葉が返ってきました。現代人の生き方について、再考させられた機会でした。

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、  
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

No. 11 2009.09.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市 棕川

## 朽木フィールドステーション

### 焼畑に寄せるそれぞれの思い

朽木 FS 研究員 増田和也

8月20日、余呉で焼畑の火入れをおこないました。本ニュースレターでご案内してきましたように、これまで菅並(すがなみ)集落で焼畑の準備を進めてきましたが、事情により菅並での火入れは延期することになりました。その代わりに、地元協力者である永井邦太郎さんが菅並と同時並行で準備を進めていた別の場所に火を入れることになりました。

代替地は、菅並の西に位置する中之郷(なかのこう)と下丹生(しもにゅう)の2集落の境である赤子山の北斜面です。ここは、レクリエーション施設「ウッディーパル余呉」内のスキー場で、今の季節には広大な草地在広がっています。施設の支配人によると、近年の暖冬でめっきりと降雪量は減っており、無雪期のスキー場活用が課題であるとのこと。そこで、新たな試みとして、永井さんの指導のもと焼畑に取り組むことになった次第です。

当日は、地元やウッディーパル余呉から15名ほど、大学関係から11名が参加しました。地元参加者のなかには、かつて高時(たかとき)川上流部の集落に暮らし、1996年まで焼畑に携わってきた方もおられました。この方は、丹生ダム(高時川ダム)の建設工事により川下の集落に移転されたものの、今



写真1: 赤子山の草地。この一部で火入れをおこないました。

回の火入れに集まってくださいました。

午前9時頃にまず上方部の耕地に点火。私は遅れて到着したので作業の流れを詳しく把握していませんが、他の方によると、斜面上部部、風下から火を入れたとのこと。これは火が一気に廻らないようにし、火勢をコントロールするとともに、地面をゆっくりと焼くためです。これにより地面を消毒する効果があると永井さんは話します。火入れの最中はものすごい熱と煙で、汗と涙のために全身びしょりとなりました。とはいえ、火を入れても、火はなかなか均一には廻らず、太目の枝は焼け残っています。火勢が落ち着くと、こうした燃え残りを焼畑内の数カ所に集めて、ふたたび燃やしていきます。これをコズ焼きといいます。

火が落ち着くと、いよいよ播種です。今回は山カブラに加え、ダイコンを撒きました。これは、焼畑と常畑で育った作物の味のちがいを比べるにはカブラよりも馴染みのあるダイコンの方がよいだろうという、朽木FSからの提案によります。かたわらでは土壌学を専門とするグループが火入れの効果を調べるべく、火入れをした場所/していない場所の土壌をそれぞれ採集していました。このように、焼畑の取り組みにはさまざまな方々がそれぞれの思いや目的をもって集まっています。



写真2: 火入れ。横一列に並んで、斜面上部から徐々に火を入れていきます。(撮影:鈴木玲治)

# 亀岡フィールドステーション

## 保津川筏聞き取りノート③ 一筏の構造②-

亀岡 FS 研究員 河原林 洋

今回は、筏の連のつなぎ方とカジボウの取り付け方を見ていく。(図1、図2参照)

### ①1連目「ハナ」と2連目「ワキ」をつなぐ

つなぎ目の中央部のみを2本の藤蔓でくぐる。図2で見られるように、1本目はハナ EF、ワキ cde を基準に赤三角で示す部分のコウガイと材木の隙間に藤蔓を通し、輪を描くようにくぐる。2本目は FG、efg を基準に青三角で示す部分を同様にくぐる。このように中央部だけをくぐるのは、のちに「カジボウ」をハナに取り付けた際、カジボウを動かすことで、ハナが上下左右に動き、舵を切ることを可能にするためである。

### ②「ワキ」と3連目「ソウ」をつなぐ

この場合は①とは違ってあまり左右に動かないように中央部と両端を3本の蔓でくぐり、連と連とをある程度固定する。図2の緑三角で示すように、中央部は F と def を基準にくぐり、両端は BC と b、IJ と h を基準にくぐる。

### ③「カジボウ=Ⅲ」の取り付け

「ハナ」に取り付ける「カジボウ」は「1番矢」とも呼ばれ、筏の操舵において重要な装備であり、しっかりと固定することが肝要である。「ハナ」中央部にかましてある I と II の材木の間に細めの材木=Ⅲを差し込み、下部に取り付け台となる細めの短い木を置く。ハナ中央部で I II Ⅲをたすき掛けするようにくぐり、Ⅲと取り付け台を EF、FG を基準に2本の蔓でくぐる。上から見ると X の字を書くようにくぐる。Ⅲのカジボウは横から見るとハナからワキへ角が出ているように見える。カジボウの後部の高さは膝より少し高い位置で固定する。舵を持つ者はワキに腰を落として立って操舵する。

### ④「カジボウ=Ⅳ」の取り付け

「ワキ」と「ソウ」にまたがって取り付け「カジボウ」は「2番矢」とも呼ばれ、1番矢の補助的役目を担う。ワキ中央部よりやや右側に2本「カン」を打ちつけ、間に細めの材木を差し込み、カンに蔓

を通してくぐる。1番矢の時よりさらに細めの取り付け台をカジボウの下に据え置き、FG と HI のコウガイと材木の隙間に蔓を通してくぐる。さらにソウにカンを1本打ちつけくりつける。カジボウの高さは足首より少し高めぐらいに留める。これは、手で操舵するのではなく、竿(檜材)の先を連の材木の隙間にあてがい、カジボウに当てて、こてる(てこの原理で動かす)ように左右に動かすのである。(図3参照)

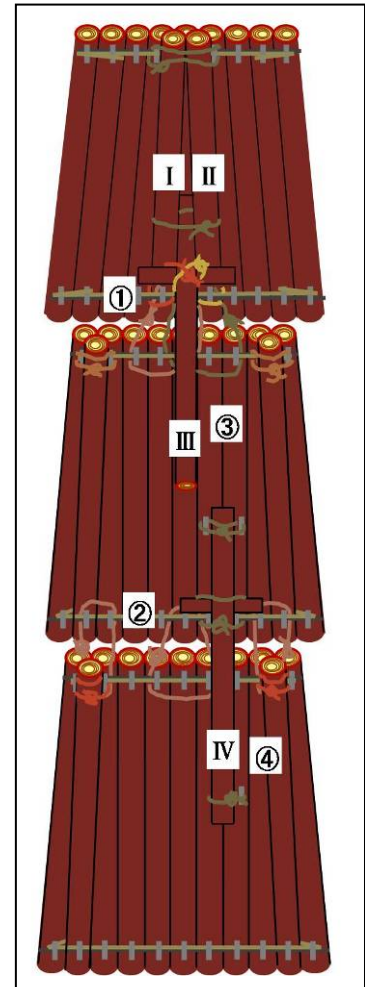


図1: 「ハナ」「ワキ」「ソウ」と「カジボウ」

今回は、筏の全体像とカセギという筏の背骨にあたる部分を紹介する。

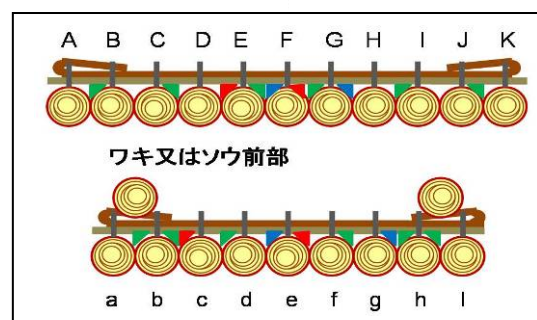


図2: ハナ又はワキ後部

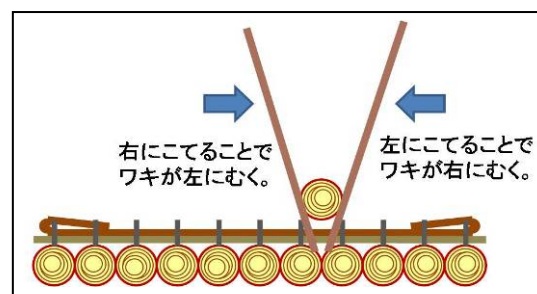


図3: 二番矢の動かし方

## 守山フィールドステーション

### Aさんとの出会い

#### 一在所の方から学ぶ野洲川流域調査一

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

「わしはこの土地で生まれ育って 80 年や。それで、ここのことがちょっと分かってくるんやな」(A さん 1925 年生 84 歳)。A さんは滋賀県守山市開発(かいほつ)で生まれ育ち、同地域の土地改良組合に関わってきた。A さんに地域を案内していただき、野洲川改修事業、土地改良事業および集落の暮らしについて話をうかがっている。

「わしは体が動くまで、ずっとコメをつくるんや。戦争中の食糧難のことが死ぬまで体にしみついとる」。現在、A さんは、7 反(1 反は 10 アール)の水田と 6 反の畑を耕作している。毎日、早朝から昼過ぎまで畑に行き、スイカ、カボチャ、スイートコーン、ササラゴボウ、トマト、ナスビ、サツマイモをつくってきた。守山市の聴覚障害者助産所の「みみの里」の数人の聴覚障害者の方を農作業のアルバイトとして雇っている。農業の経験がない方もいるため、一から教えなければならないこともあるという。だが、A さんは煩をいとわない。「在所に世話になったもん(者)が恩返しをするのは当たり前のことや」と語る。

現役の百姓である多忙な A さんに会うのは、雨の日か畑に行かない日だけである。朝 6 時、「今日、ええか。こっちは雨降ってんで」と A さんから連絡がある。午前中にお宅にうかがうと、1 日の調査の段取りを教えてください。A さんが運転する軽トラックに乗り、開発集落とその周辺地域の写真を撮るのである。だが、被写体を選ぶのはあくまでも A さんであり、私は写真を撮るだけである。被写体の多くは、A さんの記憶に残る場所である。写真を撮り終わった後、A さんは撮影した場所について話してくれるので、それを記録する。A さんと一緒に彼の友人の家、寺社、石碑、農地、用排水路、旧野洲川堤防跡などを訪れて写真を撮った。すでに A さんと

撮影した写真は約 200 枚におよぶ。

撮影した後、A さんは私に必ず質問する。例えば、川の小型堰を撮影した後、かつて堰があった場所から現在の位置に移された理由を問われた。すぐに回答を与えてくれないのだ。「あんた、なんも分かってないな」というのが私に対する A さんの口癖だ。

こうした写真撮影は、2 回目の調査の時、開発集落にある己爾乃(こじの)神社の若宮とそれを囲んでいる低い丸石の石垣を撮るように A さんに言われたことから始まった。この若宮は太平洋戦争で戦死した在所の方を祀っており、彼の兄も戦死し、祀られていると話してくれた。1955 年、若宮が建てられた時に遺族会の人たちが、戦死した人に思いを馳せて川から石を一つずつ拾い、数か月にわたって積み上げたという。私の研究テーマとは全く関係がないどこにでもある石垣には、A さんや在所の人たちの大切な思いがこめられていたのだ。研究者が調査資料にならないと思うものが、当該地の人々にとって重要な意味があるという自明なことを、A さんに手伝っていただいて写真を撮るたびに具体的に突き付けられている。

雨が降るなか水田の用排水路を一つずつ歩き写真を撮り終わった。「あんた、こういう地道なことは目だたへん。そやけど長持ちするんや。わしの経験からやけどな」。調査のたびに、A さんから心に響く言葉をいただいている。



写真 1 : 開発の用水路を案内して下さった A さん  
(2009 年 7 月 26 日撮影)



## 催しのご案内

### ■第15回 定例研究会

1. 日時：平成21年9月25日（金）17:30～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：増田和也（朽木FS 研究員）

## 京都大学総合博物館・学術映像博 2009 企画展示「水・土・火と生きる風景：在地の昔と今をつなぐ」のご案内

京都大学東南アジア研究所が担当する生存基盤科学研究ユニットの「京滋フィールドステーション事業」では、京都大学総合博物館で開催中の「学術映像博2009」において、「水・土・火と生きる風景：在地の昔と今をつなぐ」と題した企画展示を行っています。展示期間は9/16(水)～10/25(日)で、3つのフィールドステーション（亀岡FS、守山FS、朽木FS）での取り組みをパネルや映像、模型展示などを通じて紹介しています。

守山FSでは、エリ漁に用いる網や魚の模型を展示しながら、琵琶湖のエリ漁を紹介しています。エリ漁から見えてくる琵琶湖の現状、琵琶湖漁師の生き方や知恵を実感してもらえらると思います。亀岡FSでは、筏士の諸役を免除した豊臣秀吉の朱印状や筏の絵図などを展示し、保津川の筏流しの歴史や文化を紹介しています。また、筏流し復活へ向けた現在の取り組みを通して、流域の人、山、川、町のつながりが再構築されていく様子をパネルや映像で紹介しています。朽木FSでは、野山への火入れが作り出してきた草山の景観の変遷を、古地図や空中写真を用いて紹介しています。かつての暮らしに不可欠だった茅や柴を採集するための火入れが、社会変化のなかで次第に失われ、草山が木山へと変わってきた様子がわかります。

また、これらの企画展示のプレイベントとして、9/12(土)には筏組みのワークショップを行いました。このワークショップでは、9/9(水)に保津峡・落合から嵐山へ筏を組んで流した木材の一部を京大博物館に運び、亀岡FSの河原林研究員の指導の下、参加者全員で筏に組み直しました。この筏は、京大博物館の1Fホールに展示してあります。また、筏の横には、保津川の流れをイメージしたタケのオブジェ（草月流



## 4. 発表内容

『火のエネルギーによる「くらしの森」づくり 一進捗報告と今後の展望-』

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

奈良県支部制作、亀岡のマダケを使用)が展示してあります。ヒノキの丸太をフジヅルで括った野性味あふれる筏と、洗練されたタケのアートの絶妙なコラボレーションを、是非一度ご覧ください。

また、9/30(水)～10/4(日)には、特集期間として、各FSの活動を紹介する以下の映像作品を、博物館2Fの上映スペースにて上映する予定です。

「琵琶湖に生きる風景」(守山FS、制作:武藤恭子・嶋田奈穂子、7分)

「保津川筏復活プロジェクト」(亀岡FS、制作:保津川筏復活プロジェクト連絡協議会、16分10秒)

「焼畑プロジェクト余呉:火入れ」(朽木FS、制作:井上一、7分15秒)

また、特集期間後半の10/3(土)～10/4(日)には、以下の2つのトークイベントを企画しています。

### 「琵琶湖に生きる」

1. 日時:10/3(土) 15:00～16:30
2. 場所:京都大学総合博物館 2F
3. 内容:琵琶湖漁師の戸田氏をお招きし、琵琶湖の環境と魚からのメッセージを語っていただきます。「琵琶湖を守り、監視してきてくれたのは、魚である。命を張っている魚に比べたら、人間はまだまだ甘い」(戸田直弘「わたし琵琶湖の漁師です」より)。

### 「筏がつなぐ「ひと」、「もの」、「ちいき」」

1. 日時:10/4(日) 10:30～12:00
2. 場所:京都大学総合博物館 2F
3. 内容:亀岡市文化資料館の黒川館長、元筏士の上田氏、酒井氏、鍛冶職人の片井氏をお招きし、保津川の筏復活の活動を通して、これからの「ひと」、「もの」、「ちいき」のつながりを、筏復活に関わる関係者と共に語り合います。

これらの展示、映像、トークイベントを通じ、在地の技や知恵を体感していただくとともに、これからの暮らしについて、一緒に考えていただければ幸いです。みなさんのご来場をお待ちしております。

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No.12 2009年10月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

京都市 保津峡

## 亀岡フィールドステーション

### 筏がつなぐ「ひと」「もの」「ちいき」

亀岡 FS 研究員 河原林洋

去る10月4日、京都大学総合博物館において『自然と暮らし トークイベント：筏がつなぐ「ひと」「もの」「ちいき』』が行われた。研究対象としている保津川の筏流しの関係者を招いてのトークイベントである。出演者は元筏士の上田潔氏(89歳)、酒井昭男氏(82歳)、鍛冶の片井操氏(79歳)、亀岡市文化資料館館長の黒川孝宏氏、そして私である。

約60年前まで生業として「いかだ」を流していた元筏士、約60年前まで生業として筏組みに使う金具「カン」を作っていた鍛冶。実際に、片井氏のカンを使って、上田氏と酒井氏は筏を組んでいたそうである。しかし、60年前には一度も顔を合わすことはなかった。「他人の仕事を見る暇なんてなかった。自分の仕事で精いっぱいやった」。片井氏の言葉である。9月9日、京都市右京区保津峡内の保津川で、筏流しを行った。その時、片井氏を招待した。自分の作った「カン」が使われるところを60年の歳月を経て、初めて見たのである。「カンを打ち込む音を聞くたびに、ありがたいと思った」と感想をおっしゃっていた。鍛冶が精魂こめて作ったカンが、命のかかる筏流しに使われる。そこには、「もの」を通じた「ひと」の命のやり取りがあったように思える。それだからこそ、片井氏は、カンを打ち込む響きに、当時の仕事のつらさを思い出し、当時の自分の仕事の意義を初めて認識したのではないだろうか？

元筏士の方にも、当時の仕事内容を語っていただいた。筏の仕事は、主に冬場で、足袋にわらじを履くだけで、寒さが身にしむ大変な仕事であった。「辛かったなあ〜。ようあんな仕事しとったなあ〜」。率直な元筏士の感想である。筏流しができる日は一日筏を組んで流す。川が増水し、筏流しが出来ない日は、一日、山に入って、筏組みに使う藤蔓を切る。筏の仕事も休みがない。また、カン是一次筏組みに

使うと、川に落としたり、筏の引き継ぎの時に紛失したりと、約5分から1割ほど減り、その度に鍛冶屋にカンを発注していた。しかし、元筏士の方々も、カンが作られるところを見たことがないそうで、今年6月4日に、お二人を片井氏のところへ案内した。初めて見るカン作りを食い入るようにご覧になり、「もっと簡単に(カンを)作れるものと思っておりました。もっと大事に使ったらよかったなあ〜」と。

「そうま」<sup>[1]</sup>が、夏に切った材木は夏・秋に乾燥させ、冬に出荷される。切った材木は、木馬(きんま)<sup>[2]</sup>で、川沿いまで運ばれ、筏士が組んで、保津川を流していた。その上荷として、地域で産出する薪、炭、割木、時には今では貴重な松茸が大量に運ばれた。

丹波という「ちいき」において、山の産物=材木、藤蔓、把物(たばもの)<sup>[3]</sup>など、町の産物=カンなどの「もの」が、「ちいき」の「ひと」の生業となり、「命」を紡いでいく。

いかに、「ちいき」の中に埋没しつつある「もの」と「ひと」とのつながりを再構築していくのか。そこに、沈滞化する「ちいき」という共同体の再構築をひも解くかぎがあるのではないだろうか。このトークイベントがそのきっかけとなれば幸いである。



写真：トークイベントの様子。半世紀前の筏文化を語り合う。(2009年10月4日)

脚注

[1]そうまは、亀岡では柚(そま)がなまって「そうま」と呼ばれていたようだ。柚とは林木の茂る山、木材採取の山の意から転じて、伐木作業、さらには伐採、造材に働く柚人(そまびと)の名称ともなった。

[2]木馬は木材の運搬に使うそりである。木馬を引っ張って木材を搬出するのを「木馬引き」と呼ぶ。保津峡では木馬での搬出に使う「木馬道」(きんまみち)が、木材を搬出する場所ごとに作られた。

[3]把物は千把(薪や炭)、柴、割り木を総称する言葉。

## 守山フィールドステーション

### 「琵琶湖に生きる」漁師のはなし —京都大学総合博物館にて—

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

「漁以外のことになると、わしは丘にあがったカッパみたいなもんやさかい」。

琵琶湖漁師・戸田直弘さんのいつもの自己紹介である。今回は京都大学総合博物館でそれを聞くことが出来た。京都大学総合博物館 学術映像博 2009 のトークイベントで、「琵琶湖に生きる」毎日の話、漁の話、魚の話をしていただいた。

いつもは、港や船の上で、戸田さんの仕事の合間に話を聞かせてもらっている。エリ漁の合間、ミシンで網を縫っている合間。漁港の加工場で魚を炊きながら、鍋を覗きこんで「この鍋の底のコゲ、鮎の形しとるやろ。ワシがやってしもたんや」と、笑うときもある。

「今年は野洲川の放水路にビワマスが遡ったんやで。密猟者がある証拠や。あいつらは、ビワマスがおるかおらんかのバロメーターや。放水路ができてから 30 年たつけど、今までビワマスは遡らんかった。昔からの川と、何か違ったんやろな。今やっとなんか魚が本物の川やと認めてくれよったんやな」と、リアルタイムの琵琶湖や川の様子を教えてください。野洲川は 1979 年（昭和 54 年）、下流の南北流が廃止され、新しい放水路に付け替えられた。もちろんこの 30 年間、水は流れ、放水路は河川としての機能を果たしてきたと思う。しかし、魚は違った、と戸田さんは言う。魚が遡って初めて、川は川になるのだと言うのである。そんな時、私はいつも、漁師の目、いや魚の目に映る風景を戸田さんは見ているんだと思う。

博物館での戸田さんは、いつもと変わらない様子で漁や魚の話をしてくださった。サービス精神があふれる人なので、時にちゃんと笑いもとった。地域で身体を張って生きている人として、データ至上主義の研究者がもつ言葉のトゲに対する苦言も呈した。そして話が終盤にさしかかったときに出た、戸田さんの一言が、私には少しショックだった。

「これからも漁師として、琵琶湖に生かされていきたいんです」。戸田さんは言い、次の言葉までに少しの間があった。

この言葉が、決意というか、願いのように聞こえたのは私だけだろうか。琵琶湖の漁業には水質悪化や外来魚問題が立ちはだかっている。その中でも、戸田さんはこの先もずっと漁師をしていくんだと、それが当然のように、私はただ漠然と考えていた。もちろん、常々彼は「死ぬまで漁師をする」と言っているが、そのために必要な相当の覚悟や努力、願いがああ言葉ににじみ出るようで、それに今さらながら気づいた自分が情けなかったのである。

琵琶湖の漁業にほんの少しでも関わることができた者として、また琵琶湖漁師の生き方や思いに少しでも触れた者として、私は私の立場から、彼らのごく自然に琵琶湖漁師であり続けることができるように努力していきたい。



写真 1: 映像を用いて、琵琶湖の漁法を説明する様子。  
(2009 年 10 月 3 日 山下俊介氏撮影)



写真 2: 琵琶湖漁師・戸田直弘氏。(2009 年 10 月 3 日  
山下俊介氏撮影)

# 朽木フィールドステーション

## 今年の牛耕は代かき

滋賀県立大学／朽木 FS 黒田末寿

高島市椋川でおこなっている牛耕の試みも3年目になった。今年は田の荒起こしに牛を扱う時間がとれず、水廻し・代かきに登場してもらった。田植えができる状態にするには、田起こし、砕土、水を入れて土とよく混ぜてならず作業がある。どの作業にも牛を使うことができるが、固い土を犁で天地返しする荒起こしが、牛にとっては一番キツイ。水廻し・代かきは、苗を植えやすくするだけでなく、できたとろとろの泥水が田底のひびを塞いで水漏れを防止する。

牛にとっては、脚は多少とられても、代かきは荒起こしに比べてずいぶん楽である。そのせいか、それとも牛耕に慣れてきたのか、牛はずいぶん素直に田んぼを行き来してくれ、作業がはかどった。3年目にしてやっと、少々ごまかしの感があるが、わりとすんなり働いてくれたのだった。

中国地方の山間地域には、牛供養田とか花田植えとか言って、代かきに牛を使い、早乙女姿の女性たちが田植え歌に合わせて作業する祭りが残っている。代かきは豪華な引き鞍をつけた何頭もの牛が水田をぐるぐる回って行く。いまは、牛は華やかな装いで水田をまわり歩くだけになっているが、かつては牛の姿と水田をならし回る経路の形、一筆書きを

する形を競う祭りであった。そういう土地なので、毎日の訓練を欠かさなかったし、操牛法も発達していて、昭和30年頃までは牛を碁盤の上にあがらせるようなことができる人が何人もいた。

しかし、椋川ではとくに牛を訓練する方法が伝わっていない。博労が子牛を歩かせて椋川に連れてきていたということだから、その時に基礎訓練ができていたのだろう。牛は臆病で人が後ろに立つのをいやがる性向がある。小さいときから人の前を落ち着いて歩くよう慣らさないと牛耕はできないが、トラックのない時代、博労と道を歩くことが役に立っていたということだ。写真のハルエ号の場合は、椋川の井上四郎太夫さんが腰にブラシを当ててやり人が後ろに回るのを慣らしたことが、大きな効果を生んでいる。牛と人の信頼関係というだけではわからない技術である。



写真:代かきをするハルエ号(写真:辻村耕司氏)。荒起こしに比べ楽な作業だったからか、素直によく働いてくれた。

## 焼畑の近況

朽木 FS 研究員 増田和也

8月下旬に「ウッディーパル余呉」(余呉町中之郷)に拓いた焼畑。火入れ・播種から約1ヶ月半が経過しました。焼畑のその後の様子をお伝えします。

山かぶらの収穫は11月中の予定。詳細はおつてご案内します。ぜひご参加ください。



写真1:2009年9月5日。火入れ・播種から2週間が経過。密生している箇所では間引き作業。(写真:野間直彦氏)



写真2:2009年9月18日。火入れから、およそ1ヶ月が経過。ワセ系の品種(赤倉かぶら)は、すでにこの大きさ。(写真:黒田末壽氏)



写真3:2009年10月5日。地元在来品種も順調に育っています。(写真:野間直彦氏)



写真4:2009年10月5日。一部ではヨモギとイタドリが繁茂し、かぶらが負けてしまっています。火入れ後もしくは鍬入れが不十分だったのでしょうか。(写真:野間直彦氏)

## 催しのご案内

### ■第16回 定例研究会

1. 日時：平成21年10月30日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：西村明弘（京都学園大学 人間文化研究科）

### 余呉町の焼畑 —ミャンマーの焼畑との比較から— 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

滋賀県余呉町では、朽木FSのメンバーが中心となり、摺墨（するすみ）山菜生産加工組合の永井邦太郎さんと共に焼畑を行っています（本ニューズレター第3号、第7号、第8号、第10号、第11号参照）。

今回は、私が調査研究を行っているミャンマー・バゴー山地の焼畑との比較を交えながら、余呉町で今年行われた焼畑の特徴を紹介したいと思います。

6月下旬から7月上旬にかけて行われた余呉町・菅並（すがなみ）での山開きには、チェーンソーが用いられ、ケヤキやアオダモなどの大木が次々と切り倒されていきました。斧で木々を切り倒すミャンマーでの焼畑に比べ、チェーンソーでの山開きは容易だと思っていましたが、木々を切り倒してからの作業が大変でした。ミャンマーでは、伐倒木は切り倒したままの状態で山腹斜面に放置するのに対し、今回の菅並の焼畑では、伐倒木の幹や太い枝を炭焼きやキノコのほだ木に利用するため、伐倒木を一本一本ワイヤーでくくり、軽トラックで斜面から引きずり下ろしました。全ての伐倒木にワイヤーをかけるため、急斜面を何度も上り下りしなければなりませんでしたが、ミャンマーの焼畑でも太い木の幹は火入れ後に燃え残ることが多いため、これらを燃やさずに他の用途に利用することは、非常に理にかなっていると思います。そして、炭やほだ木に使えない小さな枝葉は、ワイヤーでくくって再び山腹斜面に引っ張り上げ、火入れのための燃材とするのです。また、燃材が足りない場合は、河原のヨシなどを刈って斜面に広げることもあるそうです。

焼畑で火入れをする理由の一つに、伐開跡地での耕作に邪魔な伐倒木は、搬出するよりも燃やす方が容易なことが挙げられることもあります。永井さんは伐倒木を斜面から引きずり下ろした後に、わざわざ燃材となる枝葉を斜面に引っ張り上げており、火入れが整地作業の一環ではなく、農作物栽培にと

### 4. 発表内容

「保津川筏復活プロジェクトにおける地域学の可能性 ～亀岡学を事例に～」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

って重要なプロセスと考えられていることがわかります。火を入れることにより、焼却灰による養分添加、埋土種子の焼却による雑草抑制など、様々な効果が期待できます。

今年、永井さんの指導の下、ウッディパル余呉が管理する赤子山スキー場のゲレンデで、夏期の草地を利用した焼畑を行いました。ゲレンデで刈った草だけでは火入れに不十分であったため、ウッディパル余呉の敷地内で伐採したスギの枝葉をトラックで運び、火入れ予定の斜面に敷きつめました。そして、8月20日に火入れを行い（写真1）、火入れ後には、鍬で地面を10cmほど耕しました（写真2）。耕すことで、地表面付近の有機物や焼却灰が土にすきこまれ、作物の生育にとって良好な状態になるそうです。

耕起をする焼畑をみたのはこれが初めてで、非常に驚きました。ミャンマーでは、雨期の激しい降雨による土壌浸食を避けるため、焼畑で開いた斜面は決して耕さず、堀棒で開けた小さな穴に播種していきます。作付け期間中の降水量の違いが、このような農作業の違いを生んだものと思います。今後も、余呉町での焼畑作業を通じ、焼畑に秘められた様々な在地の技術や知恵を学んでいきたいと思っています。



写真1：ウッディパル余呉での火入れ。敷きつめたスギの枝葉に火をつける。（2009年8月20日）



写真2：火入れ後、鍬を入れてから、カブラとダイコンを播種。（2009年8月20日 写真：増田和也氏）

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No.13 2009年11月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

京都市 保津峡

## 守山フィールドステーション

### 記憶に残る場所 ー水害に関する史跡ー

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

前回、「Aさんとの出会い ー在所の方から学ぶ野洲川流域調査ー」(本ニュースレター11号)で、滋賀県守山市洲本町開発(かいほつ)で生まれ育ったAさん(1925年生 84歳)の記憶に残る場所を写真に撮影し、記録していることを簡単に述べた。ここでは、Aさんの記憶に残る場所を紹介したい。

最初、Aさんに案内された場所は、野洲川流域にある水害に関する史跡であった。水害の史跡はおおよそ3つに分類できる。1つ目は、防災祈願や水害からの復旧を願って建立されたり、植樹されたりしたもので、3つのうちで一番多く見られる。神社が2か所、祠が1か所、そして神社などの植樹が2か所ある。ほかに、水災記念碑がある。これは、1913年10月、台風によって増水した野洲川が、笠原町で決壊し、死者32名の被害がでたことを忘れないように、再び悲惨な水害を繰り返させないようにと願いを込めて建てられた。

2つ目は、水害にあたり殉職したりした人々を弔った碑であり、3つ目は、水害対策に尽力した人々をたたえた碑である。双方とも、2つの碑があった。

これらの史跡の中で、最もAさんの記憶に残る場所は、守山市笠原町にある蛸江(つぶえ)神社である。



写真1:蛸江神社。

「蛸」(つぶ)とは、本来、ハマグリなどの二枚貝を意味するが、笠原地区ではタニシのことを指して「つぶ」と呼ぶ。

神社にはタニシに由来する次のような伝説がある。

1721年(享保6年)、豪雨で神社の近くの野洲川の南流の堤が切れ、御神体を安置している社殿が流れそうになった時、川上からたくさんのタニシが付いた神輿が流れてきた。タニシの重みで神輿が社殿の前に止まり、社殿の流失を防いだといわれる。人々はタニシを神の使いとして感謝し、タニシを食べるのを絶ち、神社の境内に池を掘って、タニシを放して大切に保護してきた。池を作ったときに蛸江神社と名付けられ、この池は「御蛸池」(おつぶいけ)と呼ばれている。笠原地区では、戦時中や戦後の食糧難の時でも栄養源であったタニシを口にしなかった。人々はタニシに敬意を払っていたからである。

だが、Aさんによると、野洲川の放水路建設のための改修工事で南流が廃川になったため、御蛸池の水が枯れてしまい、神の使いであるタニシは保護できなくなったという。Aさんと同神社を訪れた時、御蛸池は地下から水を汲み上げて、菖蒲が植えられていた。「前は地下から水を汲まんでもよかったんや。こうなってしもたんや」。

野洲川流域の水害の史跡は、災害が繰り返されてきた地域の人々の苦闘や防災の祈願を知る手掛かりだけでなく、野洲川改修工事後の人々の生活の変化を刻むものとして存在していることを知った。



写真2:蛸江神社付近の野洲川旧南流の石垣の堤防。

## 朽木フィールドステーション

### ヤマグワを活かす

朽木 FS 研究員 増田和也

余呉における、かつての山地利用の特徴のひとつに、桑栽培と結びついた焼畑があげられる。余呉の焼畑では、1年目にカブラ、2年目以降にはソバもしくはアズキ、そして最後に桑であった。ただし、桑についてはわざわざ苗を植えるというのではなく、ヒトリバエ（自生）してくるのだという（本ニューズレター10号参照）。焼畑のために林野を伐開することで地表に太陽光が当たるようになり、桑の生育が促されるということであろう。

桑の葉は、蚕のエサとして収穫されていた。余呉の山間部をふくめ湖北地方一帯では、明治期から1960年代まで養蚕が盛んであった。そのために桑の葉はきわめて重要で、野生種だけでは必要量をまかなえないため、畑以外にも土手や河原にも積極的に桑は植えられてきた。

地元協力者である永井邦太郎さんから話を伺ううちに、一口に桑といっても、じつは幾つもの品種があることがわかった。たとえば、シンザエモン。この名は、昔、シンザエモンという人物がこれをこの地域に持ち込んだことに由来するという。これは、田畑の端や河原に植えられている。一方、野生の桑であるのがヤマグワとギラである。ギラの名は、その葉の表面に光沢があり、陽の光をギラギラと照り返すことに由来する。かつて焼畑跡にはギラばかりが生えてくる場所があり、そのようなところはギラバタケとよばれた。ヤマグワとギラの葉を食べた蚕は、糸の検収率がよく、高値で取引された。しかし、これらの葉は薄く、籠にいっぱい詰めても荷は軽く、嵩はあっても蚕は瞬く間に食べ尽くしてしまう。そのため、永井さんは1日に数回も焼畑跡まで葉を摘みに出かけたという。

このように、食糧生産のために拓いた焼畑は、桑の自生を促し、しかも野生桑は栽培種よりも高い価値をもっていた。このために、人々は焼畑休閑後も桑の葉を摘むために焼畑跡へ何年間も通った。そして、桑の樹が大きくなり葉を摘みにくくなると、桑を倒してふたたび焼畑を拓いたという。つまり、焼

畑—桑畑—焼畑というサイクルが生み出され、余呉の焼畑はこの地の生態的条件と当時の地場産業とが上手く適合した生産システムの一例であった。もっとも、桑がよく生えるところをわざわざ選んで焼畑を拓いていたわけではないというので、このようなサイクルがみられたのは、ごく一部であったかもしれない。

現在では、焼畑も養蚕も過去のものと思われている。山は人工林となり、林業の低迷で近年は山に入る人も少ない。けれども、余呉の自然環境の特色は山であり、そこから得られる恵みであろう。そこで、ふたたびヤマグワに注目してはどうだろうか。今日では蚕のエサとしての需要はほとんどないが、桑は昔から薬用効果が知られ、一部では健康茶として販売されている。また、果実もおいしい。ならば、養蚕において栽培種よりも高い評価であったヤマグワは飲食用にもうってつけではないだろうか。何よりも、ヤマグワは森を拓けばヒトリバエしてくるのであり、この地域に根ざした資源である。もちろん、商売として成立させるには、多くの課題があるにちがいない。しかし、ヤマグワは焼畑や養蚕を伝える郷土史の教材ともなるであろうし、ヤマグワのために森を拓くことは植生を更新させ、多様な植生状況が生み出されることにより生物多様性にも寄与すると考えられる。

ヤマグワを用いて、何か新しい取り組みはできないだろうか。森の中でおぼろげな陽光を浴びてうつむく若いヤマグワ。それを見ながら、ふと考えた。



写真：焼畑跡の脇に残る桑の木。

# 亀岡フィールドステーション

## 亀岡の農業と自然(3)「亀岡市の水田と鳥類」

京都学園大学 高橋藍子

亀岡の水田にはどのような鳥が訪れて、水田の状態や周辺の環境は出現に影響するのか、時間帯によって出現する種や個体数に違いはあるのか。これらのことを知りたくて、亀岡市の特徴の1つである水田地帯での鳥類調査を始めたのは、今年6月のこと。

亀岡市は農業の地として歴史が深く、京都府内最大の面積を有している。現在も一部の地域では石垣を組んだ棚田が残っている中、近年圃場整備が行われ亀岡の農環境は変化しつつある。

調査を行ったのは、亀岡市曾我部町西条と同市保津町保津新田の2か所。8月末までに各調査地で40回ずつ行った調査で記録した鳥類は計42種、9368個体(曾我部町35種4280個体、保津町36種5088個体を記録)に上った。

調査は日の出から日の入り(4:30~19:30)までを1時間半毎に区切り、曾我部町2.1km、保津町2.5kmのルートセンサスを行った。

鳥類調査から見えたことは、特定の時間帯に集中して出現する傾向は見られなかったこと。一般に鳥類は早朝に頻繁に行動すると言われているが、今回の調査では最もよく見られた上位3種を見ても、日の出から日の入りまでまんべんなく観察することができた(図1)。森林での鳥類観察は、障害物が多く鳴き声が頼りとなる為、囀りがよく聞かれる早朝が観察に適していると言われるのだろうが、視界

が広い水田では、鳴き声に頼らず観察できることが今回の結果に大きく影響したのだろう。

また、環境別に鳥類の利用率をみると、農地に最も多く出現した上位3種は曾我部町と保津町で同じであったのに対し、河岸、上空、電線・電柱、その他(竹林・民家)での上位3種は調査地間で異なるものとなった。これは、曾我部町の調査地の川は幅が狭く浅瀬で、近隣に竹林があるのに対し、保津町の調査地の川は幅が広く、アオサギやスズメがねぐらにしている林が近隣にあるといった地域間の環境の違いが、同じ「水田」でありながら出現する鳥類の種類や数に差を生んだと考えられる。また、曾我部町は保津町に比べて水田1枚の面積が小さく、農道が狭いなど、水田の環境にも違いがある。鳥の生活には、河川や竹林、民家の有無だけでなく、稲作や畦の草刈りや中干しなどのような人間が水田を利用することで起きる変化も影響しているだろう。

今回の調査では、曾我部町と保津町のどちらでも色々な種類の鳥が色々な場所で採食をしたり囀ったり日光浴をしている姿を見ることができた。今後の調査では、秋冬に飛来する鳥類の移り変わりと共に、調査地を増やし、環境ごとの鳥類の出現傾向をみていこうと考えている。

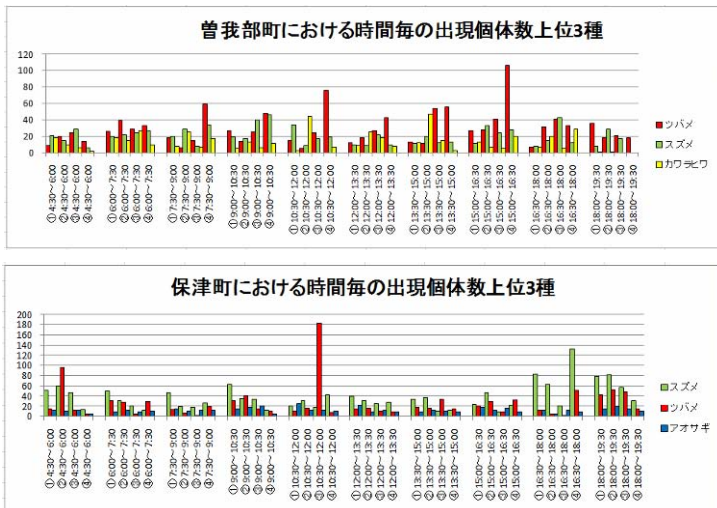


図1. 曾我部町と保津町における時間毎の出現個体数上位3種



写真1: 曾我部町で撮影したホオジロ。春から夏にかけて、枝先で囀る姿がいたるところでみられた(2009年4月12日撮影)。



写真2: 我部町の農道で砂浴びをするヒバリ。春は上空で囀る姿が、夏には道路脇で砂浴びする姿がよくみられた(2009年7月1日撮影)。



写真3: 保津町の電線で撮影したモズ。10月から11月にかけて、高鳴きがよく聞かれる(2009年10月20日撮影)。



写真4: 保津町で撮影したアオサギ。刈り取り後の水田に飛来していた(2009年10月20日撮影)。



## 催しのご案内

### ■第17回 定例研究会

1. 日時：平成21年11月27日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者1：Dani Duri（Dirang 県保健局局长）  
発表内容：「Dirang 県の医療と健康」

発表者2：Rinchin Tsering（Brokpa の社会福祉協会会長）  
発表内容：「Brokpa の人と社会福祉協会の活動」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

## 杉が植えられた水田にて

東南アジア研究所 安藤和雄

「日本人は木を食べたほうがよい」とダニドゥリさんが、可笑しさをこらえて、コメントしました。2009年11月29日、南丹市美山町知井地区の過疎が進んでいる知見集落の杉が育つ水田跡地でのことです。ダニドゥリさんは、インドのアルナーチャル・プラデシュ州ローアール・スバンスリ県ジロ郡のアパタニ族の出身のお医者さんです。現在、同州のウエスト・カメン県の県保健局の局長さんです。ダニドゥリさんとともに来日している同じくウエスト・カメン県デイラン郡のモンパ族の方で、地元のNGO・ドゥンカルバ社会福祉協会会長のリンチン・スリンさん、東南アジア研究所の招へい海外客員研究者のミャンマー歴史研究所研究部長のミン・ティンさん、総合地球環境学研究所研究員の小坂さん、京大医学研究科博士課程2回生の石本さんと私で、2009年11月28日に知井地区北集落の「かやぶきの里」の美山民俗資料館を訪問し、同地区中集落の民宿「まるや」で一泊しました。その翌朝のことです。コメントはユーモア好きなダニドゥリさん流のダジャレのセンスが言わせているのでしょうか。これには伏線がありました。29日の朝、「まるや」の女将さんから、近くにお父さんを第二次世界大戦のミャンマー戦線で亡くされたMさんが居られ、何度もミャンマーに出かけておられます、という話を聞き、Mさんを訪問しました。その時、Mさんが、日本の発展はアジアの国々の犠牲に負うところが大きい、という趣旨の発言があり、申し訳ない、と3名のアジアの隣人に言われたのです。この態度にダニドゥリさんがいたく感激しました。杉林となった水田を前に、私は、米を少しでも多く生産したいという願いから苦勞して作られた水田だったことと、現在の日本の食料の多くを輸入に頼りきっていることなどを説明しました。それを受けてのダニドゥリさんのコメントなのです。本当に日本人は木を食べるようになればよいね、と私も返答しま

した。インドやミャンマーでは、自国に必要な食糧は国内生産が当たり前の常識となっています。9月の始めに、旧美山町役場の元助役で、観光カリスマとして、退職後美山町の観光開発に尽力されている小馬さんと一緒にバングラデシュの友人2名を連れて知見集落を見学しました。小馬さんから、最近では杉も植えず放棄した水田が多くなりつつある、こちらの方が問題は深刻だ、とお聞きしました。一般に5年水田を放棄すると、もとの水田に戻すことは容易ではないと言います。農家が水田を放棄せざるをえない状況をつくりだしている日本の社会、アジアの開発途上国の人々から見れば、奢りとしかうつらないような日本の農業・食糧事情、それでも救いがあるのは、美山町知井地区のように、持続的な暮らしが作りあげてきた自分たちの文化の価値を自覚し、それを土台にした農村開発の実践事例が日本のあちらこちらに実現していることです。あきらかに、これまでの都市に近づこう、都市に頼ろうとしてきた農村とは異なっています。

私は、海外、特に、アジアの開発途上国から来日した友人・知人に日本の過疎が進む農村の現状と自分たちの文化に根差した新しい農村開発の試みを見学してもらっています。

都市のもっている匿名性の自由な気分や、生活のはなばなしさ、便利さ、収入条件の良さを意識・無意識に無邪気に宣伝し、都市生活に農村生活を近づけることが「善」であった戦後から高度経済成長期の日本の農村開発の在り方が、ボクシングのボディブローのように農村の人々から在地でいきつづけることへの自信を奪っていった。やっとその呪縛から農村が解き放れつつあると実感できます。このあ



写真：記念撮影。

たりを「百聞は一見にしかず」で、アジアの開発途上国の人々に日本の現場で直観してもらいたいと願っているのです。

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、  
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

No.14 2009.12.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市 中心市街地のそば畑

## 朽木フィールドステーション

### 椋川の手づくり収穫祭

朽木 FS 研究員 増田和也

11月22日の日曜日、滋賀県高島市椋川(むくがわ)集落では、今年も「おっくん! 椋川」(以下、「おっくん!」)が開催された。「おっくん」とは、「ありがとう」を意味する地元の言葉だ。その名称のとおり、「おっくん!」は、農作物や手づくりの品々の販売に加え、茅葺き民家の屋根裏の公開や炭焼き体験会などを通じて、椋川と外の人々とのふれあい豊かな交流を目指した、いわば手づくり収穫祭だ。この他にも、催しのある家々の軒先には椋川の絵画や写真が飾られたり、民具が壁に整然と並べられていたりするが、その傍らで洗濯物が干してあり、いたって気取りのない雰囲気である。来訪者は、集落内の学校に車を置き、歩きながら集落内を廻る。配布される手書きの地図には、各企画とともに集落内の見どころが紹介され、この日は集落内を廻る親子連れやグループで賑やかになる。

「おっくん!」は、今年で7回目の開催となる。最初は、国道から集落に折れる分岐付近で農作物を販売するだけであったが、「お客さんに集落内にも来てもらおう」ということで、現在のようなかたちになったという。年々、村の方々の熱意は高まり、今では春頃から「今年の『おっくん!』はどうするんや」といったことが話題に挙がるのだという。なかにはこの日のために何品もの手料理を用意し、椋川の外に暮らす子どもたちの家族や親戚が手伝いにやってくる。聞いたところでは、椋川のある女性が最近亡くなられたという。その方は、毎年の「おっくん!」に手製の品々を並べることを楽しみにされていた。すると、今年は椋川を離れて暮らされている娘さんが、母の意思を継いで出品されたという。こうした品々は「一応」販売されているが、こちらが申し訳

ない気分になるほどの破格で、椋川流の客へのもてなしが拡大した感じである。

朽木 FS では、椋川の休耕田に火を入れた擬似焼畑で、複数品種の赤カブラとダイコンを栽培してきた。そこで、我が FS も収穫物を出品することにした。赤カブラやダイコンは品種によって、鮮やかな紅色のもの、紫がかかったもの、丸いもの、細長いもの、扁平型のもの、と色かたちが様々である。こうして並べてみると、そのちがいがよくわかる。実際に、多くの方々がカブラに足を止めていた。しかし、我々は準備不足だった。この取り組みについて、目的や耕作方法、栽培した品種などを紹介する資料を用意すれば、在来のカブラには火入れに適応した品種があること、肥料を使わなくともこれだけの収穫があること、火入れ栽培が農産物の付加価値となりうることなど、火入れを過去の栽培技術とみなすのではなく、新たな特産品づくりとしての可能性をもっと多くの人々に伝えることができたであろう。

これまでの私は、火入れという生産過程に興味の中心があり、生産や収穫の後のこと、つまり消費ということをあまり熱心に考えていなかった。消費あつての生産であることは、考えるまでもない。しかし、生産物をたんに消費者へ届ければよいというも



写真: 軒先で手づくりの料理や品々を楽しむ(写真撮影:2006年11月)

のでもない。「おっくん!」に向ける椋川の方々の思いや今回の赤カブラ出品を通じて、恥ずかしながら、あらためてそのことを思った。

椋川での行事については、是永宙さん(椋川在住)のホームページをご覧ください。(http://mukugawa.korekore.org/)

# 亀岡フィールドステーション

## 「したたかさ」というレジティマシー (3) : レジティマシーを保証する公的主体

亀岡 FS 研究員 原田早苗

本ニューズレター第6号、9号に続き、今号でも、近代における保津川の筏・舟運に焦点を当て、筏に関わる主体に着目し、筏流しに関わるレジティマシー（正統性・正当性）について考察する。今回は、レジティマシーのひとつの根拠となりえる公的主体について紹介する。

保津川における筏流しがいつ始まったのか定かではないが、長岡京造営に際して丹波産の材木が保津川を経て嵯峨まで流されていたことがわかっており、大規模な物流手段としての筏流しの歴史は、1,200年以上前に遡る。平安京遷都に際しては、京北・山国庄が禁裏御柚御領地<sup>[1]</sup>に定められ、都の造営のために大量の材木が筏によって運ばれた。平安時代の山国庄には「津領」という庄官職が設けられ、津領から村の名主の長男に対して、筏士の免許が与えられた（京北町誌 1975）。また、その後も天正年間の羽柴秀吉による京都の大改造や大坂城築城に際しては朱印状が発行され、筏士の諸役を免除し丹波材の流送に集中させた。時の権力者にとって、材木は非常に重要な資源であり、材木の生産地、輸送主体に対し、特別な権限を与えていたのである。

近世の筏流しは、商業材木の増加により、大きな発展を遂げる。商業材木の増加に伴い、寛永17年（1640年）から慶安3年（1650年）ごろにかけて「運上木」という商業材木に対する税金（原木）の徴収が始まる。運上木は筏1乗につき20分の1運上と定められていたのだが、藤田（1973）の考察によると、



写真：嵐山における筏の集積地（臨川寺浜）

この運上は幕府運上として徴収され、寛文4年（1664年）に亀山藩が徴収事務の委託を受けるようになる。亀山藩宇津根運上所で徴収された。徴収された運上木は入札により嵯峨・梅津・桂・淀などの材木屋が落札することが多かった。宝暦10年（1760年）の記録では、元木・元板あわせて63万3,647本が筏として流されている。

本ニューズレター第6号で紹介したように、保津川の筏流しに関わる一般の主体として、山方と呼ばれる生産者（筏荷主）、材木を運ぶ宇津、上世木、殿田・保津・山本の筏問屋及び実際に筏を流す筏士（指子、差子ともいう）、運ばれた材木の販売を行う京都の嵯峨・梅津・桂の三ヶ所材木屋といったものがある（図）。

幕府、亀山藩といった公的主体にとっては、保津川における商業材木の筏流しを公認することで、筏からの税金により重要な財源を確保することができた。逆に、山方、筏問屋、材木問屋などは、流通、販売を公的主体から公認を受けることで、筏流しに関わるレジティマシーが確保されているといえる。また、筏流しの期間、筏の規格（幅、長さ）といった筏流しのルール設定においては、度々、一般の主体者間で対立が起きているが、主体者間もしくは関係者の仲裁による解決



が難しい場合は、奉行所といった公的主体が調整に入っている。このように公的主体は、材木や財源の確保という公的利益が動機づけとなり、関連主体のレジティマシーを保証する役割を果たしていたと言えよう。

図：近世の筏流しにおける主体

### 脚注

[1] 禁裏御領地とは、皇室及び公家の御領、諸司殿領などの総称であるが、山国庄の場合、天皇の直轄御領であった（『京北町誌』）。

### 参考文献

藤田叔民（1973）『近世木材流通史の研究』新井社  
京北町誌編さん委員会（1975）『京北町誌』京北町

# 守山フィールドステーション

## 中心市街地でソバ栽培？ -都市農園の試み-

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

ソバ栽培というと、山麓や休耕田でするものだとよく言われます。守山 FS では、マンションの立ち並ぶ中心市街地でソバ栽培を試みました。なぜ？と思われるかもしれませんが。今回は、守山 FS での実践型地域研究の取り組みの一つ、都市農園の試みをご紹介します。

### 畑があった！

守山市中心市街地は JR 守山駅と中山道守山宿にはさまれた一帯で、古くは宿場、昭和 40 年代までは駅前商店街を核ににぎわいました。今では商店が衰退し、店舗跡地のマンション化が進んでいます。かつての活気は薄れ、中心市街地活性化の必要性が議論されてきました。そして今年 1 月から、国の補助を受け、守山市の中心市街地活性化事業が本格的に始動しました。

一方、町家の保存修景を専門に取り組んでいる滋賀県立大学濱崎研究室が守山中心市街地の散策会を行いました。中心市街地に残る町家など、既存の文化的資源を掘り起こす目的です。その結果、濱崎先生は守山の町家の空間的特徴として、「**町家と農家の複合型**」を指摘されました。「守山の町家は、通りに面した表側は京都などでも見られる町家だが、裏には必ず畑があり、農家的でもある」というものです。この指摘を受け、守山 FS が中心市街地における畑調査を行ったところ、家の裏に畑が点在していました。ただ、高齢者の住人や空家が多いため、畑は荒地か、駐車場になっていることが多いのです。そのうえ中心市街地活性化の事業では、伝統的空間で地域資源ともいえる“町家の裏の畑”は全



図 1：町家の裏の畑

く注目されていません。畑の今後の行方といえば空き地のままか、駐車場への転向といったところでしょうか。そこで守山 FS では、地域資源としての“町家の裏の畑”を見直してみました。

### なぜ蕎麦か？

歌川国芳という幕末の浮世絵師がいます。彼の作品の中で、守山宿の絵には盛り蕎麦を食べている達磨大師が描かれています。昨年 10 月、この絵に因んで手打ち蕎麦で守山を PR しようという市民活動が守山で生まれました。「守山宿だるまそばの会」です。今、彼らは地元のイベントで蕎麦を打って、地元の方々に手打ち蕎麦を提供しています。しかし、使われている蕎麦粉は他地域産のもので、将来的には地元の蕎麦粉を使いたいと考えておられます。ならば、このソバを中心市街地の畑で作ってはどうかと考えてみたのです。

### 地産地活

地域資源としての畑を活かすということを考えた場合、ただ畑を再生して作物を作っても、それは畑の“使用”であり、“活用”とは言いにくいでしょう。しかし、ソバ栽培なら“活用”の可能性がより大きいと考えます。畑でソバ栽培し、収穫した蕎麦粉を地元のための活動に使い、その手打ち蕎麦を地元の人が食べる…。つまり作物の栽培にとどまらず、その作物が中心市街地に様々な形になって

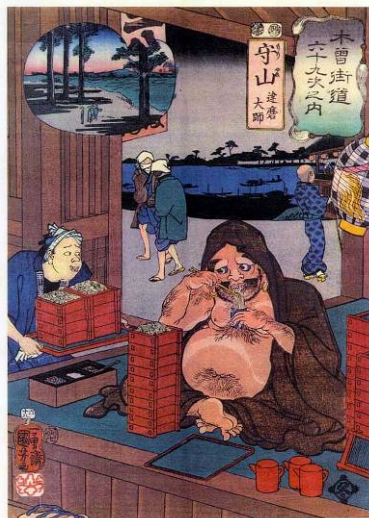


図 2：歌川国芳 木曾街道六十九次之内 守山宿

広まっていくことが可能です。何よりそれが地元の人の手によってなされていきます。このように、中心市街地でのソバ栽培は、まさに地産池消ならぬ地産地活（地元の産物を地元で活かす）を可能にするものといえるでしょう。（つづく）

### ■第18回 定例研究会

1. 日時：平成21年12月25日（金）14:00～17:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）

### 3. 発表者：嶋田奈穂子（守山FS 研究員）

発表内容：「守山市中心市街地におけるそば栽培とその効果」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

## 焼畑の再考と再興

### 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

焼畑とは、樹林や叢林の伐採・火入れにより耕地を拓き、1～数年間の作物栽培を行った後は耕作を放棄して移動し、植生・地力が回復するに十分な休閑期間を経た後、再び同じ場所を耕地として利用する循環的な農耕である。焼畑は決して原始的で時代遅れの農法ではなく、山地の生態資源を活かした石油資源への依存度の低い持続的な農法といえ、熱帯地域から温帯地域にかけて広く行われてきた。東南アジアでは、山地の主要な食物生産手段として焼畑が盛んに営まれてきたが、近年は、人口増加や商品作物の導入に伴う休閑期間の短縮や常畑化の進行、植林地への転換などの影響もあり、持続的とされた伝統的な焼畑は姿を消しつつある。

一方、日本でも、かつては日本海側と四国・九州の山地を中心に焼畑が広範に営まれており、ソバ、アワ、ヒエ、ダイズ、アズキなどの穀類や豆類を中心に、地域の自然環境条件に適した作物が栽培されてきた。1936年に全国で約77,000haあった焼畑は、1950年には約10,000haにまで激減したものの、この間に焼畑を完全に放棄した農家は全体の3割以下にとどまり、1950年時点でも約11万世帯が焼畑を営んでいた。その後、高度経済成長期以降の生活様式や価値観の変化に伴い、焼畑を営む農家の数は大きく減少し、1970年代には日本の焼畑はほぼ消滅したといわれる。しかしながら、今なお、山形県鶴岡市、新潟県山北町、福井県美山町、滋賀県余呉町、宮崎県椎葉村など、ごく小規模ではあるが、かつての伝統を受け継ぎながら焼畑が営まれている地域がある。日本の焼畑は、まだその歴史の幕を閉じてはいない。

日本の焼畑研究の歴史は古く、主に民俗学者や地理学者による詳細なフィールドワークに基づく多くの研究蓄積がある。しかしながら、現場での焼畑伝承が途絶えてしまえば、長い年月をかけて焼畑農

耕に蓄積されてきた先人の技術、知識、経験はいずれ風化し、それらを後世へ伝える機会は失われてしまうだろう。日本の焼畑が果たしてきた役割を再考し、これからの暮らしに活かす道を探るには、今ある焼畑を絶やさずに、その知識と経験を現場での体験として次世代へ引き継ぐ道を模索する必要がある。そのために残された時間は、わずかしかない。

いま、日本各地で山林の荒廃が進んでいる。薪炭材の需要低下などに起因する里山の放置、安価な輸入材の影響で採算性が低下し、枝打ち・間伐もされなくなったスギ植林地、そして放置されたこれらの山林に侵入し、繁茂するタケ。このような山林の再生に、焼畑を活用することはできないだろうか。放棄された薪炭林や植林地を焼畑に拓けば、これらの山林を食料生産の場として活用できるうえ、休閑期に再生する二次林は多様な生物を育み、山菜や有用植物などの生物資源生産の場としても活用できる。また、荒廃した山林に繁茂するタケも、焼畑に利用可能だろう。南九州ではタケを選択的に耕地に拓く焼畑農耕が営まれていたし、ミャンマーやラオスなど、東南アジア大陸部では、このようなタケの焼畑が現在でも営まれている。タケはよく燃えることから、火入れによる様々な効果が得やすく、また、旺盛なタケの生長は、休閑期の早期のバイオマス回復を促す。

焼畑再興への道は決して平坦ではないが、荒廃する山林の再生に焼畑を活用するとともに、地域の自然を活かした特産品の生産、無農薬農業や地産・地消の重視など、市場経済原理とは異なる価値を付加できれば、焼畑の作物の需要を再喚起することは可能であろう。当プロジェクトでの活動を通じ、焼畑のもつ様々な可能性を探っていきたい。



写真：焼畑で栽培したカブラの収穫（滋賀県余呉町 写真撮影：2009年11月8日）

まちやむら、そこに住む人びと (=ざいち) の、  
知恵や生き方 (=ち) から学び、実践する活動です。

# ざいちのち

No.15 2010.1.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市 中心市街地のそば畑

## 亀岡フィールドステーション

### 水運文化の伝承からまちづくりへ —着地型観光という可能性(1)—

大阪商業大学経済学部 原田 禎夫

昨今、「着地型観光<sup>[1]</sup>」という新しい旅行形態が注目されている。従来の旅行商品が都市部の旅行会社で企画される「発地型観光」であったのに対し、「着地型観光」とは旅行目的地側が主体的に企画するものをいう。旅行者のニーズの多様化とともに、地元の人しか知らないような穴場や楽しみ方が求められるようになったことが、その背景にあるが、新しい観光資源を開拓し都市部の旅行者を呼び寄せることが地域活性化につながるとして、各地で盛んに着地型観光の充実に向けた取り組みが行われている。

亀岡 FS のある南丹地域でも、着地型観光に向けた取り組みが進められている。しかし、茅葺き民家で有名になった美山町を除けば残念ながら今ひとつ、盛り上がりには欠けているように思える。その原因の一つには地域の持つ魅力をストーリー性をもって来訪者に伝えられていないからではないだろうか。地域固有の文化や景観は、その地域のもつ自然条件や歴史性によって育まれたものであり、その意味や価値を地域に住む人々が他の誰でもない自分たちのものとして認識することが何よりも重要である。

では、その魅力はどのようにして旅行者に伝えればいいのか。国際的な観光地「京都」に隣接するこの地域は、巨大観光都市の陰に隠れがちであり、それぞれの地域が個別に市場を開拓することは難しい。そこで、いわゆる観光圏として地域が連携し、面としての展開を図ることが重要になるが、そのキーワードのひとつが「川」ではないだろうか。

これまで亀岡 FS では保津川の筏を軸として様々な研究を進めてきた。その中で見えてきたことは、この地域は川を軸として人や資源が深くつながっていたということである。

昨年 12 月 16 日、私たちは初めての試みとして「保津川下りヒストリカルツアー」を行った。今も残る水運の遺構を辿り、船頭さんたちの舞台裏を垣間見る、そのことを通じて保津峡の美しくも厳しい自然の中で 1,000 年以上も続いてきた保津川水運の歴史と技術を体感していただくツアーである。

今回は、その模様をまじえながら、川とまちづくりについて考えてみたい。



写真：京都府南丹市美山町。茅葺き民家が多数残る北集落は、地域資源を活かした観光振興策として、広く注目されている。(2008年11月)

#### 脚注

[1] 着地型観光のような新しい旅行形態をニューツーリズムという。産業観光や、エコツーリズム、グリーンツーリズムなどのように、地域の立場から、それぞれの特性を活かすことを通じて地域活性化を実現することをめざして国土交通省が中心となって、ニューツーリズムの創出支援などが行われている。

# 守山フィールドステーション

## 中心市街地でソバ栽培2 —都市農園の試み— 守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

なぜ、守山中心市街地でソバ栽培なのか？という理由について、先月号でご紹介しました。今回は、2009年に行った中心市街地でのソバ栽培の過程について述べてみたいと思います。

### 3つの畑

今回ソバ栽培をさせていただいた畑は、守山中心市街地の三ヵ所です。まず一つ目が、中山道沿いの町家の裏の畑です（写真1）。庭木の剪定で出た小枝が積み、草生した状態でした。二つ目は商店街沿いの旧商店の裏の畑です。高齢者の一人暮らしのため、畑は一部しか使われず、大部分は草抑えのシートで覆われている状況でした。三つ目が同商店街の入り口に面した庭のようなスペースです。普段から、管理されている方が花を植えたり草を引いたり世話をしておられ、今回のソバ栽培にお借りすることも快諾していただきました。



写真1

### 畑づくり

草生していたり、長い間シートで覆われている土地を耕さなくてはなりません。これには地元の方々にご協力いただきました（写真2）。枯れた木を起こし、草を引き、土を耕して畝を作り、ようやく畑になります。かつては畑だっただけに耕した後の土はやわらかく、黒く、とても良い状態に戻りました（写真3）。



写真2



写真3

### 種まき

秋そばの種は盆前後に蒔くということで、8月14日と22日に種まきを行いました。種は「信濃1号」。

近所のお子さんや、ソバ栽培に興味を持ってくださった多くの方に参加いただきました（写真4）。

### 発芽！

種まきから3日～5日後、赤い茎のカイワレ大根のような芽が出ました（写真5）。少し成長させ、葉が4枚～5枚ほどに増えた頃に間引いてみました。間引いた芽はサラダにしました。クセがなく、生食向きでした。



写真4

### 開花！！

種まきから2週間ほどで開花しました（写真6）。白い小さな花がいくつか集まって咲きます。花にはハチやチョウなどが集まっており、これで受粉が進むようです（写真7）。



写真5



写真6

### 世話

ソバはやせ地でも荒地でも育つと言われますが、今年の夏は雨が降らず、さすがに3日に一度は水をやりました。



写真7

また、花が咲く頃には背も高くなっており、台風などで風が強いと根元から倒れてしまいました。ビニル紐などで株を立たせました。



写真8

### 結実！！！！

10月、種まきから約55日で結実が見られました。花がしおれると同時に、白い三角錐の形をした実が膨らみ始めます。それが熟すと黄緑色から黒く変色します。（写真8）



写真9

### 刈り取り

株についた実の半分くらいが黒くなったら、刈り取り、倒立で乾燥させながら追熟させます（写真9）。刈り取るよりも、根から引く方が早く、引き抜いて収穫しました。（つづく）

# 朽木フィールドステーション

## 山の生産力、人こそ生存基盤 (1)

滋賀県立大学 黒田末寿

### 1. 山の生産力：炭量の見積もり

私たち朽木 FS が活動のベースの一つにしている高島市の椋川地区は、かつて椋川村と自在坊村の二村に別れていた。自在坊は国道 367 号線（小浜線）から西に椋川に入ったあと南に折れた奥の地域で、現在人は住んでいないが、自在坊生まれの澤田純三さんが作業用に家を残し、80 歳過ぎの今も山林の手入れに通っている。澤田さんは、お父さん（卯三郎氏）の日誌や山林の覚え書きを大事に保管され、内容の整理とまとめを続けておられる。覚え書きは、昭和 7 年当時の土地台帳に土地形態や沿革とその後の変遷などを書き入れたもので、ほとんどの雑木林一筆ごとに木炭の生産量を見積もり、また、柴肥・草肥をとったホトラ山の生産量も記入してある貴重な記録である。

実際のところは、山林の登記面積は実面積より過少になっているから、地図と地番を対応させて修正しなければならないが、25 年周期で楢・雑木林で木炭をつくるとどのくらいの生産量になるかを知るには得難い資料である。数値を拾い出してみると、集落に近い続き山で「総じて日當山にて樹の成長程度普通なり」という斜面でも、5 反歩 300 俵、1 反 5 畝歩 500 俵、1 反 5 畝歩 500 俵、1 反 5 畝歩 300 俵と、炭量見積もりのばらつきが大きい。炭の 1 俵は 4 貫（約 15kg）である。他の筆の見積もりも合わせると、1 反でおおむね 200-300 俵取れていたことになる。澤田家では、若夫婦で年に 500-750 俵を出荷し、これは自在坊を含む椋川全体の平均ぐらい

で、2 反か 2 反少々を使ったことになる。農繁期以外では多くの家で 2 箇所の竈を使って焼いていた。1 戸あたり額面で 7 町以上山林をもっていたから、25-30 年周期で炭焼きが可能で、十分持続的な施業になっていた。炭の値段からすると当時の農民の平均収入をかなり上回る収入を得ていたといえる。

覚え書きには炭竈を築くときの重要な情報も書いてある。ある地番では、「地味樹種 雑木に富む、女石質の赤土にして木の成長普通なり。竈の良否この山にある竈の土は、火に適せず、何度打ちても耐えず。…」よって竈をもし作るなら前の山の斜面からもってこないといけないとある。女石質は、風化して軟らかいということであろうか。また、家の裏山の 1 反 6 畝歩について、「麓の方に真竹を生じ大いに用に供す。中腹には栗の木多く実を拾うを楽しむ。源におよぶにしたがい楢および雑木を生じ総じて笹多くて困難」と真竹や栗の利用を述べ、炭量は 250 俵くらいと推定している。卯三郎氏の山林利用の計画性と余裕が眼に浮かぶ文である。

炭は 1kg あたり 30MJ の熱を出す。滋賀県辺りの標準一戸建て家庭だと年に 90,000MJ のエネルギーを消費する（NEDO,2008）から、200 俵の炭に相当する。給湯エネルギーは 18,000MJ で 40 俵相当だから、1 反で 5-7 家族の給湯ができることになる。（つづく）



写真 1: 高島市椋川の風景(初秋)



写真 2: 炭竈内



写真 3: 炭竈焚き口



### ■第19回 定例研究会

1. 日時：平成22年1月29日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者1：Khin Oo 氏（Yezin Agricultural University）  
発表内容：Impact of the cyclone Nargis on livelihoods and

food security in the selected area of Bogalay, Myanmar.  
発表者2：Lay Lay Khaing 氏（Pwint Phyu State Agricultural Institute）  
発表内容：Existing Cropping Patterns in Central Myanmar: Case study  
in Le Pyin Thar Village, Yemethin District, Myanmar.

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

## 耕地景観の落ち着きとは

### —Khin Oo さんのコメントから考える—

東南アジア研究所 安藤和雄

「守山の広々とした耕地の景観は、オーストラリアやドイツに似て美しい」とは Khin Oo さん（ミャンマーYezin 農業大学教授）のコメントです。Khin さん、Lay Lay Khaing さん（ミャンマーPwint Phyu 国立農業研究所助講師）とともに、守山市の他にも京都府南丹市美山町、山口県周防大島町を1月末から2月初めに訪問しました。守山の前に美山のかやぶきの里と杉が多く植えられている谷筋の水田地帯を見学していたので、守山の広々とした用水施設のととのった耕地景観に、Khin さんがかつて留学したり研究で滞在したオーストラリアやドイツの農村景観を思いおこしたのでしょうか。広々とした耕地の景観ならばミャンマーのイラワジデルタにもあります。しかし、Khin さんは、イラワジデルタではなく、オーストラリアやドイツの耕地の風景を連想したのです。また、かやぶきの里よりも守山の耕地景観が気になったようです。このことを私なりに考えてみました。圃場整備が行われて景観が一変したにもかかわらず、守山の耕地景観は、見る者の心を捉えます。私は景観の美しさは、景観の落ち着きであると考えています。景観を構成しているさまざまな部分が馴染んだ構成をもっている時、景観を美しいと人は表現するのだらうと考えています。私は守山には10年以上前から時々来ているので、少なくともそれ以上前には圃場整備は終了しているはずですが、一方、2～3年前から一枚の水田が50aから1haの大区画水田に整備され、畦が作り替えられ、農道や水路が新規に出現している亀岡盆地の新しい水田景観は、未だどこか落ち着きがありません。以前の景観を知っているからだと言われられるかもしれませんが、そうではありません。恐らく、適用されている農業技術と面積の親和性など、細かく分析していけば、理由をあげることは可能でし

うが、大区画水田に立っていてもどこか居心地が悪いのです。亀岡の大区画水田景観が落ち着くまでには、まだ熟成期間が必要なのでしょうか。そして、Khin さんが守山の耕地景観を美しいと表現したもうひとつの要素は、守山の広々とした耕地では、放棄され雑草が生い茂る耕地や、水田や畑から杉などの林地への転化が皆無なことです。私は、ドイツやオーストラリアの耕地景観を自分の目で見たことがないので、Khin さんの目を通じて想像するしかありませんが、きっと、放棄地や林地などの転化はなく、耕地は耕地として人の労働が日々加えられ、生業として農業がいまだ成立しているのでしょうか。守山の耕地景観が Khin さんの心を捉えたのは、農業がしっかりと地域で居場所を確保し、集落営農、法人営農、家族経営と農業経営は多岐に分化しつつありますが、守山では後継者により営農が継続していることが大きいのではないのでしょうか。

耕地景観の落ち着きや美しさは、つきつめていくと、生存基盤としての機能が持続されているかどうか、という点に行きつくことに気がつきます。棚田や伝統農村家屋の保全の必要性がさげばれて久しいですが、美しさの源が生産と暮らしの基盤をつくってきたからであるという原点を今一度肝に命じておく必要があると Khin さんのコメントに教えられました。

ミャンマーのお二人のために市長表敬の時間をとっていただき、市長との意見交換ができたことをお二人は大変感謝していました。特に、守山は仏教信仰が強いところでもあり、地域おこしにとっては、単なる経済の問題ではなく、文化や心の問題が重要だという市長の指摘は、篤信の多いミャンマーの方には非常に励みになったことでしょう。この場をおかりし、守山市役所の市長、職員の方々、美山町かやぶきの里民俗文化資料館や、野洲川の近くの果樹園でお話をうかがうことができた村の方に、重ねて感謝いたします。ご協力ありがとうございました。

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の、  
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニューズレター No. 16 2010年2月

京都大学



生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市朽木 市場

## 守山フィールドステーション

### 中心市街地でソバ栽培3 —都市農園の試み— 守山FS 研究員 嶋田奈穂子

これまで2回にわたって、守山市中心市街地でのソバ栽培の試みについてご紹介してきました。この試みの背景や、過程についてご理解いただけただでしょうか。今回は、このソバ栽培について、地域の人々の関わり方や影響、反響について考えたいと思います。いったい、守山のまちの人々は、このソバ栽培をどう受け止めて下さったのでしょうか。

#### ソバなんて！

「中心市街地でソバを栽培してみようと思うんです…」と、去年の春、地域の様々な方に提案とお願いをした時の反応は、首をかしげる方が4割、面白い！と言う方が2割、関心のなさそうな方が4割…といったところでした。首をかしげる方のほとんどが「ソバは荒地でつくるもの」という考えをお持ちで、難しいだろう・土が合わないだろう・出来ても不味いだろうという反応でした。しかし、その方々も、面白い！と言われた2割の方の「まあ、とにかくいっぺんやってみたら？」という言葉には賛成してくださって、いざ、実行に移すことになりました。

#### 畑、貸してください。

栽培する畑をお借りすることが、一番難しいと考えていました。当初、周囲の反応が必ずしも良いものではなかったのですが、貸して下さる土地があるのか本当に心配だったのです。しかし、結果的にはこれが一番スムーズに進みました。スムーズというのは、地域の方が、「うちの親父が花植えてるところに、ソバ植えたら？」「私の友達が、もう畑使っていないから頼んであげる」と、逆に提案して下さいました。3つの畑をお借りすることが出来ました。

#### 畑作り、ソバ作り、そして収穫へ

それでも、ずっと使われず草生す土地を、まず起こさなければならない。大量の枯れ枝、はびこるドクダミ、真夏のカチカチの土。「一人では、絶対無理だ」と本当に頭を痛めたのはこの時です。畑を作る

ことの難しさを、想定していなかったのではなく、甘くみていたのです。ちょっとずつやるしかないなと鍬とスコップを買い揃えたとき、電話がかかってきました。「今日、ちょっと畑の準備しようと思うんですけど、時間あるかいな？」協働しようといって下さっていた「だるまそばの会」の会長さんからの電話でした。すぐに畑に向かうと、耕耘機を積んだ軽トラが停まっていた。放置された枯れ枝を軽トラがいっぱいになるまで積み、土を耕耘機で起こしてもらい、草を取り除きました。畑の持ち主の方の協力もあり、3つの畑を、土が軟らかくなるまでにしてもらいました。また、この企画に賛同してくれた滋賀県立大学の学生や、小学校の先生、農協の職員の方にも、はびこるドクダミを丁寧に取り除き、畝立てをしてもらいました。

どれも炎天下の中での作業で、本当に有難いものでした。また今年は全く雨が降らず水やりの必要がありました。夕方、畑へ行くとすでに土が湿っています。畑の持ち主の方が、「水やりくらいやったら出来るよ」と、水をやっていてくれるのです。

実がついた頃、台風の前日には熟した実を摘んでおいてくれたのも、台風で倒れた株を紐で縛って起こしてくれたのも地域の方々です。畑を通じてかわされる言葉や気持ちや時間が、この試みの醍醐味であり可能性だと感じています。

#### 種、まだあるの？

今回の取り組みを発表する様々な機会の中で、中心市街地の交流館でパネル展示をした際、地元の方が「種、まだあるの？」と尋ねてこられました。花がきれいだから、来年、自宅でも植えてみようと考えておられるようです。また、出来た蕎麦はいつでも食べれるのかという声も多く、少しずつ、地域に浸透し、広まればと願っています。



写真:畑準備中の地域の方

## 朽木フィールドステーション

### どんぐり苗“奮戦”記 ー 椋川からー

結いの里・椋川 是永宙

朽木 FS では一昨年から〈ホトラ山の復元〉に取り組んでいます（ホトラ山については、本ニューズレター2号と4号を参照）。ホトラ山世界は山とのつきあい方の一つの典型であり、これからの〈くらしの森〉づくりを照らしてくれるのではないかと私たちは考えています。

復元作業では、カヤとナラがはびこる原野を再現することを目標としています。カヤもナラももともと野良で生えているものを育てるのだから、難しいだろう……。ところが、じつは甘くない！ カヤ株定植の翌年、株の張りは期待したほど旺盛ではなく、ナラの苗づくりときたらほんとに手数が掛かってしまいました。

まず一昨年秋、どんぐりを拾って移植ポットに入れ発芽を待ちました。シカの食害に遭わないようネットで囲まれたところに移して、ひと安心……。2日後、苗床に行くと新芽がない。どうやらカラスにやられてしまったようです。

苗がない。けれども、稔りの秋まで待てない。梅雨どきならば移植のショックが少ないだろうと、春から2ヶ月余りした頃、伸び始めたナラ葉を目当てに山をうろつきまわることになったのです。が、長く伸びた直根を掘り取るのはなかなか手間要りな作業です。そうやって採集した苗をフラワーポットに移す作業でも根は傷むので、根付いたのはおよそ半分。手間の割りに成果乏しく、やはり「どんぐり拾って、取り播き苗」がベストという結論になりました。

苦労もあったのですが、作業を通じて新しいつながりもでき、また発見もありました。二年目のどんぐり拾いは FS 関係者の外へも広げてみました。現場の隣は ECC 学園高校（通信制）です。その環境授業で、山野を荒らすシカの食害について取り上げ、どんぐり拾いを実習としてみました。都市部に住んでいる生徒たちにとって「シカの食害」は縁の遠い話になりがちです。けれども、ナラ林を上り下

りしながら濡れた落ち葉に触り、自分たちの身体をつかって取り組んだことで、実感が湧いたようでした。「あのとき拾ったどんぐりどうなった？」と尋ねてくれる生徒もいます。



写真1:環境授業でどんぐりを拾う生徒たち

この冬の初め、どんぐりの伏せ込み作業のときには10cm程度の積雪がありました。重機で雪を押し分けて土を掘り返した定植床に、今度は一輪車で腐植土を運搬しました。けれども、雪混じりのゴロ土では一輪車は思うように動きません。ふっと、昔はソリを使って木を出していたことを思い出し、除雪用のスノーダンプを持ち込みました。すると、なんと軽々と運べること！ 雪を使った運材や集材を思い浮かべながら、山里の知恵に感じ入りました。

雪解けの3月にはカラス対策の網とシカ除けのネットを張る作業が待っています。3反程の実験地。その広がりを活かし、〈くらしの森〉のメニューである山菜・低木を少しずつ加えるのが次のステップです。「危機こそチャンス」という言葉があります。もしかすると、シカに痛めつけられた山や野の再生をめざしていく中で、昔の知恵と出会い直し、力をもらう場面があるのかもしれない。



写真2:運搬作業に除雪用スノーダンプを活用

# 亀岡フィールドステーション

## Bangladesh 水運の観光事業化の可能性を探る NPO法人 プロジェクト保津川 豊田知八

大中小規模の河が50河川以上流入している別名「川の国」といわれる Bangladesh では流域地域間での人や物の運送交通手段は現在も水上航路に高い比率で依存している。

河川形状や規模等は異なるものの、同様の水運業が長く栄えた歴史的背景を持つ京都の保津川を仕事場とし、観光の現場に身を置き、常に観光客のニーズを敏感に読み取る事を求められる者としての視点を頼りに、「Bangladesh の川観光の可能性」を探ってみた。

川と水運視察の対象として、乗船したのは1月19日(火)5キロメートル以上はゆうにある Bangladesh で最も長いジャムナ橋のかかるタンガイル県のジャムナ川(ブラマプトラ川が Bangladesh に入ると名前が変わる)と21日(木)琵琶湖の数倍の面積が雨季には水没するハオールと呼ばれるキシールガンジー県のニキール郡グルウッラ川の2度である。両河川とも日本で呼ぶ「川」とは河川幅、流水量ともその規模が大き



写真1: オールドブラマプトラ川支流の雄大な川風景

く、乾季であってさえも、初めて見る私にとっては、いわゆる「湖」や「海」の形状に通ずる河川風景だ。雨季の姿は想像を絶することだろう。

舟は保津川の観光船と同サイズのものだが、両河川ともに急流部がないため、激しい揺れもなく乗り心地は良好。舟から見渡す、水平線や地平線が空と交わるスケール感は、大陸から流れ込む大河ゆえの雄大な川風景だ。波ひとつない広い水面を、日光が眩しく照りつけ輝く自然現象も、舟の旅情を盛り上げる要素がある。

「観光」という視点では「流域地域の日常の暮らしぶり」も大きな資源といえる。ニキール地域では船着場から両岸約5~6km範囲に渡り集落が点在し、岸には大小さまざまな形をした舟が多数係留され、流域住民の生活に舟が必要不可欠なものである

ことが分かる。

舟の修理や洗濯、行水をする者、魚とりや水鳥の世話をしている子供の姿も多く見受けられ、活気ある明るい住環境風景が広がる。



写真2: 雨季に備える為、乾季での舟の修理は重要な仕事のひとつだ

川上には農作物、砂など物資を運ぶ大型船から人の運搬や漁に使用する中型舟、昔ながらの櫂と舵で進む手漕ぎ舟が多数往来し、水上学校となる舟まである。各用途に応じた舟が行き来する風景に、地域の舟文化が今も息づいている。

川を生活基盤として生きている流域の人々の活気ある暮らしぶりは、日本が高度経済成長後に失った川の風景であり、それが間近に見ることができるのは興味深く貴重なことだ。

Bangladesh の川風景には、洪水氾濫という厳



写真3: 舟は流域住民の貴重な移動手段となっている

しい川環境が形成した雄大な風景とそこで共生してきた人々の営みが息づき、魅力的で豊かな視覚的観光資源に溢れている。

現在、同国が観光政策をどう位置づけているかは把握していないが、今回のようなフィールドワークのスタイルこそ、‘観る’だけでなく‘触れて知り、気づく’というエコ・ツーリズムのスタイルそのものだ実感するものだ。

その上に Bangladesh の人たちのフレンドリーで屈託のない明るい国民性の土台があれば観光振興へのシフトも十分可能だと感じた。

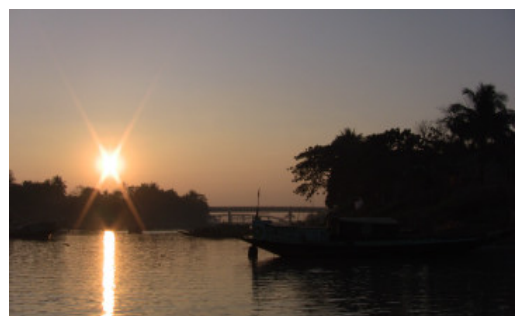


写真4: 夕日が水面に落ち、静かに集落の一日が終わる



ざいちのちは、  
まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、  
知恵や生き方（＝ち）から学び、  
実践する活動を意味します。



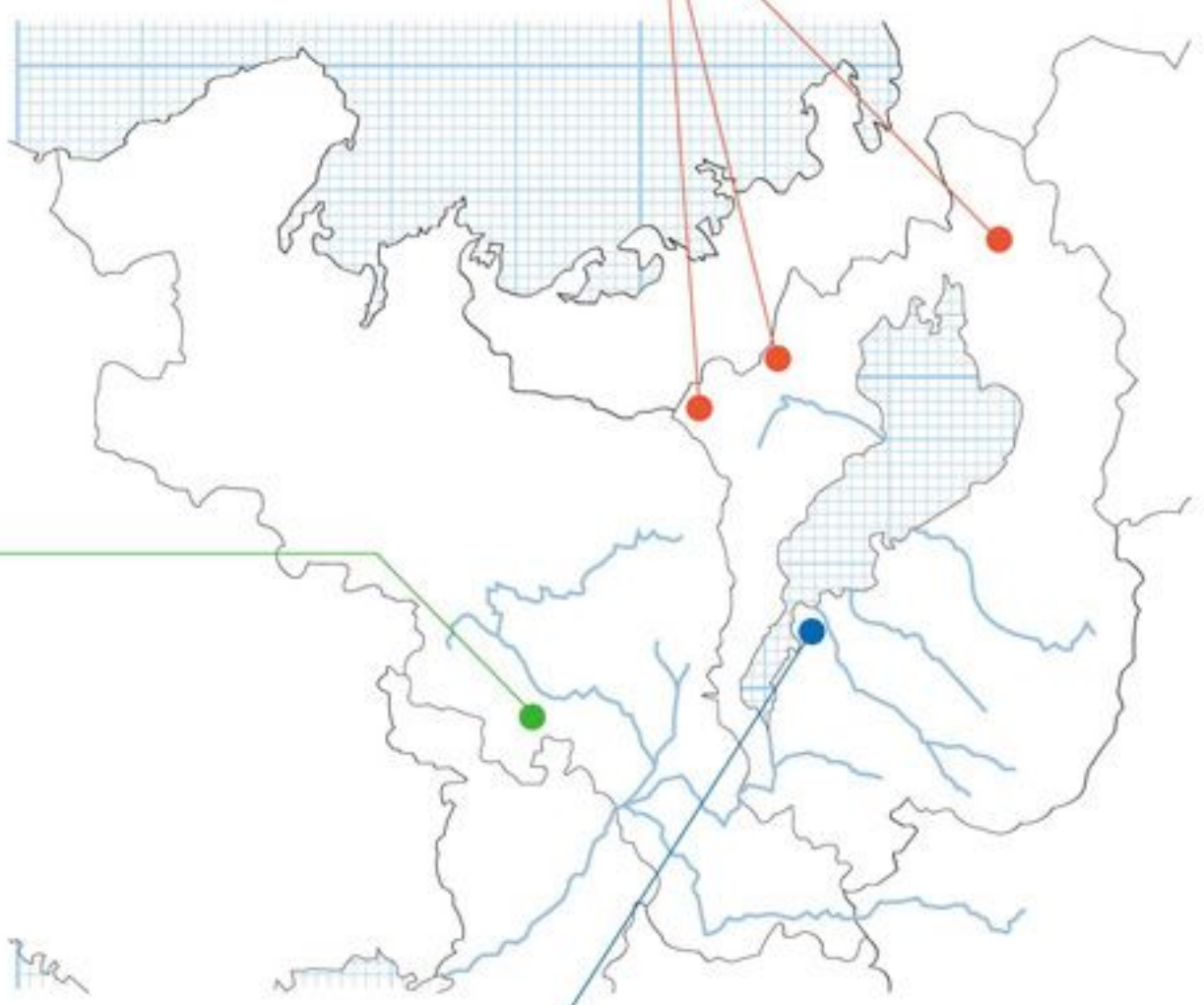
朽木 FS 余呉の焼畑



亀岡 FS 保津川の筏



守山 FS 木浜のエリ



京滋フィールドステーション活動地域

発行 京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室  
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達 46  
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/>